

## 博士論文

論文題目 概念メタファー分析から文化的キーワード翻訳可能性の探求へ  
—日本語、英語、ロシア語、ウクライナ語に即して

氏名 スロヴェイ ヴィヤチェスラヴ  
**Surovyi Viacheslav**

## 目次

### 第1章 序章

1-1 研究の背景.....	1
1-2 研究範囲と目的.....	10
1-3 本論文の構成.....	18

### 第2章 先行研究の概観

2-1 言語的世界観と Sapir-Whorf の仮説.....	20
2-2 文化的キーワード.....	27
2-3 言語に表れる異文化の翻訳可能性.....	38
2-4 言葉の意味に関する先行研究.....	47
2-5 普遍要素の分析に基づく意味解明 .....	52
2-6 認知意味論のアプローチ .....	65
2-6-1 プロトタイプ理論.....	66
2-6-2 概念メタファー論.....	72

### 第3章 分析方法とデータの収集

3-1 概念メタファー分析に基づく新アプローチ.....	77
3-1-1 認知的経済性の原理と起点領域の数.....	77
3-1-2 起点領域の性質と部分的写像.....	82
3-1-3 概念の構造における中心的な起点領域と周辺的な起点領.....	90
3-1-4 概念の範囲.....	93
3-1-5 連語における文法的な結びつきとイメージスキーマの役割.....	98
3-1-6 認知モデルと新アプローチのまとめ.....	100
3-2 連語の定義と抽出方法.....	106
3-2-1 連語の定義と条件.....	106
3-2-2 連語の採集方法（辞書、言語コーパス、連語自動抽出システム） .....	115

## 第4章 認知モデルと新アプローチの有効性の実証と応用

4-1 意味の通時的変化.....	121
4-2 外来語の意味とその普及.....	131
4-3 概念構造全体の分析に基づいた文化的キーワードの比較と翻訳可能性.....	145
(ロシア語：судьба、участь、рок、доля、ウクライナ語：доля、英語：fate、destiny、 日本語：運命、縁、運)	
4-4 概念構造表層の分析に基づいた文化的キーワードの習得問題と翻訳可能性.....	225
(日本語：迷惑、世間、義理、人情)	
4-5 類義語の意味の差異とその翻訳可能性.....	242
(ロシア語：жалость、сочувствие、日本語：同情、英語：pity)	

## 第5章 結論

5-1 本研究のまとめ.....	254
5-2 概念分析の観点からみた「文化的キーワード」の翻訳可能性.....	258
5-3 今後の展望と課題.....	262
参考文献.....	277
謝辞.....	286

## 第1章 序章

### 1-1 研究の背景

現在、言語とコミュニケーションまたは言語と文学の文化的特性を研究している全世界の言語学者の研究においては、「文化」という概念が中心的位置を占めている。様々な方向性および知識領域の研究者が、文化は人の意識のなかに反映されており、それは人のコミュニケーションから、世界観、果ては行動パターンに至るまで多かれ少なかれ影響を及ぼしているという結論に至っている。各言語の話者は、様々な概念形成手段を用いて様々な世界観を形成しており、それらの世界観が国の文化の基礎となっている。それゆえ、言語間におけるコミュニケーションのプロセスは、認識空間の相互作用として解釈できるだろう。様々な言語文化の当事者同士の接点においては、言葉や表現のみならず、世界の分類体系、認識基盤の交流が生じる。この文脈においては、外国の文芸作品の翻訳は文化的コミュニケーションの手段として重要な役割を果たしており、文学を通して、他民族・他国の思想、知識、世界観などが国境を越えて伝わる。その際、翻訳された作品は一文学作品という範疇を越え、その国の文化、又は国民のアイデンティティーの問題という領域にまで関わる。文芸作品は言語で書かれており、その言語の文法・語彙・発音などに依存するため、文化の特徴は文脈レベルばかりか、言語そのものにも表れうる。現代の翻訳研究者らも、翻訳においては、語彙や構文の問題より、文化的問題の方がはるかに深刻であると認め、「文化的」側面の重要性を認識している。信念、価値観の方向性、コミュニケーション上の戦略および認知環境の体系としての文化は、特定の言語文化的コミュニティの全成員に共通する行動基盤を決定づけるものであり、それは翻訳の等価性を達成するまでの道において本質的な障壁となっている。

複数の言語的世界観の間の差異は、当該言語に固有であり他言語に翻訳できない概念を内包する、言語学的に特殊な語句において、最も顕著に現れる。翻訳における文化的問題としては他国にない物質文化（食べ物、服装、その他の生活に関わるもの）を指す語彙が一番目立ちやすい。他国の生活関連の用語は、似たものがない文化圏の言語に訳すことが簡単ではない。そのテーマについては翻訳論においてたくさんの研究が行われており、正しいとされる翻訳上の戦略を一つに絞るのは難しいのが実情である。ただし、そのような問題が表層的で目立ちやすい一方、世界観に関わる問題の方は物質文化などより奥が深く、一見ありふれた言葉を翻訳することの方が煩わしい場合も多い。言語に表れる世界観の再構築は、現代言語学の意味論における重要課題のひとつである。言語的世界観の研究は二

つのアプローチで行われている。一つ目のアプローチは、特定言語の語彙の体系的な意味解析に基づいて、当該言語に反映されている観念体系の全体的な再構築を行うものであり、その観念体系が当該言語に独自のものなのか、それとも全言語共通の普遍的なものなのか、またはその観念体系が「民族的」ないし「学問的」な世界観を反映しているものなのかということを追及するアプローチである。これに対して、二つ目のアプローチは、当該言語に固有な個々の概念を研究するものである。そうした概念は二つの特性を持っていて、一つはそれらが当該文化にとって「枢要な」概念であることであり、もう一つは、それが他の言語にうまく翻訳できない概念だということである。それは、概念と等価の訳語が存在しない場合（例えば、日本語の「甘え」、「粹」、ロシア語の *тоска*、*надрыв*、*авось*、*удаль*、*воля*、*неприкаянный*、*задушевность*、*совестно*、*обидно*、*неудобно* など）、あるいは、概念と等価の訳語が基本的には存在するが、それが、その概念に特有の意味的要素を含んでいない場合（例えば、日本語「世間」、「遠慮」、「かわいい」、英語の *mind*、*freedom*、*story*、ロシア語の *душа*、*судьба*、*счастье*、*друг*、*справедливость*、*пошлость*、*разлука*、*обида*、*жалость*、*собираться* など）である。このような諸国言語または言語的世界観のいわゆる「キーワード」の分析と説明が、ここ約 30 年間で広く普及した。Wierzbicka の研究が、こうした分析・説明の理論的プラットフォームになって、多くの学者たちの努力によって、分析と説明が行われており、本稿で扱う言語の中でも英語では Goddard、Lakoff、Kovecses、Langacker、Shore 日本語では鈴木孝夫、土居健郎、九鬼周造、ロシアでは Shmelev、Levontina、Zaliznyak の名前を、まずは挙げなければならない。

上記のような語彙の他言語への翻訳がそもそも可能であるか、それらがどこまでその言語を話す人の世界観を表すのか、世界観がどこまで言語に依存するのかという問いかけはかなり前からなされている。「言語的世界観」という概念は、Wilhelm von Humboldt とその後継者らの考え方、そして Sapir-Whorf の言語相対性仮説に起源を持つ。Humboldt は、人々の個々の世界観を表す「内的形態」というものが言語には存在すると考え、その相互関係の研究に将来性を見ていた。

個人が話す言語によってその個人の思考が影響を受けるという Whorf によって形成されたいわゆる言語的相対論は、言語学者、心理学者、哲学者、人類学者らの注目を集め、その結果、仮説を立証または反証するために様々な実験が行われることとなった。特に、20 世紀後半、様々な言語的世界観における色と色調の呼称を用いて仮説を立証しようという試みが積極的に行われた。ここでは B.Berlin と P.Kay の、既に古典となった論文『基本の色彩語』（*Basic Color Terms*, 1969）が挙げられる。これ以外にも、言語と文化、又は言語と世界観の相互関係をテーマとして、言語の固有性を追求する文化人類学などの研究は多く、

とりわけ言葉を通じて人々の習慣や社会の構造などを説明しようとする研究が多い。日本においては、土居健郎の『甘えの構造』、九鬼周造の『「いき」の構造』、鈴木孝夫の『日本語と外国語』、山本七平の『「空気」の研究』、阿部謹也の『「世間」とは何か』、四方田犬彦の『「かわいい」論』、Wierzbicka (1997) の“Understanding Cultures through their Key Words”、Lebra (1976) の“Japanese Patterns of Behavior”、Hendry (2003) の“Understanding Japanese Society”などといった数々の書籍が注目を浴びている。ロシア語では Shmelev、Zaliznyak の研究などが挙げられる。

このように70年以上前にB. Whorfによって提唱された言語相対性仮説については、学者たちがこれを立証もしくは反証すべく無数の実験的試みを行ってきた。生成文法を提唱したNoam ChomskyやSteven Pinkerなどの研究者は言語的相対性を批判し、人間の考え方の普遍性を主張した。言語的相対性は依然として仮説のままである。だが、人の思考が言語によって大いに制限されている（形作られている）という強い仮説（いわゆる“Linguistic determinism”）が現実と異なっていたとしても、言語が思考の内容に一部影響するという弱い解釈を完全に否定することはできない。その発想が上で紹介したような一連の興味深い研究を生み出すきっかけとなった。

もちろん、文化や言語の固有性ばかりを追求する研究はある意味で翻訳可能性を否定的に捉えていると言える。文化と言語の相違点にこだわりすぎると翻訳の礎となる類似点が見逃されがちになるのである。一般の翻訳はもちろんのこと、微妙な文化的なニュアンスが重要性を持つ文学に関しても、翻訳は実際に行われ、また読まれている。ただし、言語はその話者の世界観の形成に関与するという弱い仮説が部分的にでも正しいとすれば、文芸作品の翻訳は世界観の問題に関わることになる。つまり、如何に単純で、民族性をおびていない文芸作品を訳す場合においても、そこには異なる文化間の問題が表出するのである。二つの文化の仲介者である翻訳者の、仕事の成否を左右するのは、言語の土台となる国の文化や文化的体験、発話行為や書き記された文章、二つの記号システムがもつ世界観の形成能力、文化的価値観に基づき言語文化コミュニティの全成員がみな暗黙のうちに表現している意味といったものへの理解や知識であり、かつまた、メッセージを翻訳する時に訳文が原文と同じ作用を持つようにするため、正しい言語学的手段を選択する能力である。ただし、翻訳者の仕事の評価、つまり原文のメッセージがどこまで訳されているのかを計るには、ある程度言語に依存しない客観的な基準が必要となってくる。翻訳可能性を論じる際に、言語の要素を排除し、両言語のメッセージを数式で完全に計量はできないことを認めるとしても、言葉の意味をどこまで深く、どこまで普遍的に（他言語の読者、研究者に正しく理解できるように）説明できるかということは、なお大きくて重要な課題な

のである。

もちろん、言葉の意味という問題は昔から言語学における中心的な課題であったといっても過言ではないので、言葉の意味を解明するためのアプローチも多数存在する。さらに翻訳の実践を考えると、言葉の意味を調べるには辞書という方法が最もよく使われ、非常に重要な手段であるということは否定できない。ただし、本稿で求めようとしている言葉の意味は辞書で定義されているものとは次元（観点）が異なる。Wierzbicka (1997) は英語、ロシア語、ポーランド語、ドイツ語、日本語、それぞれの言語に於ける言葉の意味の差異を明らかにする研究を行い、その中で「友達」、「自由」、「故郷」などの単語を挙げ、意味のずれ、使用頻度、使用場面などによる違いを示している。Wierzbicka (1997) によると、異なる言語において単語の意味は完全には一致しない（外国語辞書には対応する訳語の記載があるが、完全に適切な訳語がないため、無理矢理に載せられているだけである）。なおかつ、抽象的な概念を含む単語だけでなく、どの文化にも存在する具体的なものを指す単語でさえ言語間で一致しない場合がある。その例としては、鈴木孝夫 (1973, 43) が指摘した英語の“lip”と日本語の「唇」の意味的なズレが挙げられるだろう。また、対応する単語の意味的なニュアンスが完全に一致しても、文化によってはその単語の持つ重要性が異なる場合もある。Wierzbicka (1997) は次のように述べている。「例えば、英語とロシア語のある単語が意味的に対応していても、その単語の使用頻度が言語ごとにかなり異なる場合、文化における単語の重要性が異なることは明白である。」外国語辞書に出されているような翻訳が完全に信用できないとするなら、外国語に堪能な翻訳者が、対象言語の辞書を引けば、他言語からの影響を回避できるという結論に達するかもしれないが、上で取り上げたような、世界観に深いかかわりを持った各言語のいわゆる文化的キーワードの場合は、国語辞書にも頼れない場合が多い。日本語に特有のキーワードと思われる単語について辞書の定義を参照すると、『大辞林』(2006) では「気まま」は「我儘」の類義語とされるが、「気まま」の定義及びその二つの違いは以下の通りに説明されている。(注目すべき箇所には太字にする)

他人に**気兼ね**などせず自分の思ったとおりに行動する・こと（様）。{類義の語に「わがまま」があるが、「わがまま」は他人の**迷惑**もかえりみず、**自分**の考えや気持ちを押し通そうとするさまをいう。それに対して「気まま」は何の束縛も受けず自分の思い通りに振舞う（さまをいう)}

この短い説明には「わがまま」と「気まま」の他、「他人」、「気兼ね」、「迷惑」、「自分」という、文化的キーワードとして取り上げられることの多い4つ単語が含まれている。他のキーワードの辞書定義も引用し、キーワードと思われる箇所を太字にする。

#### 「甘える」

- ① 物をねだったり**かわいが**ってもらおうとして、ことさらになれなれしく振る舞う。甘ったれる。「親に甘える」② 人の好意・親切を**遠慮**なく受け入れる。また、好意・親切をあてにして、**気まま**に振る舞う。「お言葉に甘えてお世話になります。」  
(『大辞林』(2006))

#### 「世話」

- (人や生き物に対して) **気**を配って**面倒**をみること。手数を掛けて援助すること。  
(『大辞林』(2006))

#### 「精神」

- ① 人間の**心**。**心**の働き「健全なる**精神**は健全なる身体に宿る」② 物事に対する**心**の持ち方。**気**構え。**気力**。「そういう**精神**では成功はおぼつかない」「**精神**を集中する」「スポーツマン**精神**」(『大辞林』(2006))

#### 「いき」

- ① 気性・態度・身なりがあか抜けしていて、自然な色気を感じられる・こと(さま)。粋(すい)。② **人情**・**世情**に通じているさま。(『大辞林』(2006))

#### 「人情」

- ① 人間の自然な**心**の動き。人間のありのままの情感。② 人としての**情け**。**他人**への**思いやり**。「一の厚い人」(『大辞泉』(1995))

このように、日本語の文化的キーワードに関する辞書の定義には他のキーワードが頻繁に使われているというのが実情である(スロヴェイ、2008、16)。外国語への翻訳についていえば、国語辞典は頼りにくいものであると断言していいだろう。つまり、複雑な文化的概念を使って、他の概念を説明すると、悪循環に陥り、キーワードの意味を日本語の枠内でしか理解できない。そもそも国語辞書は外国人に単語の意味を説明するという目的で編集されているわけではないので、異文化の違いを想定した、言葉を文化の観点から説明しようとしている比較的新しいロシア語の書籍を参照しよう。例えば、「Новый объяснительный словарь синонимов русского языка」のような辞書では、筆者が鋭い視線でそれぞれの言葉の使われる場面などを紹介し、今まで指摘されなかった文化的な特徴まで突



き詰められている。しかし、以下の例でわかるように、言葉の意味は結局ほかのロシア語の類義語や、キーワードと思われる言葉で説明されている。以下はロシア語の жалость に関する記述である。(注目すべき箇所には太字にする)

Наиболее стихийное чувство, являющееся непосредственной реакцией души на чужое страдание, — это жалость. (Апресян (2003, 328))

つまり、世界観などを意識している編集者でさえ、複雑な文化的な概念 (душа) を使って、他の概念 (жалость) を説明するという悪循環に陥り、キーワードの意味はロシア語の枠内でしか理解できないことになる。このような問題を乗り越えるところみとしては、世界観・文化に依存しないすべての言語に共通している (意味が完全に同じである) 普遍的な要素 (単語) をもとめる研究が興味深い。言語の意味形成の原則に関する Wierzbicka の代表的な論文は、民族言語学における普遍主義的な研究の一例である。Wierzbicka と Goddard は、Gottfried Leibniz、Rene Descartes そして Andrzej Bogusławski の「思考のアルファベット」というアイデアを発展させ、理解しにくい概念を外国人にも正確に伝える方法として、自然的・意味的メタ言語 (Natural Semantic Metalanguage, NSM) の作成に着手した。Wierzbicka と彼女の後継者たちによる長年の研究の目的は、いわゆる「意味原素」、普遍的概念のセットを確立することである。それらを組み合わせることで、各言語がその言語及び文化に特有の、無限の配列を作り出すことができる。意味元素は、語彙の普遍的特性である。言い換えれば、それは、どのような言語においてもそれを意味する言葉を見つけることができるような基本的概念のことである。こうした概念は、どの言語の話者にとっても直観的に理解でき、それに基づけば、いかに複雑な言語単位であろうとも解釈することが可能なのである。普遍語彙に関する長年の調査の成果としては、すべての言語共通と考えられるコンセプト”I, YOU, SOMEONE, PEOPLE, BODY, KIND, PART, THIS, THE SAME, ONE, TWO, SOME, ALL, MUCH/MANY, LITTLE/FEW, GOOD, BAD, BIG, SMALL, THINK, KNOW, WANT, FEEL, SEE, HEAR, SAY”が抽出された点を挙げるができるだろう。このような意味原素とされるコンセプトによってあらゆる語彙の意味を構築できると Wierzbicka は主張している。たとえば、母語話者の感覚がないと分かりにくいとされているロシア語の сочувствие も、NSM 法よれば以下のようにロシア語で説明できる。(Зализняк (2005, 223))

Сочувствие X-а к Y-у; X сочувствует Y-у:

- (a) X испытывает нечто хорошее по отношению к Y-y
- (б) X может представить себя испытывающим то, что испытывает Y
- (в) X может представить себя считающим то, что считает Y
- (г) X считает, что Y-y плохо
- (д) X-y плохо оттого, что плохо Y-y
- (e) X хочет, чтобы Y-y было хорошо

このようなアプローチは、人間の認知を重視したいいわゆる認知言語学の一環として行われている。30年前に認識構造と、認識構造の利用のメカニズムが人文科学の研究者の関心を集めた結果、認知言語学、ないしは言葉の意味解明に取り組む認知意味論の基礎ができ、新しい学問として急速に発展してきた。このプロセスは、認知革命 (cognitive revolution)、認知の転換 (cognitive turn) と名付けられた。人間が持つ一般的な認知能力の反映として言語を捉える認知言語学には、言葉の意味に対するいくつかのアプローチがある。「プロトタイプ理論」、「イメージスキーマ」、「フレーム意味論」などがその例だ。本稿で扱う課題に関していえば、数多くのアプローチの中でもとりわけ、言語的世界観が、その世界観を生み出す方法の一つである隠喩と密接に関係していると主張した Lakoff と Johnson のアプローチが興味深い。G.Lakoff と M.Johnson は、(1980 に出版された有名な著作”Metaphors We Live By”において) 現実に存在し、文化のなかに深く根付いた価値観は、隠喩的枠組みと調和しており、そして文化的価値観は、互いに孤立することなく存在していて、我々の生活を取りまく隠喩的概念と調和した体系を形成していると主張した。そのアプローチは、概念メタファー理論と呼ばれ、文化的ないし言語的共通性に対する感覚とメタファーとの関係性についての学問領域が発達しつつあるという。

言語的世界観の再構築法として普及しているものの一つに、抽象的意味を持つ言葉の比喩的互換性を分析するという Lakoff がよく使う方法がある。この分析では「感覚的に知覚される」「具体的な」イメージを明らかにする。そのイメージは、ナイーブな世界観の「抽象的」概念とは対照的であって、言語におけるある種の語結合を可能にする。例えば、上ですでに触れたロシア語には наполниться сочувствием (同情でいっぱいになる)、преисполниться сочувствия (同情であふれる)、капля сочувствия (同情の滴) という語結合が存在することから、ロシア語の言語的世界観において共感 (同情) は液体のようなものとしてイメージされていると結論づけることができる。このようなアプローチのおかげで、従来の意味論はおろか、NSM 法でさえ見えなかった抽象語彙の意味の特徴に光を当てることができた。

ただし、管見によれば、Wierzbicka (NSM法) と Lakoff (概念メタファー論) が行っている概念的分析は、綿密ではあるものの、相当の部分を自身の言語的内観に負っている。Wierzbicka の考えによれば、意味的情報の大部分は、いかなる言語話者の意識のなかでも全く一様にイメージされるという。このような状況の下では、内観に基づく分析の成果は個人の言語感覚の影響を受けかねず、その言語の話者にどこまで共通しているのか一段と判断が難しい。上記の NSM 法で見たように、意味はある程度普遍要素を通して他言語の話者に伝わっているとしても、液体をイメージした用法 *наполниться сочувствием* (同情にあふれる) に関する情報が一切ないことから、外国語の翻訳や学習の分野で NSM 法のみを頼ることはできない。

さらに、Lakoff の分析方法には決まった手順がなく、メタファーの分類はある程度まで恣意的になされるため、ソースドメインの数が多く、その範囲があいまいである場合もある。Lakoff の概念メタファー論が紹介される際に”ARGUMENT IS WAR”というメタファーがよく取り上げられるが、“We have arrived to a disturbing conclusion”、“Your argument doesn’t have much content”といった用例から、“AN ARGUMENT IS A JOURNEY” (議論は旅) または”AN ARGUMENT IS A CONTAINER” (議論は容器である) というような解釈も Lakoff によって提示されている。

従来の意味論や上記の二つの方法を含めた新しい認知意味論のアプローチについては次章で詳しく考察することにし、それらのアプローチを文化的キーワードのような文化的要素および抽象性が高い語彙の意味解明に適用して、その際の弱点に触れるが、本稿では NSM 法、プロトタイプ理論、イメージスキーマのアプローチを踏まえて、Lakoff の概念メタファー論に使われる連語分析法を改善し、単語の意味に対し独自のアプローチをこころみる。そのアプローチの導入としては以下のようなポイントが挙げられる。

- ・文化的キーワードのような抽象的な名詞のソースドメインは必ずしも「液体」、「容器」、「手」のような簡単な概念ばかりではない。抽象的な概念のソースドメインにはほかの抽象的な概念が入っている場合がある。ソースドメインとして使われる抽象的な概念は、ターゲットドメインより単純で身近な存在 (使用頻度などで示す) ではあるものの、その抽象性がはっきりと確認できる場合がある。

- ・起点領域の中に抽象的な概念があると想定すると、その起点領域の概念を形成するより単純な別のソースドメインが存在すると判断できる。つまり、抽象性の高い語彙のソースドメインは木構造になっていると推測できるのである。その木構造のトップ (葉) に抽象性の強い概念があり、下 (根っこ) には五感で確認できるような簡単な概念が位置する。

- ・概念領域と起点領域の間に結ばれる関係には弱いものと強いものがある。つまりソー

ソースドメインからターゲットドメインへ写像されている情報の量には程度があり、ターゲットドメインの概念を理解する上で中心的な役割を果たしているものと、補足的な役割を果たしているものがあるのである。その範囲があいまいなため、中心的なソースドメインとそうでないものとの間に境界線を引いて、はっきりと区別するのは難しい場合もあるが、ターゲットドメインにおける連語の使用頻度を分析することによってある程度まで中心的基点領域と周辺のそれを特定できる。

・一つの概念の中心を成すソースドメインの数は少ない。中心的と思われるソースドメインの数は、単語の抽象性などの特徴によって多少変化するが、実例を挙げて次章に示すようにその数はほとんどの場合、概ね2、3個である。Lakoff は英語の love について”LOVE IS A PHYSICAL FORCE”、”LOVE IS A PATIENT”、”LOVE IS WAR”、”LOVE IS MAGIC”、”LOVE IS MADNESS”というようなメタファーを挙げているが、管見によれば、このようなメタファーを並べて、中心的なソースドメインとそうでないソースドメインの区別がないなら、このような説明は概念の理解を妨げる場合すらある。

・ソースドメインとして提示する概念を正確に選択することは、ターゲットドメインの概念を理解する上で極めて重要なことである。つまり上で触れたように、一見同じように見える簡単な単語であっても言語または文化圏によっては微妙に異なる場合があるというのであれば、ソースドメイン（単語）の選択を粗末に行うわけにはいかない。例えば、”THEORIES ARE BUILDINGS”という Lakoff が紹介しているメタファーの”BUILDINGS”の代わりとして、TOWERS, HOUSES, HUT, CONSTRUCTION, TURRET, CASTLE などの概念も使用できるはずだが、BUILDINGS という Lakoff の選択の基準が分からない。

さらに Lakoff と Wierzbicka の研究が始まったころは、コンピューターによる文章の分析は不可能な時代だったため、手動で分析できる言語データには限度があって、結局それらの研究は言語的直観に基づくしかなかった。しかし、最近ではコンピューター言語学や言語資料の自動処理が可能となっており、連語の抽出と分析に他言語のコーパスを利用することは、個人の言語感覚に依存しない、より客観性のある結果を出す上で意義がある。従って、本稿のアプローチの実証と応用の資料として、様々なジャンルと時代にわたる膨大な数のテキストを納めた日本語、ロシア語、英語、ウクライナ語のコーパスを利用する。

概念を形成するための最も生産的な手段の一つである隠喩が、言語的世界観の創造において果たす役割を解明することが本稿の一つの目的である。翻訳研究の中で繰り返し指摘されてきたように、原文に投影されている民族的文化を伝達するという問題は、翻訳活動の中でも、最も困難かつ、まだ十分に研究されていない領域であるから、本研究は翻訳の分野において一助となるだろう。

## 1-2 研究範囲と目的

すでに前書きで触れたように、世界観や言語に表れる文化の問題は、言語学、人類学、心理学などの学問が追及する根本的な問題の一つであって、すでに膨大な数の利用可能なアプローチ、用語、仮説や理論が存在しており、それらすべてを一つの研究で取り扱うことは不可能であるため、研究に取りかかる前に、本稿におけるビジョン、理論的基盤、研究範囲と目的を明確にしなければならない。

現在、世界には、互いに大きく異なる言語が 6,000 以上あるにもかかわらず、地球全体で我々は似たような欲求を持ち合わせ、似たような条件のもとで暮らしている。従って、異なる言語を話していても現実を同じように受け止めているのではないか、というような疑問を提起することは重要である。しかしながら、それぞれの言語は、認識的意味論の領域にある人類共通の基本的な情報を反映させる一方で、1000 年もの伝統によって形作られており、その大部分が個々の世界観の尺度を有し、それが人々の言語的世界観の中に現れてくる。

世界観と言語のつながりを論じている研究は、言語相対性仮説（ネオ-フンボルト主義、又は Sapir-Whorf の仮説）の理論に基づいている。その仮説は、それぞれの言語が、世界において不可欠なイメージ（言語的世界観）を一定量、人々に押し付けているというという発想から来ている。その結果として、話者が性質を認識する時、自己の言語の境界線を越えることは不可能になる。なぜなら、言語は、意味を送り出し、言語話者の文化に焦点を当てるだけでなく、言語話者の文化を決定づけるからである。その強い仮説（解釈）によると、我々の認識と現実との間には言語が横たわっているのであるから、我々は現実のことなど知る由がないということになる。

Sapir-Whorf 仮説が提示されて以降、この仮説に基づく研究がたくさん行われており、言語は認識のあり方を決定づけ、文化を形成するだけでなく、感情の領域をも左右すると断言する言語学者もいる。しかし、前章で述べたように、世界観と言語の問題を扱う現代の研究者のほとんどは、人の思考が言語によって大きく制限されている（形作られている）という Sapir-Whorf の仮説の強い解釈を支持しない。一方、言語が思考の内容に一部影響するという弱い解釈をめぐってたくさんの研究が行われており、相互影響の有無ではなく、その程度を問題としている学者が多くいる。本稿でも Sapir-Whorf の仮説、世界観と言語の影響を論じる際には、この解釈に依拠する。

さらに世界観が言語に投影されるという問題について研究を行う場合は、三つの軸でこれを進めることが多い。一つ目の軸は、周囲の現実（現実的世界）、二つ目の軸は、人の脳

に映し出される現実（文化的世界観）、そして三つ目の軸は、脳内に映し出された現実が言語に投影された結果として生じる表現（言語的世界観）である。本稿では、文化的キーワード等の、概念の意味に対する新アプローチについて考察する際に、上記の三つのうち言語的世界観のみに焦点を当てる。つまり、分析した概念の背景にある言語的世界観がどこまで現実的世界観またはその人々の文化的世界観に合致し、どこが異なるのかというような間は、本研究の対象外である。

なお、本稿では言葉（概念）の意味における特徴を追及する以上、すべてのアプローチと理論の中で言葉の意味に対し、いかなるスタンスをとっているか、そしてどのような方法が主に使用されているのかを明らかにしなければならない。意味論上の問題点は古代においても議論されたが、19世紀と20世紀の間に F. de Saussure、C. Morris、C. Peirce らの尽力によって、独立した学問分野として確立されるようになった。19世紀から20世紀にかけて言語学者たちが関心を持ったのは、言葉の語源的意味、つまり、基本的に同じ言語か、もしくは近縁言語における他の言葉との関係において究明される語源を、さらに分析することによって明らかになるような意味であった。これと同じ時期、哲学者や心理学者が学問としての意味論に注目し、哲学・心理学的解釈による意味論の研究が現れた（H. Steintal、V. Wundt など）。意味論が発展した現段階では、いわゆる「認知の転換」（cognitive turn）以降、研究者たちの関心は、概念論的課題や分類学的課題、認識や言語構造の相互関係について検討する認知意味論に向かった。我々の考えでは、言語と思考と世界の様相とを関連付けて研究する認知意味論のアプローチそのものが、言葉の補足的意味を研究するために欠かせないツールなのである。

認知言語学には言葉の意味に関するいくつかのアプローチが存在する。なかでも特にプロトタイプ理論、イメージスキーマのアプローチ、概念メタファー理論などに注目すべきである。プロトタイプ理論は1970年代に Eleanor Rosch らによって提唱され、人間が実際にもつかテゴリーは、典型事例とそれとの類似性によって形成されるという考えである。イメージスキーマというアプローチでは、人間の思考・概念の働きを抽象的で二次元的な図形に当てはめて説明しようとしている。概念メタファー理論は、人がある概念領域を別の概念領域を通して理解するというアイディアに基づく。本稿では、世界観と文化の観点から言葉の意味を論じる際、主に、上で述べた認知意味論における三つの理論に依拠する。特に Lakoff らの提示した概念メタファー理論における連語の分析は、言葉の意味における特徴を解明する上でとても有効である。本稿では連語の分析方法と概念のソースドメインの構造について独自の改善策を提案し、Lakoff の理論を発展させる。言うまでもないが、隠喩（メタファー）は、二次的命名の唯一の方法ではない。換喩も、提喩も同様に生産的

である。しかし、換喩や提喩は、隠喩より現実的であり、イメージや連想の類似ではなく、実際の類似、記号内容の並置、又は記号内容の部分性を利用したものである。従って本稿では、人の思考や文化に関わる研究を進めるという都合上、概念の意味を追求する際には研究の範囲を概念メタファーに絞ることにする。

なお、Lakoff らのタイポロジーにおいて、概念メタファーは大きく三つのグループに分類される。すなわち、構造的メタファー、存在論的メタファー、そしてオリエンテーションメタファーである。構造的メタファーにおいては、標的領域の認知的類型は、標的領域を意味づけするモデルである (ARGUMENT IS WAR)。存在論的メタファーは、空間のなかで複数の抽象的実体の間に境界線を引いて、それらを分類する (MIND IS MACHINE)。オリエンテーションメタファーは、複数の方向を示すが、そこには私たちの世界における空間方位の体験が記録されているのである (GOOD IS UP、BAD IS DOWN)。本稿の次章で示すように、抽象的概念のソースドメインがターゲットドメインに写像する情報は複雑であり、標的領域の意味づけのモデルが構造的メタファーであるのか、それとも存在論的メタファーであるのか、境界があいまいで判断が困難な場合もある。従って、概念メタファーを論じる際に三つのグループに分けて扱うことは、本稿においては意味がないと考える。

言語に対する認識的アプローチとは、人が、世界を認識しつつ、現実の特定の断片に焦点を当て、それを自らの精神に投影することを意味する。そして、意識は概念を創造しながら、意識が区別し投影した現実の断片を精神的に代弁するものと解釈するのである。その後、概念が言語内にそれに対応する形を取る。

人間の思考や世界観は、言語に表れる際に様々な形をとる。つまり、言語的世界観の特徴は語彙だけではなく、文法のレベルまでしみ込んでおり、様々な観点から研究されている。語彙の中でも単語の形態や代名詞でさえ研究の対象になる。例えば、『ことばと文化』(1973、岩波新書) という書籍では、鈴木孝夫が日本語の代名詞の用法を分析し、そこから見えてくる日本の社会と文化について論じている。個々人が色をどのように知覚するかについてでさえ、民族言語学の分野で長い間、学術的な論争を生んできた。異なる言語を母語とする者が、異なる色の範囲を使用するということが理論的かつ実験的に明らかにされると、研究者たちは、実際の色の知覚がその人が使用する言語にどう依存しているのだろうかという疑問を持った。そもそも、言語的相対性の問題が提起されたのも、言語学者の Roger Brown と Eric Lenneberg によって、異なる言語を母語とする者の色の知覚に関する実験が行われて以降であった。色の認識について、Berlin&Kay (1969) および Wierzbicka (2006) は、普遍性と相対性をそれぞれ主張している。以上のような点から、以下に挙げる研究に言及する必要と価値があるのである。

文法の現象もしばしば認知言語学の対象となり、多数の専門書が出版されている。認知言語学における文法の研究者では特に W. Langacker (1999) の研究が注目されよう。研究対象となる文法の現象は様々で、例えば「性」や「受け身形」を取り上げた研究 (Niekawa (1968)、Unterbeck (2000) , Taylor (1996)) などがある。

概念あるいは認知のメタファーは、思考プロセスをモデル化すると同時に、新しい抽象的な概念を我々がより理解しやすい形で表現できるようにする。認知地図 (cognitive map) は、外的世界との関わりから認識主体が日々習得する経験と、抽象的な概念とを関係づけるため、思考プロセスを調整する隠喩のシステムによって形成されるものである。

世界観と言語の関係が様々なレベルで現れることを認めはするものの、本稿では対象を語彙レベルに絞る。なお、比喩、慣用句、名詞の愛称形、言葉の内包的意味、時間を表す言葉など数多くの文化コードを反映する語彙を挙げる事が可能だが、本稿では対象を上で触れたように概念メタファーの特徴がよく見られる抽象性の高い語彙に絞る。

なお、その他の語彙の中で私たちが特に注目するのは、文化的キーワードと呼ばれるものである。それらの中に研究者たちが見出すのは、文化的要素と定義できるような、その人々の思考や精神性、世界観の反映であり、それらを通して、その集団における文化の特徴ばかりか、その文化全体の特徴をも理解することが可能である。

次章で示すように文化的キーワードは文化への鍵でありながら、非常に高い抽象性を持つため、概念メタファー理論の立場から研究しやすい対象である。文化的キーワードは一種の集合的概念として扱われており、言語の中に形容詞、副詞、動詞、名詞の形をとっていると示されている。つまり概念は文法的変化をしても、結局は脳内で同じ概念につながるため、形が違っていても同じように認知されている。だが、本稿の本論において示すように、例えば名詞とそれをもとに作られた形容詞は必ずしもまったく同じように認知されるわけではない。従って、このような一般化によるあいまいさを避けるため、本稿の対象を名詞のみに絞る必要がある。

本稿では文化的キーワードの連語を採集し、互換性を分析することで、言葉の意味を追求する。分析自体は認知意味論の方法論にそって行う。認知言語学の方法としては、研究者の内観、心理学的実験、コーパス分析がある。Lakoff、Wierzbicka、Zaliznyak、Shmelev の研究は、相当の部分をも自分あるいはインフォーマントの言語的内観に負っているが、本稿では、より客観的な成果を得るため、幅広い言語現象をデータとして用いることが可能になるコーパス分析を、内観に加え方法として利用する。言語資料としては日本語、ロシア語、英語、ウクライナ語の言語コーパスを利用する。このような複数の異なる言語を扱うことによって、本稿で提示するアプローチが一つの言語の特徴に基づくものではなく、



ある程度普遍的であることを示す。

一連の外国の専門家たちの考えでは、比較言語学こそが、意味論の領域を検討可能にする概念メタファーについて、その普遍性についての仮説を立証することができる。そのため、この分野で現在発表されているものの大部分が志向しているのは、G.Lakoff と彼の仲間たちが英語を例としてその他の言語の中で明らかにした概念メタファーの類似物を発見することである。Kövecses (2003, 170) によれば、現実の概念化には文化を越えて共通の傾向がある。例えば、英語、ハンガリー語、中国語では「幸せ」は「光」に喩えられる（部分的に光として理解される）。

Chinese shares with English all the basic metaphors of happiness: UP, LIGHT, FLUID IN A CONTAINER. A metaphor that Chinese has, but English doesn't, is HAPINESS IS FLOWERS IN THE HEART (Yu, 1995). According to Ning Yu, the application of this metaphor reflects "the more introverted character of Chinese" (p.75). He sees this conceptual metaphor as a contrast to the (American) English metaphor BEING HAPPY IS BEING OFF THE GROUND, which does not exist in Chinese at all. Hungarian appears to be halfway between English and Chinese in regards to the BEING OFF THE GROUND metaphor. There are some expressions in Hugarian that could be seen as instances of it but that do not indicate a well-delineated and full-fledged HAPINESS IS BEING OFF THE GROUND metaphor.

上、光、容器の中の流動体といった英語に見られる幸せのメタファーは、すべて中国語にも存在する。中国語にはあって英語にはないメタファーは「幸せは心の中の花」というものだ (Yu, 1995)。このような表現が使用されることは「中国人の内向性」を体現していると Ning Yu は述べている。彼によると、この概念メタファーは（アメリカ）英語の「幸せとは宙に浮くこと」と対照的で、これに類似するメタファーは中国語には存在しない。この「宙に浮くこと」のメタファーに関して、英語と中国語の中間に位置するのがハンガリー語である。ハンガリー語にも宙に浮くに類似する表現はあるが、そのメタファーは「幸せとは宙に浮くこと」と完全には一致しない。

このように異なる言語や文化で「幸福」が同じものだと概念づけられたことは、借用の結果あるいは偶然の一致ということではないはずである。最も信頼できる説明として考えるのは、人類共通の経験に基づく、この類似点の普遍的な動機付けである。多種多様な言語において多種多様な概念の概念論的メタファーを比較分析することで、類似の結論が

得られている。例えば、イギリス、レバノン、中国の母語話者は「教育」を「光」に喩える (Cortazzi (2008)) ということを示した研究がある (Скворцов (2009))。上記のことを踏まえて、本稿で提示するアプローチや、概念のソースドメインにおける本稿で解説する木構造が日本語のみならず、ほかのタイプの言語にも十分みられることを想定し、日本語との類似性が比較的低いと思われるゲルマン系 (英語)、とスラブ系 (ロシア語、ウクライナ語) の言語を本稿の題材にして、その発想の普遍性を試す。

文化に強い関わりを持っている言葉の研究するにあたっては、常に歴史的背景と意味の変化に注意することが必要となる。例えば、Wierzbicka (1992) がフランス語の *destin* (運命) の意味的ニュアンスを調べた際、19 世紀と 20 世紀では、使われていた *destin* の意味が違っていたことがわかった。「運命」にあたる英語の言葉について Wierzbicka (1992, 66) は次のように述べる。

Furthermore, fate itself appears to have changed its meaning in the course of the history of English, and so has destiny...

更に、英語の発達の歴史の中で *fate* 自体が *destiny* と同様に、その意味を変えてきたようである。

更にいえば、西洋言語では変化しにくいと思われる人称代名詞も日本語の場合は変化している。鈴木孝夫 (1973, 140) は人称代名詞の歴史的変化について次のように述べている。

ヨーロッパ諸語の一人称、二人称代名詞が数千年の歴史を持っていることに比べると、日本語の人称代名詞の生命の短さは余りにも対照的である。現代標準日本語のいわゆる一人代名詞である「わたくし」「ぼく」などは、古代日本語に遡ることができないばかりでなく、「ぼく」などは、口語に於けるその使用の歴史が僅か百年あまりという新参者にすぎない。相手を指す「きみ」「おまえ」「あなた」「きさま」なども言葉としてならいざ知らず、人称代名詞としてはこれもまた、その歴史は古代にまで遡って行くことができないのである。

文化を表す抽象的な概念 (例えば日本語の「遠慮」、「可愛い」) も本来の意味から変質している場合がある『日常語の意味変化辞典』(2003)。

本稿の本論において示すように、特定の言葉と組み合わせられる頻度の高い連語 (概念メ

タフナー)も通時変化をし、その言葉の意味と用法がそれによって変わることがある。例えば、ロシア語の ум (知恵、理知)の用法(使用頻度の高い連語)を分析すると、二百年前には「武器」に喩えられ、普段武器に使うような形容詞や名詞と一緒に使われていたが、科学の発展に伴い、「知恵」が「機械」に喩えられることになったため、その用法(連語)と理解が変化したことが分かる。

言語的世界観が言語の発展に伴って変化するということがロシア語の проблема (問題、トラブル)の意味の変化を見ることによって確認できる。18世紀にロシア語にもたらされた проблема という語は、「解決を要する難しい事柄」を意味したが、西欧諸語を翻訳借用した結果、現在は、主として「物事の正常な、つまり円滑な進行を妨げる事態」という意味で使用されるようになった。別の言い方をすれば、この語は、物事の正常な進行を回復させる時に排除すべき何かを意味するようになった。それを排除することで、人は人生に満足することができる、というわけである。また一連の慣用的な決まり文句も現れた(多くの場合が翻訳借用されたものである): нет проблем (問題はない)、не проблема (問題ではない)、без проблем (問題ない)、это не моя проблема (それは私の問題ではない)、это твои проблемы (それはあなたの問題だ)、создавать себе проблемы (自分で問題を作り出す)(Shmelev)。проблема という単語がロシア語に入ってから200年がたち、その意味の変化は比較的長いスパンで起こったため、意味のずれを指摘して、そのタイミングを特定するのはさほど簡単ではないかもしれない。だが、本稿の本論において示すように、最近ロシア語に入った外来語(имидж、рейтинг)は、意味がある程度定着するまでに、その意味を形成するソースドメイン(source domain)も複数のものが使用されているので、話者によって解釈(新語の捉え方)がかなり違うことがはっきりと分かる。

上記の主張を踏まえると、文化的キーワードの意味を解明するため、概念メタファー理論に基づいて概念の互換性を利用する新しいアプローチについて考察する際に、言葉の意味を調べやすい現代語もまた、言語コーパスや近・現代文学を題材にすることと同様、意味があると考えられる。本稿の主な目的は以下の三つである。

- ・抽象名詞、とりわけ世界観と密接につながっていて、他言語に翻訳しにくい(あるいは不可能)とされる文化的キーワードの意味を解明するための新しいアプローチを提示する。そのアプローチによって、今まで他の研究では取り上げられることのなかった問題や、人間の思考や、人が言葉を理解する仕組みにおける特徴の一端に光を当てる。

- ・提示された新アプローチを、個人の内観や、言語の特性による影響が少ない方法で実証

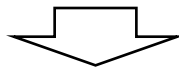
し、あらゆる観点と言語現象をもって検証する。そのために英語、日本語、ロシア語、ウクライナ語という異なる言語、または個人の感覚に依存しない様々なジャンルの言語コーパスによって検証を行う。本稿のアプローチには明確で実際的な手順があり、母語ではない言語に応用できることを目標としている。

- ・ 研究で得られたデータのもとに文化的キーワードの翻訳可能性について考察する。

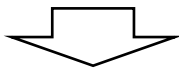
目的はあくまで上記の三点であって、本稿は特定の言語のあらゆる文化的キーワードを採集し、それを通してその人々の世界観や文化のあり方を説明することを目的としてはいない。なお、新アプローチは用い方によっては抽象性の高い語彙における今まで見逃しがちだった意味の一部だけを表出するため、新アプローチを既存の認知意味論などにおけるアプローチの完全な代替物にすることはできない。

### 1-3 本論文の構成

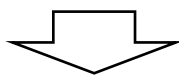
第1章 序論：問題の所在と本研究の目的	
<b>研究の背景</b> 本研究に至るまでの経緯、世界観と言語のつながり、言葉の意味に対するアプローチの歴史と文化的キーワードの翻訳可能性について考察する。問題の所在および本稿のスタンスについて述べる。	<b>研究の範囲と目的</b> 言語的世界観に対する本研究におけるスタンスならびに研究対象である文化的キーワードおよびほかの抽象性の高い語彙の意味を解明する方法について述べる。研究の理論的背景と目的について考察する。



第2章 先行研究の概観（関連動向調査分析と問題点・課題の提示）
言語に表れる文化と世界観に関する思想の歴史、Humboldtの立場、Sapir-Whorfの仮説などについて述べた後に、いわゆる文化的キーワードに関する Wierzbicka などの研究、言語に表れる異文化の翻訳可能性、外国語話者に伝わりやすい言葉や文化的特徴が分かりやすい言葉の意味に対するアプローチについて考察する。その中でNSM法、認知意味論のプロトタイプ理論、イメージスキーマ、概念メタファー理論に関する研究とその弱点について述べる。



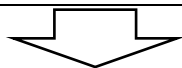
第3章 分析方法とデータの収集	
<b>本稿のアプローチを提示</b> 前章で論じた概念メタファーなどの認知意味論におけるアプローチの弱点を踏まえ、抽象性の高い語彙である文化的キーワードの意味を解明するための独自のアプローチを提案する。単語の起点領域は木構造になっているという仮説に基づき、言葉の意味解明にはその共起関係（連語）を調査する必要があることを示す。	<b>連語の定義と抽出方法</b> 本稿で提示する意味論的アプローチは主に連語の分析に基づくため、連語の定義を行い、その採集方法について述べる。その中で本研究の資料として使う言語コーパス、連語抽出ツール、辞書の活用方法などを取り上げて、使用頻度などを考慮した連語の発見手法と分析手順について論じる。



#### 第4章 本稿におけるアプローチの有効性の実証と応用

前章で説明した独自のアプローチを日本語、ロシア語、英語、ウクライナ語という異なるタイプの言語資料に即して、実際の語彙に適用し、有効性を実証する。その際、外来語の意味、抽象性の高いないし低い語彙の意味、語彙の意味変化、同族言語の似たような言葉におけるニュアンスの違い、類義語の意味などの多様な観点から、提示する仮説がどこまで適用可能かを試す。

新アプローチの適用範囲と実用性を確認した後、概念構造全体の分析に基づいた文化的キーワード（ロシア語：судьба、участь、рок、доля、ウクライナ語：доля、英語：fate、destiny、日本語：運命、縁、運）の意味解明を試み、その特徴と他言語への伝達可能性について考察する。なお、概念構造一部の分析を通し、日本語の文化的キーワード（迷惑、世間、義理、人情）の外国人による習得問題と翻訳可能性についても考える。



#### 第5章 結論

本研究の成果のまとめ	概念分析の観点からみた 「文化的キーワード」の翻訳可能性	今後の展望と課題
前章で様々な言語に即して多様な言語現象と文化的キーワードに本稿のアプローチを適用した結果、その有用性が実証できた部分についてまとめる。	日本語、英語、ロシア語、ウクライナ語の文化的キーワードに本稿のアプローチを適用した結果、そこから見えてきた文化的キーワードの翻訳可能性の二つの次元（言語的世界観における概念の翻訳可能性／具体的シチュエーションや文脈における翻訳可能性）についてまとめる。	この研究を通して明らかになった問題点などを踏まえ、今後の課題について考える。その中で、データ自動処理や外国語学習における本稿のアプローチの応用法について考察する。

## 第2章 先行研究の概観

### 2-1 言葉に表れる言語的世界観と Sapir-Whorf の仮説

本稿は文化的キーワードの翻訳可能性をテーマにしており、常に言語と文化ないし言語と考え方の関係を意識せざるを得ないことから、翻訳可能性を考える際には避けて通ることができない言語相対性仮説に対する立ち位置および考えを明確に示す必要がある。言語と世界観の関係は Sapir-Whorf の仮説ができる前からすでに論じられていた。言語的世界観、すなわち言語と思考、言語と文化の相互影響の概念は、言語は世界観とは区別され、言語は「民族の言語的認識」と言い換えられると主張した、Wilhelm von Humboldt の理論を起源とする。Humboldt の考え方によれば、各言語はその言語を話す人の文化と独自性の担い手である。Aristotle の時代から学界に受け入れられ支配的だった言語の二次性は、Humboldt によって否定されている。彼は言語学を絶え間ない創造的なプロセスとして、また言語の内的構造学を人々の個々の世界観を表すものとして発展させている。Wierzbicka (1992, 3) は、Humboldt の次のような発言を引用している。

Each language contains a characteristic worldview. As individual sound mediates between object and person, so the whole of language mediates between human beings and the internal and external nature that affects them... The same act which enables him [man] to spin language out of himself enables him to spin himself into language, and each language draws a circle around the people to whom it adheres which it is possible for the individual to escape only by stepping into a different one.

それぞれの言語には特徴的な世界観がある。個々の音が物体と人間の間 に介在しているように、言語全体も人間とそれに影響を与える内的世界と外界の間に存在している...自身の行為によって人間は、自身の内から言語を作り出すことができ、同様の行為によってまた自身を言語に紡ぎ出すことができる。各言語は、それに密接に繋がる人々の世界を区別し、それによって個々人は、別の言語に足を踏み入れることなくして、固有の世界観から抜け出すことはできない。

Humboldt 以外に、ドイツの哲学者の Hamann と Herder も似たような考えを主張している (Wierzbicka, 1992, 3)。Humboldt はその研究の中で、ドイツ語、英語や他のヨーロッパの言語のような屈折語は最も完全であると主張し、より不完全な言語の話者に比べ、屈折語の話者の優位性について解説している。この見解に同意しなかったのが、ドイツで教育を

受け、アメリカ大陸の先住民に関する文化人類学研究を行った、アメリカ人類学の父、Franz Boas であった。Boas は、すべての文化と言語は同価値であると主張すると同時に、様々な手段を使いながらではあったものの、あらゆる言語は同じ内容を表現することが可能であると断言した。Boas の教え子であった Edward Sapir は、言語間に重要な意味の違いが存在することを根拠に、Humboldt の理論に立ち戻り、言語は人の思考と認識プロセス全体を決定し、その世界観を通じて、世界の全体像が意識の中に生じると仮定した。

Language is a guide to 'social reality.' Though language is not ordinarily thought as of essential interest to the students of social science, it powerfully conditions all our thinking about social problems and processes. Human beings do not live in the objective world alone, nor alone in the world of social activity as ordinarily understood, but are very much at the mercy of the particular language which has become the medium of expression for their society. It is quite an illusion to imagine that one adjusts to reality essentially without the use of language and that language is merely an incidental means of solving specific problems of communication or reflection. The fact of the matter is that the 'real world' is to a large extent unconsciously built up on the language habits of the group. No two languages are ever sufficiently similar to be considered as representing the same social reality. The worlds in which different societies live are distinct worlds, not merely the same world with different labels attached. (Sapir (1949, 162))

言語は「社会的実在性」の一つの指針である。言語が社会科学を学ぶ学生にとって最も重要な関心の対象であると一般的には考えられていないとしても、言語は社会の問題や過程に関する私たちの考え方を強烈に条件づけている。人間は、客観的な世界でも、一般的に理解されているような社会活動の世界でも独立して存在しているのではない。そうではなくて、各言語話者の社会において表現手段たり得てきたその特定言語のなすがままとなっているのだ。人間は言語を用いることなく現実に適応できる、また言語は単に意思疎通や内省活動に伴う特定の問題を解決するための偶発的な道具に過ぎない、などと考えるのは全くの幻想である。事実、「現実世界」というのは大方の場合、無意識にその集団の言語的習慣の上に作り上げられたものだ。二つの言語が、同じ社会的現実を表象していると考えられる程度に似通っているということは決してない。異なる社会同士はそれぞれ別の世界に存在しており、単に異なるラベルを貼られた同一の世界というわけではない。

Sapir の授業に通っていた Whorf (1956, 213-214) は Hopi 族の言語を対象にして同じ方向



で研究を進め、言語と文化のつながりについて以下のように語っている。

[Language] is not merely a reproducing instrument for voicing ideas but rather is itself the shaper of ideas, the program and guide for the individual's mental activity, for his analysis of impressions, for his synthesis of his mental stock in trade. . . . We dissect nature along lines laid down by our native languages. The categories and types that we isolate from the world of phenomena we do not find there because they stare every observer in the face; on the contrary, the world is presented in a kaleidoscopic flux of impressions which has to be organized by our minds--and this means largely by the linguistic systems in our minds. We cut nature up, organize it into concepts, and ascribe significances as we do, largely because we are parties to an agreement to organize it in this way--an agreement that holds throughout our speech community and is codified in the patterns of our language. The agreement is, of course, an implicit and unstated one, but its terms are absolutely obligatory; we cannot talk at all except by subscribing to the organization and classification of data which the agreement decrees.

[言語]は単に考えを表出し再生するための道具ではなく、むしろそれ自体が思考を形作るものである。個々人の精神活動を規定し、感情を分析し、その人の持ち前の思考手段を統合するためのプログラム、指針なのである。...私たち人間は母国語によって規定された境界線に沿って自然を分析する。カテゴリーやタイプは、現象世界の各観察者にとってそれぞれ明白であるため、それらは現象世界の中に存在するのではなく、私たち人間がそこから切り離して捉えるものだ。それどころか、世界は万華鏡のように流動的な印象の中に提示され、人間の思考によって整頓される。すなわちおおよそ思考の中にある言語体系によってである。私たちは自然を切り分け、概念として構造化し、意義付けを行うが、これは主に我々が一人ひとり自然をこのような方法で体系化するという事に合意しているためだ。我々の言語共同体全体に影響を持ち、言語パターンに規定されている合意である。これはもちろん暗黙の合意であるが、その条件というのは絶対的な拘束力のあるものなのである。その合意が規定するデータの体系と区分に寄与しない限り、私たちは話すことすらまったくできないのだ。

上記のような発想は、Sapir-Whorf の言語相対性仮説において発展することとなった。Sapir と Whorf が「Sapir-Whorf 仮説」に言及したことはないし、その理論を「仮説」として紹介したこともない。「Sapir-Whorf 仮説」という語は後に、他の言語相対性理論の追従者

と同様に Whorf を研究した Hoijer の著作で言及されたものである。彼は便宜上、英語、フランス語、ドイツ語を仮に一つのグループにまとめ、「標準ヨーロッパ語 (SAE – Standard Average European)」と名付けた。これによると、これらの言語に代表されるカテゴリーと、Whorf が比較対象としたホピ語との間にはごく僅かな違いがあるだけだと言う (Black, 1961, p. 140)。Whorf が注目したものの一例として、ヨーロッパ言語とホピ語における、時間と数字の概念。Whorf 自身は、思考に対する言語の影響度に関する自分自身の理論を常に信じていたわけではなく、それが彼のアプローチを厳格かつ柔軟なものにした。

「強い仮説 (解釈)」の根幹には、言語における違いは思考における違いを決定づけるという姿勢がある一方、弱い解釈は、人々の思考プロセスにおける相違と、使用言語における相違との間に関係があることは確かなものの、絶対的なものではないとしている。

1960 年代には、言語と認知の普遍的な性質に関する研究が活発になった。具体的にいうと、異なる言語における Berlin と Kay による普遍的な色の概念に関する研究が広く受け入れられたのである。こうした研究では、異なる言語における色名の数と、それらの色の分類法は、まず色を区別しその違いを認識することにどれほどの実際的な関心があるか、それから外部世界でそれらの色に接触する頻度がどれくらいあるかに主として左右されることが指摘されている (Nida, (1975, 185–188)。このように、人間の目は、色、もしくはその言語にその色名がない場合は、その濃淡を知覚することもできるが、それよりも、その母語が想起させる事柄を理解し識別することの方がより手っ取り早くて容易なのである。つまり、言語は完全に認知プロセスを歪めるほどには、知覚を決定しないことがわかる。

Chomsky (1987, 25) や Pinker (1994, 58) は Sapir–Whorf 仮説を批判し、人間の考え方の普遍性を主張している。アメリカの言語学者であり、生成文法の提唱者である Chomsky は、普遍文法の理論を打ち立てた。この理論で彼は、仮説を反証するかなり説得力のある主張を行った。Chomsky は、言語能力の生得性という概念を提唱した。彼によれば、文法とは自然が生み出した普遍的なものであり、すべての言語はその根本において一つであり、すべての存在する差異は表面的なものであって、人は自らの生得的能力のおかげであらゆる言語を習得することができるという。Pinker もまた、仮説の反証のために研究を行った。

Chomsky: Language and thought are awakened in the mind, and follow a largely predetermined course, much like other biological properties. ...Human knowledge and understanding in these areas ... is not derived by induction ... Rather, it grows in the mind, on the basis of our biological nature, triggered by appropriate experience, and in a limited way shaped by experience that

settles options left open by the inner structure of the mind.

Chomsky : 言語と思想は精神の中で目覚め、まさに他の生物学的特性のように、おおよそ予定付けられた方向をたどる。...こういった分野における人間の知識と理解は... 帰納法的に導き出されるものではない...むしろそれは我々の生物学的本質に基づいた精神の範疇で発達し、適切な経験によって誘発される。そして精神の内部構造には、経験によって形作られる知識や理解に対しては限られた程度しか選択の余地が保留されていない。

Pinker : ...there is no scientific evidence that languages dramatically shape their speakers' ways of thinking. The idea that language shapes thinking seemed plausible when scientists were in the dark about how thinking works or even how to study it. Now that cognitive scientists know how to think about thinking, there is less of a temptation to equate it with language just because words are more palpable than thoughts.

Pinker : ...言語がそれぞれの話者の思考方法を劇的に方向づけていることを示す科学的根拠はない。言語が思考を形作っているという考えがもっともらしく思われていたのは、当時科学者たちが、思考がどのように働いているのかも、それをどのように研究すべきなのかすらもわからずにいたためだ。今日、認知学者は思考についてどのように考えるべきなのかを知っており、言葉が思想よりもわかりやすいものであるからといって、以前ほどは思考と言語を同一に見る誘惑に駆られることもない。

Sapir-Whorf 仮説の重心が普遍性に移行したことにより、Sapir-Whorf 理論の強い解釈に対する関心が失われることになった。言語相対性理論の反対派は、この理論の根本的な枠組みに照らせば、異なる言語の話者は、世界を別々の方法で受け入れており、お互いを理解することも、相互に関係することもできないということになるが、これは異なる文化の代表者同士の交流や、文学その他の翻訳といった、現実の経験に相反すると、繰り返し指摘してきた。Whorf の論点はそのままで極端ではなかったし、文化における全てが言語に決定されるのではないと繰り返し強調してもきた。しかし、Whorf は言語的要素と非言語的要素とを区別するための基準を提示してこなかった。

現在、ほとんどの言語学者は、言語的相対主義、つまり言語が特定の種類の認知プロセスに、はっきりとした形ではないにせよ影響する、という考え方に対して冷静な立場をとっている。研究が焦点を当てているのは、この影響の道筋を明らかにし、言語が思考に与

える影響の度合いを明確にすることである。例えば、色の認識を手がかりに言語相対性仮説を証明しようとする論文も多くあり、日本語における色の特徴を論じたものに、Hardin (1997) “Color categories in thought and language”などがある。また、日本文学の英訳と英語文学の和訳を通じて日本語の受身系の特徴を分析し、言語相対性仮説を考察する研究を挙げることができる。例えば、Niyekawa (1968) の“A psycholinguistic study of the Whorfian hypothesis based on the Japanese passive”が注目されよう。文法だけでなく、語彙の研究も盛んで、日本語を題材にした鈴木孝夫(1990、1973)や土居健郎(2007)などの研究もその一例である。次章で触れるいわゆる文化的キーワードを論じる研究、又は全言語共通と考えられる概念(友人、運命、自由など)の意味的な差異を明らかにした Wierzbicka (1992) (1996) (1997) の研究なども挙げられる。言語分野を専門とする Wierzbicka の他に、文化人類学の観点から日本語を通じて日本文化を説明する論文も数多くある。例えば、Lebra (1976) “Japanese Patterns of Behavior”、 Shimizu (2002) “Japanese Frames of Mind”、 Fussel (2002) “The verbal Communication of Emotions Interdisciplinary Perspectives”、 Hasada (2001) “Meaning of Japanese sound-symbolic emotion words”、 (Harkins (ed.) (2001) “Emotions in Crosslinguistic Perspective”などが挙げられる。

上記の研究には多くの場合、直接的または間接的に言語的世界観についての言及が見られるが、それは人間の意識内に形成され言語に表現された世界に関する知識が、客観的および主観的に、また個人及び集団レベルにおいてそれぞれ別の形に構成され、まとまったシステムとなったもののことを意味する。

1980年の終わりには、言語的相対論の新しい学派の代表者が、認知の言語学的分類に違いを生じさせた結果について学ぶと同時に、結論のない仮説を、広く実験的に普及させることに成功した。具体的には、認知言語学の新しい潮流が発展し始めたのだが、これについては別途後述することにする。現代でも多くの学者に支持されている Sapir-Whorf 仮説には、その厳格な解釈においてでさえ、「言語的世界観」という現象が示唆されている。「言語的世界観」という発想は非常に魅力的で生産的だった。何らかの言語に特徴的な世界観をテーマにした研究が様々な国の研究者によって毎年何十本も発表されている。これらの研究のほとんどが、特定の文化圏で典型的だとされる、言い方を変えれば、「鍵」として使用されられると思われる語彙単位を調べることに焦点を当てている。概して、そのような語は、他の言語に翻訳するのが難しいと表現される事が多い。

言語間の意味の違いは、文法の領域にもみられる。例えば、研究者の中 (Shmelev 等) には、無人称動詞がロシア語とその世界観において重要な役割を果たしているという事に注目している者がいる。これらの文法的な特徴は、世界を予測不可能だとする認識が、他の

要因と同様、ロシア語的世界観の構成要素の一つであることを裏付けるものである。つまり、ロシア語話者は出来事を、自らの行動あるいは決定の結果とみなすのではなく、予見し難くかつ変えがたい状況と捉える傾向にあるのである。その結果、人間とは自ら行動するものではなく、彼に何かが起こるのだ、という解釈が生まれる。この例として、так сложилось (вышло, получилось, случилось) (そのようになった) とか、вот угораздило! (こんなことになってしまった)、повезло (運がよかった)、образуется (うまくいく)、успеется (間に合う)、получится (うまくいく) 等の無人称動詞が挙げられる。

Sapir-Whorf 仮説に対し本稿は以下の Lakoff (1987, 328) の主張と同じスタンスをとる。

... Whorf and relativism in general are widely assumed to have been discredited. But, as we have seen, there is no single relativism, but rather dozens, if not hundreds, of versions, depending on the stand one takes on various issues. All too often, arguments against Whorf are taken to be arguments against relativism in general. And arguments against Whorf, as we have just seen, may not be arguments against the position that Whorf advocated. Though Whorf's view of relativism is only one out of a great many, and though it has no privileged status from a scientific point of view, it does have a privileged historical status.

...一般的に Whorf と相対主義の信憑性は失われてきたとされている。しかし、これまで見てきたように相対主義はただ一つのみ存在しているのではなく、多様な問題に対してどのような立場を取るかによって、何百とまではいかなくとも何十もの説が存在している。大抵の場合、Whorf に対する反論は相対主義一般への反論と受け取られる。そして前述のように、Whorf への反論は、Whorf が支持した立場への反論ではないこともある。Whorf の相対主義に対する見方は数あるうちの一つに過ぎず、それに科学的見地から何か特権的な地位があるわけではないが、実際には歴史的優位性を保ってきたのである。

本稿では、Sapir-Whorf 仮説の弱い解釈である、言語はその話者の世界観の形成に関与するという考えを基盤として、言葉がどの程度まで人間の思考や世界観に影響を与えるかということ、そして文化的キーワードの翻訳可能性について論じる。

## 2-2 文化的キーワード

前章では Sapir-Whorf の仮説に関連した先行研究について述べたが、それらの研究は、弱い仮説（解釈）に基づいたものが多く、特定の言語を話す人の言語的世界観を語彙の分析で把握しようとしている試みが特に目立っている。このような語彙の特徴には Sapir（1949, 27）も半世紀以上前から気づいている。

Vocabulary is a very sensitive index of the culture of a people and changes of the meaning, loss of old words, the creation and borrowing of new ones are all dependent on the history of culture itself. Languages differ widely in the nature of their vocabularies. Distinctions which seem inevitable to us may be utterly ignored in languages which reflect an entirely different type of culture, while these in turn insist on distinctions which are all but unintelligible to us.

語彙はその民族の文化における非常に敏感な指標であり、意味の変化や古い語の喪失、新しい語の作成や借用は全て文化の歴史それ自体に依存している。言語はそれぞれ、語彙範疇の特質の点で非常に異なっている。私たち人間が不可避と感じる差異は、まったく異なる文化を反映する言語においてはすっかり無視されていることがある。一方で、人間にとっては些細で不明瞭な差異であっても言語には明瞭に表れていることもあるだろう。

半世紀以上に Sapir（1949, 166）は、社会科学の方法論において言語学は戦略的な重要性を持つと主張し、その後、社会や文化について言葉を通じて論じる数多くの研究がなされてきた。Wierzbicka（1997, 2）の似たような発言も参考になろう。

There is a very close link between the life of a society and the lexicon of the language spoken by it. This applies in equal measure to the outer and inner aspects of life.

言葉に表れる文化と社会の特徴、つまり言語的世界観を再構築することは、現代言語学の意味論における最も重要な課題の一つである。現実世界は、無意識的とはいえ、かなりの程度で言語習慣に則って作り上げられており、言葉によって世界観が作られると説明する Sapir-Whorf 仮説がある程度正しいとすれば、言語レベルに表れる文化諸相が物質文化や歴史用語の範囲内に収まらないことは明白である。これを証明するには、その言語のすべての言語単位を詳細に分析することが必要である。言語によって、文化コードを反映する

語彙は比喩、慣用句、名詞の愛称形、言葉の内包的意味、時間を表す言葉などが数多く挙げられる。Wierzbicka (1997, 5) がさらにそれについてこう語っている。

In a sense, it may seem obvious that words with special, culture-specific meanings reflect and pass on not only ways of living characteristic of a given society but also ways of thinking.

ある意味明らかに思われるかもしれないが、特殊で文化的依存性が強い語は、その特定の社会に特異な生活様式のみならず思考様式も反映し後世に伝えていく。

つまり、Wierzbicka によると、言葉には文化の特徴だけでなく、人間の思考のあり方に関する情報までが含まれていることがある。その程度は言葉によって差があるものの、その中に文化のエッセンスを抽出できるものがあって、それを Wierzbicka は「文化的キーワード」と呼ぶ。Wierzbicka (1997, 16) 自身はそれについてこう語っている。

Some words can be studied as focal points around which entire cultural domains are organized.

そういった語は、文化的領域全体が組立てられる中心点として研究することができる。

Wierzbicka (1997, 15) は、使用頻度、文化的肉づけ (cultural elaboration)、同概念を表す単語の有無 (codability)、語彙と文化のつながりなどの条件に基づいて文化的キーワードと思われる単語を探し出し、その単語を通して文化の重要なアスペクトが説明できると主張している。例えば、日本語の「遠慮」と「思いやり」という単語は、日本文化の枠組みの中では重要な存在となっており、文化的キーワードとされている。

A key word such as enryo (roughly ‘interpersonal restraint’), on (roughly ‘debt of gratitude’) and omoiyari (roughly ‘benefactive empathy’) in Japanese can lead us to the center of a whole complex of cultural values and attitudes, expressed, inter alia, in common conversational routines and revealing a whole network of culture-specific “cultural scripts”. (Wierzbicka (1997, 17))

既に述べたように、言葉を利用して文化の一面を論じようとする文化人類学ないし社会学の研究は二十世紀後半には数多く現れている。日本語を対象にした研究も多数あって、上記のような研究には、寺沢正春 (2002) 『日本人の精神構造 ー伝統と現在ー』、Smith

(2004) “Japanese Culture: Its Development and Characteristic”、Davies (2002) “Japanese Mind”、阿部謹也 (1995) 『「世間」とは何か』などが加えられる。ただし、例として出される単語は大体同じ（日本語の場合は「甘え」、「恩」、「義理・人情」、「内・外」など）だが、それらを総称する単一の用語はなく、研究によって“core culture values、key words、key cultural concepts”などの様々な言い方が用いられている。また、用語の有無の問題はともかく、このような語彙の定義を試みる研究も少なく、大抵の場合、特定の文化において重要だと思われる単語が挙げられ、ひとつひとつの意味や他の特徴が説明されるだけである。Wierzbicka (1997) が初めてそのような語彙の発見手法や言葉を文化的キーワードとして認定するための条件などに注目し、以下のように説明している。

One may want to establish (with or without the help of a frequency dictionary) that the word in question (whatever its overall frequency) is a common word, not a marginal word. One may also want to establish that the word in question (whatever its overall frequency) is very frequently used in one particular semantic domain, for example, in the domain of emotions, or in the domain of moral judgment. Furthermore, one may want to show that this word is at the center of a whole phraseological cluster. One may also be able to show that the proposed “key word” occurs frequently in proverbs, in sayings, in popular songs, in book titles, and so on.

問題のその語が（全体的な頻度がどうであれ）よく使われる言葉であり周辺的な言葉ではないということ、（出現頻度辞典に頼るかどうかに関わらず）証明したいと思うかもしれない。またその語が（全体的な頻度がどうあれ）ある特定の意味領域、例えば感情や倫理的判断の領域で、非常に頻繁に使われている確証を得たいと思うかもしれない。あるいは提案されているその「キーワード」が頻繁に、ことわざ、流行歌、本のタイトルなどで使用されているということを示すことができるかもしれない。

上記のように Wierzbicka は、発見手法として使用頻度などに基づき単語が常用語であること、複数の表現の中心をなすこと、諺や本のタイトルなどで使われていることなどの条件を挙げているが、別のところでは (Wierzbicka (1997, 16)、文化的キーワードの分析を通じて文化の重要なアスペクトを説明できること（文化的情報負荷）が決定の決め手となると説明している。本稿では上記のような語彙をまとめて「文化的キーワード」と呼ぶことにし、Wierzbicka (1997, 16) が提案した発見手法を使うが、キーワードとして挙げられる単語の数は限られていないので、発見と決定の絶対的な方法は存在しないであろう。文化人類学などの研究では、文化の説明によく使われる単語は文化的情報負荷が大きいと仮定



し、それらが文化的キーワードである可能性が高いと考える。

日本文化の分析ないし説明を行う際、文化人類学や社会学などの研究においては固有と思われる日本語の語彙がしばしばそのまま翻訳されずに紹介される（スロヴェイ、2008、14）。その中には「甘え」、「和」、「遠慮」、「思いやり」、「気兼ね」、「世間」、「他人」、「我慢」、「頑張る」、「努力」、「恥」、「恩」、「義理」、「人情」、「粹」、「侘び寂び」、「内・外（他所）」、「らしさ」、「こころ」、「気」、「本音・建前」、「らしい」、「こだわり」、「自分」、「精神」、「集団」、「常識」、「公」、「素直」、「迷惑」、「面倒」、「世話」、「囚われ」、「あきらめ」などがある。文化的キーワードが文化の中心的な役割を成すとすれば、すべてキーワードは大きな全体像の構成成分であり、単独で理解・伝達しにくいと推定できる。文化的キーワードは固まったグループとして存在し、そのグループに入っていることですら単語がキーワードであることを一つの証明として捉えることができるだろう（Wierzbicka（1997、16））。Wierzbicka は key words と同時に core culture values（中心的文化的価値観）という用語を使うが、日本語の文化的キーワードは互いに親密に繋がっていて、core（中心）的な存在が特に見えやすい。

その裏付けとしては、文化的キーワードを説明する際に日本文化の研究においても他のキーワードを多用することが挙げられる。例えば、「遠慮」と「迷惑」を論じた次のテキストを見よう。便宜上、括弧の中で注釈をつける。

Alter's comfort（ここでは他人のこと）is optimized not only by providing pleasure, but by preventing displeasure. One should note how often in speech the Japanese refer to the need not to cause meiwaku（迷惑）, "trouble," for another person（他人）, not to be in his way, and not to hurt his feelings. In actual behavior, too, they tend to be circumspect and reserved so as not to offend other people. Thus, the virtue of enryo（遠慮）, "self-restraint," is exercised not only to respond to group pressure for conformity but to avoid causing displeasure for others, regardless of their group membership.（Lebra、1976、41）

土居健郎（2007、61）も「甘え」の多面性を説明する際に、文化的キーワードおぼしき他の単語をよく使う。例えば、「遠慮」についての段落を見てみよう（注目すべき箇所には太字にする）。

**遠慮**の意味は前に説明した「**気兼ね**」や「**こだわり**」とほとんど同義であるといつてよい。すなわち相手の好意に**甘え**過ぎてはいけないというので**遠慮**するのである。い

いかえれば、**遠慮**しないと凶凶しいと考えられ、相手に嫌われはしないかと言う危惧がそこには働いている。

文芸作品（注1）の中にも、複数の文化的キーワードが同じ発言或いは場面に繰り返しよく現れる。例えば、安部公房の『砂の女』と夏目漱石の『こころ』の一部を次に引用してみる。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

原文（安部公房『砂の女』、357）

農村じゃ、**世間体**だとか、つき合いの**義理**ってこともあるし、跡取りの**家出**ともなれば、よくよくの事情がなけりゃねえ……」「そうですよ……**義理**は、なんたって、**義理**ですから……」

原文（夏目漱石『こころ』、4）

これは**世間**を憚かる**遠慮**というよりも、その方が私にとって自然だからである。

ここでは「世間（体）」、「義理」、「家」という三つのキーワードが一つの場面に出ている。日本語のキーワードは同じ発言の中に使われるだけでなく、組み合わせあって決まり文句を形成する場合もよくある。例えば「世間への遠慮」、「世間の常識」、「世間に顔を出す」、「世間への義理」、「世間に甘える」、「義理と人情の板ばさみになる」などがある。

他の言語にも似たような傾向が見られる。ロシア語のキーワードとして душа、судьба、тоска、счастье、разлука、справедливость、обида、попрёк、собираться、добираться、сложилось、довелось、заодно、правда、авосьなどがよく出されるが、やはりすべて共起する性質を有している。Shmelev（Зализняк, (2005, 55) はロシア語の тоска を душа という別の文化的キーワードを通して説明している。

Тоска – душевная тревога, соединенная с грустью.

長年ロシア語の世界観と言葉に関する研究を行っている Levontina（(Зализняк, (2005, 74-75)）も文化的キーワードのこのような特徴に気づいている。

Можно заметить, что подобные «ключевые слова» обладают замечательным свойством притягиваться друг к другу. Очень часто они появляются в текстах рядом: воля тянет за собой удаль, разгул заставляет вспомнить о тоске, а к просторам так и просится эпитет

родные. Такие слова в конденсированном виде содержат одно и то же мироощущение. Создается впечатление что они сами по себе обладают текстопорождающей способностью. Некоторые тексты как будто написаны человеком, отдавшимся на волю стихии языка и плывущим по течению. Так, песня на стихи Лебедева-Кумача «Широка страна моя родная» не просто проникнута характерным русских мироощущением, но является описанием фрагмента русской языковой картины мира, облеченным в стихотворную форму. Тут и широта, и необъятность, и приволье, и родное, и ветер, и вольное дыханье.

これらの「キーワード」は、お互いに引き合うという注目すべき特性があることに気づかされるだろう。これらの語はテキストの中で非常によく隣り合わせになって現れる。意志は勇ましさを引き寄せるものであり、痛飲の後は憂鬱になるものだし、広々とした場所を前にすれば、血を分けた、という形容語が湧いてくるものである。

これらの語は、その凝縮された形の中に、同じ世界観を包含している。それぞれの語が、それ自体で文章生成能力を有しているかのような印象を与える。文章の中には、あたかも作者が言語の力に身を任せ、その流れのままに書いたかのようなものがある。

例えば、Lebedev-Kumach の歌詞にある「Широка страна моя родная (広い私の祖国)」は、単にロシア人の世界観が浸透しているというだけではなく、詩の形式をとったロシア語的世界観の一表現でもあるのである。これは、широта (広さ)、необъятность (果てしなさ)、приволье (果てなき地)、родное (血を分けた)、ветер (風)、вольное дыханье (自由な呼吸) という語についても同様である。

Wierzbicka もロシア語の душа (こころ、魂、精神) という単語を文化的キーワードとして分析した結果、душа は他のキーワードとおぼしき単語と密接につながっていると語っている。

A key word such as *dusa* (roughly 'soul') or *sud'ba* (roughly 'fate') in Russian is like one loose end which we have managed to find in a tangled ball of wool: by pulling it, we may be able to unravel a whole tangled "ball" of attitudes, values, and expectations, embodied not only in words, but also in common collocations, in set phrases, in grammatical constructions, in proverbs, and so on. For example, *sudba* leads us to other "fate-related" words such as *suzdeno*, *smirenje*, *ucast'*, *zrebij*, and *rok*, to collocations such as *udary sud\*by* (roughly 'blows of fate') and to set phrases such as *nicego ne podelaes'* ('you can't do anything'), to grammatical constructions such as the whole plethora of impersonal dative-cum-infinitive constructions, highly

characteristic of Russian syntax, to numerous proverbs, and so on.

ロシア語の *dusa* ('soul'に近い意味) や *sud'ba* ('fate'に近い意味) といったキーワードは、絡まった毛玉から出ている糸の先のような。その糸先を引くと、単語に限らず、慣用表現や連語、文法構成、ことわざなどに包含された態度や価値観、先見の絡まった『毛玉』をほどくことが出来るようである。例えば、単語レベルでは *suzdeno*、*smirenje*、*ucast'*、*zrebij*、*rok* などの「fate に関連した」語彙が、慣用表現では例えば *udary sud\*by* ('運命の一撃'に近い意味)、連語では例えば *nicego ne podelaes'* ('君は何もできない'に近い意味)、文法構造ではロシア語統語論に特有の無人称与格付き不定詞が過剰に使われる構文、そして多数のことわざが *sudba* から想起されるといった具合だ。

キーワードを使用する際、その一貫性は、上述したグループ化傾向の他、別の面においても現れる。こうした語彙を大まかにざっと分析するだけでも、語彙の背後に隠された言語的世界観に関する結論を導き出すことはできるし、そうした語彙を構造化し、共通のテーマを浮き彫りにすることも可能であろう。

例えば、ロシアの言語的世界観には、「崇高なもの」と「低俗なもの」、「天上の世界」と「地上の世界」という対比があつて (Зализняк、2013、227)、そして明らかにそれらのうちの前者を好むという特徴があることが指摘されている。「崇高なもの」と「低俗なもの」というこの対立は、後者の *радость* と *удовольствие* の例によって以下のように説明される。

Между словами *радость* и *удовольствие* имеется множество различий, среди которых два являются главными, определяющими все остальные. Первое состоит в том, что *радость* – это чувство, а *удовольствие* всего лишь «положительная чувственно-физиологическая реакция». Второе и главное – в том, что *радость* относится к «высокому», духовному миру, в то время как *удовольствие* относится к «низкому», профанному, телесному. Итак, аксиологическая поляризация внутри пары *радость* – *удовольствие* обусловлена тем, что *радость* связывается со способностями души, а *удовольствие* является атрибутом тела, ср.: душа радуется, радоваться душой, душевно рад (но не \*душевно доволен) и плотские удовольствия (но не \*плотские радости). При этом, поскольку оппозиция «душа – тело» уже входит в систему других аксиологически значимых оппозиций (высокое – низкое, небесное – земное, сакральное – профанное, внутреннее – внешнее и т.д.), соответствующее распределение происходит и в паре *радость* – *удовольствие*.

радость (喜び／喜ばしいこと／喜びをもたらすもの(人)) と удовольствие (喜び／快感／満足／光栄／楽しみ) の間には、多くの差異がある。そのうち、二つが主要な差異であって、ここから残りの全てが派生しているのである。一つ目の差異は、радость が感情であるのに対し、удовольствие が「心地よい官能的・生理的反応」にすぎない点である。二つ目の差異は、そしてこれこそが主たる差異なのであるが、радость が「高い」精神的な世界に関係するのに対して、удовольствие が「低い」俗悪で肉体的な世界に関係するという点である。このように、радость と удовольствие のペアにおける価値論的な分極化は、радость が精神の能力に関係しており、удовольствие が肉体的属性であるということから生じている。душа радуется (心が喜ぶ)、радоваться душой (心で喜ぶ)、душевно рад (心が嬉しい) (ただし\*душевно доволен (心が満足している) ではない)、плотские удовольствия (肉体的満足) (ただし\*плотские радости (肉体的快樂) ではない) を比較してみよう。ここで「心—体」という対比は、既に価値論的な意味を持つその他の対比(高い—低い、天上の—地上の、祭式的な—世俗的な、内的な—外的な、等)の体系に含まれているので、それに相当する対比が радость と удовольствие のペアにおいても生じている。

二項対立自体はある程度普遍的であり、日本語の文化的キーワードにも「崇高なもの」と「低俗なもの」というニュアンスこそないものの、対立の関係を持ったものが多い(スロヴェイ、2008、15)。例えば、対照的と考えられる単語は次のようなものが挙げられるだろう。「内」対「外」、「心・腹」対「顔」、「自分・私」対「他人・公・世間・集団」、「本音」対「建前」、「義理」対「人情」、「隔たる」対「馴染む」、「侘び・寂び」対「粹」、などがある。さらに、文化的キーワードとしてよく提起される語は特定のテーマに関連したものが多くという点も目立っている。そのような傾向は、どこまでが文化的キーワードの性質によるものなのか、はたまた特定の決まった角度から特定の文化を見がちな研究の性質によるものなのかといった難しい課題を浮かび上がらせる。例えば、ロシア語の文化的キーワードには「未来予測の不可能性」あるいは上記の「崇高なもの」と「低俗なもの」の対立をめぐるものが多い。日本語の候補にはある一つの一貫したテーマがあり、それは個人と社会、又はその二つのやり取りと呼ぶことができるだろう。個人を指す語彙(内・自分・私)に対し、周りの人を指す語彙が(「外・他人・世間・公・集団」)があって、それらに関連する概念(心・顔、本音・建前、常識、らしさなど)もある(スロヴェイ、2008、15)。本稿ではそのような語彙が文化的キーワードとして選ばれる理由については述べないが、その一つとして、日本社会の構造とそこでのやり取りは西洋人の学者には珍しい

と感じられ、そのためその点にこだわりすぎているのではないかと考えられる。だが一方で、日本語のキーワードにおける社会への執着性もやはり否定しにくい。「世間」や「義理」、「自分・私」と「他人・公」などの上で挙げたようなコンセプトはもちろんのこと、土居健郎によると、「侘び・寂び」や「いき」といった有名な日本的審美感も社会的に捉えることができる。それに関する土居健郎（2007）の説明は以下の通りである。

「わび」も「さび」も人界を避けて閑寂を愛する心であり、その点甘えによって人と交わることを求めるのとは正反対に見える。しかしその境地に到着した人は孤独をかこつことはなく、却って自分を取り巻く周囲との不思議な一体感を味わう。さらにまたこの境地を媒介として、同好の士との間に新たな交わりを持つことも可能となる。さてこの「わび」や「さび」といわば対照的な位置にあるのが「いき」であるといえるだろう。これは「わび」や「さび」のようにいったん人界を離れることによって達成されるものではなく、むしろ市井の中にあって、生の甘えにしばしば伴う泥くささを抜きにして生きることの審美感であるといえないであろうか。

別のところで、土井は（2007, 60）、「遠慮」という概念の特徴について論じつつ、次のように語っている。

親子の間には遠慮がないが、それは親子が他人ではなく、その関係が甘えに浸されているからである。この場合は子供が親に対して遠慮がないばかりでなく、親も子供に対して遠慮はしない。親子以外の人間関係は、それが親しみを増すにつれ遠慮が減じ、疎遠であるほど遠慮は増す。

Lebra（1976, 71-72）も「遠慮」の背後に見える日本の社会と個人の問題を取り上げている。

The virtue of enryo, 'self-restraint', is exercised not only to respond to group pressure for conformity but to avoid causing displeasure for others, regardless of their group membership.... The imposition of self-restraint to avoid hurting Alter's feelings... can reach an extreme that reveals immaturity even to most Japanese. The individual may acquiesce in the face of an intrusion on his rights or autonomy only because he is reluctant to offend another person by claiming his right.

enryo（遠慮）の美德は、集団の調和を守る強要に応えるだけでなく、集団の一員で

あったとしても、他者にとって不快が生じることを避けるために示される。…遠慮を押し付けるのは他者の気持ちを傷つけることを回避するためであるが…度を過ぎると大概の日本人の目にも未熟に映る。自己の権利や自律が侵害される場面を目撃しても、権利を主張することによって他者の感情を害することを恐れるがために黙認する場合さえある。

このように言語と文化、又は言語と世界観の相互関係をテーマにした研究がここ30年くらいの間に盛んになされるようになってきている。その中でも言語の固有性を追求する文化人類学などの研究は多く、とりわけ言葉を通じて人の習慣や社会の構造などを説明しようとする研究が多い。日本においては、土居健郎の『甘えの構造』、九鬼周造の『「いき」の構造』、鈴木孝夫の『日本語と外国語』、山本七平の『「空気」の研究』、阿部謹也の『「世間」とは何か』、四方田犬彦の『「かわいい」論』などといった書籍が注目を浴びている。

文化的キーワードに表れる文化・世界観の特徴は、様々な角度からのアプローチを使って確認することができる。例えば、Shmelev (2013, 43–44) は言葉の否定的な評価からロシア語文化の特徴について以下のように論じている

Анализ значения языковых единиц позволяет делать и менее тривиальные выводы об особенностях соответствующей культуры, в частности о ее ценностных установках. Так, компонент отрицательной оценки в семантике русского слова мелочность дает основания для заключения, что русская культура не одобряет погони за небольшой выгодой, желания «не упустить своего» даже в мелочах. Разумеется, семантика одного слова не дает возможности определить, насколько соответствующая ценностная установка важна для культуры. Культурную значимость имеют сквозные мотивы языковой картины мира, т. е. представления, повторяющиеся в семантике целого ряда языковых выражений. Так, в семантике русских слов высокомерие / высокомерный, надменность / надменный, спесь / спесивый, кичливость / кичливый / кичиться, самонадеянность / самонадеянный, самомнение, гонор, гордыня можно выявить компонент ‘плохо быть слишком высокого мнения о себе самом и свысока относиться к другим’. Эту ценностную установку вполне можно считать сквозным мотивом русской языковой картины мира, имеющей культурную значимость (сходная установка присутствует во многих других культурах).

言語単位の意味分析によって、その文化の特徴について、とりわけその価値判断の志向について、決して平凡とはいえない結論を下すことも不可能ではないのである。つまり、ロシア語の мелочность という単語に否定的な評価の要素が存在することで、わ

ずかの利益を追求することや、些細なことでさえ「自分のものは取り逃がさない」という欲望をロシア文化が是認していないと結論づけることができる。もちろん、一つの単語の意味によって、その価値判断の志向が当該の文化にとってどれほど重要であるかを判断することはできない。言語的世界観に一貫するテーマ、つまり一連の言語表現の意味の中に繰り返し現れるイメージは、文化的意義を有している。たとえば、высокомерие / высокомерный, надменность / надменный, спесь / спесивый, кичливость / кичливый / кичиться, самонадеянность / самонадеянный, самомнение, гонор というロシア語の意味においては、「自意識過剰で他人に高慢であることはよくないことだ」という要素を抽出することができる。この価値判断の志向は、文化的意義を有するようなロシア語の言語的世界観における一貫したテーマであると十分にみなすことができるだろう（類似の志向が他の多くの文化にも存在している）。

以上のように、文化的キーワードはグループ化しがちであり、辞書の定義には他のキーワードが頻繁に使われるといえる。この事実は先に述べたキーワードの一体性を裏付けることになるが、外国語への翻訳についていえば、国語辞典は頼りにくいものであると断言していいだろう。つまり、複雑な文化的な概念を使って、他の概念を説明すると、悪循環に陥り、キーワードの意味を特定の言語の枠内でしか理解できないことになってしまう（スロヴェイ、2008、16）。従って、本稿でキーワードの翻訳可能性と意味を考察する際には、外国語を話す人でも理解できるようにその意味を伝達する方法を探求することになる。



## 2-3 言語に表れる異文化の翻訳可能性

前章にて紹介した日本語の文化的キーワードにおける翻訳可能性を調べる前に、「翻訳可能性」の捉え方を定義しなければならない。翻訳可能性は翻訳論の本質的な課題であり、長年注目を浴びている。例えば、著名なドイツの思想家である Benjamin (1975, 264) は翻訳可能性を原文と訳文を繋ぐものとして理解している。

翻訳可能性はある種の作品に本質的に内在する、——ということは、翻訳がそれらの作品そのものにとって本質的だということではなくて、原作に内在するある特定の意味がその翻訳可能性においてあらわれることを意味する。翻訳は、いかにすぐれた翻訳であるとしても、原作にとってなにもものかを意味することがけっしてないことはあきらみかである。それにも関わらず翻訳は、原作の翻訳可能性によって、原作ときわめて密接な関連に立っている。いや、この関連は原作そのものにとってはもはやなにもものも意味しないだけにいっそう密接なのである。この関連は自然な関連と、もっと精確に言えば生の関連と呼んでよい。生命のあらわれは生体にとってはなにも意味しないながらも生体と密接に関連している、翻訳はそれとちょうど同じようにして原作からあらわれてくる。しかも原作の生からというよりはその<死後の生>からあらわれてくる。

翻訳の定義はそれを研究している学者の数だけあって、翻訳可能性の捉え方もかなり広いものがある。Jacobson (1959, 114) によれば、翻訳のタイプは主に三つ（言語内翻訳、言語間翻訳、異記号体系間翻訳）に分けられる。

We distinguish three ways of interpreting a verbal sign: it may be translated into other signs of the same language, into another language, or into another, nonverbal system of symbols. These three kinds of translation are to be differently labeled:

- 1 Intralingual translation or rewording is an interpretation of verbal signs by means of other signs of the same language.
- 2 Interlingual translation or translation proper is an interpretation of verbal signs by means of some other language.
- 3 Intersemiotic translation or transmutation is an interpretation of verbal signs by means of signs of nonverbal sign systems.

Steiner (1975) によると、同じ言語でなされているコミュニケーションの場面においても一種の翻訳が絡んでいる。つまり、文芸作品の意味というのは単独では存在せず、解釈（読者なりの翻訳）のプロセスによって生まれているのであって、読者ごとに異なる。

上記の説明または翻訳可能性を論じる研究では「意味」という用語が必ず出てくるが、大雑把に言えば、翻訳とは原文の「意味」を他言語に伝えることを指しているため、翻訳可能性をどの観点から考えても「意味」の捉え方の問題に直面せざるを得ない。例えば、構造主義の影響を受けたロシアの翻訳理論家 Barhudarov (Бархударов (1975), 6) は、甲の言語記号で表現されている内容を乙の言語記号で表現されている内容に等価に変換することが翻訳の本質であると述べる。つまり、記号の表現（形）を換えるだけで、記号の内容（意味）を変えないということである。Nida (2003, 30) は翻訳プロセスと「意味」の依存関係を以下のように捉えている。

Basic to any discussion of principles and procedures in translation is a thorough acquaintance with the manner in which meaning is expressed through language as a communication code – first, in terms of the parts which constitute such a code; secondly, the manner in which the code operates; and thirdly, how such a code as a language is related to other codes.

翻訳の原理と手段に関する議論は、いずれもコミュニケーション記号としての言語を介した意味の表現方法を完全に会得することを根底に置いている。第一にそうした記号を構成する要素、第二に記号がどのように作用するのか、第三にそうした言語としての記号が他の記号と如何に関係しているかということが基本的に議論される。

あらゆる翻訳理論の問題は言語の「意味」の問題に深く根ざしているため、意味論的観点から皆が納得できる「意味」の明確な定義が出されないかぎり、翻訳をめぐる論争はやまないであろう。「意味」の不完全な理解は、「翻訳の単位」や翻訳の正しさの基準などの様々な課題を生み出した。例えば、翻訳をする際に、何を翻訳すべき記号（翻訳の単位）とするか、また、記号の内容をどう測定するかには本質的な問題がある。単語を翻訳の単位とする場合、翻訳は逐語的になりかねないので、文章全体の意味が伝わりにくくなる。もし、文（センテンス）を翻訳の単位とする場合、文章の意味はより忠実に伝わるようになるかもしれないが、読者が訳文から受ける印象は原文からのものと一致するとはかぎらない。また、もし、文章全体を翻訳の単位とする場合、読者が作品から受ける印象を比較的忠実に再現できるようになるが、原文と訳文の形式的（文法的）な相違が著しくなり、訳

文が翻案になるおそれがある。翻訳の単位の問題は訳文の測定問題へつながり、翻訳の正しさの基準の捉え方もまた一様には規定できない。その多様性については Gorlee (1994, 170) の主張が参考になろう。

The varieties of equivalence which have been put forth in translation criticism is indeed truly astonishing: besides “translation equivalence”, the seemingly most general term, one finds “functional equivalence”, “stylistic equivalence”, “formal equivalence”, “textual equivalence”, “communicative equivalence”, “linguistic equivalence”, “pragmatic equivalence”, “semantic equivalence”, “dynamic equivalence”, “ontological equivalence”, and so forth.

翻訳の評価にあたって提示されてきた等価の種類は驚くほど多様だ。最も一般的と思われる『翻訳等価』に加え、『機能的等価』、『文体的等価』、『形式的等価』、『テキスト形式的等価』、『伝達的等価』、『言語的等価』、『語用論的等価』、『意味論的等価』、『動的等価』、『存在論的等価』など多数存在する。

「等価」(equivalence) (原文と訳文の一致の程度) は翻訳論の中心的なコンセプトでありながら、翻訳の目的などによって重要とされる要素が異なる。例えば、上で挙げた”dynamic equivalence”は Nida が導入した用語で、訳文の自然さに重点をおいたアプローチのひとつである。Nida (1969) はその等価を次のように定義している。

quality of a translation in which the message of the original text has been so transported into the receptor language that the response of the receptor is essentially like that of the original receptors.

原文の意味内容が対象言語へと変換される翻訳の本質は、訳文を読んだ読者の反応が原文を読んだ読者のそれと同様であることにある。

つまり、いわゆる“foreignization”と“domestication”という二つの翻訳のストラテジーの中でも後者に重点を置く等価である。原文を読んだ読者（原文が書かれた言語を話す人）が受ける効果（影響）は訳文を読んだ外国人の読者が受ける影響と同じでなければならないと Nida が主張する。Venutti (1995, 22) はそのアプローチを以下のように批判している。

For Nida, accuracy in translation depends on generating an equivalent effect in the target-language culture: "the receptors of a translation should comprehend the translated text to such an extent that they can understand how the original receptors must have understood the original

text" (ibid.:36). The dynamically equivalent translation is "interlingual communication" which overcomes the linguistic and cultural differences that impede it (ibid.:11). Yet the understanding of the foreign text and culture which this kind of translation makes possible answers fundamentally to target-language cultural values while veiling this domestication in the transparency evoked by a fluent strategy. Communication here is initiated and controlled by the target-language culture, it is in fact an interested interpretation, and therefore it seems less an exchange of information than an appropriation of a foreign text for domestic purposes. Nida's theory of translation as communication does not adequately take into account the ethnocentric violence that is inherent in every translation process-but especially in one governed by dynamic equivalence.

Nidaは、翻訳の正確性は目標言語文化において同様の効果を生み出すことに依存するとして次のように述べた。「原文の読者が原文を理解したのと同様に、訳文の読者は訳文を理解しなければならない。」動的翻訳は、言語的および文化的相違を乗り越える『言語間のコミュニケーション』であり、言語的・文化的相違はその妨げとなる。こうした翻訳によって可能となる外国語の文章と文化の解釈は、目標言語文化の価値観には根本的に対応するが、同化によって引き起こされる現象に関しては不透明になる。この状況に置けるコミュニケーションは、翻訳先となる言語文化によって始められ、その言語本位で制御される。従って、情報の相互的なやりとりというよりは、むしろ外国語の文章を自国のために私有化している状態である。翻訳をコミュニケーションとする Nida の理論は、あらゆる翻訳のプロセス、特に動的等価による翻訳に備わる自民族中心的な暴力行為に対する考察が不足している。

原文と訳文の効果はまったく同じであるべきというアプローチは、異なる言語を話す人の思考は同じであるというスタンスに基づいているといえる。Sapir-Whorf の仮説における弱い仮説（解釈）が正しいとすれば、“dynamic equivalence”はそもそも可能であるのかという疑問が生じる。完全な「等価」を否定的に捉えている研究者も少なくない。例えば、等価を批判した以下の主張が参考になる (Bermann, 2014)。

The myth of perfect equivalence dogged thinking about translation for centuries, leading to the discourses of loss and betrayal that have characterized a great many statements about translation. Theorists of translation in the 1970s who included poet-translators such as James Holmes, firmly rejected any notion of equivalence as sameness, pointing out that not only are languages different, but literary systems with their attendant norms are also different. Holmes set the

situation our with characteristic bluntness:

Put five translators onto rendering even a syntactically straightforward, metrically unbound, imagically simple poem like Carl Sandberg's "Fog" into, say, Dutch. The chances that any two of the five translations will be identical are very slight indeed. Then set twenty-five other translators into turning the five Dutch versions back into English, five translators to a version. Again the result will almost certainly be as many renderings as there are translators. To call this equivalence is perverse.—(Holmes 1988: 53)

完全な等価の虚構は、翻訳についての考察に何世紀にもわたり付きまとい、それにより翻訳について述べられた非常に多くの主張が失敗や背信として特徴づけられた。詩翻訳家 James Holmes を含む 1970 年代の翻訳理論家たちは、同一性としての等価の説を一切拒み、言語だけではなく文学の体系とそれに付随する規範も異なっていることを指摘した。ホームズは等価を無骨であるとして以下のように批判した。

構文が単純で韻律も統一されておらず、かつ容易に情景が思い浮かぶような詩、例えば Carl Sandberg の『霧』を 5 人の翻訳家がそれぞれ翻訳をするとしよう。このような場合でも、まったく同じ訳文が出来上がる可能性はないに等しい。では、完成した 5 つのオランダ語訳文をそれぞれ 5 人ずつ、計 25 人の翻訳家が英語に戻すとどうなるだろうか。結果は同様である。翻訳家の数と同じだけ訳文が出来上がる。これを等価と呼ぶのは道理に反している。— (Holmes 1988: 53)

言語学の発展の現段階においては、言語における民族・文化的特質、言語文化の結びつきに基づいて形成された、世界に対するイメージの中の民族的独自性に関してより多くの注意が払われている。文化が翻訳に対して有する特別な意味を認識しつつ、翻訳研究者たちは文化間コミュニケーションの最も重要な手段としての翻訳の役割を強調している。多くの研究においては、言語間コミュニケーションの行為として、また言語間の仲介手段、文化間の相互作用の形式として、翻訳が論じられている。翻訳における異なる文化の役割を様々な観点から追求する研究は数多くあるが、中でも以下に挙げるものは先行研究の中でも重要な位置を占めている。Venuti (1994) "Translation and the Formation of Cultural Identities", Mueller-Vollmer (1988) "Translating Literatures, Translating Cultures", Rubel (2003) "Translating Cultures, Perspectives on Translation and Anthropology", Budick (1996) "The Translatability of Cultures, Figurations of the Space Between", Moore (1992) "Translation East and

## West: A Cross-Cultural Approach”.

本稿では、文化的キーワードの翻訳可能性を論じる際、研究対象である概念の意味を解明することに重点が置かれる。ただし、本稿でいう意味というのはもちろん和英辞書や和露辞書に載っているようなものではない。むしろ、言語的世界観という観点から単語と辞書に載っている翻訳（同じだとされる）とを照らし合わせたときに見えてくる違いこそが重要なのである。文化における違いはしばしば、その文化を支え、言語的世界観に合致するような言語における相違点に対応している。文化間のコミュニケーションにおいて、一方の文化にとっては特有ではあるけれども、その文化の中でコミュニケーションに際して関心が払われないような考え方は、障害となり得るのである。

異なる言語間の意味上の不一致は色の表現方法に特徴的である。ロシア人は太陽スペクトルを7色に区別するが、ドイツ人、イギリス人、フランス人は6色で、彼らは、ロシア語における *синий*（暗青色）と *голубой*（淡青色）を1つの語で表現する。その際、その語の語彙的な意味は淡青色と呼ぶ時も暗青色と呼ぶ時も同じなのである。日本語の場合は「青」という色は西欧の日本語の学習者にとっては多少戸惑う存在でもある。ただ、色の差異は比較的表層的問題であって、気づかれやすいものである。一方、もう少し深いレベルになると単語の文化的な特徴や差異は気づかれにくくなる場合がある。文化的キーワードは文化的情報負荷が大きく、Sapir-Whorf 仮説における弱い解釈が部分的にでも正しいとすれば、そのような語彙とそこに表れる言語的世界観は他言語には翻訳しにくいものであろう。今まで見てきたように文化的キーワードは固まったグループとして存在しがちであり、一つ概念を説明するのにほかの文化的キーワードがよく使われる。文化的キーワードのこのような性質は辞書の記述や専門書における説明だけでなく、人の思考にも表れるのであってみれば、文化的キーワードの翻訳可能性自体が問われることになる。つまり、日本人は「世話」という概念を理解するのに「面倒」（面倒を見る）という概念を、または「人情」を理解するのに「他人」と「思いやり」（他人への思いやり）という概念を脳内で実際に使っているのかという問題を解決しなければならない。同じようにロシア人が *тоска* という概念を脳内で構築する際に *душа*（上記で説明したように *тоска* は専門書で *душевная тревога* と説明されている）という概念がなんらかの形で関与しているのとなると、外国人が *тоска* を正しく理解するにはまず *душа* という概念を正しく理解する必要がある。*душа* というロシア語にしても、露英辞書では *soul* と訳されているとしたところで、実際には文化的情報負荷が大きい語であって、普遍的な概念ではない。Weirzbicka (1992, 31) は *душа* の意味と英訳について次に語っている。

The word *duša* (roughly, ‘soul’) is - alongside *sud’ba* (roughly, ‘fate/destiny’) and *toska* (‘a painful feeling’) – one of the leitmotifs of Russian literature and Russian conversation. Its range is extremely wide and its frequency extremely high. In English translations of Russian novels, *duša* is sometimes translated as soul, but in most cases, it is either omitted or replaced with either heart or mind. To some extent, this can be explained in purely cultural terms: Anglo-Saxon culture doesn’t seem to tolerate as many references to people’s souls as typical Russian prose would. If the translator of a Russian novel does try to render *duša* as soul wherever possible (rather than simply omit it), the high frequency of the word soul gives the English prose a slightly odd flavor...

Even if a translator is eager always to render *duša* as soul, no matter how often it is used, and in this way to violate Anglo-Saxon cultural conventions in order to remain faithful to the spirit of the original, often it is felt to be simply not possible, because the range of contexts where *duša* can be used in Russian is much wider than the range of contexts where soul can acceptably be used in English. In other words, often *duša* cannot be translated as soul not just because the frequency of soul would become too high for Anglo-Saxon cultural tastes for intrinsic linguistic reasons (which is not to say that those intrinsic linguistic reasons are not, ultimately, culturally determined as well)

*duša* (‘soul’に近い意味) は、*sud’ba* (‘fate/destiny’に近い意味) や *toska* (‘a painful feeling’に近い意味) と並び、ロシア文学およびロシア語の会話の中で主要な言葉の一つである。その意味する領域は非常に広く、使用頻度も非常に高い。ロシア文学の英訳では *duša* は soul と訳されることもあるが、多くの場合、訳出されないか、もしくは heart や mind に取って代わられる。この現象は文化的にある程度説明できる。アングロサクソン文化においては、典型的なロシア語散文のように人の魂 (soul) に幾度も言及することに抵抗があるようだ。ロシア文学の翻訳家ができる限り *duša* を soul と訳出すると、soul が何度も出てくる英語の訳文は若干不自然な響きを持ってしまうことになる。

何度 *duša* が出てきても、アングロサクソン文化の慣習に背くとしても、忠実に原文の趣旨に従い、必ず毎回 soul と訳出したいという様に翻訳家がたとえ望んでいたとしても、実行に移すのは困難である。というのは、英語において soul が許容される文脈の幅と比較して、ロシア語の中で *duša* が使われる文脈の幅は随分広いためである。つまり、*duša* が soul に翻訳され得ない場合が多い理由は、単にアングロサクソン文化固有の言語感覚において soul の頻度があまりにも高くなってしまいうるだけではない。(ただし、固有の言語感覚が、結局は文化に応じて決定づけられているというわ

けでもない。)

душа も文化的用語だとすれば、それがまた別のキーワードを通して理解されているのだろうか。その場合、何がその起点領域にある概念なのか、文化的キーワードなのか、それともある程度抽象性の低い普遍的な語彙なのかは調べる必要がある。つまり抽象性の高い概念の構造のタイプは木構造であると推定し、そのノード・要素（ソースドメイン、あるいは起点領域）の構造をさらに調べることによって木構造グラフの根っこの部分にたどり着いたら、そこにこれ以上分解できない、つまり抽象性がない（その連語の中に概念メタファーといえるものが発見されない）概念があると推定できる。抽象的な概念における木構造の一番下にある単語に文化的情報負荷がない（どの言語にも普遍的である）と判明した時点で、問題となっている概念（文化的キーワード）は基本的に翻訳可能であると判断する。本稿でいう翻訳は「他言語の話者（違う言語世界観を持っている人）にその言語を使って概念の意味が説明できること」と狭い意味で取り、特定の文脈において原文の文化的キーワードを他言語のある特定の単語に置き換える可能性については論じない。本稿における「翻訳可能性」は「理解可能性」と似たような意味で用いられるため、翻訳である説明文は、木構造グラフのノードの羅列として長文になる場合が多い。上記で紹介した等価 (equivalence) という発想を適用すれば、いわゆる「認知的等価」というタイプのものが一番近いと思われる。Partington (1998, 48) は「認知的等価」を“Cognitive equivalence” is equivalence of informational content in two languages.”と定義する。つまり、特定の概念を他言語の話者が歪みなく意味を理解できるように伝えられたら、「認知的等価」という観点から見れば、その概念は翻訳可能であると判断できる。ただし、前章で見てきたように辞書に記載のある一見問題のない対訳語（英語の friend とロシア語の друг、英語の lip と日本語の「唇」など）でも完全に一致しない場合があり、意味的なずれを回避することができるだろうかという疑問が生じる。Wierzbicka (1997, 22) はそのような語彙について以下のよう論じている。

To compare the meanings of words from different languages (such as, for example, pravda and truth, or dusa and soul), we need a tertium comparationis, that is, a common measure. If the meanings of ALL words were-culture-specific, then cultural differences could not be explored at all. The "hypothesis of linguistic relativity" makes sense only if it is combined with a well thought out "hypothesis of linguistic universality": only well-established linguistic universals can provide a valid basis for comparing conceptual systems entrenched in different languages and for elucidating the meanings which are encoded in some languages (or language) but not in



others.

異なる2言語間で単語（たとえば pravda と truth や、 dusa と soul）の意味を比較する際、一般的に比較の第三項という手段が使われる。あらゆる語彙の意味が文化に特有であったとすると、文化的差異は吟味され得ない。「言語相対仮説」は、綿密に考え抜かれた「言語普遍仮説」と組み合わせあって初めて意味を成すのである。揺るぎない言語の普遍的特性のみが、異なる言語に定着した概念システムを比較するため、また、ある言語では表出され別の言語では表出されない意味を解明するために、有効な基盤を作り出す。

つまり、翻訳可能性の問題を解決するためには、まず意味的に歪みがなく、まったく同じように理解される語彙はそもそも存在しうるのかという疑問を解決しなければならないということになる。上記のことを踏まえると、そのような語彙と言語における普遍性に対するアプローチについて次章で詳しく触れることには意義があるといえるだろう。

本稿では、Sapir-Whorf 仮説を発展させた文化人類学上の成果は興味深く、完全には否定しがたいものとみているが、翻訳の実践を考える上では、言語が文化（思想）に及ぼす影響は翻訳可能性を完全に否定するほどには強くないと考え、概ね Wierzbicka（1992, 7）の次の主張に賛成する。

The real question, then, is not whether meaning can be transferred from one language to another but to what extent it can be so transferred; not whether meaning is language-independent but to what extent it is. Or, to put it differently, to what extent languages are shaped by «human nature» and to what extent they are shaped by culture.

したがって、真の問題は、意図が一つの言語から別の言語へと移しうるものであるかということではなく、どの程度伝達できるかということにある。意図が言語に依存したものであるかどうか、それがどの程度なのかということ。すなわち、言い換えると、どこまで言語が《人間の本質》によって形作られ、どこまで文化によって方向付けられているかということである。

## 2-4 言葉の意味に関する先行研究

前章で述べたように、翻訳論において言葉の意味の問題は極めて重要であり、本稿で文化的キーワードの翻訳可能性を論じる際には、言葉に表れる文化や世界観に関する情報を引き出す方法をいかにして見つけ出すかが鍵となる。従って、文化的キーワードとおぼしき言葉の翻訳可能性について分析に入る前に、まず言葉の意味に関する本稿の態度を示す必要がある。

古代の思想家と哲学者たちは、記号システムとそれが意味するものとの関係に興味を持ち、意味論の問題に再三向き合ってきた。それは言葉の誕生と起源についての議論であったり、状況次第でいかに言葉の意味が変化するかについての議論であったり、あるいはまた、いかに思考を適切な言語表現にするかといった問題であった。とりわけ、言語と言語単位の意味論において言語学と超言語学が相互関係を有するという考えは、昔から存在していた。概してこの問題は、古代の言語学者と哲学者の著作の中で打ち立てられ、我々の時代に至るまで学者たちの関心を引き続けてきた。意味の変化に関する学説としての意味論が直接的に形成され始めたのは、19世紀後半以降である。学問としての意味論が現段階にまで発展したことにより、意味される対象と描写される内容に対する言語表現の関係を究明する「記号論と論理学の分野」が理解されるようになった (Hippkiss, 1995)。Leibniz、Descartes、Bacon などの哲学者たちは、自然言語と人工言語の特質を描き出しはしたものの、関心があったのは思考における記号の役割であって、一般的な現象としての言語については研究しなかった。Saussure の登場により、言語学は構造主義の時代に入った。Saussure が初めて記号のシステムとしての言語をほかの公共制度から独立させ、その他の記号システムの中でも最も重要なものとして研究を始めたのである。論理的記号論は、主にシステム化された言語の研究へと向かいながら、極めて的確な精査を受けることとなった。20世紀に入って以降、意味論に関する研究は多岐にわたって行われたが、ほとんどが比較的限られた範囲内での成果にとどまっている。Nida (2003, 33-37) によれば、翻訳論の立場から見た場合、「意味」に対するアプローチとしては、心的イメージのアプローチ (Mental image approach)、行動主義的アプローチ (Behaviorist approach)、言語的分析的アプローチ (Linguistic analysts)、言語人類学的アプローチ (Linguistic-anthropological approach) などが存在するが、どれもまだ不完全で、翻訳論では使いにくいところがある。さらに、Nida (2003, 32) は、「意味」に対する古典的なアプローチの欠点について次のように考察している。

Traditional views of meaning can be conveniently summarized in terms of (1) centripetal (2) centrifugal (3) lineal concepts. The centripetal view concentrates on the “common denominator of meaning,” for, when confronted with the task of defining the meaning of a word, people usually respond by looking for a common core of meaning which will pull together all usages into a single whole. Evidently, the fact that a word has a unity of form leads people to think that there must be a unity of meaning, and hence they try to find it. However, attempts to discover common denominators of meaning are usually ineffectual.

In contrast to this view, one may take the opposite approach and look to the area of meaning involved. Thus one emphasizes the centrifugal aspect, for often the meaning of a word seems to be “riding off in all directions at once,” so difficult is it to pin down the meaning to any one referent or closely related set of referents...

The linear view at least seems to go back to origins and to approach correctly what words should mean, for by should people usually refer to what the words formerly denoted. But even a lineal view, whether based upon history or logic, is not enough, for verbal symbols are living realities with great plasticity, remarkably capable of being used in ever varying circumstances not easily restricted to logico-historical categories.

意味に関する従来の考え方は、好都合なことに、求心的、遠心的、線的の三つに集約される。求心的見解においては、語の定義付けをする必要性に直面した際には『意味の共通項』に重点が置かれ、用法が一つに重なる意味の共通の核を探す。語形に一貫性があるという事実から人々は意味にも一貫性があると推定し、探そうとする。しかし、意味の共通項を探す試みは大抵無意味である。

この見解とは対照的に、意味の問題を研究するにあたって逆のアプローチを図る場合もある。求心的見解と対極をなす遠心的見解では、語の意味は「あらゆる方向に拡散している」と考え、一つの指示対象、あるいは、密接に関連し合う指示対象のまとまりに意味を特定することは困難であるとする...

線の見解は、少なくとも語源に目を向け、語の元来の意味に注目すべきであるとしており、語の意味について妥当なアプローチをしているようだ。しかし歴史に基づいた論理的な見解を示しているとはいえ、これも考察が不十分である。言語象徴は大いに柔軟に変容するものであり、絶えず用法が変化する可能性もあり、史実的論理の枠には容易に収まらないためだ。

Nida 自身は「意味」を言語的意味 (Linguistic)、指示的意味 (Referential)、情緒的意味 (Emotive) に大別している。言語的意味は主に文法的な意味を指しているから、語彙に直

接に関係のある指示的意味と情緒的意味を本稿では追求する。Nida によれば、指示的意味は主に「辞書に載っている意味」であるから、別の言い方で外延的意味とも呼ぶことができる。情緒的意味は、内包的意味と呼ぶこともでき、個人的な連想、感じ方などを表す。前章では文化的キーワード全体の特徴を分析して、文化的キーワードは他の語彙と比べて文化コードが目立ちやすいことを示した。文化的キーワードの定義と本質を考えれば、翻訳可能性を考える際、特にその文化的なアスペクトを追求することが有意義であると思われる。すでに示したように、語彙に現れる文化は非常に捉えにくいものであり、いわゆる「外延的意味」においても「内包的意味」においても文化に関連した情報が現れる場合があるため、語彙の「意味」における文化的なアスペクトを追求する際に、「外延的意味」と「内包的意味」という区分は不便であろう。但し、Nida (2003, 70) が提案した「外延的意味 (指示的意味)」と「内包的意味 (情緒的意味)」のそれぞれの調べ方を本稿では有効だと考え、「意味」の文化的なアスペクトを調査する際にそれらを参考する。外延的意味の発見手法は以下の通りである。

Referential meanings are those generally thought of as “dictionary meanings”. The domains of referential meaning are generally described in three ways: (1) by identifying the internal content of a domain, either by listing the referents in question or defining the necessary and sufficient features which will include the referents in question; (2) by contrasting the domain of one word with that of others (i.e. one does not describe the area covered by a particular lexical symbol, but simply defines the borders between this and other semantically contiguous symbols); and (3) by showing the extent to which the area of a particular word may be shared by other words, i.e. by listing synonyms.

指示的意味とは『辞書の意味』と一般的に考えられているものだ。指示的意味の領域は概して三つの手段を以て示される。

(1) 問題となる指示対象を列挙する、あるいは問題の指示対象を含む必要十分な特徴を定義することより、意味領域に内在する要素を割り出す。(2) ある語の意味領域を別の語のそれと対照させる。(例えば、ある特定の語彙的記号が支配する領域を示すことはできないが、意味的に隣接する記号の間に境界を引き、区別することはできる。) (3) 類義語を列挙するなどの手段により、ある語がどの程度まで他の語と意味領域を共有しているかを示す。

内包的意味は変わりやすく、主に文脈に依存し、発見手法は以下の通りである。

In fact, almost the only way in which we can analyze emotive meanings is by contexts, either cultural or linguistic. In describing emotive meanings on the basis of cultural contexts we analyze the behavioral responses of others to the use of certain words.

The second principal approach to emotive meanings is through the examination of linguistic contexts, that is to say, analyzing the co-occurring words which may prove diagnostic as to emotive values. For example, does a particular lexical unit normally appear in association with other units which may be described as occurring in settings which are vulgar, academic, conversational, etc.] (Nida (2003), 71)

指示的意味とは『辞書的意味』と一般的に考えられているものだ。指示的意味の領域は概して三つの手段を以て示される。

(1) 問題となる指示対象を列挙する、あるいは問題の指示対象を含む必要十分な特徴を定義することより、意味領域に内在する要素を割り出す。(2) ある語の意味領域を別の語のそれと対照させる。(例えば、ある特定の語彙的記号が支配する領域を示すことはできないが、意味的に隣接する記号の間に境界を引き、区別することはできる。) (3) 類義語を列挙するなどの手段により、ある語がどの程度まで他の語と意味領域を共有しているかを示す。

言葉の意味解明法として、Nida (1975) は「成分分析」という手法を提案している。成分分析のパイオニアだったデンマークの学者 L. Hjelmslev (Hjelmslev, 1963) は、「雄羊」、「雌羊」、「男性」、「母」、「父」ような単語の意味は、それらの単語の要素「彼」と「彼女」、「羊」、「人間」、「大人」といった要素の組み合わせによって分析できると主張した。成分分析は、一連の意味的領域（同族性、色、動き、家具の用語）の研究において広く普及した。成分分析の主な利点は、このアプローチが、意味と意味との間にある、例えば上下関係（包摂関係）や非互換性といった関係性をうまく示すことができる点にある。しかし成分分析や「意味的特徴」の使用には、著しい限界がある。このアプローチを用いると、意味のすべてのニュアンスを記述することはできなくなり、記述できるのは、意味的に関係ある他の単語との意味的対比の側面のみである。さらに、二項対立だけを使った単語の意味の特定は、いくつかの領域では、かなりの制限を生むものとなる。例えば、このアプローチは、抽象的用語（価値や感情を表す単語等）の意味を記述する際には適用することができない。その他に挙げられるこのアプローチの重大な欠点は、定義が不明瞭で分かりにくいことである。一部の単語の意味は、より複雑な用語又は学術用語によって示され、その用語自体がさらなる定義づけを必要とする。このように、研究や意味を記述する手段と

しての成分分析には、利用できる範囲に様々な厳しい制約があり、そのため、言語に反映された認知プロセスの研究には、うまく適用することができない。このアプローチは、文化的意味論の研究に適用できるだけの十分なポテンシャルをあきらかに持ってはいない。文化的意味論の研究においては、単語または文法構造の意味は、広く普及した観念や文化の志向に従って分析される。成分分析は単に、その関係性を示す手段しか持ち合わせていないのである。

認知意味論が発展して以降は、成分分析は過去のものとなり、その代わりに概念分析が登場してきた。だが、概念分析は、成分分析に比べて、言語資料の調査と分析ができる明確な方法論を持たない。概念分析は、多くの場合、研究者の言語感覚と直観を基に行われ、他の研究では再現が難しいのである。すなわち、概念分析におけるしっかりとした方法論の確立が重要な課題であるといえる。概念分析は、言語に表れる人間の認知モデルを調べる手法、または人間が周辺世界を認知する仕組みを調べる手法と定義される。

## 2-5 普遍要素の分析に基づく意味解明

序章で述べた Sapir-Whorf の仮説を一部でも認めるならば、訳文と原文の比較、又は外国語の表現の意味を考察する際、文化に左右されない普遍的な語彙が必要であろう。それについて Wierzbicka (1992, 17) はこう語っている。

To explain any meanings we need a set of presumed indefinables; and to explain meanings across language and culture boundaries we need a set of presumed universals. We can understand ourselves to the extent to which we can rely on some concepts which are self-explanatory...and we can understand other languages and other cultures to the extent to which we can rely on shared concepts. To be able to elucidate the meanings encoded in other languages we need a 'natural' semantic metalanguage, which would be maximally universal and maximally self-explanatory.

意味を説明するためには、一揃いの、前提化されそれ以上定義を有しない語が必要となる。言語と文化の境界を超えて意味を伝えるには、前提としての普遍的特質がなければいけないのだ。自明な概念があり、それに頼ることができる範囲内でのみ、私たちは自身を理解することができる.....そして共有された概念に頼ることができる範囲内でのみ、他の言語と文化を理解できる。他の言語に規定された意味を解明するためには、「自然な」意味論的メタ言語が必要であり、それは最大限普遍的で最大限自明なものであるだろう。

すでに序論で述べたように、文化的キーワードのような語彙は、しばしばほかの文化的キーワードないしその言語特有の語彙によって説明されており、結局その言語の枠内でしか理解できないということになっている。外国語辞書はもちろん、異文化や言語的世界観を意識している研究ですら、その畏にはまる場合が多い。例えば、Gladkova は、モスクワ意味論学派の Levontina (2004) がロシア特有の4つの類義語、*жалость* (憐み/同情)、*сочувствие* (同情/好意的な態度同)、*сострадание* (同情/憐れみ)、*участие* (同情) に対して行った解釈を取り上げ、言語や文化に関し特定の用語を適用することは語彙の文化的解釈を「ぼやけさせる」と批判している。Levontina (2004: 327) がそれらを«чувство по отношению к другому человеку, какое бывает, когда, считая, что этому человеку плохо, субъект ощущает душевную боль и желание облегчить его положение.»として定義しているが、Gladkova (Гладкова 2009) は«душевную боль»を取り上げて、以下のように批判している。

В то время как это толкование хорошо понятно носителям русского языка, его перевод на другие языки, например английский, приводит к значительному искажению смысла. В толковании используется несколько лингво- и культурно-специфичных русских слов и выражений, которые представляют преграды для их понимания людьми, говорящими на других языках. Например, в этом толковании употребляются слова *бывать* и *считать*, у которых нет точных переводных эквивалентов в английском языке (см. главу 4 о семантике глагола *считать*). Также в этом толковании термины чувств объясняются через другое важное русское культурное понятие *душа*, в частности, *душевная боль*.

В русской языковой картине мира *душа* представляет собой центр человеческого существа, место возникновения чувств и эмоций (Wierzbicka 1992, Апресян 1995, Шмелев 2002, Урысон 2003). Ощущение душевной боли – это способ концептуализации эмоционального опыта, который хорошо знаком носителям русского языка, но который не может быть в равной степени понят носителями других языков. Как показывают данные английского корпуса *Cobuild*, люди, говорящие на английском языке, не думают о своем эмоциональном опыте как о душевной боли. Так в 56-миллионном корпусе не было найдено ни одного примера употребления выражений *rain of the soul* или *soul pain*.

Ближайший английский перевод этого выражения может быть *mental anguish*, но это выражение представляет совершенно иную картину человека, центром существа которого является *mind*, а не *душа*. Более того, в этом толковании выражение *душевная боль* сочетается с глаголом *ощущать*, который также не может быть переведен на английский язык без искажения значения. Слово *ощущать* может быть переведено на английский как *to feel*, но *to feel* является семантически простым словом, в то время как *ощущать* содержит некоторые дополнительные компоненты.

この解釈は、ロシア語の話者にとってはよく理解できるが、これを英語などの他言語に翻訳すると、意味が大きく歪められることになる。この解釈には、言語的、文化的にロシア特有と言えるいくつかの語句や表現が使用されており、それらは他言語の話者にとって理解の障壁になっている。例えば、この解釈においては *бывать* ((時々・よく・たまに) ある、起こる、生じる) と *считать* (<...を...>考える、認める、みなす) という単語が使用されているが、これらの単語を正確に伝えることのできる訳語が英語には存在しない(動詞 *считать* の意味に関する第4章を参照のこと)。またこの解釈においては、感覚を表す用語が、別の重要なロシアの文化的概念である *душа* (心)、特に *душевная боль* (心の傷み) を通して説明されている。

ロシアの言語的世界観において、感情や感覚が生まれる心は、人間存在の中心なの



である (Wierzbicka 1992, Апресян 1995, Шмелев 2002, Урысон 2003)。心の傷みという感覚は、感情的経験を概念化する方法であり、ロシア語話者にとってはおなじみのものだが、他言語の話者が同じ程度に理解することのできる感覚ではないのである。コウビルドの英語コーパスが示す通り、英語話者は、自分の感情的経験を心の傷みとは考えていない。5600万語のうち *pain of the soul* または *soul pain* という表現を用いた例は、一つも見当たらないのである。

この表現に最も近い英訳語は *mental anguish* かもしれないが、この表現は、人間存在の中心は *душа* (心/魂) でなく *mind* であるという、まったく別の人間観を示している。しかも、この解釈においては、*душевная боль* (心の傷み) という表現が *ощущать* (感ずる/知覚する/実感する) という動詞と結びつけられているが、この動詞もまた意味の歪曲なしに英語に翻訳することができないのである。*ощущать* という語は、英語の *to feel* に翻訳できるが、*to feel* は意味的にシンプルな語であるのに対し、*ощущать* はいくらかの付加的要素を含んでいる。

言語あるいは言語化されていない思考における概念は、人間が外部からそのまま習得するものではなく、生まれながら脳内に存在する普遍的な要素から構築されるものだという考えに基づいた普遍主義的な研究が 20 世紀に著しく発展した。各言語共通の語彙の存在を証明し、いわゆる言語的普遍用語を探る認知学的な研究には、Bogusławski (2003、2007)、成分分析 (Hjelmslev (1963)、Coseriu and Geckeler (1981))、概念意味論 (Ray Jackendoff (1983、1990、2006、2007))、モスクワ意味論学派 (Апресян (2000))、NSM 法 (Wierzbicka と Goddard) などがある。Andrzej Bogusławski は哲学と言語学の視点から言葉の意味原素を探り、Wierzbicka による NSM 法の研究に刺激を与えた学者である。Bogusławski はその意味原素を「説明不可能な要素」と名づけ、数学の記号などを使って、言葉の意味を説明しようとしている。Bogusławski が指摘する「説明不可能な要素」の一部は NSM 法と一致している (*something, good, bad, do, say* など)。

前章ですでに触れた Hjelmslev (1963)、Coseriu and Geckeler (1981)、Greimas (1966) などに代表される成分分析 (*component analysis*) は、20 世紀の後半に発展した。この考えは、言葉の意味を性 (男性、女性、中性)、年齢 (子供・大人)、種 (人間、動物、鳥) などの成分に分解し、説明しようとするものである。ただし、すでに述べたように、一部の単語の意味は、より複雑な用語又は学術用語によって示され、その用語自体がさらなる定義づけを必要とするため、このアプローチは抽象的用語 (価値や感情を表す単語等) の意味を記述する際には適用できず、普遍主義的アプローチとしては大きな欠点を持つ。

Ray Jackendoff (1994, 188) が提唱した概念意味論 (Conceptual Semantics) は、どの概念も意味原素に分解することができるかと主張する。また、Wierzbicka が提唱する NSM 法とは違い、その意味原素は自然言語の言葉だけでなく、自然言語にない抽象的な概念をも含むと指摘している。

In other words, the expressive variety found in language implies a corresponding expressive variety in the thoughts expressed by language. But as with language, this infinity of potential thoughts must be encompassed in a finite brain. Again, the only way this is possible is for us to store in our heads a finite number of "pieces of thought" or "simple concepts" plus a set of patterns for putting them together into more and more complex thoughts. I'll call these "simple concepts" conceptual primitives and I'll call the patterns that combine them conceptual grammar

換言すると、言語に見られる表現の豊かさは、言語を用いて表出される思考の豊かさに対応する。しかし、言語同様、無限の潜在的思考は有限の脳に内包されなければならない。これを実現する唯一の方法は、やはり限られた数の『思考要素』あるいは『単純な概念』に加え、より複雑な思考を可能にするために、それらを組み合わせるパターンを脳内に蓄積するしかない。『単純な概念』を概念素性、それらを結び付けるパターンを概念文法と呼ぶことにしよう。

Jackendoff (1994, 197) は、メタファー的連語とそこに表れる概念の構造を全言語に共通する普遍的概念が存在する証拠としてみている。

It's not that these ways of talking are creative, novel metaphors that make our speech more colorful. In most cases... they are the only ways we have of expressing these concepts in English—and similar patterns appear in language after language. This suggests that thought has a set of precise underlying patterns that are applied to pretty much any semantic field we can think about. Such an underlying "grain" to thought is just the kind of thing we should expect as part of the Universal Grammar of concepts: it's the basic machinery that permits complex thought to be formulated at all.

これは生活を彩り豊かにし、文学作品の創造的なメタファーというわけではない。大抵...こうした概念の英語表現は一つしかない—そして、類似したパターンが幾つもの言語に現れる。このことから窺えるのは、私たちが思いつく限りのどの意味場にも広く適用された幾つかの明白なパターンが、思考の根底にはあるということだ。こうし

た基盤にある思考の『粒子』は、複雑な思考を実現する基礎的な仕組みである概念的な普遍文法の一部に過ぎない。

Jackendoff が提示した普遍的な概念は言葉ではなく、脳内に存在する抽象的なものであるため、その実際のリストを Jackendoff は作っておらず、その実現可能性自体をも否定的にみている。Jackendoff のアプローチは本稿のような実際的な概念の意味とその翻訳可能性を論じる研究では活用できない。

普遍主義的な研究のもう一つのアプローチは、言語における意味の叙述原則に関する A. Wierzbicka の研究である。Wierzbicka と彼女の後継者たちの長年にわたる研究の目的は、いわゆる「意味原素」、普遍的概念のセットを確立することである。それらを組み合わせることで、各言語がその言語及び文化に特有の、無限の配列を作り出すことができる。意味元素は、語彙の普遍的特性である。言い換えれば、それは、どのような言語においてもそれを意味する言葉を見つけることができるような基本的概念のことである。こうした概念は、どの言語の話者にとっても直観的に理解でき、それに基づけば、いかに複雑な言語単位であろうとも解釈することが可能なのである。Wierzbicka が、意味素の特定に関心を持ったのは、上ですでに触れた 1960 年代にワルシャワ大学で行われたポーランドの言語学者 Bogusławski A. の講義がきっかけだった。17 世紀の哲学者らの「黄金の夢」とは、原子価のセットを特定することだった。哲学の視点でなく言語学の視点でこれに取り組みれば、この夢はついに現実のものとなるかもしれない (Wierzbicka 1996、13)。「解釈不可能な」意味の研究においてボグスラフスキーが依拠したのは、複数言語間の実証的研究より、むしろ論理と論理的証明であった。ボグスラフスキーのアプローチに比べて、Wierzbicka のアプローチは質的により実証的であり、あらゆる自然言語の基礎であるミニ言語を、綿密な言語間研究によって解明することに焦点が当てられている。このミニ言語のポテンシャルは、自然的意味的メタ言語の研究者らにより、多様な言語の辞書と文法における複数領域の意味分析を通じて解明されてきている。自然的意味的メタ言語は、自然言語における単語又は単語に似た要素を構成している原素に頼っており、解釈において論理記号は使用しない。

Wierzbicka (1972) が最初に作った普遍的概念のリストには、14 単語が含まれていた。以後 30 余年の間に、このリストは大幅に拡大され、言語学的分析の多面的メタ言語に成長した。これは Cliff Goddard やオーストラリアの同僚たちが Wierzbicka に協力したおかげで実現したことである。彼らは、相互に無関係な多数の言語にこのメタ言語を適用して調査した。このメタ言語は、自然言語 (任意の自然言語) の単語になっている概念を基にしており、当初は意味分析の道具として開発されたものだったため、自然的意味的メタ言語と

名付けられた。自然的意味的メタ言語の理論は発展し続けており、複数の側面において、より明確で磨かれた理論になりつつある。Wierzbickaの研究プログラムでは、原則として、普遍的な意味元素の探索を実証的手法で行う。第一に、個々の言語において、ある概念が他の概念の解釈において果たしている役割を明らかにする。第二に、各概念がどの言語で語彙化されているか、つまりその概念を表す単語が存在している言語を明らかにする。

普遍語彙の仮説は、すでに触れた Jackendoff または Chomsky が提唱する生成文法理論とある程度重なるところもある。概念意味論と生成文法理論は全ての人間の言語には普遍的な特性があるという仮説をもとにした言語学一派で、その普遍的特性は人間が持って生まれた特徴であるとする。但し、Wierzbicka (1992, 11-12) は普遍語彙を全言語に共通している語彙としてのみ捉えており、それがいわゆる「心のアルファベット」(Mental alphabet) と完全には重ならないという可能性も否定していない。

A plausible set of indefinables which can 'generate' all other words (and all the grammatical meanings) of a language can be tentatively established on the basis of any human language (Latin, English, or whatever). But before accepting such a set as a likely 'alphabet of human thoughts' we would first have to verify its applicability to other languages. The criterion of 'universal words' quickly exposes some weak points of any tentative set of indefinables and points to the need for revisions. This leads to an amended set of candidates, which can in turn be checked against the requirement of 'universal words'.

その言語の他のすべての語（及びすべての文法的意味）を「生み出す」ことができる、一揃いの定義不能語というものがあるならば、人間のどの言語（ラテン語、英語でも何でも）を基礎としても暫定的に確立することができるだろう。しかしそういった一揃いの語が恐らく「人間の思考のアルファベット」であろうと受け入れてしまう前に、まずそれが他の言語において適用しうるものなのかを確認しなければならない。「普遍語」の基準に照らし合わされると、暫定的に決めた一揃いの定義不能語が持つ短所も、補正の余地のある点もすぐさま顕在化される。これにより候補となる語が修正され、それらが今度は「普遍語」の条件と照合される。

Jackendoffのようなアプローチに比べて、NSM法は、意味原素として指摘される単位が抽象的な概念または記号ではなく自然言語の言葉であることを特徴とするため、人間の思考の構造（世界観）と翻訳可能性の関係を研究する際には使いやすく、言葉の意味の解明を行いやすい。このような利点は他の研究者からも認められており、言葉の意味を分析する

複数の研究に使用されている。例としては、感情の研究（Wierzbicka（1999）、Harkins and Wierzbicka（2001）、Enfield and Wierzbicka（2002））、価値観（Travis 1998, Goddard 2001）、社会的なカテゴリー（Wierzbicka 1997, Ye 2004, Wong 2006）、精神状態（Goddard 2003b, Wierzbicka 2006）、ものと動物（Wierzbicka 1985, Goddard 1998）、文法的なカテゴリー（Wierzbicka 1988, 2006）などが挙げられる。NSM法は、世界各国の学者によって様々な言語（ヨーロッパ諸語、アジア諸語、オセアニア諸語、アフリカ諸言語など）の分析において、日々研究されつづけている。この方法論は、語彙だけでなく、語用論的側面における意味の定義などにも広く使われている。

Wierzbicka（1992, 11-12）が提案した普遍語彙の発見基準には主に五つの条件がある。

- (1) these concepts must be intuitively clear and self-explanatory; and
- (2) they must be impossible to define.
- (3) the requirement that the ultimate 'simples' in the alphabet of human thought should be not only clear and indefinable but also demonstrably active as 'building blocks' in the construction of other concepts.
- (4) the requirement that candidates for the status of innate and universal human concepts should 'prove themselves' in extensive descriptive work involving many different languages of the world (genetically and culturally distant from one another) and
- (5) the requirement that the concepts which have 'proved themselves' as building blocks in definitions should also prove themselves as lexical universals, that is, as concepts which have their own 'names' in all the languages of the world.

- (1) これらの概念は直感的にはっきりとわかるもので、自明でなければならない。
- (2) それらは定義不可能である。
- (3) 人間の思考のアルファベットにおいて究極的に「簡素な」語というのは、明確かつ定義不能であるだけでなく、他の概念の構築の際に「構成要素」として明快に機能していなくてはならない。
- (4) 内在的かつ普遍的な概念としての地位を持ちうる語は、様々な世界の言語（起源的にも文化的にも互いに異なる言語）を含む広範囲な記述作業においてその「力が証明」されなくてはならない。
- (5) 定義上の構成要素としてその「力を証明」した概念はまた、語彙における普遍的な要素として能力を発揮していなくてはならない。すなわち、世界のすべての言語において独自の「名称」をもった概念としてである。

長年、普遍語彙に関する調査を行っている Wierzbicka (1996) によれば、上記の条件を満たし、全言語共通と考えられるコンセプトには次のものがある。

Substantives:	I, YOU, SOMEONE, PEOPLE, SOMETHING~THING, BODY
Relational substantives:	KIND, PART
Determiners:	THIS, THE SAME, OTHER~ELSE
Quantifiers:	ONE, TWO, SOME, ALL, MUCH~MANY, LITTLE~FEW
Evaluators:	GOOD, BAD
Descriptors:	BIG, SMALL
Mental predicates:	THINK, KNOW, WANT, FEEL, SEE, HEAR
Speech:	SAY, WORDS, TRUE
Actions, events, movement, contact:	DO, HAPPEN, MOVE, TOUCH
Location, existence, possession, specification:	BE (SOMEWHERE), THERE IS, HAVE, BE (SOMEONE/SOMETHING)
Life and death:	LIVE, DIE
Time:	WHEN~TIME, NOW, BEFORE, AFTER, A LONG TIME, A SHORT TIME, FOR SOME TIME, MOMENT
Space:	HERE~PLACE, HERE, ABOVE, BELOW, FAR, NEAR, SIDE, INSIDE
Logical concepts:	NOT, MAYBE, CAN, BECAUSE, IF
Intensifier, augmentor:	VERY, MORE
Similarity:	LIKE~AS~WAY

上記の意味原素とされるコンセプトによってあらゆる語彙の意味を構築できると Wierzbicka は主張している。原素は、それを制御するシンタックスによって統合される。つまり各原素が、他の特定の原素と結合する能力をもつ。それらは一つになってミニ言語を形作り、それが各言語の基礎となる。原素のシンタックス的特性は、その「結合能力」のなかに発現する。例えば、”SAY”という原素は、この単語を「向けられる対象」と「発話

行為のテーマ」を結び付ける普遍的能力を持つ。つまり「誰か（X）が何かを誰か他の人（Y）に言った」「誰か（X）が何か（Z）について何かを言った」。母語話者の感覚がないと分かりにくいとされている日本語のオノマトペのような語彙もその範囲に含まれる。以下は日本語の「はっと」の説明（Rie Hasada, 228 in Wierzbicka (1999)）。

- (a) X feels something for a very short time
- (b) because X thinks something
- (c) sometimes a person thinks something like this:
- (d) “something happened now
- (e) I didn’t think before that this would happen
- (f) I know something now because of this”
- (g) because of this, this person feels something for a very short time
- (h) X feels something like this
- (i) because X thinks something like this

Wierzbicka は英語の普遍語彙を利用しているが、他の言語を研究している学者は別の言語も使う場合がある。例えば、ロシア語の *сочувствие*（同情）というコンセプトは以下のようにロシア語の普遍語彙によって説明されている（Зализняк (2005, 223)）。

Сочувствие X-а к Y-у; X сочувствует Y-у:

- (a) X испытывает нечто хорошее по отношению к Y-у
- (б) X может представить себя испытывающим то, что испытывает Y
- (в) X может представить себя считающим то, что считает Y
- (г) X считает, что Y-у плохо

NSM 法の普遍語彙が脳内の言語と重なるという仮説が正しければ、普遍語彙を組み合わせることによって、どの言語によっても、他の言語の概念を表現できると推定していいだろう。Wierzbicka (1992, 20–21) もその可能性を示唆している。

In this sense--but only in this sense--anything that can be said in one language can be translated, without a change of meaning, into other languages. Complex and culture-specific concepts such as those encapsulated in the Russian words *duša*, *sud'ba*, or *glasnost'* can be defined in terms of the basic concepts, and the definitions can be translated into the English version of the metalanguage, as they can be translated into its Japanese, Chinese, Pitjantjatjara, or Ewe

versions. Each such version can be regarded as a natural semantic metalanguage, intelligible, in principle, to native speakers of the language in question. Nonetheless, each such version represents a standardised and non-idiomatic metalanguage rather than a natural language in all its richness idiosyncrasy. This difference between a natural language and a natural semantic metalanguage derived from natural language defines the limits of precise translatability.

この意味で——ただしこの意味においてのみ——ある言語において言い表すことができる事柄が何でも、意味を変えることなく他の言語に翻訳可能となる。ロシア語における *duša*、*sud'ba*、*glasnost'*などの語が含んでいるような、複雑でその文化に根ざした概念は、例の基本概念の観点から定義づけることができる。そしてその定義は英語版のメタ言語として翻訳可能で、日本語や中国語、ピチャンチャチャラ語、エウエ語にもできる。そういった翻訳形はそれぞれ自然な意味論的メタ言語と見なすことができ、原則的に当該の言語を母語とする人々に理解可能なものであるとされる。にもかかわらず、そういった翻訳が表現しているのは、画一化され特有性を持たないメタ言語であり、豊かな独自性を持った自然言語ではない。自然言語と自然の意味論的メタ言語の差異は、自然言語では厳密に翻訳できる限界が決まっていることに由来している。

モスクワ意味論学派と自然的・意味的メタ言語 (NSM 法) はほぼ同じ時期に発生し、アプローチも似ている。両学派とも、世界観の分析にあたって言葉における意味の探求が重要であると指摘している。意味の探求に関しても意味原素 (semantic primitives) による迂言法を使うという点が共通して見られる。ただし、NSM 法では概念を構築する最小の単位である意味原素は自然言語 (部分的でも) に存在するものでなければならぬと主張しているのに対し、モスクワ意味論学派では、意味原素が完全に言語を離れ、形式的構文が用いられる。だが、(Apresjan 2000: 218) によれば、事実上、モスクワ意味論学派と NSM 法が扱っている意味原素は徐々に近づいてきている。

NSM 法におけるシンタックスと概念の説明法は普遍性を持っており、他言語の話者に分かりやすいため、言語学、文化人類学の研究において用いられ、たびたび有効性を証明し、利点も多いことは確かであるが、その一方で、弱点と思われる特徴もいくつかある。その中に NSM 法で普遍語彙とされる単語を様々な言語で探し、普遍性を疑う研究もあれば、個人の言語感覚のみに基づく Wierzbicka (1996, 313) の分析を批判する研究もある。例えば、日本語の「青」という色は以下のように NSM 法で説明されている。



X is aoi. =

- (a) at some times people can see the sun in the sky  
When one sees things like X one can think of the sky at these times
- (b) in some places there is a lot of water  
when people are far from these places  
they can see this water  
when one sees things like X one can think of this
- (c) in some places things grow out of the ground  
at some times there is water in those places  
when one sees things like X one can think of this

この説明、または英語の”green”の説明に対して、Murphy (2010、73) は不十分であると以下のように批判をしている。

Another question is whether these primes and the grammar for combining them are sufficient to represent precise lexical meanings. Recall the explanation of green in (18) It is meant to indicate that green is the color of grass or other plants, and so when we call something green, it is because it reminds us of plants. But since plant is not a primitive, the explication instead mentions ‘things that grow out of the ground in some places.’ This description is vague, since it does not say which things or in what places, so it could be understood to denote things that are not green. The explication also can only go as far as saying that the property of being green is a visual property of these things that grow out of the ground – it has no way (unless some day COLOR is admitted into the pantheon of primitives) to indicate that green indicates a color. Thus, the explanation in (18) could be interpreted as being about the shape or brightness of the things that grow out of the ground, rather than the hue of the color.

これらの素性や、素性を結び付ける文法が、語の意味を正確に捉えるのに果たして十分といえるかという問題もある。前述の青の説明を思い出してほしい。青は芝生や草の色であり、あるものを青と呼ぶのは植物を想起するためとある。ところが、植物は素性でないため、代わりに『ある場所で地面から生えてくるもの』と説明している。この説明文は曖昧で何がどこで生えるのかということに言及していないため、青ではないものを意味していると解釈されてしまう可能性がある。更にここでは、青であることが、地面から生えてくるものの視覚的特徴であることしか述べることができない。(今後色が素性として認められない限り) 青が色であることすら示す手立てはない。

従って上記の説明は、地面から生えてくるものの色相ではなく、形や明るさに関するものだと受け取られてしまう恐れがある。

なお、”things grow out of the ground”というような説明は英語の“green”という概念などにも入っているが、それぞれの要素が普遍的な語彙であり、他言語の話者にゆがみなく理解されていても、全体の意味が通じるとはかぎらない。つまり、地域と気候によっては植物の緑色に濃度の大きなばらつきがあり、他民族や地域の人がこの説明を分かったとしても想像する植物の色、すなわちgreenと思う色は、実際のgreenとは違うというケースがあり得るだろう。この点に関しては、違う気候の地域に住んでいる英語の話者によってgreenとみなされる色 (focal color) が同じであるとは一概にいけない。

Wierzbickaらは、文化的キーワードの意味を他言語の話者に説明する際にNSM法をしばしば利用しているが、本稿でその方法を利用することについてはいくつか問題がある。

1. NSM法による概念の説明文は場合によってかなり長くなり、実際の概念の構造（脳内の概念の構造）がそのように構築されるのかは疑わしい。文化的キーワードのような抽象性の高く、複雑な概念を構築するためにWierzbickaのNSM法を用いるとすれば、その概念の説明に複数の意味原素が必要となる。管見では、思考のプロセスにはエネルギー節約原理が働くので、意味の要素の数は最小限であると推定される。
2. NSM法は言葉の意味の細かいニュアンスまで説明できるが、その言葉の用法（特にメタファー的な連語）を完全に説明しきることができない。例えば以下のWierzbicka (1991, 279) の「恩」という日本語の文化的キーワードの説明から「恩を被る」、「恩に着せる」という「用法」に関する情報が含まれていない。

- (a) X thinks something like this about someone:
- (b) This person did something very good for me
- (c) I couldn't do something like this for this person
- (d) I have to think about this always
- (e) I have to do good things for this person because of this
- (f) If this person wants me to do something I have to do it
- (g) X feels something bad because of this

つまりこの説明を読んだ日本語を勉強する外国人は「恩」を正しく使えるようにはならないだろう。なお、本論で示すように、この弱点は特に外来語の習得と用法においてもみ

られる。外来語が普及し始める場合、どのようにその意味がすべての話者に伝わるのかという大きな問題がある。新しい単語を聞いた人が辞書的意味を調べる場合は少なく、なんらかの形で意味原素による説明を受けるとも考えられない。にもかかわらず、ほとんどの人は多少揺れがあっても最初から外来語の意味を共有しているようである。たとえば、現代の日本人は「コミュニケーション」という外来語を「取る」、「図る」、あるいは「交わす」などの動詞とともに使うが、本論で示すように「コミュニケーション」が日本語に入った（70年代）直後からそういった用法が普及した。その用法はけっしてランダムなものではなく、現代の日本人の感覚でもおかしいと思われるような「コミュニケーション」を「借りたり」、「掛けたり」、「売ったり」などという用法は70年代にもみられなかったのである。

上記の理由をまとめると Wierzbicka らが提示する NSM 法は、異文化の影響をなくすという意味で他言語の言葉の意味を解明するのにある程度有効であると考えられるが、NSM 法自体は人間の実際の思考や言葉の習得のプロセスとは程遠い存在である。概念をより簡単な要素に分解することができることは認めるが、その要素が必ずしも意味原素である必要はない。次に考察する認知意味論のアプローチで提示されているように、抽象的な概念における意味の構造には別の抽象的な概念やプロトタイプ、イメージスキーマといったものが入っている場合が多い。

これらの方法は一部の課題を解決はするが、両方とも大きな欠点がある。多くは筆者自身の言語感覚またはネイティブのインフォーマントの感覚に基づいて直観的に分析されているため、見落としている部分もあれば、主張の根拠が見えにくい場合もある。さらに、母語を通して世界を捉えているため、ネイティブの感覚がない人に関しては同じ手法で言葉の細かいニュアンスを探るのは困難であろう。

管見によれば、NSM 法に加え、概念メタファーを研究する認知言語学の成果を視野に入れることで、その問題が解決できる。Lakoff による概念メタファーは、思考と概念の構造において重要な役割を果たし、人間の抽象的な概念能力は具体的な認知機構からのメタファー的拡張によって作られているというアイデアを踏まえるならば、概念メタファーを分析することによって、抽象的な語彙の意味が解明できるだろう。なお、下で示すように「火」や「川」といった具体的な（五感で知覚できる）語彙の用法においても概念メタファーが見られるので、この手法はロシア語とそこに現れるロシア的世界観を理解する可能性を拓く一助となるだろう。

## 2-6 認知意味論のアプローチ

前章で述べたように、世界で起こる全ての出来事を人間の意識を通した屈折と解釈することは、科学が新しい人類学的パラダイムに移行するための基盤となった。これが起きたのは 20 世紀の終わりだったが、それは正に人間的な要因によって結び合わされた人文学的領域が、研究の学際的分野、すなわち認知的研究に変化した時期と同じである。「認知科学 (cognitive science)」という用語は、これらの学術領域を表すために導入された。認知言語学とは、共通の認識メカニズムとしての言語をその関心の中心に置く学問分野であり、認識はその言語的反映の中にある。認知言語学はアメリカにおいて興った (G. Lakoff、M. Johnson、R. Langacker、L. Talmy、R. Jackendoff、C. Fillmore、など)。

認知意味論は構造主義的な意味論の対案として生まれ、その先駆者として Fillmore (1975) の“An alternative to check list theory of meaning、Lakoff and Johnson (1980) “Metaphors we live by”、Lakoff の“Women, fire, and dangerous things”または Talmy (2000) の“Toward a cognitive semantics”という研究が挙げられる (松本、13)

言語学は認知心理学の一部と解釈すべきだという考えを最初に唱えたのは、アメリカの言語学者 N. Chomsky である。彼は、言語学は研究対象を見直す必要があるとし、その手始めとして、理想的な話者・聴者が持っている知識と、一般的な人々が言語をどのように話し、理解しているかとの間に境界線を引くことにより、話者が持っている知識と彼らの言語的領域を研究することの必要性を説いた。この理念は言語学者と心理学者の立場を近づけ、その結果、言語学者が研究してきた心理学的現実について問題を提起することになった。認知過程の一般理論なしに十分な言語理論を打ち立てられるかという疑問に対する答えの必要性が、認知科学において認識されるに至ったのである。Chomsky が提起した課題は、そもそも知識はどこから来るのか、特に人の言語知識はどこから来るかを理解することである。松本 (2003, 5) は認知意味論の特徴を以下のようにまとめている。

認知意味論は、これまでの意味論に対して、意味の概念的なものであることを何ら抵抗なく受け入れる。そして、意味を人間の外界認知の産物であると考え、この考え方によれば、語の意味は、外界の指示物を決定するものというよりも、認識された外界をカテゴリー化 (categorization) したものである、ということになる。

言語的データの分析方法としては内省 (introspection)、心理学的な実験およびコーパス使用という三つの方法を挙げている。内省は Fillmore、Lakoff、Talmy と Wierzbicka の研究でしばしば用いられる。松本 (2003、11-12)。

認知意味論のアプローチの中には典型的なものがいくつかあるが、本稿においては、プロトタイプ理論と Lakoff の概念メタファー理論が文化的キーワードの意味を論じる際特に有効だと考えられるため、本章で詳しく触れる意義があろうと思う。

### 2-6-1 プロトタイプ理論

人間はまわりの環境に接する際に様々な情報を処理する必要がでてくる。ただし、五感で受け取った連続している情報は、言語化する際にどうしても不均衡に整えられがちである（『認知言語学への招待』、93）。例えば、物理的に連続している音のピッチや色のグラデーションを7つに分けたりする。その分け方には物理的な根拠はないにしても、人間はこのように周りの世界をカテゴリー化（分類）することによってコミュニケーションを可能にしている。物事に共通点を探しだし、それらを特定のカテゴリー（グループ）として処理するのは人間の基本的な認知能力のひとつである。単語の認知はおそらくこの能力に大きく依存している。「犬」、「鳥」、「赤色」などの一見簡単と思われる概念は特定のものを指しているのではなく、複数の似たようなもの、あるいは現象を指すカテゴリーとして見られる。従来の意味論ではそのようなカテゴリーははっきりした範囲を持ち、その中に含まれるすべての成員が特定の特徴を備えている以上、すべてが均等であるとされていたが、近年の研究ではカテゴリーの範囲があいまいで、より中心的なものからより周辺的なものまでであるという見方が強くなった。その発想の先駆けとして Rosch and Mervis (1975、573–574) の以下の主張が挙げられる。

when describing categories analytically, most traditions of thought have treated category membership as a digital, all-or-none phenomenon. That is, much work in philosophy, psychology, linguistics, and anthropology assumes that categories are logical bounded entities, membership in which is defined by an item's possession of a simple set of criterial features, in which all instances possessing the criterial attributes have a full and equal degree of membership. In contrast, it has recently been argued ... that some natural categories are analog and must be represented logically in a manner which reflects their analog structure

分析的にカテゴリーを描写する際、従来の理論では、その成員はデジタル的な全か無かの法則により決定づけられていた。つまり、哲学、心理学、言語学、人類学の大概の研究において、カテゴリーは論理的に有界な存在で、幾つかの重要な特徴の所有により定義づけられる成員は、その属性を満たしていればすべて同等にカテゴリーの成員であるとみなされていた。一方近年は、自然的カテゴリーの中には境界が不明瞭な

ものもあり、アナログ的構造を映し出した法則を以て論理的に示されるべきであると主張されている。

E. Rosch は 1970 年代に同僚とともに実験によって見出した知見を説明するために、“prototype theory”という人間のカテゴリー化に関する理論を提唱した (Evans、176–177)。松本は (2003、30) プロトタイプ意味論の特徴について「ある意味カテゴリーに属する成員は均等ではなく、その中には典型的なケースと周辺的なケースがある」とまとめている。辻 (2003、101) は従来のアプローチとプロトタイプ意味論のアプローチにおける違いについて以下のように述べている。

共通属性によってカテゴリーが規定できるとする古典的なカテゴリー観が、そのままの形で我々の頭の中にあるカテゴリーの構造を適切に記述できているならば、あるカテゴリーに属する成員はすべて同じ資格でそのカテゴリーに属すると判断されるはずである。

……

しかし、我々の日常的な直観はそのようには構成されていない。世界についての我々の日常的な理解においては、我々はスズメとペンギンを同じように鳥として扱っているわけではない。少なくとも日本ではスズメがもっとも鳥らしいと感じられる。

さらに Lakoff (1987、5) はカテゴリーに対する近年の見方について以下のように説明している。

The classical view that categories are based on shared properties is not entirely wrong. We often do categorize things on that basis. But that is only a small part of the story. In recent years it has become clear that categorization is far more complex than that. A new theory of categorization, called prototype theory, has emerged. It shows that human categorization is based on principles that extend far beyond those envisioned in the classical theory.

カテゴリーは共通の特性を基礎としているという古典的な見方が完全に間違っているわけではない。そういった基準で分類を行うこともしばしばある。しかしそれはほんの一部の話に過ぎない。近年、カテゴリー化というのはそれよりもはるかに難しいということが明らかになった。プロトタイプ理論と呼ばれるカテゴリー化の新しい理論が現れたのである。それにより、人間が行うカテゴリー化が、古典的理論で考えられ

ていた範囲をはるかに超える原理に基づくことが明らかとなっている。

プロトタイプ理論によれば、人間の思考においてカテゴリーを形成する際の助けとなる基本原理には（1）認知経済の原理と（2）世界構造知覚の原理という 2 つのものがある。これらの原理が共に人間のカテゴリー化のシステムを生み出している。Evans（2007、176－177）その原理は以下のように説明されている。

The first principle, the principle of cognitive economy, states that an organism like a human being attempts to gain as much information as possible about its environment while minimizing cognitive effort and resources. This cost-benefit balance drives category formation. In other words, rather than storing separate information about every individual stimulus experienced, humans can group similar stimuli into categories, which maintains economy in cognitive representation. The consequence of this is that humans privilege categories formed at a certain level of informational inclusiveness or complexity. This level of categorization is known as the basic level of categorization.

The second principle, the principle of perceived world structure, posits that the world around us has correlational structure. For instance, it is a fact about the world that wings most frequently co-occur with feathers and the ability to fly (as in birds) rather than with fur or the ability to breathe underwater. This principle states that humans rely upon correlational structure of this kind in order to form and organise categories. This correlational structure gives rise to a prototype.

第一の原理である、認知経済の原理は、人間のような有機体は認知に関わる労力と資源を最小限に抑えつつ、環境に関する情報を最大限獲得しようとするという考えである。こうした費用と便益のバランスがカテゴリー形成を促している。言い換えると、刺激を一つひとつ経験する度にそれらの情報を個別に蓄積していくのではなく、人間は類似する刺激をカテゴリーに分類していくことができ、それにより認知表現上の経済性が維持されるのである。その結果、人間は一定水準の情報の包括性や複雑性を持って形成されたカテゴリーを優位に扱うこととなる。この水準のカテゴリー化は、カテゴリー化の基本的レベルであるとされている。

二つ目の原理である世界構造認識の原理は、我々の周りの世界が相関構造を持っていると仮定している。例えば、世界に関する事実の一つとして、翼は毛皮や水面下で呼吸する能力というよりも、羽毛と（鳥にあるような）飛ぶ能力と共起することが多いということがある。この原理では、人間はカテゴリーを生成し組織するために、この

種の相関関係構造に頼っているということが主張されている。この相関関係構造によってプロトタイプが生まれるのである。

このような事実は様々な実験によって実証されている。「<ある事例>は<あるカテゴリー>である」という真偽反応の時間を計ったときに、典型的な事例の方が短くなるという実験のほかに、事例提示、類似性評定における非対称性、一般化における非対称性などに関する実験でもそのような事実が確認された（辻、2003、101）。あるカテゴリーの成員を典型性の段階に基づいて判断する認知作用は、プロトタイプ効果と呼ばれる。

E.g. people think of songbirds, such as a robin, as having more of the central character of a bird than others, such as ducks, falcons, or ostriches. In that sense, a robin or the like is a prototypical instance, or prototype, of a bird. But birds are the denotation of bird. So, it is argued, the meaning of bird should in turn be identified by its prototype: 'robins and the like in the first instance, plus other species that, to varying degrees, share some of their character'.

Prototype theories are often linked with the view that denotations have no precise limits: e.g. bats are merely less 'robin-like' than ducks, and so on. (Matthews, 2014, 302)

例) コマドリなどの鳴き鳥はアヒル、タカ、ダチョウなどのほかの種よりも鳥としての中心的性格を多く有していると考えられている。この意味において、コマドリおよび同類のものは鳥の原型的な例、すなわちプロトタイプである。しかし鳥は、外延的に定義される鳥を表す。そのため、鳥の意味はプロトタイプによって特定されるべきであると主張されている。つまり、「第一の例としてコマドリおよび同類のものが挙げられ、加えて程度の差はあるが特徴を共有するその他の種類が挙げられる」といた具合である。プロトタイプ理論には通常、外延的意味の範囲は明確に限定されていないという見解が付随する。例えば、コウモリはアヒルと比較して「コマドリの同類」である程度が低い。

プロトタイプ理論の初歩的な研究としてしばしば Berlin and Kay (1969) の色の研究が挙げられる（松本、31）。Berlin と Kay は英語の話者に様々な色相と明度のものを見せて、最も“red”らしい色を選択してもらったが、その結果、色彩語が表す色には典型的（中心的な）なものとは違うものがあることが分かった。調査の結果、典型的であるといわれた色は red の focal point と呼ばれ、red という単語のプロトタイプとして扱われる。この焦点から多少離れた色も英語話者は同じように red と呼ぶが、それは非典型的な例として見られる。



その後、プロトタイプ意味論は Lakoff (1987)、Langacker (1987)、Rudzka-Ostyn (1988)、Lehmann (1988)、Taylor (1989) などの研究にて発展した。

一方、Weirzbicka (1985) は bird とは性質が異なる概念、例えば fruit、あるいは weapon、toy、furniture という集合的な名詞にプロトタイプ理論を適用し、そのアプローチの限界について論じている。ただし、Wierzbicka (1996、317) の NSM 法にも似たような発想がある程度含まれているといえる。例えば、英語の「red」は NSM 法で以下のように説明されている。

X is red. =

when one sees things like X one can think of fire

when one sees things like X one can think of blood

one can see things like X at times when one cannot see other things

この説明には“red”が“fire”と“blood”に例えられている。つまり、“blood”と“fire”の色は(あるいはその真ん中の色)は red のプロトタイプとしてだされているといえる。Lakoff (1987、56) は、認知モデルの姿勢にも通じるプロトタイプ理論の基本的帰結を以下の通りまとめている。

The basic results of prototype theory leading up to the cognitive models approach can be summarized as follows:

- Some categories, like tall man or red, are graded; that is, they have inherent degrees of membership, fuzzy boundaries, and central members whose degree of membership (on a scale from zero to one) is one.
- Other categories, like bird, have clear boundaries; but within those boundaries there are graded prototype effects—some category members are better examples of the category than others.
- Categories are not organized just in terms of simple taxonomic hierarchies. Instead, categories “in the middle” of a hierarchy are the most basic, relative to a variety of psychological criteria: gestalt perception, the ability to form a mental image, motor interactions, and ease of learning, remembering, and use. Most knowledge is organized at this level.
- The basic level depends upon perceived part-whole structure and corresponding knowledge about how the parts function relative to the whole.
- Categories are organized into systems with contrasting elements.
- Human categories are not objectively “in the world,” external to human beings. At least some categories are embodied. Color categories, for example, are determined jointly by the external

physical world, human biology, the human mind, plus cultural considerations. Basic-level structure depends on human perception, imaging capacity, motor capabilities, etc.

– The properties relevant to the description of categories are interactional properties, properties characterizable only in terms of the interaction of human beings as part of their environment. Prototypical members of categories are sometimes describable in terms of clusters of such interactional properties. These clusters act as *gestalts*: the cluster as a whole is psychologically simpler than its parts.

– Prototype effects, that is, asymmetries among category members such as goodness-of-example judgements, are superficial phenomena which may have many sources.

今日、プロトタイプ理論はもはやカテゴリー化に関する正確な見方ではないとされている。にもかかわらず、認知意味論の発展におけるその歴史的な重要性は大きいのである (Evans、2007、176-177)。プロトタイプ理論だけではすべての概念の意味を完全には説明できないと認めつつも、今まで指摘されていなかった言葉の意味の一部に対しプロトタイプ理論が光を当てたことは間違いないので、人間の認知モデルの全体像を補う観点として、本稿においてこれをほかのアプローチと併用することには意味があると考えられる。

## 2-6-2 概念メタファー理論

20世紀後半には、人間の認知構造に密着した言語研究が発展し、認知言語学という新しい分野が生まれた。メタファーの研究は修辞学の範囲を越え、メタファーは人間の認知構造に深く関係していると指摘する研究者が多く現れた。1976年、J. Jaynes は著書『The Origin of Consciousness in the Breakdown of the Bicameral Mind』（神々の沈黙—意識の誕生と文明の興亡）』を刊行した。この本には、隠喩について独立した章が設けられており、人の認知体系が形成される過程で隠喩が果たすと著者が考える役割について書かれている。J. Jaynes は、意識進化と隠喩化能力を関連づけ、隠喩は、私たちによる世界の理解と人間意識を拡大する方法だと考えていた。「抽象的概念は具体的隠喩の助けを借りて形成される」（Jaynes、1976、50）が、人々の大半が、多くの言葉の隠喩性を認識しておらず、「抽象的概念を意味する言葉は、古代貨幣のようにこすれて摩耗し、描かれたものが消えてしまった」と述べている。J. Jaynes によれば、理解するとは良い隠喩を見つけることを意味し、それはつまり、未知のもの、よく分からないものを意味づけるために、私たちの知覚の感覚に結びついた馴染み深い形式を選び取ることなのである。その4年後、1980年に刊行された Lakoff と Johnson による『Metaphors we live by』（邦題『レトリックと人生』）は概念メタファーのもう一つの先駆的研究である。Lakoff は自分の新しいアプローチについてこう語っている。

メタファー（隠喩）と言え、たいいていの人にとっては、詩的空想力が生み出す言葉の綾のことであり、修辭的な文飾の技巧のことである。つまり、通常用いる言語というよりは特別改まった表現をする際の言語のことである。それに、メタファーというのは言語だけに特有のものであって、思考や行動の問題であるよりは言葉遣いの問題であると普通一般には考えられている。したがって、大部分の人はメタファーなどなくとも、日常生活はなんら痛痒を感じることなくやっていけるものと考えている。ところが、われわれ筆者に言わせれば、それどころか、言語活動のみならず思考や行動にいたるまで、日常の営みのあらゆるところにメタファーは浸透しているのである。われわれが普段、ものを考えたり行動したりする際に基づいている概念体系の本質は、根本的にメタファーによって成り立っているのである。

（Lakoff/Johnson 渡部他訳 1986: 3）

Lakoff と Johnson の説明によれば、理性（知性）が肉体的に表現されるだけでなく、我々の概念体系も、非常に高い割合で、私たちの体に共通する性質や私たちが住む環境に

基づくような形で表現されている。その結果、ある特定の個人の概念体系に含まれるものの多くが普遍的であるか、もしくは、あらゆる言語や文化に広く普及したものであるということになる (Lakoff, 1987, 370)。

- Meaningful thought is not merely the manipulation of abstract symbols that are meaningless in themselves and get their meaning only by virtue of correspondences to things in the world. – Reason is not abstract and disembodied, a matter of instantiating some transcendental rationality.
- The mind is thus not simply a “mirror of nature,” and concepts are not merely “internal representations of external reality.”

—意味を持った考えというのは、一つ一つはそれ自体意味のない抽象的な記号を、単にうまく操ってできるものではなく、世界にある物事に対応させることでのみ得ることができる。—理性は抽象的でもなく、肉体的に表現されないわけでもない。何らかの超越的な合理性を例示化しているというわけだ。—従って思考は単なる「自然を映し出す鏡」ではなく、概念もまた単に「外的現実を内面的に表象したもの」ではない。

概念領域を形成する知識の根源は、人と周囲の世界との直接的な相互作用の経験であり、時間的に最初にくるのが物理的経験である。そしてこの物理的経験が、現実を「イメージ図」というシンプルな認知構造でカテゴリー化する。隠喩的投影は、知識構造における二つの個別要素の間で行われるだけでなく、概念領域と概念領域の間でも行われる。隠喩的投影の際、標的領域 (target domain) の一部に源泉領域の構造が残るという仮説は、不変性仮説という名称で呼ばれるようになった。概念メタファーの理論によれば、二つの概念領域 (源泉領域 (source domain) と標的領域 (target domain)) がもつ複数の知識構造 (フレームとスクリプト) の間には相互作用があり、その相互作用のプロセスが隠喩化の基礎である。源泉領域から標的領域への一方向的なメタファー写像 (metaphorical mapping) により、人と環境の相互作用の結果として形成された源泉領域要素は、より分かりづらい概念的標的領域を構造化する。これがメタファーの認知的ポテンシャルの本質になっている。

Lakoffは英語の“Argument” (議論) という単語の用法 (使用頻度の高い連語) を例にとり、英語では「議論」が「戦争」 (英語: War) として理解されていると主張している。

ARGUMENT IS WAR

<議論は戦争である>

Your claims are indefensible.

<君の主張は守りようがない (=弁護の余地がない)。>

He attacked every weak point in my argument.

<彼は私の論議の弱点をことごとく攻撃した。>

His criticisms were right on target.

<彼の批判は正しう的を射ていた。>

I demolished his argument.

<私は彼の議論を粉碎した。>

I've never won an argument with him.

<私は彼との議論に一度も勝ったことがない。>

You disagree? Okay, shoot!

<異論があるだと。よし、撃って (=言っ) みろよ!>

If you use that strategy, he will wipe you out.

<そんな戦法じゃ、彼にやられてしまうぞ。>

He shot down all of my arguments.

<彼は私の議論をすべて撃破 (=論破) した。>

つまり、英語話者は単に戦争の用語を使って議論のことを語っているだけでなく、「議論には現実に勝ち負けがあり、議論の相手は敵とみなされ、相手の議論の立脚点 (=陣地) を攻撃し、自分のそれを守る。優勢になったり、劣勢になったりする。戦略を立て、実行に移す。自分の議論の立脚点が守りきれないとわかれば、それを放棄して新たな戦線をしる。議論の中でわれわれが行うことの多くは、部分的ではあるが戦争という概念によって構造を与えられているのである。」人間の思考自体がメタファー的であるために、メタファーなしには抽象的な概念を十分に理解することはできない。隠喩の仕組みは、不可視の世界の客体を記号化する場合などにおいて、様々な論理的順序で関連づけられた本質を比較し、次にそれを合成することによって生産能力を発揮し、新しい名称を生み出す。そしてここで重要な役割を果たすのが、隠喩に最も特徴的なパラメーターである、隠喩の人体測定性である。人は自分なりに、又は、自分が経験のなかで関与し空間的に知覚している客体を基準として、新しく出会うもの全てを一つの尺度で測るという能力をもっており、この能力が、隠喩が行う根拠の選択と関係している。この点に隠喩の人体測定性が現れる。

Lakoff のアプローチは幅広く使われるようになり、“Metaphors we can learn by”、“Metaphors we ought not live by”、“Metaphors we die by”、“Metaphors we surf the web by”、“Metaphors we discriminate by”といったタイトルの研究が盛んになり、さまざまな概念 (政治、教育、人間関係など) が一貫した概念構造を持つことが示されている。

概念メタファーの理論は、心理言語学方面の研究者らの間で大きな関心を呼んだ。心理言語学者らにとって主な疑問となっていたのは、使い古されたメタファーのアップデートが概念領域に対する能動的操作を伴うものであるのか否か、またそのようなメタファーは言語話者によって受動的に習得される決まり文句のようなものではないのではないか、という点だった。「肉体的理性」と基本的概念メタファーの無意識的性質に関するLakoffの仮定を立証すべく、興味深い実験が、GibbsとWilsonによって行われた（Gibbs, Wilson, 2002）。この実験では、被験者の運動の生理的過程と擬人化メタファーの使用との間に、相関関係が確認された。その際、この相関関係は、被験者の国籍によって異なるものではなかった。同著で著者らは、運動の生理的過程に応答する回答者の脳領域の活性化と、言語表現との間の相互作用を証明する研究を行っている（言語表現は、周囲の世界と相互に作用し合う肉体的経験と結びついたものである）。

前章で述べたように文化的キーワードは抽象性が高いため、上で紹介した Lakoff らの認知に関する解釈が正しいとすれば、文化的キーワードのような語彙を理解する上で、人間は、もっと簡単な起点領域（概念）をなんらかの形で活用する必要があるだろう。

なお、概念メタファー写像のプロセスには上で挙げたような概念だけでなく、非言語の構造体が密接にかかわっている。Evans (2007, 106) は概念メタファー写像におけるイメージスキーマの役割について次のように説明している

It has also been claimed by George Lakoff and Mark Johnson in their work on metaphor that image schemas provide the basis for abstract thought by virtue of serving as the source domain in metaphoric mappings. The importance of image schemas is that they are held to provide the concrete basis for these metaphoric mappings. Consider the image schema PHYSICAL OBJECT. This image schema is based on our everyday interaction with concrete objects like desks, chairs, tables, cars and so on. The image schema is a schematic representation emerging from embodied experience, which generalises over what is common to objects: for example, that they have physical attributes such as colour, weight, shape and so forth. This image schema can be 'mapped onto' an abstract entity like 'inflation', which lacks these physical properties. The consequence of this metaphoric mapping is that we now understand an abstract entity like 'inflation' in terms of a physical object.

ジョージ・Lakoff とマーク・Johnson はまたメタファーに関する著書の中で、イメージスキーマはメタファー的マッピングにおける源泉領域として機能することで、抽象的な観念に基礎を与えていると主張してきた。イメージスキーマの重要な点は、こう

したメタファー的マッピングにおける具体的な基礎を与えるためにそれらが使われているということだ。PHYSICAL OBJECT（物理的対象）というイメージスキーマを考えてみよう。このイメージスキーマは、机、椅子、テーブル、車といった有形の対象物との私達の日々の関わりに基づいている。これは具象化された経験から生まれる図式的表現であり、それによりどんなことが対象物にとって普通であるのかが一般化される。例えば、色や重さ、形などといった物理的特性を持っているといったことである。このイメージスキーマは、そうした物理的特性を持たない「膨張」などといった抽象的実在の上に「地図化」することができる。メタファー的マッピングの結果として、「膨張」のような抽象的実在を物理的対象の観点から理解することができるのだ。

上記のことを踏まえるなら、文化的キーワードの意味を考える際、イメージスキーマを利用して、その意味の一部の特徴が説明できるか調べることには意味があると考えられる。

Lakoff の概念メタファー理論には二つの解釈がある。弱い仮説（解釈）によれば、概念メタファーと人間の思考はある程度関係している。強い解釈によれば、概念メタファーが人間の思考パターンを完全に作っている。本稿で扱う認知モデルを考える際には弱い仮説（解釈）を採り、概念メタファーと思考（世界観）の関係を探る。

管見によれば、上で触れた認知意味論のアプローチ（プロトタイプ理論、概念メタファー、イメージスキーマ）は、単独では言葉の意味を完全には説明できない場合が多い。だが、それぞれの理論は、上で述べたように別々の角度から意味を取ろうとしているだけであって、相互排他的なものではない。従って、本稿においてそれぞれを同時に適用した認知モデルを描き出すことには意味があると判断する。

## 第3章 分析方法とデータの収集

### 3-1 概念メタファー分析に基づく新アプローチ

#### 3-1-1 認知的経済性の原理と起点領域の数

前章では文化的キーワードの意味解明に有効と思われるアプローチと方法論について触れたが、本章ではそれらの弱点を探し出し、改善策を考えながら、本稿なりの認知モデルおよび文化的キーワードの意味に対するアプローチを考察する。

文化的キーワードのような抽象的な概念の意味についていうと、NSM法と概念メタファー理論のアプローチには共通点がある。両方の理論において、抽象的な概念がそのまま丸ごと人間によって理解されているとは考えられておらず、概念の理解は、その概念を構築しているか、少なくとも構築に部分的に関わっている要素に依存していると主張されている。NSM法の場合、それは普遍的な意味原素であり、概念メタファー理論においては、概念領域に部分的に意味を写像する起点領域の概念というものが提示されている。NSM法が提示する意味原素というものは、これ以上意味的に分解できない語彙であるとされ、その単語とその単語をつなぐシンタックスが生まれつきのものなのかどうかは曖昧だが、シンプルな要素で複雑な概念を構築するという点においては概念メタファー理論と同様な見方である。概念メタファー理論では、抽象的な概念の基底には人の身体的経験があり、人間が体で経験した事物や現象を表すシンプルな概念に例えて複雑な概念は理解されるとしている。言葉の意味を分解して説明しようという言語学における試みはほかの理論にも見られる。その一つとしては前章で触れた成分分析が挙げられる。このような抽象的な概念の分解可能性に関するアプローチと、それに基づいて生まれた多数の研究による成果をみとめ、本稿においても、抽象的な概念の意味を解明する際、それをより単純な要素に分解することは有効であると考え。ただし、概念の意味を構築する要素の選択とその性質に関しては、NSM法や概念メタファー理論とはことなるアプローチをとる必要がある。

まずは概念の構築に関わっている要素の数と構造を考えてみよう。Wierzbicka (1992, 73) のNSM法では複雑な概念の説明には意味原素が使われており、説明が長くなる場合が多い。例えば、ロシア語の *porok* (運命、悲運) という概念は以下のように説明されている。

- a. rok
- b. bad things happen to people
- c. I imagine I know that some bad things happen to some people because someone wants it
- d. it is not someone like a human being



- e. one can say that it is something, not someone
- f. one cannot know what it is
- g. it is not part of this world
- h. it is something bad
- i. if this someone or something wants something it will happen
- j. one cannot think: 'if I say: I don't want it, it will not happen'
- k. it cannot not happen

このようなタイプの説明は、文化や言語的世界観に関する専門書などで外国語の複雑な概念を一部抜き出して説明するのには適しているといえるが、人間が実際に言葉を認知する際にこのような長くたくさんの要素を含む構造を記憶に保存したうえ、言葉を使うたびにそれをシンタックスのルールに従って再構築しているかどうかは疑わしい。プロトタイプ理論の原理の一つとしては、いわゆる認知的経済性がある。その原理は、人間はカテゴリーを認知する際に認知リソースの消費ができるだけ少なくなるように情報を扱おうとするはずだという発想に基づいたものである。認知的経済性は以下のように定義されている (Evans、2007、19)。

Relates to the way in which human categorisation works so as to provide a maximally efficient way of representing information about frequently encountered objects.

認知的経済性は最近プロトタイプ理論の枠を超え、心理学など人間の認知に関連した分野で広く使われるようになった。人間の情報処理（記憶と記憶から引き出した情報の処理をふくむ）には限界があり、人間は脳のリソースを効率的に使おうとしているということが認められている。この観点からみると NSM 法のような説明の仕方は認知的経済性の原理と矛盾しているのである。Partington (1998、20) は、記憶と記憶から引き出された情報の処理に必要なリソースについて以下のように説明している。

In formulating performance models of language processing, researchers endeavour to offer direct descriptions of psychological categories and processes, attempting to describe languages in terms of how they are perceived, stored, remembered and produced. These researchers feel that the storage capacity of memory is vast, but that the speed for processing those memories is not (Crick 1979: 219), so that we must learn short cuts for making efficient use of this processing time

言語処理の性能モデルを定式化する際に、研究者らは心理的なカテゴリーと過程を直接的に説明しようと努めており、言語がどのように知覚され、蓄積され、記憶され、取り出されているのかという観点から言語を特徴づけようとしている。彼らは記憶の貯蔵容量は非常に大きいという感覚を持っているが、それを処理する速度は速くはなく (Crick 1979: 219)、そのためこの処理時間を効率化させる術を学ばなければならない。

つまり、NSM 法のような定義は、記憶自体に問題がなかったとしても、記憶から引き出した情報を処理し、複雑なシンタックスに基づいてその情報を一つの概念に構築するという点において、認知経済性の原理に反しているのである。さらに、文化的キーワードの特徴を前章で示したが、それは、言語的世界観の中心的な役割を果たしており、互いに絡み合って、比較的頻繁にさまざまな場面で使われるということである。つまり文化的キーワードの中には使用頻度の高い語彙が多いという事実を考慮すれば、NSM 法のような説明を認知モデルとして扱うことができないだろう。文化的キーワードの構成要素 (ソースドメイン) はおそらく数が少ないであろうと推測できる。限られた数の要素で複雑な概念を構築するためには、その成員自体がある程度複雑な概念でなければならないということになる。NSM 法が提唱する意味原素の構造を批判した Partington (1998, 20) は、意味原素のようなシンプルな要素をたくさん保存し、処理するよりは、ある程度複雑な (complex) 要素を扱うことの方が有効であると主張している。

The indications from neurophysiology and psychology are that, instead of storing a small number of primitives and organizing them in terms of a (relatively) large number of rules, we store a large number of complex items which we manipulate with comparatively simple operations. The central nervous system is like a special kind of computer which has rapid access to items in a very large memory, but comparatively little ability to process these items when they have been taken out of memory.

神経生理学と心理学によって以下の様なことが示唆される。私たちは根源的な要素を少数蓄積し (比較的) 多くの規則に則ってそれらを体系化しているのではなく、複雑な要素を大量に集め、比較的単純な工程で操作しているのである。中枢神経系は特殊なコンピューターのようなもので、膨大な記憶の中に収められている事柄にすばやくアクセスすることができるが、そうして記憶から取り出した事柄を処理する能力はそれほど高くはない。

Partington (1998, 20) はこのような原理は人間の言葉の認知だけでなく、人間同士のコミュニケーションにまで拡張できると推測している。

A still more powerful reason for the employment of semi-preconstructed phrases probably lies in the way it facilitates communication processing on the part of the hearer. Language consisting of a relatively high number of fixed phrases is generally more predictable than that which is not (Oller & Streiff 1975). In real-time language decoding, hearers need all the help they can get. Redundancy in communication is often explained in this way and the collocational principle probably has the same functional origins.

半固定フレーズを適用する理由として一層有力なのは、聞き手側において、伝達内容の処理を容易にするという点であろう。比較的多くの固定フレーズが言語を構成している場合、そうでない場合と比べて、概して予測可能性が高まる (Oller & Streiff 1975)。リアルタイムで言語を処理するために、聞き手はできる限りの援助を要する。コミュニケーションにおける冗長性は大抵このように説明され、そして、連語の原理も同じ機能的起原を有すると考えられる。

序論において文化的キーワードのグループ化現象に触れた際に、辞書などでは一つの文化的キーワードがしばしば別の文化的キーワードを通して説明されていることを示したが、そのような特徴も概念構造は比較的複雑な語彙で構築されるという主張の裏付けとみることが出来る。意味原素だけに頼り過ぎる NSM 法は、言葉の用法に関する情報をほとんど含んでいないという大きな欠点を持つ。例えば、NSM 法による英語の *sadness* を考えてみよう (Wierzbicka, 1999, 63)。

Sadness (e.g. X feels sad)

- (a) X feels something
- (b) Sometimes a person thinks:
- (c) "I know: something bad happened
- (d) I don't want things like this to happen
- (e) I can't think now: I will do something because of this
- (f) I know that I can't do anything"
- (g) Because of this, this person feels something bad
- (h) X feels something like this

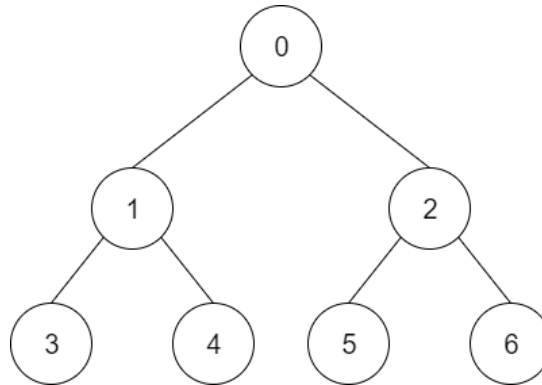
このような説明によって、日本人の話者はある程度意味を掴めるだろうが、英語圏の人が「悲しみに包まれた」時、“filled with sadness”という表現を使うという事実は、このような説明からでは理解できないだろう。逆に概念メタファー理論のアプローチを適用すれば、“filled with sadness”、“deep sadness”、“tap into sadness”などから見えるように英語の sadness は「液体」のようなものに例えられると分かる。sadness の起点領域には liquid という概念があって、それが liquid 特有の特徴を sadness に写像していると分かれば、外国の話者でもある程度まで sadness の用法を理解できるようになる。このように、概念における要素の性質に関しては、概念メタファー理論は、NSM 法とは違い、ソースドメイン（概念の構成要素といえるもの）として複雑な概念を示し得ている場合もある。例えば、英語の love という概念には journey や war という起点領域があり、journey の特徴が love に写像されていると Lakoff はいう。journey と war は両方とも Weirzbicka の意味原素と違って、かなり複雑な概念であるといえる。

ただし、Lakoff のアプローチでは特定の概念における起点領域の数に関して何の制限もない。文化的キーワードのような抽象性の高い語彙を分析する際には特に、そのソースドメインが目立って多くなってしまう。例えば、Lakoff は上記の“love”に対して“war”と“journey”以外に“patient”、“magic”、“health”、“madness”、“work”、“aesthetic”、“experience”などのソースドメインも意味を写像していると言っている（Lakoff, 2010）。概念メタファーのアプローチは NSM 法と同様に認知的経済性の原理を無視しているといえる場合がある。

上記のことを踏まえると、本稿で文化的キーワードの意味とその翻訳可能性を論じる際には、認知的経済性の原理に基づいて認知モデルを構築する必要があるといえる。つまり、抽象性の高い概念の意味を解明するにあたって、その概念の構築に利用されるリソースと処理時間を考慮し、概念の構造（説明）をできるだけ小さく抑える。そのために、意味の成分としては Wierzbicka の意味原素という極端にシンプルな単語を利用するのではなく、ある程度複雑な概念に置き換えることを目指す。例えば、認知的経済性の原理を利用すれば、前章で引用した日本語の「青」に関する Wierzbicka の説明文はかなり短くできる。

例えば、“things grow out of the ground”を“plants”、または“(a) at some times people can see the sun in the sky, When one sees things like X one can think of the sky at these times”というような説明を“clear sky”などという単語に置き換えられる。もちろん、“plants”や“clear sky”といったような概念は、Wierzbicka が考える全言語に共通の“primitives”ではないかもしれないが、普遍的な語彙だけが認知プロセスに直に関わっているという証拠もない。この意味では、本稿で提示する認知モデルにおける意味の成分は NSM 法よりは Lakoff の概念メタファー理論で扱われているものに近い。ただし、起点領域の概念が複雑である場合、その概念の意

味をさらにいくつかの成分に分解できるということになる。つまり、抽象性の高い概念の構造は木構造のグラフとして表すことができるであろう。



ソースドメインの単位は、ターゲットドメインよりシンプルで、かつ主従関係のあるシステムを形作っているということになる。上記のグラフのトップに複雑な概念があり、レベルが下がると比較的単純で理解しやすい概念がある。一番下のレベルでは、おそらくこれ以上分解できない意味原素があると推定できる。この意味で本稿の認知モデルは「人間が複雑な概念を理解するのに自分の身体的な経験を活用し、抽象的なものを物理的なものに例えて理解している」という現代の認知意味論、特に Lakoff の概念メタファー理論のスタンスと同じであるといえる。概念の木構造の一番下にある意味原素は Wierzbicka が提案した普遍的な語彙と部分的に一致する可能性が高いと思われる。すべてのレベルに入っている要素はレベルごとに比較的簡単になるという現象があるとすれば、人間の会話におけるその要素自体の使用頻度が高くなるという傾向がみられるかもしれないので、別途調べる必要がある。

### 3-1-2 起点領域の性質と部分的写像

次は NSM 法と Lakoff 概念メタファー理論における意味原素、あるいはソースドメインの性質に対する立場を考えてみよう。すでに述べたように Wierzbicka らは複雑な概念を説明するのにこれ以上分解できない意味原素 (primitives or semantic primes) とそれをつなぐ特殊なシンタックスを使っている。意味原素の選択は様々な言語における徹底的な調査のうえで行われ、各要素が多数の言語に存在しているということが確かめられる。ただし、その素性自体が脳内で概念の構築に関わる成分と同じであるという必要はない。Wierzbicka 自身もポーランド語に関する記述で“semantic primes”と“mental lexicon”という用語を使い分けて、“semantic primes”は一番深いレベルで“mental lexicon”を構築していると述べている

(Wierzbicka, 2009)。

Semantic primes constitute the deepest layer of the “mental lexicon”, on which everything else rests. Hundreds of concepts encoded in the Polish lexicon as words are built directly out of the primes. For the most part, these concepts are organized into domains each of which is characterized by a distinctive type of structure

意味原素は心内辞書の最深層を構成し、その他すべての要素は意味原素より上層に存在する。ポーランド語の単語としての語彙目録の内に記号化された数多くの概念は、意味原素から直接形成されている。これらの概念の大部分は、示差的な構造の型によって特徴づけられる各意味領域に分けられる。

上記の主張は本稿のスタンスと全く同じであるが、Wierzbicka 自身が行う分析はすべて意味原素のみに頼っているのである。Wierzbicka の意味原素 (semantic primes) は抽象概念ではなく、実際の単語である。その単語はすべての言語に共通しているというだけで、人間の脳内に存在する非言語化されたものではない。一方 Lakoff の概念メタファー理論では、起点領域の存在がかなり曖昧であるといえる。例えば、“AN ARGUMENT IS A CONTAINER”の“CONTAINER”は抽象的な容器の概念を指しているように思える。つまり、皿、バケツ、コップではなく、ものが入れる一種の限られたスペースである。“LIFE IS A RESOURCE”あるいは“VITALITY IS SUBSTANCE”と同様である (Lakoff, 2010)。一方、“IDEAS ARE MONEY”あるいは“LOVE IS A JOURNEY”の“MONEY”と“JOURNEY”はどちらかといえば、かなり具体化されている。“MONEY”と“RECOURCES”はどれも「使う」、「なくなる」、「たまっている」というような特徴をもち、意味を調べようとしている概念 (例えば「英語」の“TIME”) の起点領域としてどちらも使えるように見えるが、その選択次第では分析の結果が大きく変わる場合もある。money は pay (支払う) ことができるが、recources にはそのような使い方はできない。すなわち、間違った選択をすると概念領域に写像されると思われる情報が実際の用法とは異なるという問題が起きる。英語の time には money に例えられる以下のような使い方が可能だが、“I paid my time to him”などは使えない。

You're wasting my time.

This gadget will save you hours. I don't have the time to give you.

How do you spend your time these days? That flat tire cost me an hour.

I've invested a lot of time in her.

I don't have enough time to spare for that. You're running out of time.  
You need to budget your time.  
Put aside aside some time for ping pong.  
Is that worth your while?  
Do you have much time left?  
He's living on I borrowed time.  
You don't use your time, profitably.  
I lost a lot of time when I got sick.  
Thank you for your time.  
(Lakoff, 1980)

Lakoff 自身は“time”の起点領域として“recourse”や“valuable commodity”という選択肢を意識しているが、彼にとっては“recourse”や“valuable commodity”という概念はすでに“money”という概念に入っているため、すべてを“money”で統括している (Lakoff, 1980、9)。

The metaphorical concepts TIME IS MONEY, TIME IS A RESOURCE, and TIME IS A VALUABLE COMMODITY form a single system based on sub-categorization, since in our society money is a limited resource and limited resources are valuable commodities. These sub categorization relationships characterize entailment relationships between the metaphors: TIME IS MONEY entails that TIME IS A LIMITED RESOURCE, which entails that TIME IS A VALUABLE COMMODITY.

We are adopting the practice of using the most specific metaphorical concept, in this case TIME IS MONEY to characterize the entire system. Of the expressions listed under the TIME IS MONEY metaphor, some refer specifically to money (spend, invest, budget, probably cost) , others to limited resources (use, use up, have enough of, run out of) , and still others to valuable commodities (have, give, lose, thank you for) . This is an example of the way in which metaphorical entailments can characterize a coherent system of metaphorical concepts and a corresponding coherent system of metaphorical expressions for those concepts.

抽象名詞の用法（連語）を分析するとその認知に別のもっと単純な概念が明らかに関わっているという例が数多く見られるが、起点領域が概念領域に写像される際に、上記で示したように起点領域のすべての特徴（情報）が概念領域に移るというわけでもない。そのような現象は“partial mapping”と呼ばれる。松本（2003、204）は以下のようにそれについて

説明している。

多くの場合、メタファーは概念領域を部分的にしか対応付けない。つまり、部分的写像 (partial mapping) が見られるということである。メタファーによる概念領域間の対応づけは、2つの意味で部分的である。1つには、メタファーは起点領域に属する概念構造すべてを目標領域に写像するのではなく、その一部のみを写像する。もう1つは、個々のメタファーは目標領域全体を起点領域と対応づけるのではなく、目標領域の一部分に対し起点領域の概念構造を写像する。

Lakoff 自身も partial mapping の問題を意識しているが、そのような現象が起こる理由とはっきりしたメカニズムに関しては何も有益な情報を示していない。さらに、一部のメタファー的な用法が概念メタファー理論の中で説明できないということに対して、概念メタファー理論は批判を受ける場合がある。本稿でも概念メタファー理論における部分的写像の問題は解決できないが、一部の場合では起点領域の性質を見直し、分析結果を改善する必要があるだろう。その改善とは、上で触れた概念の構造と起点領域の性質における修正である。Lakoff の概念メタファー理論は抽象概念の理解において身体的 (具体的な) な経験の役割に注目しているが、起点領域として使われる概念の選択ではこのような原理に従っていない場合がある。なお、プロトタイプ理論の説明で見てきたように、人間は抽象的なカテゴリーを認知するときは、実物とその特徴を中心にそのカテゴリーを構築しがちである。例えば、日本語において鳥のカテゴリーに入っているものは、よく見かける「スズメ」とどれだけ共通点を持つかによってそのカテゴリーへの所属が決まっている。このような原理に従うと、人間が抽象概念を理解する上では、その起点領域として container や resources のような集合的な概念 (場合によっては言語化されていないイメージ) より毎日手で触って、見て、五感で感じられるような実物 (「コップ」、「お金」など) の概念が多く利用されるだろう。例えば”THEORIES ARE BUILDING”という Lakoff の概念メタファーを考えてみよう。谷口はその部分的写像について Grady の例文を使って以下のように論じている。

ただし、新しいメタファー表現の産出は、あくまで経験の構造に一致する範囲で行われる。同じ THEORIES (and ARGUMENTS) ARE BUILDINGS の概念メタファーを用いても、以下のような表現の適切性が落ちるのは、「窓」(windows) や「店子」(tenants) に対応する部分を、「理論」に見出し難しいためである (谷口、2006、102)。



- (49) a. ?This theory has no windows.  
b. ?The tenants of her theory are behind in their rent.  
(Grady et al. 1996, 178)

確かに、Lakoffが挙げたような以下の使い方を見れば“THEORIES (and ARGUMENTS)”には BUILDING を思わせる特徴が目立つ。(Lakoff、2010、70)

Is that the foundation for your theory?  
The argument is shaky.  
We need to construct a strong for that.  
The theory will stand or fall on the strength of that argument.  
So far we have put together only the framework of the theory.

ただし、foundation があって construct できるものを指す単語は、building 以外にもたくさんあり、building を選択する根拠は曖昧である。断言はできないものの、この場合に起点領域として building の代わりに tower、fort、stronghold、wall という単語を使えば、部分的写像の問題の一部が解決できるかもしれない。例えば、wall という概念には tenants や windows がなく、上記の例 (“?This theory has no windows”、“?The tenants of her theory are behind in their rent.”) は問題にならない。なお、wall には holes というものがあるが、holes in the theory という使いは一般的である。wall は敵から defend できるが、theories に対してもしばしば英語の話者は defend という。ここでは theory の起点領域は wall であると断言したいのではなく、起点領域の特定は、個人の言語感覚に基づいて適当に合いそうな概念を選ぶのではなくて、膨大な言語データの分析と比較に基づいた多数の候補の精密な分析が必要となると主張したいのである。さらに、もう一つロシア語の例を考えてみよう。Lakoff の概念メタファー理論といえは“Argument is war”という命題が有名であろう。それでは英語の argument に当たるロシア語の спор を考えてみよう。以下の使い方（連語）で確認できるように、ロシア語の спор にも「暴力、戦争、喧嘩」などのような概念が起点領域に入っているということは明らかである。(注5)、(注6)、(注7)

<спор+形容詞>

горячий спор, жаркий спор, затяжной спор, ожесточенный спор, неравный спор, безумный спор, жестокий спор, бурный спор, кровавый спор, буйный спор

< спор (自動詞) >

спор возникает, назревает спор, ведутся споры, спор длится, кипит спор, завязался спор, спор разгорелся

< спор (他動詞) >

разрешить спор, вступать в спор, закончить спор миром, затевать спор, не вмешиваться в спор, спровоцировать спор, проиграть спор, выиграть спор, пуститься в спор, урегулировать спор, уладить спор, вести спор, ввязаться в спор, уклоняться от спора, увязнуть в спорах, лезть в спор, затеять спор, сойтись в споре..., схлестнуться в споре, оставить на время споры, вмешаться в спор за медали, улаживать спор, биться в споре, сплетаться в споре, вступить в споре за кого-то

<その他の使い方>

в пылу спора, в разгар спора, взять верх в споре, побить кого-то в споре, одолеть соперника в споре, занять нейтральную позицию в споре, исход спора, сцепиться в споре, острота спора, потерпеть поражение в споре, припереть кого-л. к стенке в споре, причина спора, разгорячиться в пылу спора, разгорячиться в споре, спор из-за чего-то, сколько сломано копий в спорах, участники спора, спор за титул

このリストの中に **выиграть** (勝)、**проиграть** (負ける) というメタファー的な表現があるので、ロシア語の **спор** は英語のように **war** (война) に例えられて使われていると結論付けられてしまうかもしれないが、より詳細にみれば、**война** という単語とはあまり共起しないか、全く共起しない (不自然な) 単語も多いということが分かってくる。例えば、?горячая война, ?жаркая война, ?бурная война, ?кипит война, ?разрешить войну, ?пуститься в войну, ?сойтись в войне など是不自然である。そこで、言語コーパスや共起表現の辞書を調べてみると、上記のリストから **спор** の起点領域として考えられる概念は **схватка**, **битва**, **стычка**, **поединок**, **конфликт**, **бой**, **драка**, **ссора**, **вражда**, **сражение**, **столкновение**, **борьба** などである。次章で連語の分析方法について詳しく触れるが、**спор** の共起表現を詳しくみると、その起点領域を暗示するような特殊なパターンが見えてくる。例えば、**урегулировать спор**, **уладить спор**, **разрешить спор**, **острый спор** といったような表現は上記の候補のリストから **конфликт** に使える表現が多いと分かる。**урегулировать конфликт**, **уладить конфликт**, **разрешить конфликт**, **острый конфликт** といったような言い方はロシア人にとっては自然に聞こえるが、?урегулировать бой, ?разрешить войну, ?острая война など是不自然である。

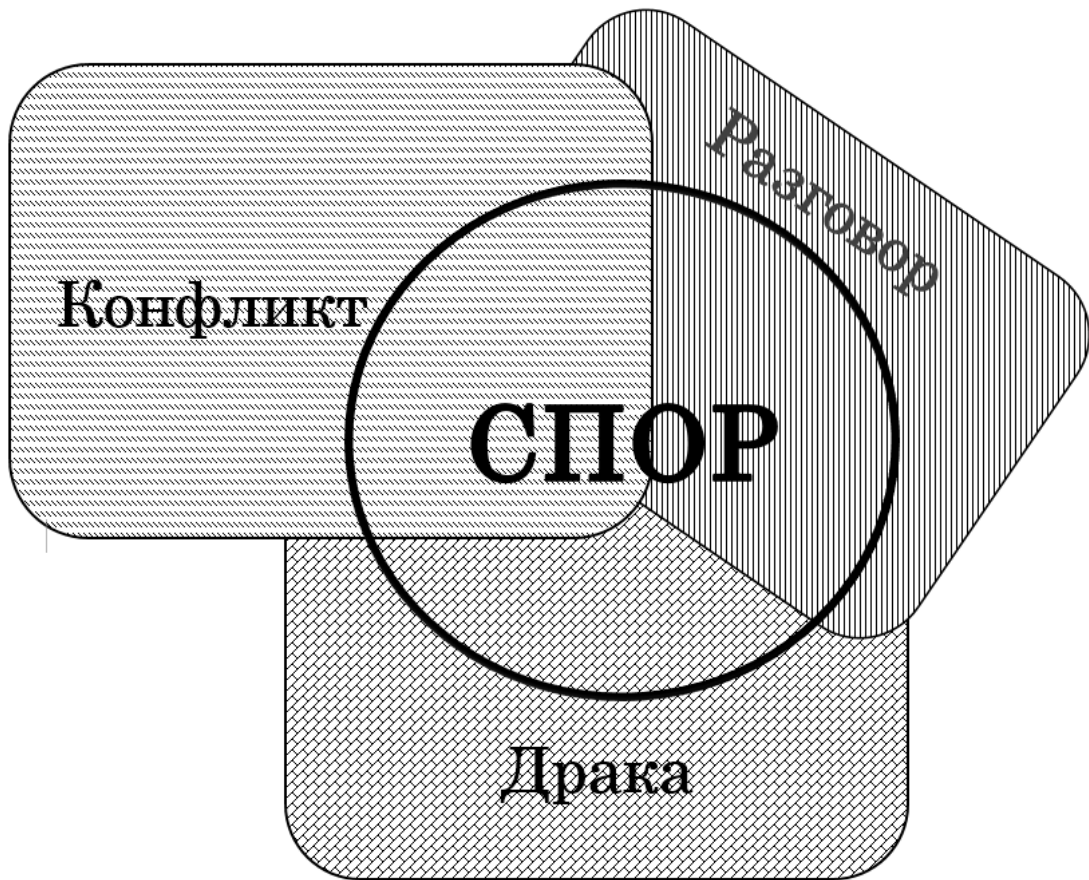
特に *урегулировать* という表現は他の候補にはない使い方なので、このような特徴を *спор* に写像しているのは *конфликт* という概念に他ならないということが分かる。*конфликт* が *спор* の起点領域の一つであると確認できたが、上記のような *спор* の連語はすべて *конфликт* のメタファーでは説明できない。例えば、*биться в споре, в пылу спора, одолеть соперника в споре, пуститься в споры* という表現は *конфликт* に使えず、おそらく *драка* という概念から来ている使い方である。その事実を確かめるためには詳しい分析が必要となってくるので、これ以上ここでは踏み込まないが、*спор* のメタファー的理解に関して以下の連語に見られるもう一つのパターンを検討してみよう。(注5)、(注6)、(注7)

#### < спор の連語 >

*громкий спор, затяжной спор, оживленный спор, бесконечные споры, спор бесплодный, честный спор, принципиальный спор, праздный спор, бурный спор, глупый спор, тихий спор, тщетный спор, долгий спор, мучительный спор, напрасный спор, не вмешиваться в спор, пуститься в спор, вести спор, ввязаться в спор, уклоняться от спора, вызвать массу споров, лезть в спор, не утихают споры, вызвать много споров, прекратить спор, споры не смолкают, спор длится, спор продолжается, кипит спор, спор затих, спор замолк, спор оживляется, спор разгорелся, спор между кем-то и кем-то, предмет спора, участники спора, поставить точку в споре, по существу спора*

上記の連語を分析すれば、*спор* は *разговор* (会話、話) から写像を受けていることが分かる。すべての連語は *разговор* と共有されているといえる。*речь, беседа, переговоры* ではなくて、*разговор* のみが100%その連語と一致するということが分かる。この短い分析の結果を概略図で表示すると以下のようなものになる。

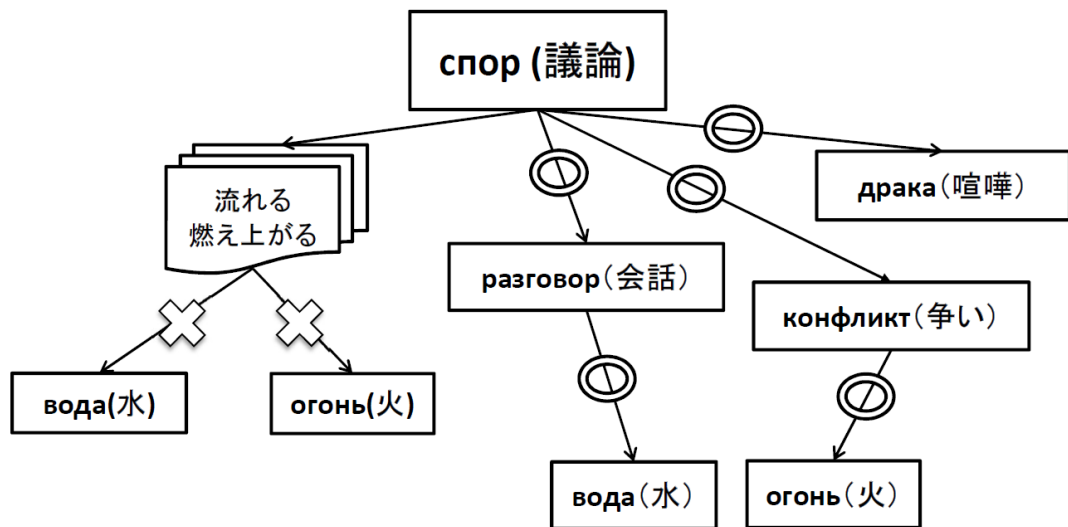
<разговорのメタファー的構造の概略図>



図形の重なる部分はそれぞれの概念の連語が重なる部分である。разговор の7割くらいの連語は спорにも使えるということで спор と重なる部分が多い。спор に разговор、конфликт、драка の遺伝子が組み込まれていることは助詞などのレベルでも明らかである。例えば、「何かについて議論する」という表現をロシア語に訳せば、спор ИЗ-ЗА чего-то、спор О чем-то という二つの言い方ができるが、ИЗ-ЗА という助詞は конфликт, драка の特有のもので、О は разговор の特有な使い方である。つまり、動作の「対象」を表す方法（助詞）は、起点領域の概念には一つしかなかったものだが、その「子供」（概念領域）にはそれぞれが受け継がれて、二つ備わっているということになる。図形のはみ出している部分は上で説明した「部分的写像」によるものである。つまり、起点領域として挙げられる三つの概念とも спор に使えない共起表現がある。上で触れたように起点領域の正確な選択は部分的写像の問題を解決はできないが、写像されていない部分を確実に小さくできる。

### 3-1-3 概念の構造における中心的な起点領域と周辺的な起点領域

概念メタファー理論のもう一つの弱点として、概念構造の階層性に対する意識のないことが挙げられる。すでに述べたように、概念の領域には複雑な概念が入っている場合があり、その起点領域の概念をさらに細かく分解できる。Lakoff は基本的に抽象概念の連語の中に「燃える」や「流れる」という使い方があれば、“XX IS FIRE”、“XX IS LIQUID”などのような言い回しができると結論しているが、管見によれば、そのような解釈が多くの場合に実際の認知モデルとは異なっている。例えば、上記で挙げたロシア語の спор (議論) には течь (流れる)、вспыхивать (燃え上がる) というようなメタファー的言い方があるが、спор が直接に огонь や вода に例えられていないと思われる。「燃え上がる」という言い方は спор の起点領域の候補として挙げた драка (喧嘩)、конфликт (衝突) にも見られ、течь (流れる) という言い方は разговор にも特徴的な言い方である。разговор という概念自体を分析すれば、その起点領域にたしかに「水」(あるいは「川」) という概念が入っているので、その特徴(性質)が разговор を通して спор に伝わっていると判断することができる。「燃え上がる」に関しても同様であり、「火」→「衝突」→「議論」という流れで「遺伝子」のように「親」から「子」へ、そして「孫」へと伝わっている、

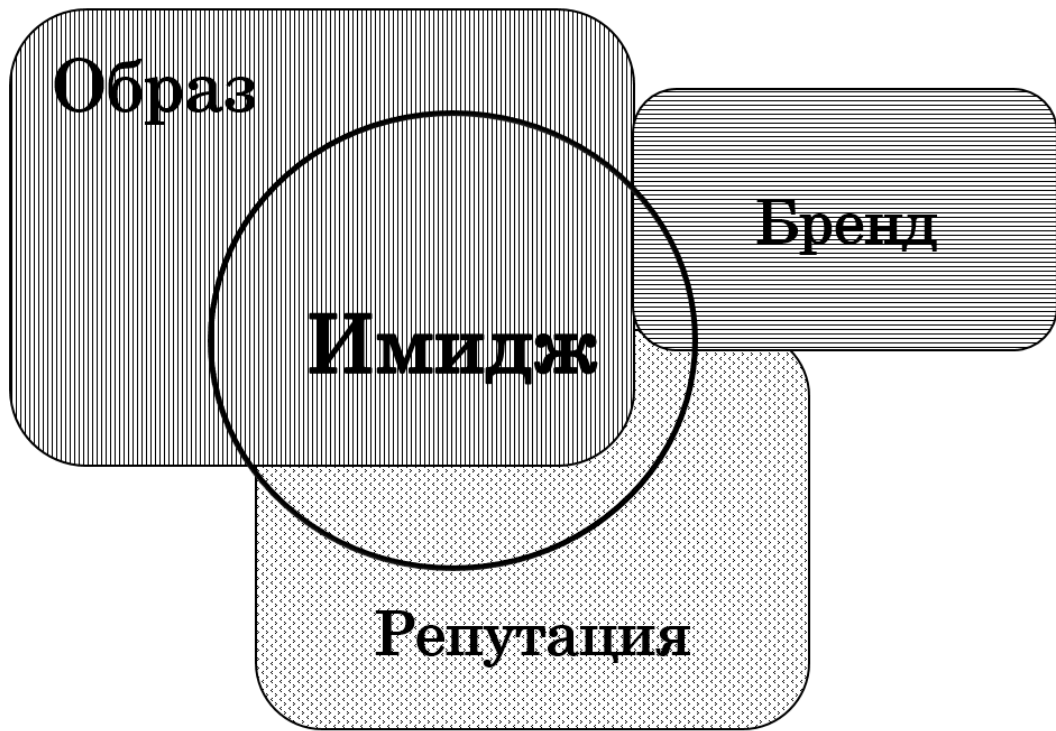


Lakoff のアプローチではこのような構造が使われていないため、概念によってはソースドメインとして挙げられる概念の数が多くなってしまいが、このように各要素間の主従関係が見える概念の木構造を正しく再現することで、概念に対する起点領域の数を減らすことができ、上で触れた認知的経済性の原理を守ることができる。さらに Lakoff が起点領域

として挙げている概念は数が多いだけでなく、その概念同士がかなり異なった特徴をもち、お互いに対立しているという印象もある。Murphy (1996) が指摘しているように、「恋愛」に関していくつもの概念メタファーが存在する (LOVE IS A JOURNEY, LOVE IS A PATIENT, LOVE IS WAR, LOVE IS MAGIC など) という事実は、明らかに矛盾である。これに対して谷口はこのように LAKOFF の捉え方を解釈している。

実際に、Lakoff and Johnson (1980) は、これら一連の恋愛に関する概念メタファーが、「恋愛」の概念が持つさまざまな側面を捉えたものであると考えている。つまり、「恋愛」という抽象的概念が特定の具体的概念に依存した表示を受けるのではなく、さまざまなメタファーによって理解される多面的構造を持つと想定しており、この点においても、Lakoff and Johnson が強い解釈のメタファー表示を意図していないことがわかるはずである。(谷口、2006、102)

概念がいくつかの起点領域から情報を写像されて多面的構造になっているのは問題ないが、異なった性質を持ったたくさんの概念が同じように概念の構造を形成しているとは思えない。例えば、本論で示すようにロシア語の **имидж** (イメージ) の起点領域には **репутация** (評判) と **образ** (像) というのがあって、**имидж** のほとんどの連語がその二つから伝達されている。ただし、最近では **имидж** がこれまで見られなかった **продвигать** (プロモーションを行う)、**раскручивать** (販売促進する、宣伝する) というような単語とともに使われるようになった。「販売促進する、宣伝する」という意味の連語が **образ** と **репутация** には今でも見られないため、おそらく **имидж** という概念に新しい起点領域が現れたと推定できる。この **продвигать** と **раскручивать** はセールスやマーケティングでよく **бренд** (ブランド) という単語に対して使われるため、おそらく **имидж** は **бренд** に例えられるようになったのだろう。ただし、**репутация** (評判) と **образ** (像) から受け継がれた連語の数と使用頻度に比べれば、**имидж** の起点領域としての **бренд** の存在はまだ弱いのだと言える。**раскручивать имидж** あるいは **продвигать имидж** という表現はまだまだ定着度が低く、ロシア語ネイティブスピーカーなら、違和感を覚える人が多いだろう。従って、概念メタファーに影響力の強いものと影響力の弱いものがあるとするなら、概念の構造においてより中心的なものより周辺的なものがあるということになる。**имидж** の概念の構造は図で以下のように示すことができる。



プロトタイプ理論の用語を借りれば、円の真ん中は **имидж** という概念の“focal point”（中心点）であって、中心から離れば離れるほど典型的な意味から遠ざかり、ネイティブスピーカーの違和感が増すのである。「中心的」起点領域と「周辺の」な起点領域の導入によって、概念の構造がよりわかりやすくなる。もちろん「中心的」と「周辺の」の間にはっきりした境界がないため、区分しにくい場合が多いが、上で挙げた **бренд** ならその周辺性ははっきりと表れている。なお、概念のより中心的な起点領域を特定することは困難な場合もあり、それぞれの起点領域から受け継がれた連語の数やその使用頻度を考慮する必要がある。本論のほうで詳しく触れるが、**имидж** の場合は **образ**（像）がより中心に近いといえる。**имидж** は 1980 年代に英語からロシア語に入り、当時のメタファー的用法を分析すると **имидж** は **образ**（像）と同じように使われていた。その後ある程度普及すると、1990 年代からは **репутация** が写像された連語が少しずつ見られるようになり、90 年代の後半から **репутация** が **имидж** の起点領域として定着したという研究結果がでている。このように、**образ** やその他の起点領域から **имидж** に受け継がれた連語の使用頻度と数を通時的に分析すると、**имидж** という概念の中心に近いのは **образ** のほうであるといえる。谷口（2006、101）は概念メタファー理論の強い解釈と弱い解釈を論じる際に、上で説明した起点領域の中心性という発想に近い主張をしている。目標領域の概念が起点領域に「依存」する程度は、

概念メタファーによって異なる、たとえば、”A CATEGORY IS A CONTAINER”と”LOVE IS A JOURNEY”を比較してみよう。前者の場合、「カテゴリー」の概念と「容器」の概念は別のものであるが、Lakoff (1987, 1993) が指摘しているように、「カテゴリー」に関わる推論そのものが容器のメタファーによるものであり (⇒例 (14))、「カテゴリー」と「容器」の二つの概念は、分ち難く思われる。こうした場合にはメタファー表示の適用を受けるとも考えられるが、”LOVE IS A JOURNEY”のような概念メタファーでは、「恋愛」と「旅」がそれぞれ自立的な概念であり、一方が他方に依存している概念ではない、このように、起点領域・目標領域の自立性に関して、概念メタファーのすべてを一様に扱うことはできないのである。

つまり”LOVE IS A JOURNEY”のような起点領域が周延的であるため、「LOVE」という概念が”JOURNEY”という起点領域がなくても十分成り立つ。谷口の用語を使えば、「恋愛」と「旅」はそれぞれ自立的な概念なのである。

### 3-1-4 概念の範囲

次に概念の説明を曖昧にする Lakoff らのアプローチのもう一つの弱点についてふれてみよう。上ですでに提示したように、Lakoff は概念メタファー理論において扱っている単位が言葉なのか言語化されていない一般的な概念なのかをはっきりさせていない。そのような恣意的な解釈は起点領域に関してだけでなく、調査対象となっている概念領域にまで広がっている。たとえば、Lakoff の”LOVE IS A PATIENT” (恋愛は病気である) という概念メタファーを裏付けるための例文 (谷口、2006) を参考にしよう。

LOVE IS A PATIENT (恋愛は病気である)

They have a strong, healthy marriage (彼らは強く健康的な結婚生活を送っている)

The marriage is dead, it can't be revived. (その結婚は死んでいる。もう蘇らない。)

Their marriage is on the mend. (彼らの結婚は快方に向かいつつある。)

英語の argument の概念の理解には WAR という起点領域が影響を及ぼし、その構造が英語話者の議論の仕方にまで影響するという極めて言語相対理論に近い主張した Lakoff はここでなぜか言葉をとっても恣意的に扱う。根拠なく”LOVE”と”MARRIAGE”の概念を一緒にして、”MARRIAGE”という概念の特徴を”LOVE”に無理やり当てはめている。本論で詳しく説明するが、辞書で類義語とされている単語 (例えば、ロシア語の *сочувствие*、*жалость*、*сострадание*) には多少異なる用法 (共起する連語) が見られる。”MARRIAGE”と”LOVE”



の場合はそもそも類義語とは言えず概念を一つにすることができない。例えば、最初の例文に marriage の代わりに love を入れれば、”They have a strong healthy marriage.” → ”They have a strong healthy love.”となり、その違いが明らかになる。marriage なら strong and healthy という言い方は自然に聞こえるが、strong and healthy love は違和感がある。上記のような Lakoff の恣意的な概念の捉え方は、他の例でも多数みられる。例えば、「議論 (argument) は戦争 (war) である」という有名な概念メタファーを裏付ける例をみてみよう。argument という言葉とは直接関係のない表現があるところは太字となっている。

<議論は戦争である>

**Your claims are indefensible.**

<君の主張は守りようがない (=弁護の余地がない)。>

He attacked every weak point in my argument.

<彼は私の論議の弱点をことごとく攻撃した。>

**His criticisms were right on target.**

<彼の批判は正しく的を射ていた。>

I demolished his argument.

<私は彼の議論を粉碎した。>

I've never won an argument with him.

<私は彼との議論に一度も勝ったことがない。>

**You disagree? Okay, shoot!**

<異論があるだと。よし、撃って (=言って) しろよ! >

**If you use that strategy, he will wipe you out.**

<そんな戦法じゃ、彼にやられてしまうぞ。>

“claim”と“criticism”は自立した概念であり、Lakoff が紹介している例文はおそらく「人が議論している場面」を想像しているようだが、このような用法が“argument”の特徴なのか、それとも“criticism”という概念の特徴なのかははっきりしない。

概念メタファー理論は、一部の連語の用法を説明できないということで批判を受けている。例えば英語では濃い紅茶を指して“strong tea”とはいえるが、“powerful tea”とはいえない。逆に“car”や“computer”の場合は“powerful computer”とはいえるが、“strong computer”とはいえない。こうした現象は概念メタファー理論では説明できないとされている。おそらくこのような勘違いは「抽象性の高い複雑な概念だけがメタファー的に使われ、身の周りのものはメタファー的に理解する必要がない」という発想から来ていると思われる。だが、連語

の分析をすれば、一見単純な概念でもメタファー的に理解されていると分かる。

“strong tea”の起点領域を探す前にまず、ロシア語の огонь (火) という概念を考えてみよう。Lakoffは、“ANGER IS FIRE”などのように、概念メタファーの起点領域として fire という概念をよく使う。確かに火というのは人の生活に身近な存在であり、それを見たり、温度を感じたり、音を聞いたりすることは、身体的な経験の一つであるから、抽象性の高い概念は、その連語から伺えるように、「火」に例えられて使われる場合が多い。だが、このようなシンプルな単語でもさらに分解することができる場合がある。メタファー的なソースドメインは特に抽象的で複雑な概念の説明に有効だが、五感で実感できる比較的簡単な言葉でもメタファー的な構造を持っている。ロシア語の огонь (火) の連語を見てみよう (スロヴェイ、2016、233-234)。ここでは「ライト」、「射撃」という同音異義語の用法をデータから外した。(注5)、(注6)、(注7)

<Огонь (火) が (動詞) >

согревать (暖める (完了))、греть (暖める (不完了))、гореть (燃える)、гаснуть (消える)、распространяться (広がる)、разгораться (燃え上がる)、полюхаться (揺らめく)、освещать (照らす)、озарять (輝かす)、сиять (光る)、мерцать (煌く)、пламенеть (炎を上げて燃える)、теплиться (かすかに燃える)、издавать свет (光を出す)、жечься (やけどさせる)、излучать свет (光を出す)、светить (光る)、печь (やけどさせる)、просочиться (浸透する)、трещать (パチパチ音を立てる)、пожирать (食ら食う)、убивать (殺す)、метнуться (サッと動く)、лизнуть (何かを舐める)、заснуть (寝る)、пробудиться (起きる)、утихнуть (静かになる、落ち着く)、охватить (何かを抱き締める)、есть (食べる)、присмиреть (大人しくなる、退く)、накинуться на кого-то (誰かに襲いかける)、шипеть (シュッと音を立てる)、разъяриться (激怒する)、бояться (воды) (怖がる)、рыскать (駆けずり回る)、перепрыгивать (飛び越える)、доходить до... (...まで行く)、перекинуться на (次のものを攻撃する)、проглотить (呑み込む)、бесноваться (暴れる)、плясать (踊る)、юлить (せかせか動き回る)、терзать (引き裂く)、реветь (吠える)、проникать (入り込む)、бушевать (荒れ狂う)、взвиться (上に飛ぶ、はためく)、ползти (這う)、пыхнуть (в лицо) (息を出す (顔に))、тухнуть (от тихий) (落ち着く、消える)、вспыхнуть (от пыхтеть, дышать) (息を吸う、燃え上がる)、полюхаться (от полах, переполах, и т.д.) (燃えさかる、あかあかと燃える、あわてる)、биться в печке (биться в клетке) (慌てて籠などを出ようとする)、

## обглодать что-то (ガリガリかじる)

### <Огонь (火) を (動詞) >

гасить (消す)、зажечь (つける)、увеличить (増やす)、хранить (守る)、тушить (стар. успокаивать) (現在は「消火する」という意味しかないが、語源は「静か」、つまり動詞の場合は「静かにさせる」、「落ち着かせる」)、запалить (燃やす、点火する)、поддерживать (保つ)、предать огню (直訳「火に渡す」、意味「火にかける」、「火で燃やす」)、бороться с огнем (直訳「火と戦う」)、учуять (感じる＝けだもの、動物、危険性を伴う場合に用いる)、добыть (直訳「獲物を狩る」、意味「火をたく」、「火をおこす」)、приручить (直訳「飼い慣らす」、意味は「火を使えるようにする」)、подчинить (直訳「～を征服する、圧倒させる、意味「火をコントロールする」)、развести (直訳「(家畜)を飼う、繁殖する」、意味「たき火をする」)、кормить (直訳「餌をあげる、何かを食べさせる」、意味「火に薪や他の燃料をくべる」)、утихомирить (直訳「静かにさせる、子どもなどをなだめる」、意味「火を落とす、火を小さくする」)

### <Огонь (火) + 形容詞>

горячий (熱い)、жаркий (暑い)、маленький (小さい)、большой (大きい)、ясный (明るい)、ненасытный (直訳「強欲な、[食欲で] 飽くことを知らない」)、голодный (空腹な、飢えた)、кровожадный (語源：「血に飢えた」、意味「激しい」)、хищный (肉食の)、разъярившийся, разъярённый (怒り狂った)、сильный (強い)、беспощадный (容赦しない、冷酷な)、живой (直訳「生きている」、意味「(覆いのない暖炉の) 火」)、свирепый (激怒した、怒り狂った)、веселый (いきいきとした、元気な)、слабый (弱い)

次にメタファー的な連語(太字になっている)を選別する。上で太字にした連語は、詩のみに用いるようないわゆる詩的(修辭的)な表現ではなく、ロシア語話者がほとんど意識せずに日常会話で話し、あるいは新聞やテレビなどでよく使われるものである。つまり、上で並べた連語は詩的なメタファーではなく、概念メタファーである。そのメタファーを分析すれば **огонь** の起点領域が表面に出てくる。上で見てきたように、言葉によっては二つ以上のソースドメインが存在するが、**огонь** の場合は一つで、そのソースは **зверь** (日本語：獣、動物) であると簡単にわかる。太字となっているメタファー的な単語は **зверь** とい

う単語にも付けることができ、**зверь** の連語でもある。それ以外のもの（太字となっていない連語）は概念メタファーではなく、直接火の物理的な特徴を説明している（熱さ／暑さ、明るさ、色など）。ただし、現在のロシア語話者から見ると、メタファー的ではない連語の中にも、元々はメタファーとして生まれたものがある。上記の「火」の例を見れば、**тушить**（火を消す）、**жаркий**、**жар**（熱い、暑さ）といった連語があるが、その語源を語源辞書で調べれば、**тушить**（火を消す）は **тихий**（静か、落ち着かせる）という単語に由来し、**жаркий**、**жар**（熱い、暑さ）は **ярый**（激しい、怒り）という単語に由来する。つまり、このような語源は上記のソースドメイン（「獣」）の説を裏付けるものである（スロヴェイ、2016、234）。

上記のことを踏まえて、“strong tea”と“?powerful tea”の問題に戻ろう。strong のという形容詞の連語を調べると、strong taste または strong smell/flavor といった使い方が目立っている。それらは tea と同様 strong taste や strong smell/flavor とはいえるが、powerful taste、powerful smell/flavor とはいえない。ここでは英語の tea の意味を詳しく分析しないが、おそらく tea のそのような特徴は、taste や smell から写像されているだろう。ロシア人とウクライナ人は英語圏の人と同じように「紅茶」の概念を構築しているようである。ロシア語とウクライナ語にも似たような言い方と連語の使い分けが見られる。

<ロシア語>

**Крепкий чай** – ?**мощный чай**

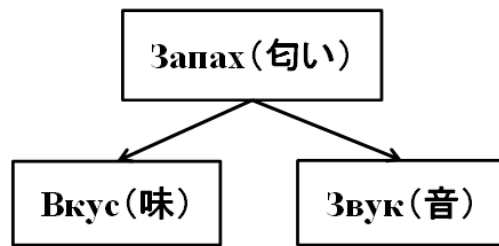
?**Крепкий компьютер** – **мощный компьютер**

<ウクライナ語>

**Міцний чай** – ?**потужний чай**

?**Міцний комп'ютер** – **потужний комп'ютер**

ロシア語もウクライナ語も **чай**（紅茶）のこのような特徴はおそらく「味」（**вкус/смак**）「匂い」（**запах/запах**）から写像されているようである。ちなみにロシア語の「匂い」にも部分的にメタファー的な用法が見られている。その連語を分析すれば、ロシア人にとって「匂い」とは、「味」と「音」の組み合わせとして理解されていることが分かる（スロヴェイ、2016、235）。（**сладкий**、**горький**、**вкусный**、**учуять**、**слышать**、**прилетел**、**стоит** など）



### 3-1-5 連語における文法的な結びつきとイメージスキーマの役割

次は文法的な結びつきと前置詞の役割について考えよう。概念の起点領域を探すときは、連語の語彙だけでなく、連語に入っている要素の結びつきも重要な情報である。ロシア語 спор (議論) の意味は起点領域である разговор (会話、話)、конфликт (衝突)、драка (喧嘩) から写像を受けているとすでに上で説明したが、それらは意味だけではなく、文法的な結びつきの特徴まで спор に写像している。

?драка **О** чем-то

драка **ИЗ-ЗА** чего-то

разговор **О** чем-то

?разговор **ИЗ-ЗА** чего-то

драка **ИЗ-ЗА** чего-то + разговор **О** чем-то = «спор **ИЗ-ЗА** чего-то», «спор **О** чем-то»

もう一つの例文を考えてみよう。ロシア語の жалость (哀、哀れ) と сочувствие (同情、同情心) という概念はロシア語で類義語とされているが、それぞれの連語内の文法的な結びつきを比較すれば、興味深い特徴が現れる。「誰かに対して同情、または哀れみを感じる」という意味では сочувствие が к という前置詞+与格 (名詞) (Он проявил сочувствие к протестующим)、または、前置詞の к なしで、直接に与格 (名詞) кому-то (выразить сочувствие изгнанникам) という二種類の結びつきが可能だが、жалость は к 前置詞+与格 (名詞) というパターンでしか使えない。このような小さな特徴を突き詰めれば、興味深いことが見えてくる。本論の方でまた詳しくこの二つの類義語について論じるが、結論からいうと、сочувствие という概念には жалость にはない要素が入っていることが分かる。それぞれの連語を調べ、共通していない使い方を洗い出すと、その中に сочувствие に使えて、жалость に使えない以下のようなものがある。(注5)、(注6)、(注7)

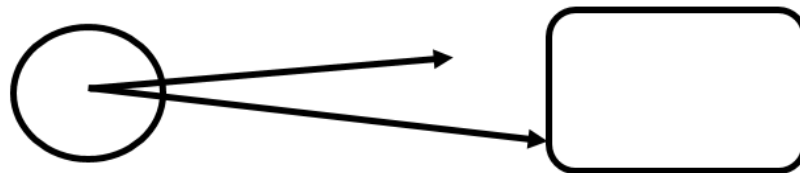
встречать в ком-то, надеяться на ..., проявить, иметь чье-то..., завоевать себе, возбуждать, найти (в ком-то), искать (у кого-то), рассчитывать на, уповать на, утратить ... к, отбросить,

примите наше ..., отвергнуть любое/всякое, претендовать на, получать, опираться на ...,  
гарантированное, благородное, встречное, дружественное, деланное, пассивное, полное,  
всеобщее, настоящее, взаимное, безусловное, всяческое

このリストに入っている単語はロシア語の **помощь** (助け、手伝い) と共起するということが分かる。つまり、**сочувствие** には **жалость** がない、**помощь** という概念が起点領域として写像されているということになる。さらにこの **помощь** は動作の対象の名詞と結びつく際に、「**помощь** + 与格 (名詞)」というふうに、前置詞なしで使われる。つまり、起点領域として **помощь** が **сочувствие** に自分の文法的な結びつき特徴まで写像したといえる。**помощь** (助け、手伝い) も抽象的な概念であり、その連語を調べればその起点領域が特定できるが、**помощь** (助け、手伝い) が前置詞 **к** と結びつかない理由はおそらく起点領域の影響だけでは説明できないだろう。それを調べるためには前章で触れたイメージスキーマが有効であろう。ロシア語の前置詞の **к** は動作の方向性、あるいは表面的な軽い接触をさし、一方「**名詞+与格 (名詞)**」は多くの場合に直接的な接触あるいは関わり合いを前提としている。例えば、「**名詞+к+ 名詞 (与格)**」のパターンを使う単語としては **прикасание** (軽い接触)、**интерес** (興味)、**чувства** (気持ち)」というのが挙げられる。どれも対象に向けられたもので、直接的に対象に何かの動作・反応を求めるものではない。一方、「**名詞+ 名詞 (与格)**」の場合は **удар** (パンチ)、**подарок** (贈り物)、**ответ** (返事)、**обещание** (約束)」といった相手の反応を前提にする動作を表す言葉が多い。その二つの境界はもちろんはっきりしていないが、イメージスキーマは以下のような図に表すことができる。

<イメージスキーマ>

名詞 + **к** + 名詞 (与格)



<イメージスキーマ>

名詞 + 名詞 (与格)

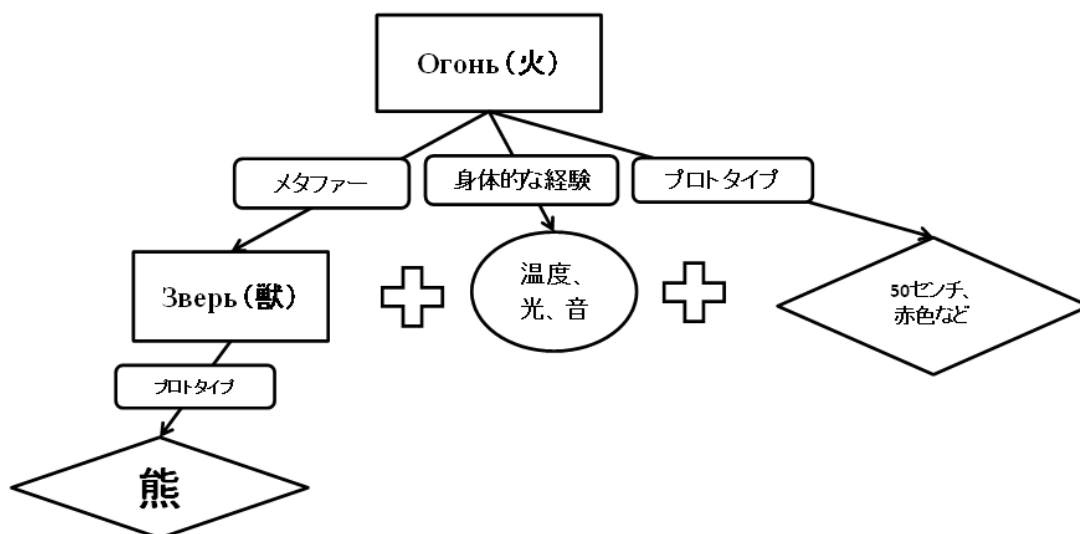


помощь (手伝い) も同様に相手に直接に影響を与える動作なので、前置詞の後者のイメージスキーマが写像されているのだろう。

### 3-1-6 認知モデルと新アプローチのまとめ

最後に上記のことを踏まえた上で概念における意味の構造とその構成要素のタイプについてもう一度考え、以下にまとめる。

1. 複雑な概念は別の概念を通して理解されている。「火」、「匂い」という比較的抽象度の低い言葉でも部分的には概念メタファーを通して理解されている場合がある。
2. 「火」や「水」のような五感で感じられるものは、おそらくその物理的な側面に関する経験（温度、形、サイズ、音）も脳内において概念の意味の一部となっている。
3. 一部の語彙（помощь など）は言語化されていない抽象的なイメージスキーマが意味の構成に関わっているといえる。
4. さらに、前章で触れたプロトタイプ理論が近年認知意味論において力を失ったのは確かだとしても、Wierzbicka の NSM 法の色の説明（blood や fire が英語圏の人にとっては red のプロトタイプである）などに見るようにプロトタイプを思わせるような現象が存在し、ごく一部ながら概念における意味の構成に関わっているといえる。それぞれの概念のプロトタイプを解明するには心理学実験などが必要で、本稿では深入りしないが、上で意味構造の分析を行ったロシア語の огонь 対してロシア人はだいたい同じような 50 センチ程度のたき火を想像しているということが分かった。なお、その起点領域である зверь (獣) のプロトタイプ（連想している動物）としてはしばしば медведь (熊) が出されている。ウクライナ語の звір (獣) に関してはウクライナ人が вовк (狼) をよく連想しているという結果が出ている。上記のことを踏まえると、ロシア語の огонь の構造（認知モデル）が以下のような図で表される。

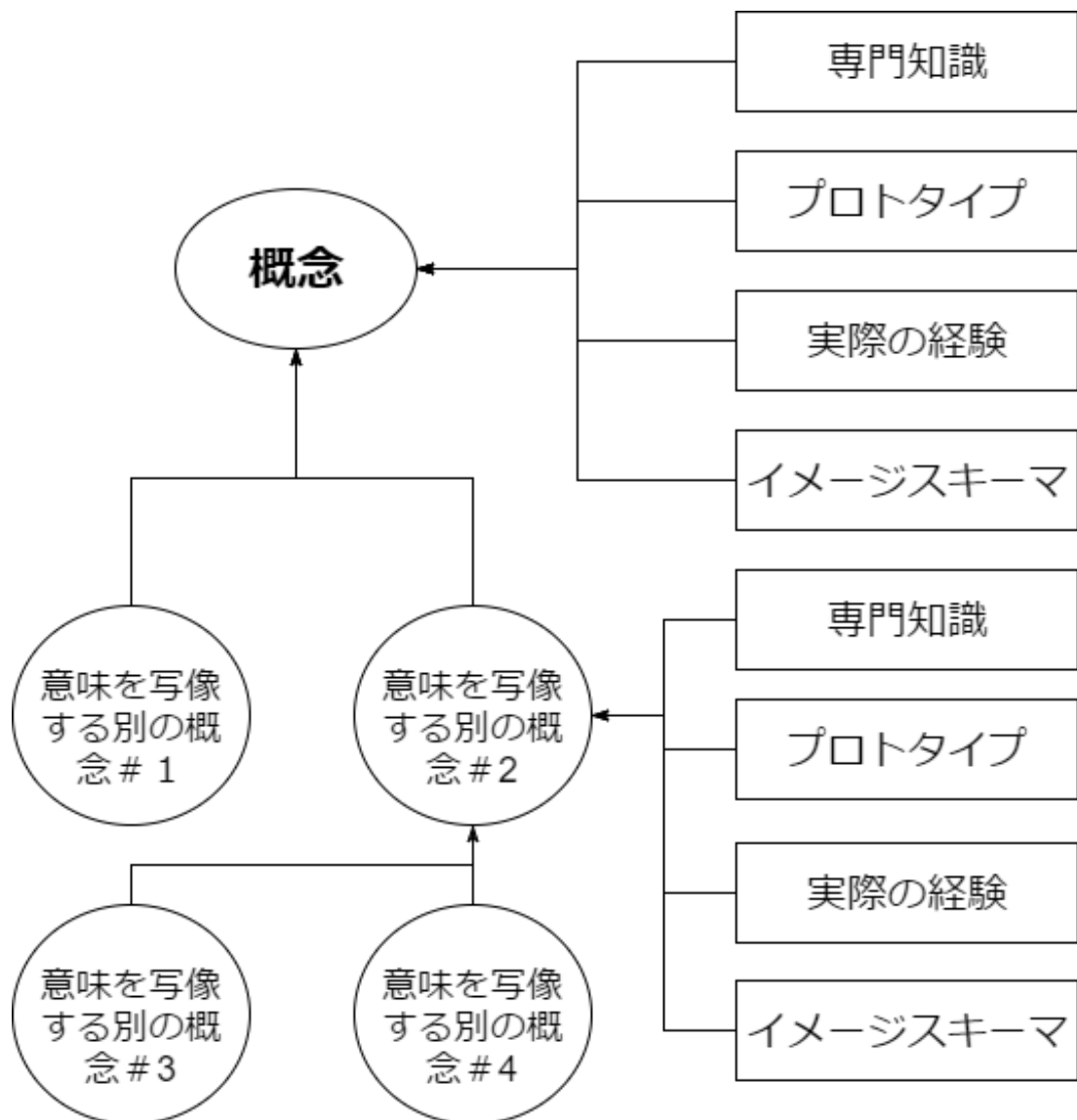


5. もちろん上で挙げた概念の構成要素だけでは概念の意味を完全には説明できない。「電気」、「分子」、「ロココ式」、「ダダイスム」のような用語には、辞書的・専門的な知識や数式などが必要となってくる。ただし、専門的な用語ですら専門知識に加えて、メタファー的に認知される場合はある。特によく使われる専門用語が時間とともにメタファー的に理解されがちである。例えば、「電気」は「走る」、「たまる」、「流れる」などといえる。もちろんこのようなメタファー的用法が「電気」に関する専門家の正しい理解に影響を及ぼしているとは言えないが、電気について学んでいる生徒などは多少そのメタファーによって影響を受けていると Lakoff (1987, 305) は主張している (筆者による翻訳)。

務めをきちんと果たしている多くの科学者は日々の仕事の中で、一つの概念化から別の概念化へと移る能力に依存している。事実、科学者になろうとすると科学的概念を別の方法で概念化する術を学ばなければならない。電気を例に上げてみよう。回路図に関わる問題を解くためには、電気に対するどのような直感的理解が必要となるのだろうか。Gentner and Gentner (1982) が述べているように、電気のメタファー的理解では2つのものが広く知られている。すなわち、流体としての理解と個々の電子から成る群衆としての理解である。両方の概念化が必要であり、電気を流体としてだけ理解している者は特定の問題——すなわち群衆のメタファーのほうがより機能するような問題——において一定の誤りを起こしやすい。ある程度複雑なレベルで電気を理解するためには、メタファーが必要だ——それも2つ以上なければいけない。電気回路上の問題を解決する術を知っているとき、どの状況下でどちらのメタファーを使うべきかを同時に知っていることにもなる。



上記のことを踏まえると、概念の構成には、概念メタファー、イメージスキーマ、プロトタイプ、身体的な経験、専門知識などが関わっているが、その度合いが概念によってかなり違うのである。言葉の意味を多面的に分析するにはそれらをすべて研究範囲に入れる必要がある。ただし、本稿の研究対象である文化的キーワードが抽象性の高い語彙であるため、メタファー的に理解されている部分が多く、メタファー的な起点領域を調べることによってその意味における重要な特徴が解明できると推定される。本稿で扱う認知モデルを以下に示す。

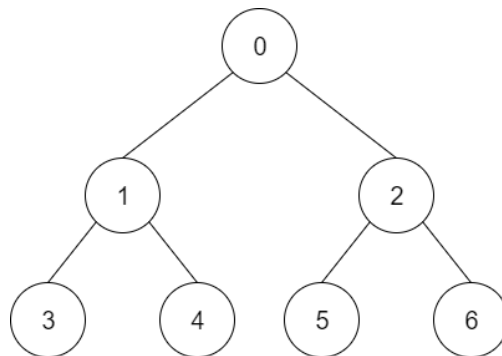


概念メタファー理論の基本的なスタンスでは、意味の写像は簡単な概念から複雑な概念へ一方的に矢印の方向に行われるとされているが、一部の研究者（Barnden、2004）は、メタファー写像における単一方向性のテーゼを再検討している。例えば、バーミンガム大学の研究者らのグループは、領域間の相関関係（inter-domain influences）の分析において、概念メタファーのなかで標的領域が源泉領域に及ぼす反対方向の影響（reverse influence）を考慮するべきだと指摘している。本稿で論じる認知モデルでは一方的な写像を基本とするが、実例を分析する際に概念の使用頻度が急増する場合には領域間の相関関係が変わる可能性も視野に入れる。

本章で述べたアプローチと本稿であつかう認知モデルの要点を以下にまとめる。

1. 概念の意味を形成する起点領域としては、一つ以上の別の概念、イメージスキーマ、プロトタイプ、身体的な経験、専門知識などがあり得るが、その有無と度合いは概念によって異なる。
2. 起点領域となる別の概念は抽象的な概念または記号ではなく、自然言語の中の他の言葉であると推定される。
3. 起点領域の概念は概念領域よりシンプルで、主従関係のあるシステムを作っている。

複雑な概念は、よりシンプルな（分かりやすい）単位によって構築され、その全体図は木グラフとして表すことができる。



4. 主従的システムのもっとも下位（シンプル）の単位は Wierzbicka の自然的・意味的メタ言語の意味原素と部分的に重なるが、認知的経済性の原理に従えば、もっと上のレベルでは意味原素ではなく、意味原素の組み合わせで構築された言葉が概念の単位となる。
5. 本稿の研究対象である文化的キーワードは、抽象性の高い語彙であり、メタファーを通して理解されている領域が大きいため、その起点領域を調べることで、その意味に関する

重要な情報を得ることができる。言葉（ターゲットドメイン）のソースドメイン（起点領域）を調べるには、概念領域の言葉との連語で使用頻度の高いものを調査し、分類する必要がある。

6. 起点領域の言葉が概念領域の言葉の意味を構築する際に、概念領域の言葉と関連している行為や思考も起点領域の影響を受ける。英語の議論には「戦争」という要素が含まれていることを証明した Lakoff によれば、英語話者の議論の仕方もそれによっておおいに影響されている。同じように、本論で示すようにロシア語の文化的キーワードとされる судьба（運命）には бог（神）という起点領域の概念が写像されているので、「運命とはどうしても打ち勝つことができない力であり、人間は受身的で、それに従うしかない」という世界観があるだろうと推定できる。文化人類学の研究の中にはこのような結論を裏付けるものが多く、文化的キーワードの起点領域を調べることで、その民族の言語的世界観に光を当てることができるだろう。

7. 上で説明した認知モデルが正しいとすれば、抽象的な意味を持つ外来語（新語）がある言語に入ってくる際に、まったく新しい意味が形成されるのではなく、既存の自然言語の言葉によって新語の意味が構築されるので、元の文化圏の世界観を表す言葉でも意味が変化し、ターゲット言語の世界観に馴化されると推定できる。例えば、日本語の「社会」という言葉は西欧（英語）における意味から多少ずれて、現地の色に染まった。「社会」という翻訳語は、日本には当時存在しなかった「西欧タイプの社会」を指す言葉として、明治時代から使われるようになったが、その概念が「世間」などの従来の日本語の概念と混ざり合った可能性があり、結果として日本語には「社会にでる」、「社会人になる」といった、英語では論理上考えられない表現が生じただろう。このようにもともとは同じ言葉から発生し、さまざまな他の言語に導入された外来語は、それぞれの言語の既存の言葉を用いて紹介され、その言語の既存の概念によって理解されるから、必然的に意味のずれが生じる。このような現象に関する研究が最近増え続けている。例えば、英語の business に由来する日本語の「ビジネス」とロシア語の бизнес は、一見同じ概念を指しているが、その使い方と意味のニュアンスが違っていると Shmuner (Шмунер, 2010) が証明した。本論では外来語の認知や類義語の差異、概念の意味変化に伴う起点領域の変更などについて、本章で提示した認知モデルを確かめる。

8. 散文や詩にしばしば用いられるいわゆる修辭的なメタファーは、概念メタファーの影響を強く受けるため、他の言語に移し替えられたときに、その言語にすでに存在している概念メタファーに基づいた世界観と合わない場合、そのメタファーの綾が分かりにくく、受け入れられにくいことが多いだろうと推定できる。例えば Корабль спорил с ветром（直訳：

船は風と議論した。意味：船は風と戦って進んでいた）というような表現は、既に述べたようにロシア語の спор「議論」の意味構造には драка（喧嘩）というソースドメインが入っているから可能なのである。創作活動自体はある程度言語とそこに表れる世界観に影響されており、その仕組みの背後には概念メタファーがあるのである。(Kövecses、2003、23)

Creative speakers (such as poets), however, often deviate from these entrenched ways. In this section, we have dealt with only one example, but there are many similar cases. They point to the same conclusion: that emotion metaphors as used by poets are based on everyday conventional metaphors. Gibbs (1994), following Lakoff and Turner (1989), puts the more general point in the following way:

**My claim is that much of our conceptualization of experience is metaphorical, which both motivates and constrains the way we think creatively. The idea that metaphor constrains creativity might seem contrary to the widely held belief the metaphor somehow liberates the mind to engage in divergent thinking.**

しかしながら、創造性の高い言語話者（詩人など）はよく、このような確立された方法を用いないことがある。この章では一つの例しか取り上げなかったが、類似した例は他にもたくさんある。それらの結論はどれも同じである。すなわち、詩人が用いる感情のメタファーは日常会話的メタファーに基づいている。Lakoff とターナーに続き、ギブス（1994）はより一般的な点を以下のように表した。

私が主張するのは、認知の概念化のほとんどはメタファー的で、そのために私たちの創造的思考力は刺激されると同時に制限もされるということだ。メタファーが創造性を制限するという考えは、広く一般的に受け入れられているような、メタファーによりいくぶん精神が解放され思考が広がるようになるという見解とは相容れないものと思われるかもしれない。

9. 文芸作品においては、言語に表れる人々の共通の世界観と各個人の世界観との差異が重要であり、著者とその言語を話す人々の世界観をともに見極めることが大事である。例えば、Bulgakov の作品“Собачье сердце”（「犬の心臓」）を研究した Marugina によれば、「人間」とその行動を「動物」に喩える概念メタファーが数多くあり、「人間は動物である」（否定的な意味で）というアイディアはこの文芸作品の重要なテーマであるが、ロシア語全体を見れば、「人間」という言葉には「動物」というソースドメインが殆ど入っていないので、このような「人間」と「動物」の理解は作者、あるいはこの作品に特有の世界観である。

## 3-2 連語の定義と抽出方法

### 3-2-1 連語の定義と条件

前章では名詞（特に抽象的名詞）の意味構成に関する仮説を提示し、その部分的な意味解明（ソースドメインの発見）に対する新アプローチとして言葉の連語を分類し、分析を行う必要があるはずだと推測した。本論で展開する新アプローチのアイディアは、著名なイギリスの言語学者の以下の言葉で表される。

You shall know a word by the company it keeps (Firth, 1957, 11)

さらに、次章ではこのアプローチを様々な言語と語彙に適用し、類義語の比較、意味の通時的変化などの現象を新しい角度から詳しく考察することによって、本論の仮説を検証するが、実例の分析に入る前にまず連語の定義と採集方法を明確にしなければならない。

「連語」という日本語の用語は、言語学研究会に所属する奥田靖雄などの学者らにより、ロシア語の *словосочетание*（語結合）の訳語として 1960 年代に日本で紹介されたものである（鈴木、1983）。奥田靖雄らは、ロシア文法学（モスクワ派）の Vinogradov の理論を紹介し、日本語で発展させた。語結合（*словосочетание*）というロシア語の用語自体は以前にも使用されていたが、Vinogradov (B. B. Виноградов、1954) は、曖昧だった定義を文とは次元のことなる単位として新しく定義し、20 世紀後半におけるロシアの語結合理論の基礎を作った人物である。（注 2）

Vinogradov らは、語結合（連語）の研究において主軸構成素に従属する構成素の形などに焦点を当てているが、それと似たような視点は結合価（Valency）という西欧言語学の理論にも見られる。（注 3）

さらに、言語学、とりわけ教育学やコーパス言語学においては、単語の組み合わせに対して「コロケーション」（Collocation）という用語も広く利用されている。John Rupert Firth というイギリスの言語学者が 20 世紀半ばにコロケーションの研究に大きく貢献し、コロケーションを“tendency to co-occur in texts”または“actual words in habitual company”として定義していた（Firth、1957、14）。ファースは独自の意味論を展開し、共起自体は単語の意味の一部であると主張している。つまり、night という英語の概念の意味には dark という言葉と共起する傾向が埋め込まれているという。逆に dark にも night と共起する素質が備わっており、この二つの単語は統合関係にある。

Meaning by collocation is an abstraction at the syntagmatic level and is not directly concerned with the conceptual or idea approach to the meaning of words. (Firth, 1957, 197)

なお、Firth は言葉の組み合わせの共起可能性については「可能」または「不可能」という極端な分類をせず、共起可能性はレベル (“more typical”、“less typical”) の問題であると主張していた。その一例としては、英語の“tall”は“man”という単語と共起しがちで、“bookcase”とはより少なく、または“hair”と全く共起しない (“zero concurrence”) というコロケーションが挙げられている (Rudzka-Ostyn, 1988)。現在の言語学において“collocation”は二つの単語の共起を指すが、Firth の理解では、単語だけでなく、頭韻や類音といった現象までコロケーションの範疇に入っている (Partington, 1998, 16)。

Firth の後継者 (Neo-Firthians、マイケル・ハリデー (Michael Halliday) など) はコロケーションの研究をさらに発展させ、組み合わせの主軸を指すノード (NODE)、ノードに関連し、ノードの前後にある単語の数を指すスパン (Span) という用語を紹介した (Sinclair, 1966, 415)。

言語資料を研究するコーパス言語学においては、共起表現またはコロケーションという、連語に似た用語も使われている。コーパス言語学では高い確率で共起する単語の組み合わせをコロケーション、共起表現、または「連語」ともいう。その定義は以下のとおりである。

collocation is the phenomenon surrounding the fact that certain words are more likely to occur in combination with other words in certain contexts. A collocate is therefore a word which occurs within the neighbourhood of another word. (Baker, 2006, 36-37)

コロケーションとは、特定の文脈において特定の語同士と一緒に使用される可能性が高いという現象である。それゆえコロケートというのは他の語と近接して起こる語のことを指す。

言語資料の作成とそれをもとにした研究はコンピューターが普及する前から行われたが、Chomsky はコーパスの研究を経験主義から合理主義のほうに転用することに大いに貢献した。

Early (pre-electronic) studies which used large bodies of text to analyse language included diary studies of child language (Preyer 1889, Stern 1924), research into language pedagogy (Fries and

Traver 1940, Bongers 1947), spelling conventions (Käding 1897) and comparative linguistics (Eaton 1940). However, in a series of influential publications, Chomsky (1957, 1965) helped to change the direction of linguistics away from empiricism and towards rationalism. (Baker, 2006, 36-37)

膨大な言語データの自動処理に基づくコーパス言語学には *collocation* の一種として *colligation* という用語も使われている。それは語彙的レベルというよりは文法的レベルで見られる共起のことである。その定義は以下のとおりである。

A form of collocation which involves relationships at the grammatical rather than the lexical level. For example, nouns tend to colligate with adjectives while verbs tend to colligate with adverbs. We can also apply colligation to phrases or words. (Baker, 2006, 36)

語彙的レベルというより文法的レベルでの関係性を含んでいるコロケーションの一種。例えば、名詞は形容詞と結びつく傾向にあり、動詞は副詞と結びつく。コリゲーションは句や語にも当てはめることができる。

前章のように概念の起点領域を特定する際には、その概念が共起させる助詞、その概念がとる格や数という文法的な特徴も重要である。従って、本稿では連語を扱う際、「コロケーション」と「コリゲーション」のように語彙と文法のレベルには分けず、概念の連語をあらゆる角度から総合的に調べる。

コーパス言語学でコロケーションに近い意味で使われているもう一つの用語として“*n-gram*”というものが挙げられる。共起頻度に基づくという点においては *n-gram* は共起表現またはコロケーションに似ているが、文字列の共起頻度を単語単位ではなく、任意の単位で集計するので、出現した共起関係は、必ずしも単語ではない。*n-gram* の採集法では単に単語の周囲を分析して、共起の可能性が高いものが抽出される。*n-gram* は調査範囲をしめしており、必要によっては“*bigram*”、“*trigram*”などもある。以下は“*bigram*”、“*trigram*”の辞書的定義である。

The two most common types of tag transition probabilities used in a probabilistic part-of speech tagger. A bigram probability is the probability of a sequence of two tags: that is, the probability that tag B will occur, given that it comes directly after tag A. A trigram probability is the probability of a sequence of three tags: that is, the probability that tag C will occur, given that it comes directly after a sequence of tag A followed by tag B. ... More generally, the different

types of transition probabilities can be referred to as N-grams.

確率的品詞タグ付けにおいて、最もよく目にする付加語の推移確率は以下の二種類だ。二重文字の確率は、二つの付加語が連続する可能性を表す。すなわち、付加語 A の直後に付加語 B が共起するとした場合の、その可能性だ。三重文字の確率は、三つの付加語が連続する可能性であり、つまり、付加語 B が付随する付加語 A の直後に付加語 C が共起するとした場合の、その可能性を示す。...一般化すると、こうした推移確率は N-gram と総称される

n-gram は基本的に共起頻度の統計データのみに基づいていて、その要素には主従関係がない場合が多いため、すべての n-gram がコロケーションであるといえないが、逆にすべてのコロケーションは n-gram であるといえる。コロケーションと n-gram (あるいは n-gram と似たような現象) を同一現象としてみる学者もいる。Halliday と Hasan は Collocation を lexical cohesion (結合) の一種であると主張し、コロケーションの構成要素が意味論的な関係にあるかどうかということは重要ではなく、同じ環境の中で共起すること自体がコロケーションの決め手となるとしている。

Collocation has also been identified by Halliday and Hasan as a form of lexical cohesion, and it has been defined as the “cohesive effect” of pairs of words such as 'bee...honey' and 'king...crown' which "depends not so much on any systematic semantic relationship as on their tendency to share the same lexical environment, to occur in COLLOCATION with one another" (Halliday & Hasan 1976:286).

コロケーションはまた、ハリデイとハーソンによって一種の語彙的まとまりであると認識されており、'bee...honey'、'king...crown'といった語の組合せにおける「凝集効果」であると定義されている。これは、「体系立てられた意味的關係にというよりも、構成要素が共通の語彙的環境を共有する、つまり互いの繋がりにおいて発生するという傾向により強く依存している。」

本稿で用いるアプローチにおいては、共起する単語は概念メタファーとして意味的につながっていることを前提とし、主従的な文法的結びつきにより名詞と1つ以上の単語(助詞でも可)が結びついた構造体を「連語」としてみなす。

コロケーションは上で触れたコーパス言語学のみならず、ここ数十年間は教育学の分析



でもよく注目されている。Pawley and Syder (1983) は母語話者と学習者の違いはコロケーションの使用に現れると指摘し、コロケーションを習得することは母語話者レベルに達するために最も重要であると指摘している。さらに、“Oxford Collocations Dictionary for students of English” (2002) の序論では、「正しいコロケーションの使用により、発話・文章がより自然で母国語話者的なものになるので、英語学習者にはその学習が重要である」と述べられている。このような主張は本稿のスタンスと極めて一致している。コロケーション（本稿では「連語」という）の用法によって概念の理解のされ方が簡単に確かめられる。つまり、概念の構造を形作る起点領域の正しい理解は、正しい連語の使い方を促すという作用がある。逆も同じように、連語を調べることによって、概念の構造に関する理解を正しいものに近づけることができるだろう。第一言語の習得に関する研究においてもコロケーションの重要性が主張されている。子供が母語を覚える時は、辞書の定義ではなく、言葉の周囲（連語）からその意味をつかんでいるからである。つまり、連語は言葉の意味への一種の鍵的存在であろう。外国語を学ぶ学習者も連語にもっと注目するべきだとする言語教育の研究が多い。言語習得に関する Bolinger の意見をまとめた以下の Gitsaki (1996) の記述が参考になろう。

The importance of collocations for the development of L2 vocabulary and communicative competence has been underscored by a number of linguists and language teachers who recommend the teaching and learning of collocations in the L2 classroom. Collocation has been considered as a separate level of vocabulary acquisition. Bolinger (1968) and (1976) argues that we learn and memorise words in chunks and that most of our "manipulative grasp of words is by way of collocations" (Bolinger 1976:8). The learning of language in segments of collocation size, especially in children, is proved by the fact that "the collocates is what the young child produces if you ask him a definition", e.g. a 'hole' is 'a hole in the ground' (Cazden 1972:129, cited in Bolinger 1976:11). Bolinger describes language learning as a continuum starting at the morpheme level with word formation rules, moving to the word level and activating phrase formation rules. The last stage before storage into memory is the level where words enter into collocations. When learning a language people may or may not store a morpheme as such, but they do store phrases. For example, the phrase 'indelible ink' will be stored as a phrase, but few people will analyse the word 'indelible' as having the morpheme 'in-' as a prefix (Bolinger 1968:106).

第二言語のボキャブラリーやコミュニケーション能力の向上を図る上でのコロケーションの重要性は、これまでに数多くの言語学者や語学教師によって強調されており、

彼らは第二言語の授業においてコロケーションを教え学ぶことを勧めている。コロケーションは別のレベルの語彙習得であると考えられてきた。ボリンジャーは、私たちは語をまとまりとして学習・記憶し、主として「語を巧みに操り把握する力はコロケーションによるものだ」(Bolinger 1976:8)と主張している。私たち、とりわけ子供が、言語をコロケーションの単位で学習しているということは、「コロケートとは、子供にある語の定義を聞いた時に返ってくる答えのことである」であるという事実、例えば、「hole っていうのは hole in the ground のことだよ」といったものによって証明されている (Cazden 1972:129, cited in Bolinger 1976:11)。ボリンジャーは言語学習を、語の形成規則を含む形態素のレベルに始まり、句の形成規則を運用する語のレベルへ進んで行く連続体として描写している。記憶に貯蔵される前の最後の段階では、語がコロケーションの中に組み込まれていく。言語を学習するとき、人は形態素をそういうものとして記憶するときもあればそうでないときもあるが、句は必ず記憶される。例えば、indelible ink という句は句というまとまりとして記憶されるが、indelible という語が in-という形態素を接頭辞として持っているとは分析する者はほとんどいないであろう。

さらに、語彙の研究においては連語だけでなく、慣用句、ことわざという表現もある。

(注4) 場合によっては連語と慣用句表現の境界を明確にすることが難しいが、慣用句表現は一定の形式を保っていて、全体で一つの意味を表すものであるとされる。慣用句を構成する単語の意味だけから、慣用句の意味を理解するのは難しいことが多い。

上で見たように、研究者によっては連語を、共起性の強さ(定着度のレベル)、連語を形作っている単語(部分)の意味から全体の意味をどれだけ推測できるか(ことわざ、慣用句など)、自立語の数(二つ以上など)などの基準で分類することも多いが、本稿にそのような分類を行う必要性はなく、意味を解明しようとしている名詞については、概念メタファー的と思われる用法を中心にすべての連語を採集しなければならない。ただし、連語の中には死喩として生まれたもの(例えば、ロシア語の тушить огонь(火を消す)という単語は тихий(静か、落ち着いた)という単語から来て、「火を静かにさせる、または火を落ち着かせる」というふうにメタファー的に使われている)、またはすぐにメタファー的な本質が見抜けないものが多いため、自然さ(定着度)を表す使用頻度に基づいて連語を採集する必要がある。

なお、コロケーションは共起関係にある主要語とそれに結合する語の習慣的な結びつきとして、名詞・動詞・形容詞および副詞から構成されているといふように捉えられているが、

言葉の起点領域を特定するには、前置詞、文法的な特性（例えば数、あるいは連語内の結びつきの類型（従属構成素の名詞与格形）などの情報が鍵となる場合もあるから、これも本稿の調査範囲に入れる必要がある。つまり、連語に対する本稿の立場は、構成に関しては主流である「二つ以上の自立語」だけではなく、以下の日本大百科全書（ニッポニカ）の定義も考慮し、前置詞+名詞などのような（概念メタファーに関する情報が含まれる場合）もの連語として扱う。

「文の一部で、語と語とが結び付いて一定の意味を表しているもの。たとえば「庭の桜がきれいに咲いた」という文において、「庭の」も連語であり、「庭の桜」「庭の桜が」も、「咲いた」「きれいに咲いた」も連語である。」

本稿では文化的キーワードの翻訳可能性を論じる際、名詞のみのキーワードを扱うため、意味の分析の準備段階において問題となっているキーワードについて、動詞、形容詞、助詞などとの組み合わせをリスト化する。通常、動詞が付く連語は概念の働き・機能（「愛情を注ぐ」）を表し、形容詞のつくものはその概念の特徴（「深い愛情」）を表している。例えば、日本語の場合はキーワード+「を+動詞」、「が+動詞」、「は+動詞」、「に+動詞」、「を+動詞+する」、「が+動詞+する」のような組み合わせはキーワードの機能性を表し、キーワード+「ナ形容詞」、「イ形容詞」、「ナ形容詞+に」、「イ形容詞+く」などはその概念の性質・特徴を表すといえる。

上記のように、新アプローチを用いて文化的キーワードのような抽象的な語彙における意味的な特徴を解明する際には、そのソースドメインの中心を成す言葉（概念）を正しく採集することが極めて重要である。単語のソースドメインを特定するにはターゲットドメイン（つまり分析対象となった単語）における共起関係の分析が鍵となるため、より客観的な結果（連語の正常性を確保する）を得るには、連語の数だけでなく、その使用頻度（自然度、概念の構造における中心度）や使用された時代などに関するデータも必要となってくる。本論では分析結果の正確さや客観性を保つため、以下の5つの基準に従って、連語に関する情報を収集する。

Moreover, there is no total agreement even among native speakers as to which collocations are acceptable and which are not. In the field of collocation, as Carter (1987: 55) remarks, “questions of acceptability are much more difficult to determine than the decision over what is grammatical or ungrammatical”. He suggests using “techniques of informant analysis in which

the intersubjective intuitions of a group of native-language speakers are statistically measured and a line drawn between what can generally be allowed and what can not” (Carter 1987: 55). However, in the light of the dependency of collocational acceptability on register and style, such a demarcation would have to be conducted with great care, making sure enough context was supplied to render informants’ decisions meaningful. (Partington, 1998, 17-18)

さらに、母語話者の間でもどのコロケーションが容認できどれが容認されないかに関して完全に一致しているということはない。コロケーションのこの面に関して、カーター (1987: 55) は、「容認性の問題に関して断定をするのは、何が文法的で何がそうでないかを決定することよりもいっそう難しい」と述べている。彼は「情報提供者分析の手法」を用い「母語話者のグループの間主観性的な直感を統計的に測り、一般的に容認されるものとそうでないものの間の線引きをする」ことを提案している (Carter 1988: 55) しかし、コロケーションの容認性が言語使用域や文体に依存していることを考慮すれば、そうした境界策定は非常に慎重に行われる必要があり、情報提供者の判断を有意義なものにするために十分な量の文脈が提示されるべきである。

なお、単語の意味について論じる際に本稿では、表現の自然さを表す使用頻度以外にも、その言語を母語として話す集団におけるもっとも一般的な解釈を求めているが、外来語が普及していったり、意味が変化していったりする際にまれに生じる例外も、概念の認知のプロセスを考える上で、そして本稿のアプローチを適用する題材として極めて有用である。本稿では文化的キーワードの意味解明と翻訳可能性に関してより客観的な結果を得るために以下の基準に従って言語データの分析 (連語の採集など) を行う。

#### 1. 多数の言語データと使用例を収集する

前章で示したように、ソースドメインの特定には、ソースドメインの候補である単語と、ターゲットドメインのそれぞれの連語を比較して、一致するものを探し出す必要がある。単純に言えば、分析対象となっている二つの単語に同様な共起表現が多ければ多いほど、それらがソースドメインとターゲットドメインの関係にある可能性が高くなる。具体的にいうと、ソースドメイン候補の検索は、ターゲットドメインの連語を検討し、候補となりそうな言葉をリスト化し、徐々に検索範囲をしぼるというプロセスを経る。当然ながら多くの表現は様々な言葉と共起するため、候補のリストを絞るにはたくさんの連語を検討することが重要である。多くの場合は一つの特異な連語が候補を絞るカギとなる。

## 2. 使用頻度を考慮する

上記の連語に関する考察で示したように、連語の境界がはっきりせず、連語と文学的な隠喩の区別が困難な場合が多い。なお、話者の言語的感覚には個人差があり、特定の表現を自然または不自然と感じるかどうかはそれぞれに異なるので、分析対象となった言葉の連語をリスト化する場合には、母語話者の感覚に頼らず、それぞれの連語の使用頻度、つまり自然さ（定着度）を把握することが極めて重要である。ターゲットドメインの連語における使用頻度に従って、中心的なソースドメインと周辺的なソースドメインが特定できる。

## 3. 同音異義語を考慮する

連語抽出の際には同音異義語を区別する必要がある。同音異義語は意味ごとに定着している連語が異なるため、データ収集の際にコンテキストなどから意味を区別しなければならない。例えば、射撃という意味で使われるロシアの **огонь** では、開始するとき **открыть**（開く）といえるが、「火」という意味の **огонь** では、そのような使いかたはできない。

## 4. 収集されたデータの作成年代を考慮する

本稿の次章で示すように、特定の言葉と組み合わせられる頻度の高い連語が通時変化をし、その言葉の意味と用法がそれによって変わることがある。例えば、ロシア語の“ум”（知恵、理知）の用法（使用頻度の高い連語）を分析すると、二百年前には「武器」と喩えられ、普段武器に使うような形容詞や名詞と一緒に使われていたが、科学の発展に伴い、「知恵」が「機械」と喩えられることになって、その用法（連語）と理解が変化したということが分かる。

さらに、本稿の本論で示すように、新語、特に外来語は、意味がある程度定着するまでに、その意味を形成するソースドメイン（source domain）も多数のものが使用され、話者によって解釈（新語の捉え方）もかなり違うということが分かる。上記の主張を踏まえると、連語の抽出にあたってはその時代に関するデータも考慮する必要がある。そうしたデータによってターゲットドメインの意味をより正確に解明できるだけでなく、意味の通時的変化（認知的な構造の変化）が追及できるようになる。

## 5. 複数のジャンルをカバーすること

より充実したデータを収集するには調査範囲を様々なジャンルに広げることが重要である。Partington (1998, 17) によれば、連語の自然さは分野によって大きく変わる場合がある。

Collocational normality is dependent on genre, register and style i.e. what is normal in one kind of text may be quite unusual in another.

ある文中では適切な表現が別の文中では不自然とされることがあるように、連語の正常性は、分野、言語使用域、文体に依存する。

上記の条件をすべて満たし一つ一つの単語の連語を採集するには、その単語の様々な用法を様々なジャンルと文章で調べたうえ、年代、ジャンル、使用頻度などの情報を記録する必要がある。ただし、そのような調査は非常に手間がかかり、調査を行う研究者の個人的な言語感覚、または外国語の場合にはその言語能力に大きく左右される。情報処理システムが利用できなかった時代にはこのような研究を行うのは困難だったが、近年は言語のコーパスから単語の共起表現が自動抽出できる自然言語処理ツールが発展し、調査のスピード、調査できる分量ともに急激に向上したため、より客観的な調査データがえられるようになった。ただし、情報処理ツールのもとにあるアルゴリズムまたは対象言語のコーパスにはまだまだ課題が残っているため、本研究では上記の条件を満たすために多数の採集方法を併用する必要がある。本論で用いる採集方法ごとの利点と欠点について以下で考察する。

### 3-2-2 連語の採集方法（辞書、言語コーパス、連語自動抽出システム）

言語データの採集方法としてまずは連語を納めた辞書（注5）を参考にするが、連語の辞書を参照する際にいくつか注意点がある。まずは、その中に納められた連語には、言語コーパスを利用して採集されたものもあれば（Kjellmer など）、手作業で採集されたものもあるということだ。例えば、「てにをは辞典」（小内, 4）は250名の作家の文庫本を中心に採集したものである。そのため辞書に載っている情報が完全ではない可能性がある。さらに、手作業で採集されたものは使用頻度などではなく、編集者の個人的な言語感覚に基づいている。そのために、個人の感覚の影響が反映している可能性もある。なお、辞書に記載されているのは連語のみで、使用頻度、ジャンル、作成年に関する記述がないため、連語の採集には適しているが、そこから得られたデータを別の方法（コーパスなど）で確認する必要がある。以上の欠点があるため本稿では連語の辞書を補助的な材料として利用することにした。

コーパス研究は20世紀の1960年代にイギリスの言語学において始められた。この分野が課題としたのは、様々な文体と多様な言語学領域のあらゆるデータが登録されたリストの

中に、可能な限りの英語の言語的データを記述することであった。この分野は現代の言語科学においてすでにその成果を証明している。これにより、全面的なコンピューターによるデータ処理を用いることで、様々なレベルの言語単位、会話、その発現、文体、リストの中での実際的な使用の研究が可能になっている。このような研究こそが、多様な形式のテキストの中において様々なリストや機能的な文体に関連する共通点と相違点を明らかにすることができるのだ。現在、コーパス言語学は、言葉の意味論における認知的分析の方法論的発展において重要な役割を果たしている。主観的、直観的印象に基礎を置いた研究と、抽象的アプローチや確実な証明の基礎が要求される現代の傾向とを結びつける使命を帯びており、認識論的研究を新しいレベルへと前進させているのである。本論では連語の抽出には主には様々な言語コーパスを活用した。(注 6) コーパスは、機械可読の文章の何百万語にもわたる巨大な集合体で、その中でしばしば文章が選定され、特定の言語種やジャンルの典型例となっているため、それが標準的なものの基準となる場合もある。ただし、コーパスにおける連語の自動検索は難しい課題であり、いくつかの統計的方法 (z-score、log-log) に基づいた手法が一般的に利用されている。

Corpus linguistics techniques have therefore allowed researchers to demonstrate the frequency and exclusivity of particular collocates, using statistical methods such as mutual information, the Z-score (Berry-Rogghe 1973), MI3 (Oakes 1998: 171-2), log-log (Kilgarriff and Tugwell 2001) or log-likelihood (Dunning 1993) scores. Each method returns a value showing strength of collocation, but their criteria for assignment differ. For example, mutual information foregrounds the frequency with which collocates occur together as opposed to their independent occurrence whereas it is more probable that log-likelihood will register strong collocation when the individual words are themselves frequent. So mutual information will give a high collocation score to relatively low-frequency word pairs like bits/bobs, whereas log-likelihood will give a higher score to higher frequency pairs such as school/teacher. (Baker, 2006, 36-37)

それゆえコーパス言語学の手法は、研究者らが相互情報量、Z 値、MI3、対数の対数、対数尤度値といった統計的方法を用いて、特定のコロケーションの頻度と排他性を実証することを可能にした。それぞれの方法はコロケーションの強さを表す値を返すが、割り当ての基準は一致していない。例えば、コロケートが独立して使われる時と対照的に互いに一緒に起こる際の頻度を中心としているのが相互情報量であるが、一方で個々の語自体の発生頻度が高い場合に対数尤度が強いコロケーションが検知されると

いうことの方がより確率が高い。そのため、相互情報量は bits/bobs といった比較的頻度が低い語の組に高いコロケーション値を与えがちであり、対数尤度は school/teacher といった高頻度の組み合わせに高い値を付ける。

統計的方法のみに基づいて連語を抽出すると、school/ teacher あるいは king/crown というような結果がたくさん出るため、本稿で定義した連語（言葉のメタファー的用法の解明を目的としたもの）とは異なり、言葉の起点領域の調査には向かない。この問題を解決するにはいくつか方法がある。まずは、いわゆる KWIC 索引検索という方法でコーパスにおける単語の例文を表示して、そこから手動で連語を採集するという方法がある。KWIC 索引検索は以下のように定義されている（Partington、1998、9）。

A concordance, or rather KWIC (KeyWord In Context) concordance, is a list of unconnected lines of text, which have been summoned by the concordance program from a computer corpus, that is a collection of texts held in a form which is accessible to the computer. At the centre of each line is the item being studied (keyword or node). The rest of each line contains the immediate co-text to the left and right of the keyword. Such a list enables the analyst to look for eventual patterns in the surrounding co-text, which proffer clues to the use of the keyword item.

コンコーダンス、厳密には KWIC 索引検索とは、コンコーダンスプログラムによってコンピューターコーパスから集められた、繋がりのないテキスト行のリストの事で、コンピューターにアクセス可能な文章の集合である。各行の中心には研究対象（キーワードや節）があり、各行の残りの部分にはキーワードに隣接する文章が左側から右側へと示される。そういった行によって調査者は、文章中における研究対象語の最終的なパターンを探し、その用法に関する手がかりを得ることができる。

この KWIC 索引検索の結果は以下のように前後の文章も含めて表示されるため、連語を形成する単語が多少離れていても、見逃してしまう可能性が低くなる。

doc#1816	countries -- have mustered strong and valid <b>arguments</b> for not ratifying. </p><p> Not only may Kyoto
doc#1834	it happened? Stoney deGeyter looks at the <b>arguments</b> for and against ranking analysis. Direct
doc#1853	northeast "Seven Sister" states. His core <b>argument</b> is that events beyond India's borders,
doc#1930	reaction to YouTube's site being down and an <b>argument</b> for why young people aren't the harbingers
doc#1986	debate in Washington. There are certainly <b>arguments</b> for and against universal health care.



Кругом неправда. Злая **судьба** . — Работать не отказываетесь? ←...→  
 вопрошателя, а подчас обвинителя. (Дальнейшая **судьба** этого незаурядного человека любопытна. Продолжал ←...→  
 встречался с человеком, с которым **судьба** так резко столкнула меня на ←...→ А. И. Деникин. Очерки русской с  
 живого человека, но, однако, печальная **судьба** вышла вразрез наших ожиданий. ← (1922)  
 холодающих углов идут старухи, чья **судьба** недолга; из уплотнённых, некогда покоев ←...→

この方法では離れている要素を検索するだけでなく、(Halliday 1966, 151) が指摘している“collocational patterns”まで特定できる。“collocational patterns”（連語的パターン）とは基本的に同じ意味を持つ連語が様々な文法的な形を取るということである。例えば、“a strong argument”は、“the strength of his argument”あるいは“he argued strongly”という形になっても、基本的に同じ連語のパターンに過ぎない。

もう一つのコーパスを使った連語の抽出方法は、言葉の文法的な結びつきに基づいた自動処理である。本稿で利用するコーパスの中には品詞タグなどの付加情報を施されたものもあって、文法的な結びつきを考慮した連語の自動検索が可能となっている。例えば、「Национальный корпус русского языка」（ロシア語のコーパス）では「動詞+жалость（生格）」という条件で検索が可能となっている。

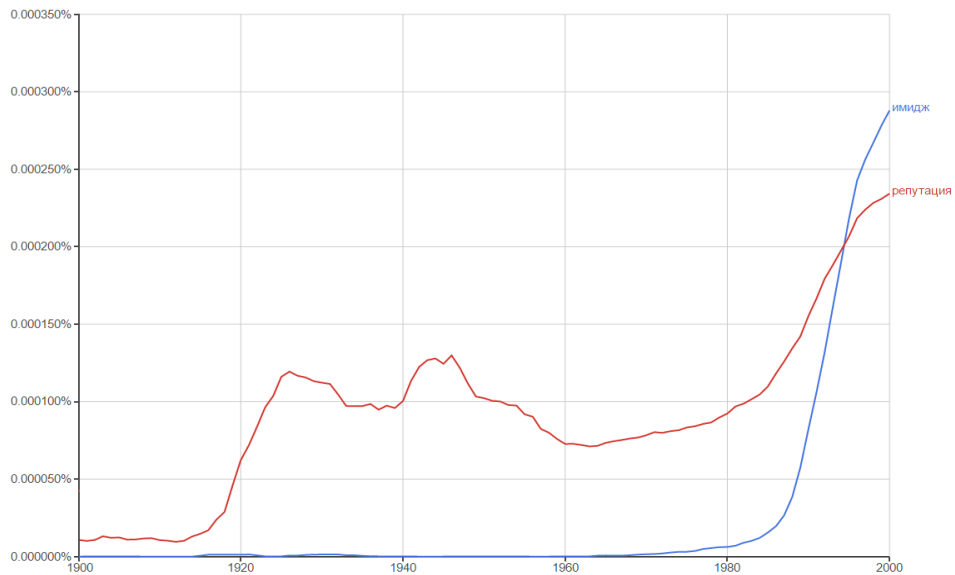
Все черты не <b>ведающей</b>	<b>жалости</b> к людям крепостной России ←...→
Впервые в жизни ему <b>захотелось</b>	<b>жалости</b> к себе, и он ←...→
ли он жаловался, то ли <b>просил</b>	<b>жалости</b> . ←...→
одна лишь математика, весёлые, не <b>ведающие</b>	<b>жалости</b> высоким мастера. ←...→
не умел и не мог <b>чувствовать</b>	<b>жалости</b> и боли. ←...→
царствовать мохнатых гусениц, жизнь не <b>знает</b>	<b>жалости</b> , когда в мечтательное общение ←...→
Но в сердце Чертопханова не <b>было</b>	<b>жалости</b> . ←...→
твёрдостью и с некоторым родом <b>презирающей</b>	<b>жалости</b> . ←...→
жарят «чемоданами» Но война не <b>знает</b>	<b>жалости</b> . И вот уже в ←...→
за живот, немножко похныкивала и <b>требовала</b>	<b>жалости</b> , но не как женщина ←...→

もう一つの連語抽出方法として言語自動処理ツールに注目すべきである。これらには文章の体系や文法を解析する機能が備わっているため、品詞タグなどの付加情報のない文章でも文法的な結びつきを考慮して効率よく検索できる。そのようなツールの中では、多数の言語コーパスを利用した連語抽出ツールである WordSketch (Sketchengine) (<https://the.sketchengine.co.uk/>) というものが現時点で一番有効であると思われる。(注7)

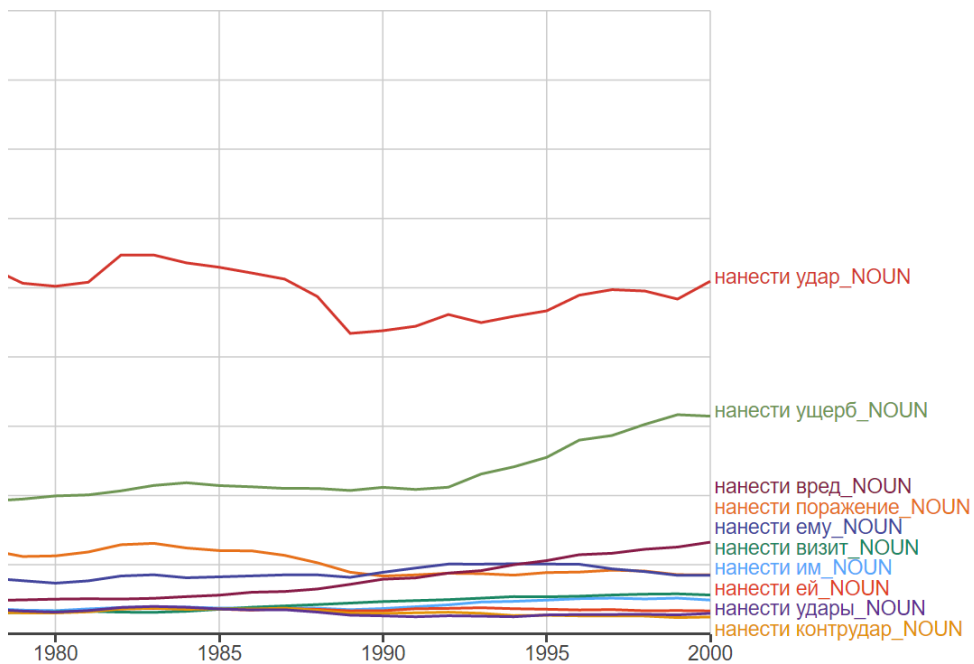
連語の抽出と使用頻度の確認に有効と思われるもう一つのツールは Google による Ngram Viewer と Google Book Search が挙げられる。Google Ngram Viewer とは、Google が電子化した数百万の書籍を検索できるツールである。一括で複数の単語を検索でき、それぞれの単語の経年変化と出現数を可視化できる。例えば、以下は 20 世紀に書かれた書籍においてロシア語の **имидж** と **репутация** という単語が出現する頻度を表したグラフである。

## Google Books Ngram Viewer

Graph these comma-separated phrases:   case-insensitive  
between  and  from the corpus  with smoothing of

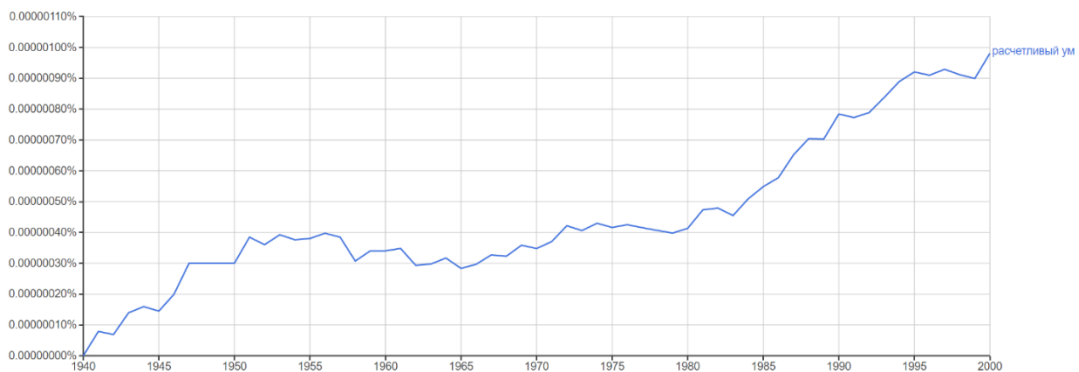


なお、ツール名からも伺えるように n-gram 検索も可能であり、ワイルドカード、活用形、大文字使用のような検索オプションが備わっている。下図にはロシア語の動詞 **нанести** とよく共起する名詞/代名詞が表示されている。



このような機能は連語の採集、とりわけ本研究においては連語の出現頻度のデータ収集に十分活用できる。さらに連語の出現頻度の通時的変化の検討によって、中心的なソースドメイン（概念メタファー）の変化と世界観の変化が見えてくる。つまり、前章で提示した仮説が正しいとすれば、特定の言葉と高頻度で組み合わせられる連語（概念メタファー）も通時変化をし、その言葉の意味と用法がそれによって変わることがあり得ることになる。例えば、Pimenova, (Пименова, 2009) は、ロシア語の ум (知恵、理知) の用法（使用頻度の高い連語）を分析すると、二百年前には「武器」と喩えられ、普段武器に使うような形容詞や名詞と一緒に使われていたが、科学の発展に伴い、「知恵」が「機械」と喩えられることになったと主張しているが、その用法（連語）と変化を思わせるデータを下図で確認することができる。

< 「расчетливый ум」 (打算的な知恵) の使用頻度 (1940年から2000年まで) >



このように google の N-gram は年代の軸にそって使用頻度が見られて、特定概念の連語と起点領域の変化が簡単に確認できる点が便利であるものの、いくつか弱点もある。

- ・データベースとなっている書籍の正確な数とジャンル構成が非公開。
- ・BookSearch のデータベースに入っている書籍は機械により光学文字認識 (OCR) されたものがほとんどで、識字率が 100%に満たないため、スペルミスや間違った単語が多少ある。なお、出版年や書籍の執筆年に関するデータも機械によって認識されたもので、正確さに欠けている。
- ・現時点では一部の言語でしか検索できない。本稿で扱う日本語とウクライナ語のデータにアクセスできない。
- ・ジャンルは学術的な書籍が多く、偏っているといえる。

## 第4章 認知モデルと新アプローチの有効性の実証と応用

### 4-1 意味の通時的変化

すでに述べたように、文化的キーワードは文化の中心的存在であり、抽象度の高い語彙であるため、それを理解したり翻訳したりするのはかなり難しいこととされている。文化的キーワードの意味解明と翻訳可能性の研究に取りかかるまえに、前章で提示した認知モデルと方法論の有効性を、まずは、はっきりした結果が得られる言語現象を対象にして実証する必要がある。認知モデルの有効性の実証法として効果的なのは、外来語の意味、外来語や他の概念の意味における通時的変化、類義語の意味の差異などを分析することであると思われる。本稿で提示したアプローチによりそのような言語的な現象を説明し、得られた結果が本稿の認知モデルと合っていることを確認してから、文化的キーワードの分析に入る。

言語接触を文化間コミュニケーションの一要素とみなす研究においては、異文化概念の借用メカニズムを解明することが重要になりつつある。異文化概念の借用は、土着の言語意識が、異なる言語文化に触れて、その最も重要な要素と同化することによって生ずる。異文化概念の借用は、文化言語学または認知言語学の関心が交わる場所に根付いた総合的な問題である。学問的探求の境界線を広げ、その探求に認知言語学的方向を加えることで、借用過程について我々が従来抱いていた概念を転換できるばかりか、大幅に深化させることも可能になる。現代文化言語学においては、借用を、一つの言語環境から別の言語環境へ名称が移動する過程としてではなく、新たな視点、つまり他の概念的 세계観の要素の借用として検討できる可能性が開かれつつある。

言語学の伝統的アプローチの基礎には、借用の理解が存在する。借用とは、ここでは言語同士が接触した結果、一つの言語から他の言語へ言語要素（語、隠喩、構文等）が移動すること、また一つの言語から他の言語へ言語要素が移動する過程そのものを指している（Ярцева, 1998）。認識的アプローチの観点においては、言語は、知識表現、知識加工の体系として研究されている。このことから、借用の過程を、「借用概念やその構造を生み出す二つの概念的空間の相互作用」と呼ぶことができる。また「外国語の名称のひとつひとつの背後に、特定の活動領域で得た知識と経験の機構が存在している。その活動領域は借用する側の文化にとってアクチュアルな領域である」（Голованов, 2011, 108）。そのため、外国語話者が表現する概念の意味的内容が借用過程で変形する際の、その変形特性が重要な問題となる。

言語間の借用プロセスについては、文化間のコミュニケーションの結果として考察する

研究者が多く、コミュニケーションの結果の如何によっては全く新しい概念が言語に入るという。だが、前章で述べたように、概念の多くはかなりメタファー的に理解されているため、新しく入った概念は恐らく、借用する側の言語における既存の言葉（概念）によって構築されるということになる。前章で提示した認知モデルの有効性を確認し実証するためには、外来語の認知と意味変化のメカニズムをその認知モデルを通して説明することが極めて重要である。数百年前から使われている語彙は複雑な変化を遂げており、その起点領域と構造を説明することが場合によっては難しいからである。なお、子供の言語習得に関する研究は多いが、いまだにその認知プロセスをあらゆる面から正確に説明できたものはない。この意味では、比較的最近入った外来語は大人によって習得されたものなので、その習得のプロセスが借用当時の様々な言語資料として残っており、意味の認知プロセスを考える上で極めて興味深い現象である。

序章ではすでに日本語の「社会」という外来語に触れて、その理解が「世間」という既存の概念から大きく影響を受けた可能性があるとして説明した。そのようなことは「社会人」、「社会人の常識」という表現から推察できるだろう。現代日本社会における社会人とは、ある組織に所属して一定の雇用上の地位を得た人のことを示す場合が多い。社会人には、始まり（就職、組織に入るなど）と終わり（退職）がある。西欧において、人は、広い意味では生まれつき社会の一員であり、或いは判断力がついてから社会の一員とされるが、終わりというものはない。日本にはなかった「西欧タイプの社会」を目指すために、「社会」という翻訳語が明治時代から使われるようになったが、その構成員を表す「個人」という概念の翻訳語がその後から出来たという倒錯の中で、「社会」の意味は当初から多少歪んでいたことだろう（スロヴェイ、2008）。現代の「社会人」という言葉の意味から読み取れるように、「社会」には、英語の *society* とは異なる使われ方があり、「世間」という世界観の影響を受けている可能性がある。「社会人でなくなる」という言い方からみえるように、日本語では「社会」と「個人」の関係はまだ薄いのである。「世間の常識」という使用頻度の高い表現に似た「社会人の常識、マナー」、「社会人のための必須〜」、「社会人として知っておきたい〜」といったタイトルの本がたくさん出版されていることから分かります、「社会人」と「世間」という概念は関係が深いといえる。外から来た概念が地元の世界観に馴化されるというケースは他の言語にもみられて、例えば Shmelev (Шмелев, 2009) はロシア語の「на всякий случай」の借用と意味変化について以下のように説明している。

Приспособление заимствованного концепта к русской языковой концептуализации мира может происходить и в тех случаях, когда средством выражения концепта служит русский

аналог иноязычного слова (в первую очередь — при семантическом калькировании). Так, выражение на всякий случай вошло в русский язык как калька французского выражения *à tout hasard*.... Однако с течением времени его значение и функции стали несколько иными по сравнению с французским прототипом. Выражение на всякий случай в русском языке выражает особое, характерное именно для русского восприятия мира мироощущение: ‘произойти может все что угодно; всего все равно не предусмотреть; могут пригодиться любые ресурсы, которыми человеку посчастливилось располагать’. В этом отношении на всякий случай сближается с пресловутым «русским» авось: человек на всякий случай запасается некоторым ресурсом — авось пригодится.

借用概念がロシア語の言語的世界観に適応して変化するという事は、外国語句の類似語句が概念の表現手段となっている場合でも起こり得ることである（第一に意味的借用の場合）。例えば、*на всякий случай*（あらゆる場合に備えて／念のため）という表現は、フランス語の *à tout hasard* の翻訳借用語として、ロシア語に入ってきた。しかし、時間の流れとともに、その意味と機能が、フランス語のプロトタイプとはいくらか異なるものとなった。*на всякий случай* という表現は、ロシア語において、まさにロシア的世界観に特有の、特別な何かを表現している。それは「どんなことでも起こりうる」「すべてを予期することなどどだい不可能だ」「うまいことものを持ってさえいれば、どんなものでも役に立つ」という世界観である。この意味で、*на всякий случай* という表現は、悪名高い「ロシア的な」*авось* に近い。つまり人は、*авось пригодится*（多分役に立つから）、あらゆる場合に備えて、いくらかのものを貯えるのである。

上で説明した「世間」や Shmelev が「*на всякий случай*」を論じた際に行った分析はどちらかといえば直観に基づいたものであり、本稿で提示した連語の分析方法に基づくアプローチを適用すれば、もっと確実に正確な結果が得られるだろう。例えば、序章で触れた「コミュニケーション」という比較的最近日本語に入った外来語を考えてみよう。1970年代の連語を調べると「コミュニケーション」はおそらく「意思疎通」という概念を通して理解されていたと思われる。ただし、「コミュニケーション」の意味が定着するまではもちろんその感覚は共通のものではなかった。

70～80年代には「コミュニケーションを通わす」といった言い方が出てくるが、これはおそらく「ここを通わす」という連語からきていると判断できる。さらに「コミュニケーションがよくマッチする」あるいは「よく合う」といった使い方も見られ、おそらく

「話」という単語から意味が写像されたのだろう。だが、もちろんこのようなゆがんだ用法はマイナーであり、ほとんどの連語からは「コミュニケーション」が「意思疎通」に例えられたということが分かる。しかし一方で、現代の「コミュニケーション」の連語を分析すると意思疎通と多少異なる使い方もされている。つまり、「コミュニケーション」は時間とともに多少意味が変化し、新しい起点領域からも影響を受けるようになっているということである。「意思疎通を作る」という言い方はやや不自然だが、その一方で「コミュニケーションを作る」といった言い方はどちらかといえば自然である。「コミュニケーションを結ぶ」、「コミュニケーションを中断する」、「打ち切る」も同様に「意思疎通」にはあまり使えない表現だが可能である。その性質はおそらく「関係」という概念から伝わってきているのだろう。「築く」、「絶つ」、「育む」という「関係」特有の表現が「コミュニケーション」にも使えるようになっているからである。このように、コミュニケーションは英語とまったく同じような意味で借用されたのではなく、既存の概念を通して理解され、少しずつ意味が変化している。“communication”と「コミュニケーション」の意味的な差異については下で説明するが、もととなった外国語と借用された外来語はおそらく多くの場合で意味が異なるだろう。ロシア語の外来語を研究している Shmelev (Шмелев, 2009) はロシア語にも似たような傾向があることに気付いている。

При заимствовании часто оказывается, что концепт, стоящий за заимствованным словом, не вполне отвечает особенностям русского восприятия мира. В этом случае бывает необходимо каким-то образом приспособить к ним заимствуемый концепт, «ассимилировать» его, «встроить» его в русскую языковую картину мира, подвергнув более или менее существенной трансформации.

借用に際しては、借用される語の背後にある概念が、ロシア的世界観の特質に完全には一致しないということがよくある。この場合には、借用概念に大なり小なりの本質的変形を加えたうえ、何らかの形で借用概念を馴化させ、“同化”させ、ロシア語的世界観の中に“はめ込む”ことが必要となってくる。

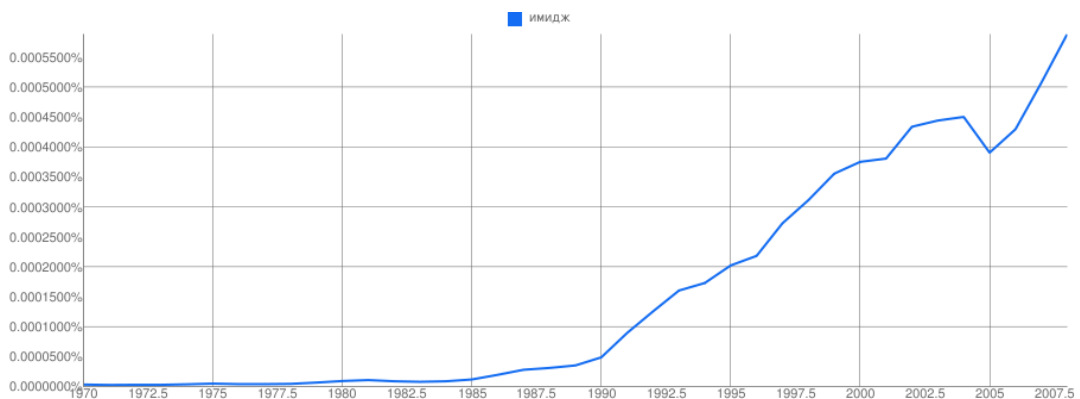
次に、имидж という比較的最近ロシア語に入った借用語の使用例を詳しく分析し、本稿のアプローチの有効性を実証する。まずは現在の定義と使用頻度を見してみる。имидж は「Большой энциклопедический словарь」で以下のように定義されている。

ИМИДЖ (англ. image, от лат. imago - образ, вид), целенаправленно формируемый образ

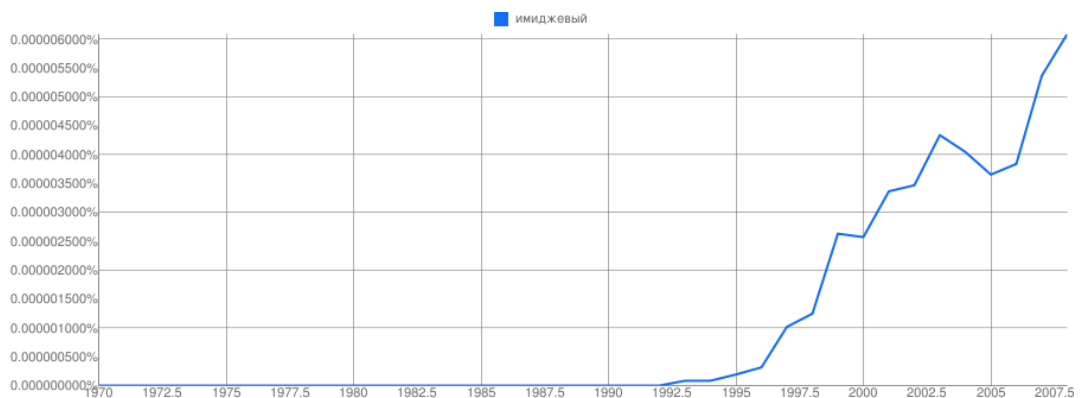
(какого-либо лица, явления, предмета), призванный оказать эмоционально-психологическое воздействие на кого-либо в целях популяризации, рекламы и т. п.

比較的最近（1980年代）にロシア語に入ってきた単語にしては **имидж** は使用頻度がかなり高いといえる。Ляшевская（2009）の「Новый частотный словарь русской лексики」によれば、**имидж** は最も使用頻度の高い6000の語彙の中に入っており、上から5770番目である。つまり100万単語あたり約13.5回出現している。この数字はコーパス全体（年代を問わず）のデータを分析したもので、年代別に調べれば、50年代から70年代までは **имидж** の使用率は0だが、80年代から徐々に増加してくる。80年代は100万語あたり1.6回、90年代は5.5回、2000年代は19.2回という時代別の使用頻度が数字で分かる。名詞の **имидж** から作られた **имиджевый** という形容詞の使用頻度は100万語あたり1回である。前章で紹介したGoogleのn-gram検索ツールでも似たような傾向が見られる。以下に（1970年～2008年）のデータを分析したグラフを示す。

「имидж」の使用頻度（1970-2007）



「имиджевый」の使用頻度（1970-2007）





このように **имидж** の使用頻度が急増し、約 30 年間でロシア語の最も使われる 6000 単語に入った。

それでは **имидж** がロシア語に入った当初の用法を参照しよう。**имидж** は英語からの借用語で、当初はアメリカの社会を説明するために用いられた。販売促進や政治家の支持率などに関する用語はソ連時代のロシア語にはほぼ皆無だったため、アメリカのコマーシャルと政治を（主に否定的な意味で）説明するために、**имидж** が使われ始めた。当時は **имидж** が以下のように定義されていた（太字は筆者）。

（注 8）«...и термин **ИМИДЖ (образ)**, ставший сейчас основой целых систем в рекламе, политике и общественной жизни. Образ не реальный, а идеальный» (230)

（注 9）В сущности, это был как теперь говорят в Америке, «**ИМИДЖ**» (выдуманный, лубочный образ). «**ИМИДЖ**» «благородного дикаря» был моден в эпоху романтизма и по сю пору сохранился кое-где на страницах книг для детей. Но со временем его вытеснил... (271)

（注 10）Это ложное представление упрочилось в США после негритянских волнений 60-х годов. Тогда же получило распространение и другое ложное убеждение. **Наиболее распространенный «ИМИДЖ»** (образ, облик) мигранта в крупный город непременно связан с...

（注 11）Необузданное желание **создать собственный пышный президентский «ИМИДЖ»** (образ) сковывалось требованиями сохранять известную преемственность государственной и партийной политики.

（注 12）В этом случае человек обожает не реальную вещь, а рожденный его фантазией образ вещи, иллюзию, мираж, то, что американцы называют словом «**ИМИДЖ**».

（注 13）С тех пор расходы на «обман и самообман» в капиталистическом мире невероятно возросли. Эффективным оружием «ловли душ» стал «**ИМИДЖ**» - полуреальный, полувывдуманный, намеренно идеализированный эмоционально окрашенный образ...

（注 14）Реклама, ставшая основным средством воздействия на сознание и поведение

аудитории, создала понятие «ИМИДЖ» - иллюзорный образ действительности.

(注 15) Поэтому бывает так, что автор первой книги преподносит читателю свой, как принято говорить на Западе, «ИМИДЖ», выдуманный образ, сложенный на основе случайных впечатлений жизни, а истинная его судьба остается за бортом. ...

(注 16) Эти журналы активно используют прием «ИМИДЖА», который «стал главным инструментом обработки сознания» человека в США. Как отмечается некоторыми советскими исследователями, «ИМИДЖ можно назвать эстетическим псевдоидеалом»

(注 17) «ИМИДЖ – это распродажа репутации!»

(注 18) Это большая разветвленная сфера знаний, которая досконально разъясняет, почему ИМИДЖ, то есть созданный актером (или политическим деятелем, или диктором телевидения, или бизнесменом) образ, или, точнее говоря, облик, является составной ...

(注 19) Сам его ИМИДЖ — экранный и внеэкранный облик, каким он запечатлелся в сознании десятков миллионов зрителей, — ассоциировался у них с представлением о справедливости и правопорядке.

(注 20) В системе этих стереотипов прежде всего имеют значение такие, как «ИМИДЖ» (образ) самого государства, его «партнеров» и «врагов» на международной арене...

(注 21) Рид просто-напросто рассчитывает психологически воздействовать на читателей и вызвать у них враждебность к бастующим, отрицательный стереотип, ИМИДЖ.

(注 22) ИМИДЖ, а, м. Рекламный образ кого-л. (обычно политического деятеля), создаваемый средствами массовой информации (в капиталистических странах).

(注 23) Тот или иной ИМИДЖ кинозвезды — это гипертрофированное амплуа сценической роли.

このように、(GoogleBooksのデータ)にある書籍や定期刊行物を調査し、その中から 350

の **имидж** の使用例を分析すると、初出は 1970 年にさかのぼることが分かる。**имидж** は入った当初は **облик**、**репутация**、**стереотип**、**псевдоидеал**、**амплуа** として説明されている。だが、半数以上の例では主に **образ** という単語が使われている。数行にわたる定義もあれば、**имидж** の後に括弧書きで一言 (**образ**) と書いたものもかなり多い。結局、「**имидж**」＝「**образ**」という理解が普及し、**имидж** が **образ** と同様に使われる例も出てきた。例えば、**экранный имидж**、**сценический имидж** という現在はあまり見られない言い方が普通に使われていた。

(注 24) **Всеобщая популярность, даже лирическая влюбленность, которую испытывают к ним зрители, аналогичны чувствам, которые вызывали кинозвезды, к примеру Любовь Орлова или Гарри Купер, создавшие свой экранный имидж.**

以下は「**литературный образ**」という意味で「**имидж**」が使用された一例である。

(注 25) Этот **«ИМИДЖ»** создается всей совокупностью художественных средств, которыми располагает «массовая литература». Герои произведений «массовой беллетристики» обычно принадлежат к обеспеченным слоям населения, которых не обременяют заботы о ...

このように **имидж** には完全に **образ** と同じように使われた時代があったわけだが、ある時期から **имидж** の連語には **образ** と共起しないものが現れ始め、**имидж** の意味が少しずつ変化しはじめる。たとえば、共起する単語の中には **ударить по**、**заботиться о**、**за кем-то закрепиться**、**быть запятнанным** というものが徐々に増えはじめ、**имидж** という概念の性質が変化し始めたことが分かる。つまり、それまでは **имидж** と **образ** は完全に一致しており、**имидж** は **создать** (作る)、**создается**、**изменить** (変更する)、**улучшить** (改善する) という言い方はできたが、**ударить по** (害する) や **закрепиться** (定着する)、**приобрести** (もらう、購入する)、**утвердиться** (固まる) とは言わなかったのである。以下はその一例である。

(注 26) **Волею дельцов от кинодела за Вандой прочно закрепляется этот «ИМИДЖ» — легкомысленной, веселой, разбитной девчонки, ставшей эталоном женской привлекательности и вызывающего секса.**

(注 27) «Особенно авторы **обеспокоены за «ИМИДЖ»** крупных фирм, которые

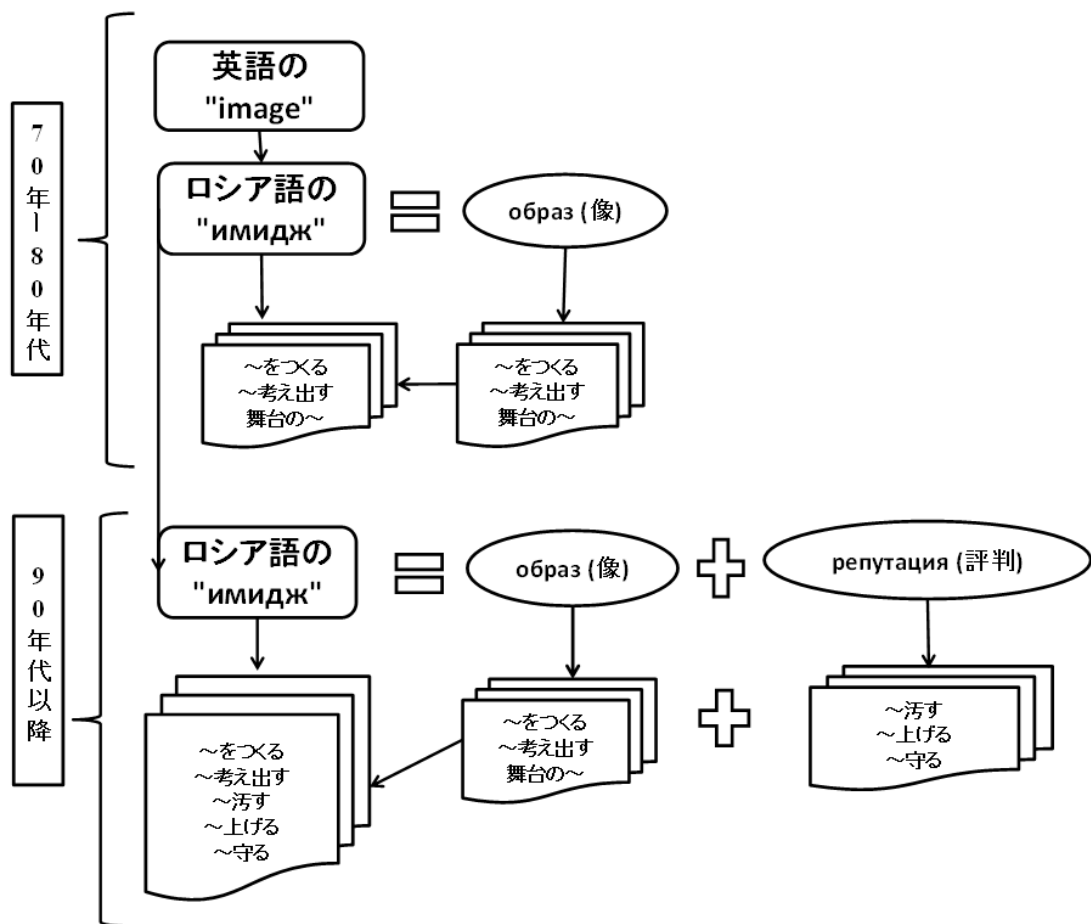
обвиняются в том, что вся их деятельность строится в интересах владельцев...»

(注 28) ... как традиционного консервативного критика «вашингтонского истеблишмента», тогда как в глазах либералов будущий президент США сумел **приобрести либеральный «ИМИДЖ»**. Весьма показательны также, что рост популярности Картера в первые сто ...

(注 29) Поддержка военной диктатуры претила взглядам администрации Кеннеди тем, что **портила ее «ИМИДЖ» на международной арене**.

(注 30) В Японии, где **ИМИДЖ государства был в свое время сильно запятнан** как раз его гегемонистскими поползновениями, борьба частных вузов за независимость весьма многозначительна...

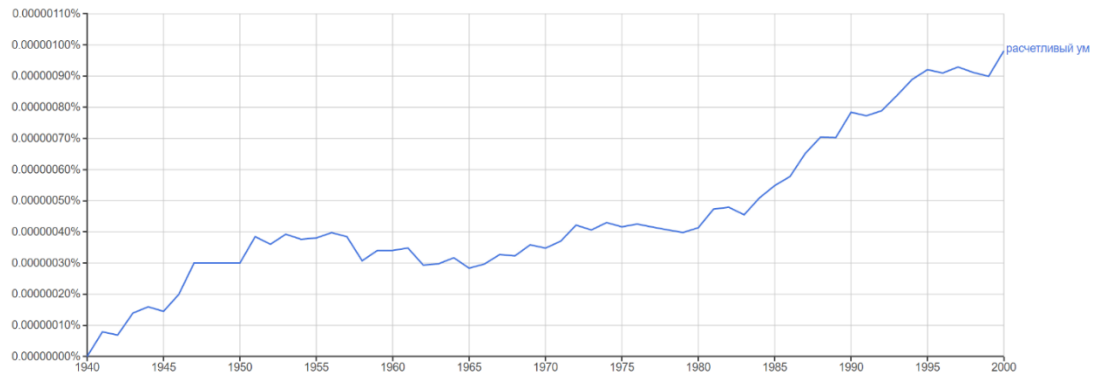
上記の新しくできた共起表現を分析すると、それらが **репутация** (評判) という単語に特有の表現であることが分かる。つまり、かつて **образ** という起点領域しかなかった **имидж** は、少しずつ **репутация** という概念からも写像されることとなった。その写像は初めごく部分的だったが、1990 年あたりから **повысить имидж** (イメージを高める) という、**репутация** 特有の言い回しをした連語が現れる始める。このような意味の変化を以下のように図でまとめることができる (スロヴェイ、2016、240)。



このように、ターゲットドメインである言葉の意味の構造に新しいドメインが入ったり、既存のソースドメインの意味が変化したりすることで、ターゲットドメインの意味も変質する。外来語ではそのような変化が比較的短い期間で行われるため、容易に確認できるが、在来概念も時間とともに意味が変化している場合がある。

その一例としてロシア語の ум (知恵、知能) という概念が挙げられる。すでに触れたように、Pimenova (Пименова, 2009) の指摘によると、ロシア語の ум (知能) のソースドメインには「武器、剣」(орудовать умом (剣のように振り回す)、острый ум (鋭い)) という単位があったが、社会の進化とともに、「武器」というソースドメインの存在が薄れて、「機械」という新しいソースドメイン (расчетливый ум) が入った。つまり、ум の意味と用法が変化し、どんどん「機械」という要素が ум (知能) の概念に与える影響が増大していったと言える。以下は前章で参照した расчетливый ум (打算的な知恵) の使用頻度のグラフである。

<расчетливый ум (打算的な知恵) の使用頻度 (1940年から2000年まで) >



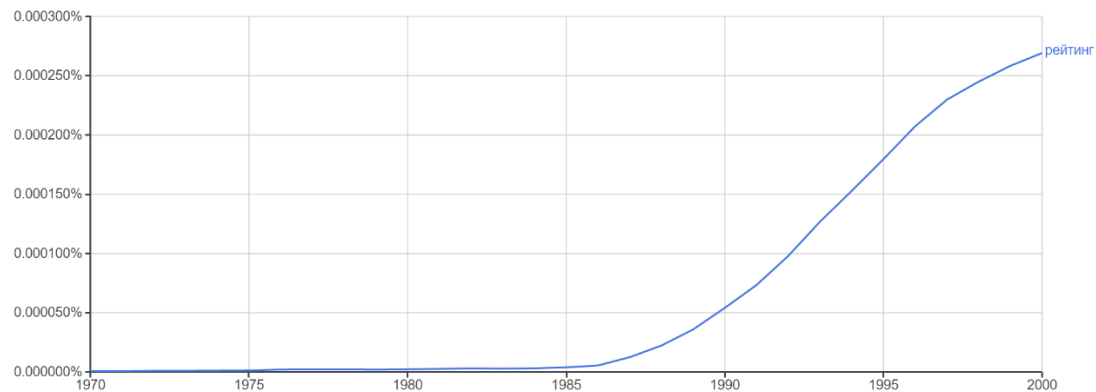
このように、外来語と在来語の意味変化を調査し、以下の結果が確認できた。

1. 外来語のような新しい概念は、習得先の言語にある既存の概念を通して習得される。
2. 言葉の意味が変化する際に、その共起表現（連語）も変化し、その概念の起点領域も変化する（なくなる、追加されるなど）

このような結果は、本稿で提示した認知モデルに合致するといえる。次は、本稿のアプローチを用いて類義語の差異を説明する。

## 4-2 外来語の意味とその普及

続いて、外国語由来のロシア語の рейтинг という単語の概念メタファー解析を行い、これを例に取り、言語の既存の古い概念からどのように新しい概念が構築されていくのかを考察する。以下に示す、Google n-gram viewer のデータを元にしたグラフによると、рейтинг という単語は 1970 年代にロシア語に登場し、それ以来使用頻度は現在まで徐々に増加している。



ロシア語ナショナルコーパスのデータによると、この単語は基本コーパスで 100 万語中およそ 12 回の頻度で使用され、新聞のサブコーパスではその使用頻度は 100 万語中 134 回にのぼる。類似するデータは、多くの評論の資料が含まれる Sketch Engine (注 7) のコーパスにも見られる。こちらでは、ランキングという単語の使用頻度は 100 万語中 54 回となった。

筆者が発見することのできた、この単語の最初の使用例 (рейтинг пошел вверх (ランキングが上昇した) は、1977 年のロシア語の出版物 (注 31) である。これによると、ランキングが総じて何かまたは誰かの評価あるいは人気として理解されていることが分かる。このことは、1980 年以降になされたこの単語の最初の定義 (Котелова,、1980、124) でも裏付けられている。

Рейтинг. а, м. Личный рейтинг. Индивидуальный числовой коэффициент оценки чьей-л. деятельности, меняющийся в зависимости от успехов его обладателя.

ランキング。個人ランキング。所有者の成功によって変動する個人的な何らかの活動の評価の数値。

現在この単語は、単純に何かの *оценка* という以上に広い意味を持っている。この単語の現代的な意味の特徴は、辞書だけでなく、この単語に特徴的な連語の分析をする際にも見られる。(注5)、(注6)、(注7)

*в рейтинге* (直訳：レイティングでは／和訳：評価では、格付けでは)、*по рейтингу.*  
(直訳：レイティングでは／和訳：レイティングによれば、レイティングでは)、  
*участвовать в рейтинге* (直訳：レイティングに参加する／和訳：レイティングに参加する)、*средний рейтинг* (直訳：真ん中のレイティング／和訳：中位の評価、格付け)、*высокий рейтинг* (直訳：高いレイティング／和訳：高い評価、格付け、人気がある)、*с (рейтингом...)* (直訳：レイティング (と一緒に) ／和訳：格付け (と一緒に))、*рейтинг растет* (直訳：レイティングが上がる／和訳：格付けが上昇している、評価、人気上昇している)、*рейтинг вырос* (直訳：レイティングが上がった／和訳：評価、人気、格付けが上がった)、*маленький рейтинг* (直訳：小さいレイティング／和訳：人気がない)、*возглавить рейтинг* (直訳：レイティングを主導する／和訳：レイティングのトップになる、格付けのトップになる)、*рейтинг популярности*  
(直訳：人気投票／和訳：人気度、人気投票)、*понижить рейтинг* (直訳：レイティングを下げる／和訳：格付けを下げる、人気、評価が下がる)、*дать рейтинг* (直訳：レイティングを与える／和訳：文脈によって様々な和訳可能、これだけでは意味の確定不可能)、*(что-то) основывается на рейтинг* (直訳：(～が) レイティングに基づいている／和訳：レイティングによれば、レイティングでは、)、*делать себе (хороший) рейтинг* (直訳：自分に良いレイティングをつける／和訳：自分を高く評価する)、*низкий рейтинг* (直訳：低いレイティング／和訳：低い評価)、*рейтинг У кого-то* (直訳：～のレイティング／和訳：～のレイティング、評価、格付け)、*высший рейтинг*  
(直訳：最高レイティング／和訳：最高評価、最高レイティング)、*место в рейтинг*  
(直訳：レイティング中の順位／和訳：レイティング中の順位)、*согласно рейтингу*  
(直訳：レイティングによれば／和訳：格付けでは)、*снизить рейтинг* (直訳：レイティングを下げる／和訳：格付け、評価、人気下がる)、*позиция в рейтинге* (直訳：レイティング中のポジション／和訳：格付けの順位)、*занять определенное место в рейтинге* (直訳：レイティングで一定の順位を占めている／和訳：格付けでそれなりの順位を占めている、一定の評価を受けている)、*иметь рейтинг* (直訳：レイティングを持つ／和訳：評価される、格付けされる)、*плохой рейтинг* (直訳：悪いレイティング／和訳：評判が悪い、人気がない)、*хороший рейтинг* (直訳：良いレイティ



ング／和訳：評判が良い、人気が高い)、**высокие рейтинги** (множ. число) (直訳：レイティング上位／和訳：格付け上位)、**составлять рейтинг** (直訳：レイティング付けする／和訳：格付けする)、**потерять рейтинг** (直訳：レイティングを失う／和訳：格付けを失う、格付け対象外となる)、**итоги рейтинга** (直訳：レイティングの結果／和訳：格付けの結果)、**итоговый рейтинг** (直訳：総合レイティング、最終レイティング／和訳：総合格付け、総合判断)、**попасть в рейтинг** (直訳：レイティングに入る／和訳：格付けに入る、評価リストにはいる)、**краткосрочный рейтинг** (直訳：短期レイティング／和訳：短期間の評価)、**долгосрочный рейтинг** (直訳：長期レイティング／和訳：長期にわたる評価)、**наименьший рейтинг** (直訳：最小レイティング／和訳：最低評価)、**подсчет рейтинга** (直訳：レイティングの得点数／和訳：格付けの得点数)、**соответствовать рейтингу** (直訳：レイティングに合致する／和訳：格付けに合致する)、**рейтинг определяется** (直訳：レイティングが定まる／和訳：格付け、評価が定まる、順位が定まる)、**вне рейтинга** (直訳：レイティング外／和訳：評価外、格付け外)、**повысить рейтинг** (直訳：レイティングを上げる／和訳：評価、格付けを上げる)、**подняться в рейтинге** (直訳：レイティングの順位が上がる／和訳：評価、格付けが上がる)、**подтвердить рейтинг** (直訳：レイティングを承認する／和訳：評価、格付けを承認する)、**фигурировать в рейтинге** (直訳：レイティングに出る、レイティングの対象となる／和訳：評価、格付けの対象となる)、**входить в рейтинг** (直訳：レイティングに入る／和訳：ランク入りする)、**вернуться в рейтинг** (直訳：レイティングに戻る／和訳：再び評価対象、格付け対象となる)、**получить рейтинг** (直訳：レイティングを受ける／和訳：格付け対象となる、評価対象となる)、**присваивать рейтинг** (直訳：レイティングに一票を投じる／和訳：レイティングに一票を投じる)、**рейтинг падает** (直訳：レイティングが落ちる、下がる／和訳：格付け、評価、人気を下がる)、**рейтинг снизился** (直訳：レイティングが下がる、落ちる／和訳：格付け、評価、人気を下がる)、**поднять рейтинг** (直訳：レイティングを上げる／和訳：格付け、評価、順位を上げる)、**отрицательный рейтинг** (直訳：否定的レイティング／和訳：否定的評価、望ましくない評価)、**присвоить рейтинг** (直訳：レイティングに一票を投じる／和訳：レイティングに一票を投じる)、**опуститься в рейтинге** (直訳：レイティング順位が下がる／和訳：格付け、評価、人気を下げる)、**обнародовать рейтинг** (直訳：レイティングを公表する／和訳：レイティングを公表する)、**отозвать рейтинг** (直訳：レイティング対象外となる／和訳：格付け、投票の対象外となる)、**вершина рейтинга** (直訳：レイティングのトップ／和訳：最高格付

け)、**закрывать рейтинг** (直訳: レイティングを閉じる/和訳: レイティングの最低順位になる)、**рейтинг упал** (直訳: レイティングが落ちる、下がる/和訳: 評価が下がる、格付けが下がる)、**рейтинг превышает** (直訳: レイティングを上げる/和訳: 格付けを上げる)、**переместиться в рейтинге** (直訳: レイティングの順位が変動する、変わる/和訳: 格付け、評価が変化する)、**строка рейтинга** (直訳: レイティングの行/和訳: 格付け順位)、**потерять в рейтинге** (直訳: レイティングの順位を失う/和訳: 格付け対象外となる)、**накрутка рейтинга** (直訳: レイティングに手を入れる? /和訳: (いろいろな手段を使って) レイティングの順位を上げる)、**рассчитывать рейтинг** (直訳: レイティングを考慮する/和訳: 格付け、評価を考慮する)、**обновлять рейтинг** (直訳: レイティングを回復する/和訳: 支持、格付け、評価を回復する)、**вверху рейтинга** (直訳: レイティングの上に/和訳: 格付け上位に)、**внизу рейтинга** (直訳: レイティングの下に/和訳: 格付け下位に)、**собирать рейтинг** (直訳: レイティングを集める/和訳: 人気を集める、評価を高める、支持を集める)、**рейтинг повышается** (直訳: レイティングが上がっている/和訳: 格付けが上昇している)、**занижать рейтинг** (直訳: レイティングで過小に評価する/和訳: 過小に低く格付けする、評価する)、**обойти кого-то в рейтинге** (直訳: レイティングで~を上回る/和訳: 格付け、評価で~を上回る)、**приличный рейтинг** (直訳: 相応しいレイティング/和訳: 相応しい格付け)、**проводится рейтинг** (直訳: レイティングが行われる/和訳: 格付けが実施される)、**набирать рейтинг** (直訳: レイティングを集める/和訳: 人気を集める、評価を高める、支持を集める、支持を集める)、**следующий по рейтингу** (直訳: レイティングで次の/和訳: 次の格付けの、格付けで劣る)、**высочайшие рейтинги** (直訳: 最高のレイティング/和訳: 最高格付け、最高評価)、**свежие рейтинги** (直訳: 新しいレイティング/和訳: 直近の格付け (文脈によって、他の訳し方もあると思いますが))、**набрать рейтинг** (直訳: レイティングを集める/和訳: 人気を集める、評価を高める、支持を集める)、**формировать рейтинг** (直訳: レイティングを形成する/和訳: レイティングをつくる)、**прирост рейтинга** (直訳: レイティング上昇/和訳: 格付け上昇、人気上昇)、**обладать рейтингом** (直訳: レイティングを受ける/和訳: 格付けを受ける)、**борьба за рейтинг** (直訳: レイティング獲得のための闘い/和訳: 格付け取得のための闘い)、**пересмотр рейтинга** (直訳: レイティング見直し/和訳: 格付け見直し)、**влиять на рейтинг** (直訳: レイティングに影響する/和訳: 格付け、評価に影響する)、**наличие рейтинга** (直訳: レイティングがあること/和訳: 格付けがあること)、

исключить из рейтинга (直訳：レイティングから除外する／和訳：格付け対象外とする)、верить рейтингу (直訳：レイティングの正しさを信じる／和訳：格付けが正しいと信じる)、рейтинг колеблется (直訳：レイティングが変動する／和訳：格付けが変動する、上下する)、огромный рейтинг (直訳：膨大なレイティング／和訳：膨大な格付け)、сложить два рейтинга (直訳：ふたつのレイティングを加算する、編成する／和訳：ふたつの格付けを合わせる)、выставлять рейтинг (直訳：レイティングに記入する(無理に訳すなら)／和訳：レイティングに投票する(文脈によります))、рейтинг зашкаливает (直訳：レイティングが最高になる／和訳：最高ランクの格付け)、рейтинг составляет ... пунктов (直訳：レイティングは～ポイントである／和訳：投票で～ポイント獲得する)、рейтинг взлетел (直訳：レイティングが飛揚する／和訳：評価がうなぎのぼり、格付けが一気に上がる)、достигать рейтинга (直訳：レイティングを達成する／和訳：良い順位に達する、良い評価を得る(文脈によります))、сказаться на рейтинге (直訳：レイティングに影響する／和訳：格付け、評価に影響する)、терять рейтинг (直訳：レイティングを失う／和訳：格付け対象外になる)、отразиться на рейтинге (直訳：レイティングに反映される／和訳：評価、格付けに反映される)、выводить рейтинг (直訳：レイティングする／和訳：格付けする、優劣をつける)、построение рейтинга (直訳：レイティングの構成／和訳：格付けの構成)、ставить рейтинги (直訳：レイティングする／和訳：格付けする)、гнаться за рейтингом (直訳：レイティングを追跡する／和訳：格付けを追い求める)、пересматривать рейтинг (直訳：レイティングを見直す／和訳：格付けを見直す、評価を見直す)、подорвать рейтинг (直訳：レイティングを損ねる／和訳：格付け(の権威を)失墜させる)、создать рейтинг (直訳：レイティングをつくる／和訳：格付け、評価をつくる)、обрушить свой рейтинг (直訳：自分のレイティングを壊す、落とす／和訳：自身の格付けを失墜させる)、рейтинг подрос (直訳：レイティングが上がった／和訳：格付けが上がった)、делиться рейтингом (直訳：レイティングを分け合う／和訳：格付けを分け合う、同じ格付けになる)、подпортить рейтинг (直訳：レイティングを少し損なう／和訳：格付けがわずかに下がる)、заоблачный рейтинг (直訳：天井のレイティング／和訳：極めて高い格付け)、соответственно рейтингу (直訳：レイティングに応じて／和訳：格付けに応じて、評価に応じて)、покинуть рейтинг (直訳：レイティングを捨てる、やめる／和訳：格付けをやめる、格付け対象となることを止める)、рейтинг ползет вверх/вниз (直訳：レイティングがゆっくり上がる／下がる／和訳：格付けがゆるやかに上昇する／下降する)、добиваться

рейтинга (直訳：レイティングを達成する／和訳：高い順位を獲得する)、  
сумасшедший рейтинг (直訳：馬鹿げたレイティング／和訳：馬鹿げた格付け)、  
удостоиться рейтинга (直訳：レイティングを授与される／和訳：格付けを授与される)、  
лидировать в рейтинге (直訳：レイティングをリードする／和訳：格付けで首位を占める)、  
пересчет рейтинга (直訳：レイティングを数えなおす／和訳：格付けをやり直す)、  
впечатляющий рейтинг (直訳：強い印象を及ぼすレイティング／和訳：強い印象を及ぼす格付け)、  
скатится на .. место в рейтинге (直訳：レイティングで○位に転落する／和訳：格付けが○位まで落ち込む)、  
отслеживать рейтинг (直訳：レイティングを追跡する／和訳：評価を追う、評価を注視する)、  
оправданный рейтинг (直訳：正当なレイティング、真つ当なレイティング／和訳：正当な格付け、正しい評価)、  
нарастить рейтинг (直訳：レイティングが増える／和訳：格付けが上がる)、  
бить по рейтингу (直訳：レイティングに勝つ／和訳：格付けに勝つ、評価に勝つ)、  
заботиться о рейтинге (直訳：レイティングを懸念する／和訳：格付けを気にする)、  
убрать из рейтинга (直訳：レイティングから外す／和訳：格付けから外す)、  
возникать (直訳：レイティングを発生させる／和訳：格付けを発生させる?)、  
приумножить (直訳：レイティングを水増しする／和訳：評価、格付け、人気を水増しする?)、  
соревноваться в (直訳：レイティングで競う／和訳：評価、格付け、人気を競う)、  
прочный (直訳：しっかりしたレイティング／和訳：揺るがぬ評価、格付け)、  
отобрать по (直訳：レイティングにより選択する／和訳：レイティングによって選ぶ)、  
проиграть по рейтингам (直訳：レイティングで負ける／和訳：レイティングで悪評される)、  
выпасть из (直訳：レイティングから漏れる／和訳：評価対象外となる、格付けから外れる)、  
обогнать по (直訳：レイティングで追い越す／和訳：～に勝る、優位に立つ)、  
спускаться по рейтингу (直訳：レイティングが低くなる／和訳：評価、人気などがガタ落ちする。評価、人気などが下がる。)、  
превосходить кого-то по рейтингу (直訳：レイティングで～より上位になる／和訳：人気、実力、評価などで、～を凌駕する)、  
надувать рейтинг (直訳：レイティングを膨らませる、欺く／和訳：人気を水増しする)、  
подтачивать чей-то рейтинг (直訳：～のレイティングを弱める、下げる／和訳：～の格付けを下げる、順位を下げる)、  
конвертировать что-то в рейтинг (直訳：～をレイティングに置き換える／和訳：～を格付けになおす、変換する)、  
замерять рейтинг (直訳：レイティングを測定する／和訳：評価、格付けを測る)、  
бежать за рейтингом (直訳：レイティングを求めて走る／和訳：格付けを求める)、  
одарить рейтингами (直訳：レイティングを与える／和訳：

訳：格付けを付与する)

続いて、これら連語が発生した可能性のあるソースドメインにしたがってこれらを分類してみる。(注5)、(注6)、(注7)

<список> (リスト) >

рейтинг популярности, (что-то) основывается на рейтинг, краткосрочный рейтинг, долгосрочный рейтинг, проводится рейтинг, свежие рейтинги, верить рейтингу, скатится на .. место в рейтинге, отозвать рейтинг, собирать рейтинг, выводить рейтинг, в рейтинге, участвовать в рейтинге, возглавить рейтинг, место в рейтинг, согласно рейтингу, позиция в рейтинге, занять определенное место в рейтинге, составлять рейтинг, итоговый рейтинг, попасть в рейтинг, вне рейтинга, подняться в рейтинге, фигурировать в рейтинге, входить в рейтинг, вернуться в рейтинг, опуститься в рейтинге, обнародовать рейтинг, вершина рейтинга, замыкать рейтинг, переместиться в рейтинге, строка рейтинга, потерять в рейтинге, обновлять рейтинг, вверху рейтинга, внизу рейтинга, обойти кого-то в рейтинге, следующий по рейтингу, формировать рейтинг, пересмотр рейтинга, исключить из рейтинга, построение рейтинга, пересматривать рейтинг, создать рейтинг, соответственно рейтингу, покинуть рейтинг, лидировать в рейтинге, убрать из рейтинга, выпасть из, спускаться по рейтингу, по рейтингу..

<популярность (人気) >

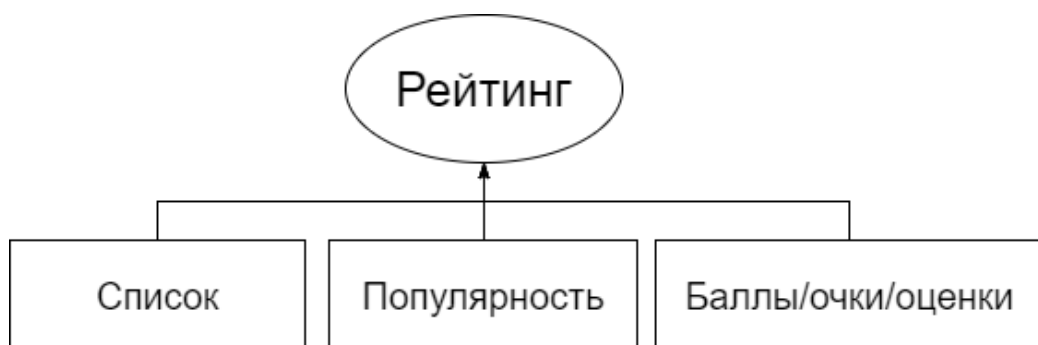
собирать рейтинг, по рейтингу.., высокий рейтинг, рейтинг растет, рейтинг вырос, маленький рейтинг, понизить рейтинг, делать себе (хороший) рейтинг, низкий рейтинг, рейтинг У кого-то, снизить рейтинг, иметь рейтинг, потерять рейтинг, наименьший рейтинг, соответствовать рейтингу, повысить рейтинг, подтвердить рейтинг, рейтинг падает, поднять рейтинг, рейтинг упал, рейтинг превышает, накрутка рейтинга, рассчитывать рейтинг, рейтинг повышается, набирать рейтинг, прирост рейтинга, обладать рейтингом, борьба за рейтинг, влиять на рейтинг, наличие рейтинга, рейтинг колеблется, огромный рейтинг, рейтинг зашкаливает, рейтинг составляет ... пунктов, рейтинг взлетел, достигать рейтинга, сказаться на рейтинге, терять рейтинг, отразиться на рейтинге, гнаться за рейтингом, подорвать рейтинг, обрушить свой рейтинг, рейтинг подросток, заоблачный рейтинг, рейтинг ползет вверх/вниз, добиваться рейтинга, сумасшедший рейтинг, удостоиться рейтинга, впечатляющий рейтинг, отслеживать рейтинг, оправданный рейтинг, нарастить рейтинг, бить по рейтингу, заботиться о рейтинге, возникать , приумножить, соревноваться в, отобрать по, проиграть по

рейтингам, обогнать по, превосходить кого-то по рейтингу, надувать рейтинг, подтачивать чей-то рейтинг, конвертировать что-то в рейтинг, замерять рейтинг, бежать за рейтингом, делиться рейтингом

< очки/баллы (点、ポイント) >

собирать рейтинг, по рейтингу.., высокий рейтинг, рейтинг растет, маленький рейтинг, понизить рейтинг, низкий рейтинг, снизить рейтинг, иметь рейтинг, потерять рейтинг, наименьший рейтинг, соответствовать рейтингу, повысить рейтинг, подтвердить рейтинг, рейтинг падает, поднять рейтинг, рейтинг упал, рейтинг превышает, накрутка рейтинга, рассчитывать рейтинг, рейтинг повышается, набирать рейтинг, борьба за рейтинг, влиять на рейтинг, рейтинг колеблется, рейтинг зашкаливает, рейтинг составляет ... пунктов, рейтинг взлетел, сказаться на рейтинге, терять рейтинг, отразиться на рейтинге, гнаться за рейтингом, рейтинг подрос, заоблачный рейтинг, рейтинг ползет вверх/вниз, добиваться рейтинга, сумасшедший рейтинг, удостоиться рейтинга, впечатляющий рейтинг, оправданный рейтинг, приумножить, соревноваться в, отобрать по, проиграть по рейтингам, обогнать по, верить рейтингу, выводить рейтинг, средний рейтинг, с (рейтингом...), дать рейтинг, высший рейтинг, плохой рейтинг, хороший рейтинг, высокие рейтинги (множ. число), подсчет рейтинга, рейтинг определяется, получить рейтинг, присваивать рейтинг, рейтинг снизился, отрицательный рейтинг, присвоить рейтинг, занижать рейтинг, приличный рейтинг, высочайшие рейтинги, набрать рейтинг, сложить два рейтинга, выставлять рейтинг, ставить рейтинги, подпортить рейтинг, пересчет рейтинга, одарить рейтингами

リスト1のほぼ全ての連語が、**рейтинг**の概念を伝える連語のソースドメインに従い3つのグループに問題なく分類することができることが分かる。現代の意味における概念の想定される構造を以下の図に示す。



この後で文化的キーワードの分析をする際、単語の主なドメインを連語ごとに単純に一義的に分類することが常に可能なわけではないことが分かる。しかも、言語に既存の概念は数百年をかけてかなり大量のほかの意味を獲得しており、その構造には中心的なソースドメインだけでなく、3~4の周辺的なソースドメインが存在していることが分かる。

そのほか、後で示すように、このような単語は一連の同義語からの影響を受けることがあり、ネイティブスピーカーは時々ひとつの同義語の連語の一部をほかの別の同義語とあわせて使用することがあるが、それはこれらの違いを常に識別しているわけではないためである。

どのように単語の意味が形成されるかを示した上述の例では、**рейтинги** という単語が複数形で使用される連語を検討したい。例えば、**высочайшие рейтинги** (最高のランキング)、**проиграть по рейтингам** (ランキングで負ける) というものである。「**Фильм получил очень высокие рейтинги от критиков**」(映画は批評家から非常に高いランキングを獲得した) という文は、いくつかの委員会があり、それぞれが独自のランキングを作成したという意味ではない。このような文でのランキングという単語の複数形は、ランキングという概念への **баллы, очки** (評点、得点) というソースドメインの影響を証明するものである。通常、ソースドメインはその語彙の意味が概念の分野へ転移するのが見られるが、この場合、**очки** というソースドメインの影響力が非常に強く、ネイティブスピーカーが **рейтинг** という単語を複数形にしなければならないと感じるほどであり、「**получил высокие баллы**」(高い評点を取った) という文でも同様に使用することができる。つまり、語彙的意味だけでなく、文法的特徴も転移するのである。

もうひとつのロシア語の外来語の単語、**визит** を検討する。M. Vasmer のロシア語語源辞典によると、この単語は 300 年以上前にポーランド語の **wizyta** から借用された。初め、この単語はポーランド語と同様の「**визита**」、「**сделать визиту**」という形式(女性名詞)であった。現在この単語がどのように使用されているかを理解するため、現代語における訪問という単語の最も頻出する語結合を抜き出してみる。(注5)、(注6)、(注7)

**находится с визитом** (直訳：訪問とともにある／和訳：訪問中である)、**состоялся визит** (直訳：訪問が行われた／和訳：訪問が行われた)、**при визите** (直訳：訪問の際／和訳：訪問の際)、**ответный визит** (直訳：お返しの訪問／和訳：返礼訪問)、**нанести визит** (直訳：訪問を加える、持っていく／和訳：訪問する)、**визит вежливости** (直訳：表敬訪問／和訳：表敬訪問)、**совершить визит** (直訳：訪問を終える／和訳：訪問を終える)、**посетить с визитом** (直訳：訪問とともに訪れる／和

訳：訪問する)、 **побывать с визитом** (直訳：訪問とともにある／和訳：訪問する)、  
**отбыть с визитом** (直訳：訪問の途につく／和訳：訪問の途につく)、**явиться с визитом** (直訳：訪問とともにある／和訳：訪問する)、**направиться с визитом** (直訳：訪問とともに向かう／和訳：訪問に赴く)、**приехать с визитом** (直訳：訪問とともに来る／和訳：訪れる、やってくる)、**нанести ответный** (直訳：返礼訪問を行う／和訳：返礼訪問を行う)、**пренебрегать визитом** (直訳：訪問を軽視する／和訳：訪問をないがしろにする)、**обмениваться визитами** (直訳：訪問を交換する／和訳：相互訪問を行う)、**внезапный визит** (直訳：突然の訪問／和訳：突然の訪問)、**визит длится** (直訳：訪問が長引く／和訳：訪問が長引く)、**визит продолжается** (直訳：訪問が続いている／和訳：訪問が続いている)、**удостоится визита** (直訳：訪問を受ける栄に浴す／和訳：訪問を受ける栄に浴す)、**(принять участие) в визите** (直訳：訪問に(参加する)／和訳：(訪問に)参加する)、**наметить визит** (直訳：訪問を予定する／和訳：訪問を予定する)、**уклониться от визита** (直訳：訪問を避ける／和訳：訪問を避ける)、**неожиданный визит** (直訳：予期せぬ訪問、不意の訪問／和訳：予期せぬ訪問、不意の訪問)、**готовиться к визиту** (直訳：訪問に備える／和訳：訪問に備える)、**опасаться визита** (直訳：訪問を危ぶむ、用心して訪問を控える／和訳：訪問を危ぶむ、用心して訪問を控える)、**медлить с визитом** (直訳：訪問に手間取る、訪問をためらう、訪問を引き延ばす／和訳：訪問に手間取る、訪問をためらう、訪問を引き延ばす)、**затягивать визит** (直訳：訪問を長引かせる／和訳：訪問を長引かせる)、**запланировать визит** (直訳：訪問を計画する／和訳：訪問を計画する)、**омрачить визит** (直訳：訪問を陰気にさせる／和訳：訪問中に良くないことが起こる(雰囲気壊す))、**сорвать визит** (直訳：訪問を決裂させる、台無しにする、妨害する／和訳：訪問を決裂させる、台無しにする、妨害する)、**ждать визит** (直訳：訪問を待つ／和訳：訪問を待つ)、**редкий визит** (直訳：稀な訪問／和訳：稀な報恩)、**продолжительный визит** (直訳：長引く訪問／和訳：長引く訪問)、**в ходе визита** (直訳：訪問時に／和訳：訪問時に)、**в рамках визита** (直訳：訪問の枠内で／和訳：訪問の際に)、**визит завершился** (直訳：訪問が終わる／和訳：訪問が終わる)、**визит продлился** (直訳：訪問が長引いた／和訳：訪問が長引いた)、**ожидается визит** (直訳：訪問が予想される／和訳：訪問が予想される)、**визит начался** (直訳：訪問が始まった／和訳：訪問が始まった)、**визиты участились** (直訳：訪問が頻繁になった、訪問が度重なった／和訳：訪問が頻繁になった、訪問が度重なった)、**намечается визит** (直訳：訪問が予定されている／和訳：訪問が予定されている)、**готовить**



почву для визита (直訳：訪問のための土壌を準備する／和訳：訪問のための地盤をつくる)、поздний визит (直訳：遅い訪問、遅れた訪問／和訳：遅い訪問、遅れた訪問)、важный визит (直訳：重要な訪問／和訳：重要な訪問)、визит к кому-то (直訳：～を訪ねること／和訳：～を訪ねること、訪問すること)、визит носить характер... (直訳：訪問は、～の性格を有している／和訳：訪問は、～の性格が濃い)、предстоит визит (直訳：訪問が迫っている／和訳：訪問が迫っている)、зачастить с визитами (直訳：頻繁に訪問する／和訳：頻繁に訪問する)、маленький визит (直訳：小訪問／和訳：ちょっとした訪問、ささいな訪問)、осуществить визит (直訳：訪問を実現する／和訳：訪問する、訪問を実現する)、пребывать с визитом (直訳：訪問とともにある／和訳：訪問中である)、быть с визитом (直訳：訪問とともにある／和訳：訪問中である)、молниеносный визит (直訳：稲妻のような訪問／和訳：電光石火の如き訪問、あっという間の訪問)、отдать визит (直訳：答礼として訪問する／和訳：答礼として訪問する)、сделать визит (直訳：訪問を行う／和訳：訪問を行う)、почтить визитом (直訳：訪問により敬意を表する／和訳：訪問により敬意を表する、表敬訪問)、прервать визит (直訳：訪問を中断する／和訳：訪問を中断する)、сорвать визит (直訳：訪問を台無しにする、失敗させる／和訳：訪問を台無しにする、失敗させる)、получить визит (直訳：訪問をもらう／和訳：このような表現はありません)、взаимный визит (直訳：相互訪問／和訳：相互訪問)、предпринять (直訳：訪問を企図する／和訳：訪問を企図する、企てる)、осчастливить визитом (直訳：訪問により幸福にする／和訳：訪問して喜ばせる)

この概念の連語の90%以上が、поездка と посещение というソースドメインに従い2つのグループに条件付で分類されることが分かる。(注5)、(注6)、(注7)

#### <Поездка>

при ..., совершить, состояться, посетить с, предпринять, находится с, побывать с, осуществить, длиться, продолжаться, наметить, уклониться от, неожиданный, готовиться к, опасаться, медлить с, затягивать, запланировать, омрачить, сорвать, ждать, редкий, продолжительный, в ходе, в рамках, завершиться, продлится, ожидается, начаться, участиться, намечаться, затянуться, затягивать с, готовить почву для, поздний, предстоять, длительный, зачастую с, важный, в ..., к..., носить характер, прервать, внезапный, сорвать, маленький, дружественный

## <Посещение>

при ..., состоялся, длится, продолжаться, наметить, уклониться от .... , неожиданный, готовиться к, опасаться, медлить с ... , затягивать, запланировать, омрачить, сорвать, ждать, редкий, продолжительный, в ходе, в рамках, завершиться, продлится, ожидается, начаться, участится, намечаться, затянуться, затягивать с, готовить почву для, поздний, предстоять, длительная, зачастить с, внезапный, дружественный, пренебрегать, взаимный, удостоиться, осуществить, ответный, прервать, почтить чем

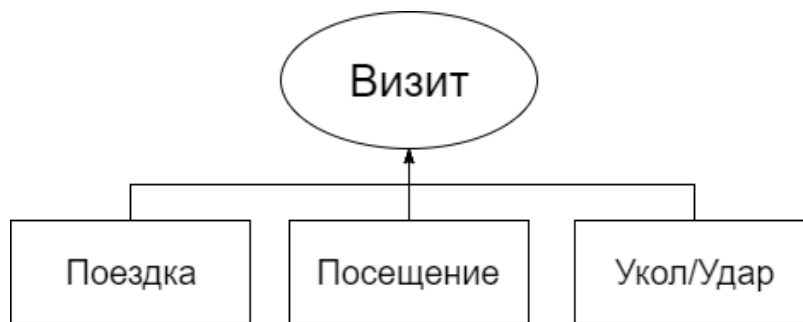
しかし、中心的なソースドメインに従属するこれら連語のほかに、訪問とも旅行とも関係のない、まったく異なる性質を持つものがいくつかある。例えば、**визит** はしばしば動詞 **нанести** とあわせて使用される。このかなり特殊な動詞は、特にその行為が誰かに対するものだった場合 (**нанести ... кому-то/誰かに.....与える**)、主にネガティブな意味を持つ。SketchEngine (注7) では、単語 **нанести** のよく使用される連語のうち、**нанести удар** (一撃を加える)、**нанести укол** (人を刺す)、**нанести вред** (害を与える)、**нанести ущерб** (損失を与える)、**нанести урон** (被害を与える)、**нанести обиду** (屈辱を与える)、**нанести увечье** (傷害を加える)、**нанести убыток** (損害を与える)、**нанести повреждение** (危害を加える)、**нанести оскорбление** (侮辱する) といった例が提示される。その一方で、**визит** という単語自体は中立的で、これにはネガティブなニュアンスは少しもない。状況を明確にし、この現象を理解できるような、連語をさらにいくつか検討しよう。(注5)、(注6)、(注7)

сделать, наметить, уклониться от, неожиданный, готовиться к, опасаться, внезапный, обмениваться, медлить с, ответный, взаимный, молниеносный, получить, осуществить, совершить, нанести ответный, в...

これら全ての語結合が、**удар** または **укол** (刃物による突刺) のような単語にだけ一般化でき、可能性のある候補の範囲が狭められたることが分かる。そして繰り返すが、**визит** という単語には、ソースドメイン「**удар** 一撃/**укол** 突刺」から論理的に予期される何らかの攻撃性を示唆するものはない。このような場合、ソースドメイン「**удар** 一撃/**укол** 突刺」は **визит** という単語の意味の潜在的意味ではなく、ロシア語ネイティブスピーカーがこの概念の動作の力学をイメージすると考えられる。「**удар** 一撃/**укол** 突刺」の概念が語彙の意味よりも **визит** の概念に自らのイメージスキーマを投影していると考えてもよい。特に誰かに向けた動作、短い停止 (一撃や突刺の瞬間)、そして元に戻る動作である。グラフにすると、これはほぼ以下のように表示される。



визит と удар に共通するこのイメージスキーマは、нанести、получить、отдать することのでき、молниеносный、ответный などのあり得る визит という単語の用法のいくつかのニュアンスを説明できるものである。全体として、ロシア語におけるこの概念の構造は、以下のように表現することができる。



続いて、ウクライナ語とロシア語における визит の意味を比較してみよう。ウクライナ語においてロシア語の визит という単語は、візит という発音に非常によく似ており、辞書の定義（Морозов, 2000）によると同じ意味を持つ

1. Відвідини кого-небудь, переважно офіційні
2. Відвідання лікарем хворого вдома.

ウクライナ語の візит の連語を分析すると、これら概念の中心的なソースドメインは非常に似ており、ウクライナ語における візит もその語法をロシア語のソースドメインに一致する特徴の поїздка、відвідини / відвідування に分類することができる。スラブ語のひとつであるウクライナ語はかなりロシア語に近いので、このような一致は驚くべきことではない。しかし、ロシア語の визит の第 3 の周辺のソースドメイン（удар/укол 一撃／突刺）に関しては、ウクライナ語においては存在しないか、もしくはそのような表現は非常に弱いものである。нанести візит という連語は、ウクライナ語ではまったく特徴的でなく、отримати візит または взаємний візит という連語は使用頻度が非常に少ない。

#### 4-3 概念構造全体の分析に基づいた文化的キーワードの比較と翻訳可能性（ロシア語：судьба、участь、рок、доля、ウクライナ語：доля、英語：fate、destiny、日本語：運命、縁、運）

文化的キーワードの分析に入る前に本研究の範囲を簡単にまとめる必要がある。既に述べたように特定の言語の文化的キーワードをより多く探し、それを通してその話者の世界像を描くことを目的したものではない。文化的キーワードは抽象性が高く、他言語に翻訳しにくいという性質をもち、本研究で提示した概念メタファー分析に基づく意味解明への新しいアプローチの対象として適切である。そのため本章では英語、ロシア語、日本語、ウクライナ語の文化的キーワードを扱う際に、それぞれ選んだキーワードがどこまでその文化の中心的な存在になっているか、またはそれらのキーワードにどのような文化が現れているのかを分析の対象から外すことにする。すでに述べたように文化的キーワードには様々な定義があり、その完全なリストを作成するのは不可能である。さらに、文化的キーワードの意味が概念メタファー以外の様々な要素で成されるので、本章では特定のキーワードの意味を説明する際にあくまで概念メタファー用法に見られる概念の構造を対象にして、そのような傾向が他の言語にどの程度まで共通しているのかを考察する。日本語の「世間」やロシア語の *судьба* という概念とそこに表れる文化についてはすでにたくさんの文化人類学、社会学などの研究がなされており、本章ではそのような包括的な説明よりは、概念メタファー分析を通して見えてきたキーワードの構造がどの程度新しいか、またはどの程度まで既存の研究にすでに裏付けられているのかについて論じる。

##### ロシア語 «судьба»

ロシア語の *судьба* は *душа*、*печаль*、*авось* と並んで、ロシア文化を理解する上でとても重要な概念としてよく挙げられている。Shmelev (Шмелев А. (2009)) や Wierzbicka, A. (1992)、Arutyunova (Арутюнова, 1994) などは様々な観点から「*судьба*」という概念を研究し、それがロシア語を話す人の言語的世界観を形成する上でとても重要で、高度なレベルの概念であると主張している。なお、文化的キーワードとしてロシア語の「*судьба*」は他の言語に翻訳できない、あるいは翻訳が極めて難しいとされる概念でもある。もちろん人間の人生を完全にまたは部分的に支配する力とという概念自体はロシア語特有の発想ではない。本研究の対象となった言語の中にもそれを思わせるような語彙がある。日本語では「運命」、「運」、「縁」などがあり、英語では *fate*、*destiny*、*luck*、*fortune* があり、ウクライナ語には *доля*、*талан*、*фортуна*、*щастя* がある。英語とロシア語で「運命」にあたる意

味を持つ様々な単語の使用頻度を調べた Wierzbicka (1992, 66) は、ロシア語の「судьба」とその語形は英語の fate などに比べれば、かなり使用頻度が高いと主張している。

The subjective impression that the word sud'ba is used much more frequently in Russian than the word fate is used in English is confirmed by computational analysis of large corpora. In a corpus of one million English words, Kucera and Francis (1967) have recorded 33 occurrences of the word fate (and 22 occurrences of the related word destiny); by contrast, in a corpus of one million Russian words, Zazorina (1977) has recorded 181 occurrences of the word sud'ba. In Steinfeldt's (1974) Russian word count the corresponding figure for sud'ba is 148 (based on a corpus of 400,000 words.)

英語において fate が使われる頻度よりも、ロシア語において sud'ba が使われる頻度の方が高いという主観的な印象は、膨大なコーパスのコンピューター分析により確認される。Kucera and Francis (1967) は、百万語の英単語コーパスから 33 件の fate を記録した（類語 destiny は 22 件）。一方、同様に百万語の露単語コーパスから Zazorina (1977) は、181 件の sud'ba を記録している。Steinfeldt's (1974) による露単語 40 万語のコーパス分析では、sud'ba に対応する数値は 148 件であった。

つまり、特定の言語で、ある種のより大きな力を記述する言葉がその他の言語よりも頻繁に用いられるという事実は、その言語を母語とする人々が日常においてこのような言葉の必要性を強く感じている可能性が高いことを物語っている。こうした言語を母語とする人々は、自分自身や他人に起こったある出来事を、ことの成り行きに影響を及ぼす、より大きな力の存在を前提とした概念によって説明しようという傾向があるのであろう。上記のデータに加えて、Wierzbicka の視界に入らなかった言語コーパスにおける судьба（運命）の概念に関係のある名詞の使用頻度を引用することとする。鍵となる単語のロシア語における使用頻度を確認することから始めたい。ロシア語類語辞典（Абрамов, 1999）では «судьба» という単語の類義語として、«судьба, судьбина, рок, удел, жребий, доля, участь, счастье, будущность, грядущее, предназначение, предопределение, провидение» といった単語が提示されている。今日アクセス可能なロシア語で最大の言語コーパス（Sketch Engine）においてこれら各単語の使用頻度を以下に示す。

<ロシア語> (Russian Web 2011 (ruTenTen11) コーパス) (注 7)

Судьба: 100 万あたり 93.4 回

Судбина: (судьба の語形) : 100 万あたり 0.2 回

Рок: 100 万あたり 10.4 回 (大半が同音異義語の рок (音楽) と重なる)

Удел: 100 万あたり 4.5 回

Жребий: 100 万あたり 2.3 回

Доля: 100 万あたり 111.9 回 (9 割以上は同音異義語の доля (配当分) である)

Участь: 100 万あたり 7.6 回

Счастье: 100 万あたり 66 回 (大半が「幸せ」という意味で使われる)

Будущность: 100 万あたり 0.5 回

Грядущее: 100 万あたり 1.1 回

Предназначение: 100 万あたり 9.9 回 (大半が「使用目的」という意味)

Предопределение: 100 万あたり 0.7 回

Провидение: 100 万あたり 1.8 回

<ロシア語> (“Национальный корпус русского языка”コーパス) (注 6)

Судьба: 100 万あたり 197.7 回

Судбина: (судьба の語形) : 100 万あたり 1 回

Рок: 100 万あたり 10.6 回 (大半が同音異義語の рок (音楽) と重なる)

Удел: 100 万あたり 10 回

Жребий: 100 万あたり 7.1 回

Доля: 100 万あたり 82.2 回 (9 割以上は同音異義語の доля (配当分) である)

Участь: 100 万あたり 31 回

Счастье: 100 万あたり 161.4 回 (大半が「幸せ」という意味で使われる)

Будущность: 100 万あたり 5.6 回

Грядущее: 100 万あたり 11.7 回

Предназначение: 100 万あたり 4.7 回 (大半が「使用目的」という意味)

Предопределение: 100 万あたり 1.3 回

Провидение: 100 万あたり 6.23 回

※名詞の使用頻度は、様々な格での使用を含む。その他のあらゆる派生語や単語の構成要素は使用頻度に含まれない。例えば、名詞 *судьба* の派生語である動詞 *суждено* は含まれない。

二つのコーパスの分析結果を比較すると、複数の単語に関して、1万語当たりの使用頻度に顕著な差異が見られた。судьба という単語は、ロシア語のナショナルコーパスでは、Russian Web 2011 (ruTenTen11) のコーパスの2倍以上用いられている。このような違いは、恐らく、それぞれのコーパスを形成しているものの特徴と、テキストの性格—科学、技術、法律など—によって説明が可能であろう。また、судьба の使用頻度は、話し言葉の下位コーパス («Национальный корпус русского языка») では1万語中112語、韻文コーパス («Национальный корпус русского языка») では1万語中679回であったことを指摘しておく(比較のため、1万語中、рок は159回、участь は42回)。つまり、судьба の概念は、ロシア語のその他類似した意味を持つ概念のなかで中心的な位置を占めており、この傾向は韻文の下位コーパスあるいは話し言葉の下位コーパスにおいて、より強まっている。社会評論的な性格の資料を集めた、いわゆる Газетном подкорпусе (新聞下位コーパス) («Национальный корпус русского языка») においてすら、судьба は1万語当たり152回も言及されており、著しく高いことには変わりはない。ロシア語の судьба の概念は、英語の等価語に比べ特殊な役割を担っていることは Wierzbicka が指摘しているが、この事実もまた裏付けられる。英語、日本語、ウクライナ語における судьба の概念分析は、後に詳細に行う。ここでは英語における судьба の等価語の使用頻度について手短かにデータを引用しておく。英露露英辞書 (Mюллер, 2013) では、ロシア語の「運命」という単語の訳語案として “fate, destiny, chance, lot, fortune, luck” が提示されている。

SketchEngine 英語コーパス (English Web 2013 (enTenTen13) (注7))

Fate: 100万あたり 16.1回

Destiny: 100万あたり 9.3回

Chance: 100万あたり 161回 (ほとんどの例は同音異義語の「機会」)

Lot: 100万あたり 501回 (ほとんどの例は同音異義語の「たくさん」(a lot of) にあたる)

Fortune: 100万あたり 20回 (同音異義語の「富、お金」と重なる)

Luck: 100万あたり 38.6回 (多少意味がずれている)

以下に示す通り、ロシア語の судьба には、これ以外の英訳もある。しかしながら Wierzbicka の結論の正しさを確認するには、ざっと上記の訳語で十分であろう。同音意義語を除くと、судьба という単語そのものとその同義語の使用頻度は、英語の等価語のそれを

はるかに凌駕している。この頻度の差は 10 倍にも及び、かなり顕著である。では、筆者が研究している他の言語ではどうか？

『露和辞典』(Кенкюся, 1988 г. 研究社、1988 年)によれば、ロシア語の *судьба* の訳語として、運命、宿命、運、幸運、悲運などが挙げられている。言語コーパスにおけるこれらの単語の使用頻度を以下に示す。

SketchEngine 英語コーパス (English Web 2013 (enTenTen13) \*名詞のみ(「運命的」などの語形は排除されている) (注 7)

運命: 100 万語あたり 19.6 回

運 : 100 万語あたり 24.9 回

幸運 : 100 万語あたり 8.2 回

悲運 : 100 万語あたり 0.27 回

宿命 : 100 万語あたり 3.2 回

上記に引用したデータは、全体的に英語で得られた結果と類似している。英語の場合、*судьба* クラスターの単語の使用頻度は、ロシア語における頻度をはるかに下回っている。*судьба* の日本語の等価語の意味の特徴は概念メタファーを通して、後に検討するが、現時点で、多数の訳語のなかで「運命」と「運」がかなり頻繁に使われていることは指摘に値する。

ここからは、スラブ語の一言語であり、語彙的にロシア語に近いとされているウクライナ語における状況を検討する。ロシア-ウクライナ語辞典で(«Русско-украинский словарь в 3 т.», 1969)は、ロシア語の *судьба* の訳語として *доля*、*фортуна*、*талан* が提示されている。この他、類似語辞典では *доля* の同義語として *фатум*、*щастя*、*планида* が挙げられている。現在、ウクライナ語の話し言葉では *судьба* という言葉が使われることもあり、1972 年発行の«Словник української мови у 11т.» (1972) では、この単語は口語として位置付けられている。しかしながら、1959 年発行の著名なグリーンチェンコの辞書では、*судьба* には「空疎な会話」「噂」という全く異なる定義が与えられている。このような意味を持つ *судьба* がロシア語にも存在することは、過去数十年の言葉の借用の結果、あるいは、ロシア語とウクライナ語の話し言葉が混ざり合った結果であると考えerことは理に適っている。上記のウクライナ語の単語の使用頻度と、他言語との比較に関するデータを以下に示す。(注 7)



Доля : 100 万語あたり 45.7 回

Фортуна: 100 万語あたり 1.8 回

Талан: 100 万語あたり 0.48 回

Фатум: 100 万語あたり 0.3 回

Планида: 100 万語あたり 0.03 回

Щастя: 100 万語あたり 75 回 (ほとんどは「幸せ、幸福」という意味の同音異義語である)

ウクライナ語における本クラスターの中心概念は、*доля* という言葉である。この単語は、他の類義語と比べて使用頻度がはるかに高い。他言語と比較するなら、ウクライナ語での *доля* の使用頻度は、英語、日本語における運命/*fate* のクラスター単語の使用頻度より著しく高い (2~3 倍) が、ロシア語よりもはるかに低い (半分から 4 分の 1)。この他、*судьба* のクラスターに属する二義的単語は、他言語に比べウクライナ語で使用されることは非常に稀であることは指摘に値する。例えば、ロシア語の *рок*、*удел*、*жребий*、*участь*、日本語の「運、幸運」、英語の *destiny*、*luck*、*fortune* などは、(同音意義語故の意味の変化を考慮しても) 1 万語当たり 10 回かそれ以上使用されている。一方、ウクライナ語では、*фортуна*、*талан*、*фатум*、*щастя* (運命という意味で) といった二義的な単語は 1 万語当たり 0.03~1.8 回の頻度でしか使われていない。(しばしば「幸せ」と訳される単語 (*щастя*) に関しては、末端の意味として *судьба* と同様の意味を有するが、この意味で使用される頻度は非常に低い。)

ウクライナ語の話し言葉で、*судьба* がロシア語からの借用語として時に用いられることは少し前に述べたが、ウクライナ語におけるクラスターの中心である *доля* は、ロシア語でもよく用いられている。以下、ウクライナ語とロシア語におけるこれらの概念の比較を詳細に行う。とは言え、これらの単語に特徴的な概念的隠喩を各言語においてざっと分析した限りでは、この二つの単語には共通点が多いことが分かる。ロシア語とウクライナ語が共にスラブ語起源であることを考慮すれば、このような類似は驚くに値しない。むしろ当然のことであろう。しかし、ロシア語を母語とする人々の使用頻度から判断するに、*доля* は、ロシア語では予め決められている人間の生き方を意味する概念クラスターの末端にあるものであり、ウクライナ人にとってはクラスターの中心部にあることを指摘しておくことは重要である。つまり、これらの概念が持つなんらかの特性に対し各言語の母語話者が与える評価は、言語によって異なっていると考えられる。具体的な世界観において、ある出来事について叙述する場合に、わかりやすく使いやすい単語が、言語の使い手の意識の

中心にあることになる。それが、ロシア語では *судьба*、ウクライナ語では *доля* である。これらの単語の意味を伝える可能性（そのままの意味の翻訳可能性）について言うなら、ウクライナ語の *доля* が意味するニュアンスは、ロシア語を母語とする人々はもれなく理解できる。逆も然り。しかしながらこの場合、二つの言語をそれぞれ母語とする人々では、世界観や、人生に起こった出来事に対する態度は異なるものとなり得る。なぜなら、それぞれの単語は、それぞれの言語が描く世界の様相によって異なった重みを有しているからである。英語についても状況は同様である。Wierzbicka (1992, 66) は、ロシア語と英語における *судьба* クラスターの代表格である単語同士の関係性を以下のように記述している。

Dictionaries usually offer fate as the closest English word, but actually the meaning of fate differs considerably from that of *sud'ba*. In fact, fate has perhaps a closer counterpart in the Russian word *rok* (and the adjective *fateful* can be said to have a counterpart in the Russian adjective *rokovoj*).

大抵の辞書では、一番意味の近い英単語として *fate* を挙げているが、実際のところ *fate* の意味は *sud'ba* とはかなり異なる。*fate* に対応する語として露単語で最も適切なのは *rok* であるかもしれない（形容詞 *fateful* に対応する露単語は *rokovoj* であるといえる）。

つまり、英語の *fate*、ロシア語の *рок* の意味は近く、英語、ロシア語をそれぞれ母語とする人々はそれぞれの単語のニュアンスをほとんど理解できることが可能だろう。しかしながら、英語を母語とする人々にとって *fate* は、ロシア語の *рок* より（ロシア語話者にとって）、このクラスターにおいてより重要な意味を持っている。*fate* の意味がもつならんらかの特徴は、この単語の概念が、英語の世界観においてよりゆるぎないポジションを占めることを可能ならしめているのであろう。そうであるならば、我々は再び次の結論に至ることになる。つまり、単語の意味そのものは（*рок* という概念を用いて）ロシア語に翻訳可能であるとしても、翻訳を読んだロシア語を母語とする人々が、英語を母語とする人々と一致する価値体系に関するイメージを持つことにはならないという結論である。*судьба*, *общество*, *жалость*, *печаль* などの抽象的概念が基本的に母語で伝達可能であるとしても、それぞれの言語においてこれらの概念の重みが異なることなど、読者は考えもしない。まさにこれこそが問題なのである。外国語を学んだことがない人々は、しばしば、こうした概念があらゆる人々にとって共通であると考えている。他方、生活習慣に関する単語に関し

では、違いは一目瞭然である。例えば、ウクライナ語を母語とする人々にとって、日本語のテキストの翻訳語である *рисовая каша* の概念そのものは十分理解できるものである。意味も分かる。なぜなら、その味も見た目も知っているからである。違いは、日本人にとって「ごはん」が栄養の中心を成すものであるのに対し、ウクライナ人にとっては付け合せ的なものであることだけである。

上述したことをまとめるなら、特定の文化における文化的キーワードを翻訳する際の難しさは、意味が包括するいくつかのニュアンスを伝えることのみならず、このような単語が（その名称に応じて）、言語が描き出す具体的な世界の有り様において、重要かつ中心的な役割を果たしていることにある。このような単語は、その他多くの単語とともに、場合によってはその言語を母語とする人々の言語を通した世界観の構築に影響し、かつ、特定の角度から世界を見ることを強いながら、一体性のある構造を形成している。例えば、ロシア語の *судьба*（運命）には「宿命性」、「被制約性」、「この世のものではない超越した外力の存在」、「人間によるコントロールの不可能さ」というロシア語特有の世界観が現れているとされる。そのような傾向については Shmelev（Шмелев、2009、210–211）の次の二つの発言が参考になる。

Слово *судьба* оказывается одним из самых характерных слов русского языка (и здесь можно пол ностью согласиться с А. Вежицкой), поскольку соединяет в себе две ключевые идеи русской языковой картины мира: идею непредсказуемости будущего и идею, в соответствии с которой человек не контролирует происходящие с ним события. Только эти идеи присутствуют в понятии *судьбы* не одновременно, а сменяют друг друга, когда решается *судьба*. Пока *судьба* еще не решилась, будущее остается непредсказуемым, а человек может изменить свою *судьбу* и вообще может выступать как творец своей *судьбы*. Но как только *судьба* решилась, человек уже не властен над ходом событий, которые зато уже могут быть с той или иной степенью полноты предсказаны.

*судьба*（運命）という言葉は、ロシア語において最も特徴的な言葉の一つである（それについては Anna Wierzbicka 氏の意見にまったく賛成できる）。なぜなら、この言葉はロシア語の鍵となる世界観を二つ併せ持っているからである。これは未来に対する予測不可能性、またそれゆえに人間は自分の身に起きる出来事をコントロールすることができないという考え方である。ただしこれらの考え方は、運命という認識において同時に現れるのではなく、運命が決定される際に交互に出現する。運命が決定されるまでは、未来は予測不可能なままであり、人間は自分の運命を変えたり、自ら

の運命の創造者のようにふるまったりすることもできる。しかし運命が決定された後は、人間はすでにある程度予測可能になった出来事の進展を動かす権限をもたない。

Кроме того, представление о судьбе дает удобный способ примириться с непредсказуемостью жизни, с тем, что не все в ней зависит от человека и с тем, что в ней может происходить то, чего мы вовсе не хотели бы. Такие сентенции, как *Такая уж у меня судьба*; *Не судьба была встретиться*; *Значит, не судьба* представляют собою формулы «примирения с действительностью», столь характерные для русского дискурса.

また、*судьба* 運命に対するこのような考え方は、人生の予測不可能性、すべてが人間の思うように動かせるわけではないこと、そして人生には我々がまったく望まないことも起こり得ること等を甘んじて受け入れるための方便ともなりうる。次のような文「*Такая уж у меня судьба*」（これが私の運命なのだ）、「*Не судьба была встретиться*」（どのみち会える運命ではなかった）、「*Значит, не судьба*」（それは運命とは違ったということだ）これらは、ロシア人の会話に特徴的な「現実を受容する」という決まり文句である。

Shmelev (Зализняк, Левонтина, Шмелев, 2005, 445)をはじめとする著者は、例えば、*у нас появилась стиральная машина* («Мы купили стиральную машину»の代わりに)、*так вышло/так получилось、образуется、пройдет、угараздило、сделается* といったロシア語文法の無人称構造の例を引用している。これらの表現は、*судьба* という概念と同様、人が受け身であり、人間が意図する以外のところで出来事が起こり得るという世界観と極めて有機的に合致している。論理的には、*судьба* に端を発する予測不可能な世界観を形成する *авось* あるいは *вдруг* という重要な単語もこの範疇に入る。つまり、しばしば人は出来事に対して無力であり、出来事は「勝手に起こる」ものだとする場合、これらの出来事は予見不可能で、*авось* あるいは *вдруг* と言わざるを得ないことになる。しかし Shmelev (Шмелев, 2009) は、ロシア語で *судьба* という単語を使う場合すべてが、宿命論や受動的なロシア語の傾向を示すものでは決してないことも確認している。

Исходя из частотности упоминаний судьбы в русской речи, некоторые исследователи делают вывод о склонности русских к мистике, о фатализме «русской души», пассивности русского характера... Такой вывод представляется несколько преувеличенным. В большинстве употреблений слова *судьба* в современной живой речи

нельзя усмотреть ни мистики, ни фатализма, ни пассивности — ср. такие высказывания, как: Наша судьба в наших руках; Судьбу матча решил гол, забитый на 23-52 минуте ,Ледяховым; Народ должен сам решить свою судьбу; Меня беспокоит судьба документов, которые я отослала в ВАК уже два месяца тому назад,— и до сих пор не получила открытки с уведомлением о вручении.

ロシア語の発話に *судьба* 運命という言葉が頻繁に用いられることを、ロシア人の神秘的なものへの傾倒、「русской души」（ロシアの魂）という宿命論、ロシア人の受動的性質などと結びつける研究者たちもいる。しかしそれらの結論づけは、やや誇張されたものである。現代の実際のロシア語会話において多くの場合、*судьба* 運命という言葉が使われる際に、神秘性や宿命論や受動性などの意味を見いだすことはできない。例えば次のような発言（Шмелев、2009、210）を参照されたい。「Наша судьба в наших руках.»（我々の運命は我々の手中にある）、«Судьбу матча решил гол, забитый на 23-52 минуте, Ледяховым.»（試合の運命を決めたのは、レジャホフが23分から52分に叩き込んだゴールだ）、«Народ должен сам решить свою судьбу.»（国民は自分の運命を自分で決めなければならない）、«Меня беспокоит судьба документов, которые я отослала в ВАК уже два месяца тому назад, — и до сих пор не получила открытки с уведомлением о вручении.»（高等資格審査委員会に送付した書類の運命が心配だ。2か月前に送ったのに、まだ受取り証明のハガキが届いていない）。

次はロシア語の *судьба* の使用頻度の高い連語を抽出し、以下に載せる。（注5）、（注6）、（注7）

#### <形容詞+*судьба*>

*дальнейшая*（直訳：今後の／和訳：今後の、将来）、*печальная*（直訳：悲しい／和訳：悲しい）、*одна*（直訳：一つの／和訳：同じ、一蓮托生）、*нелёгкая*（直訳：容易でない／和訳：つらい）、*счастливая*（直訳：幸せな／和訳：幸せな、幸運）、*злая*（直訳：悪意に満ちた、意地悪な／和訳：不幸な、悲運）、*тяжёлая*（直訳：重い／和訳：過酷な、つらい）、*историческая*（直訳：歴史的な／和訳：歴史的、人民の行く末）、*творческая*（直訳：創作上の、創造的な／和訳：創作上の）、*горькая*（直訳：苦い／和訳：痛ましい、悲運）、*общая*（直訳：共通の／和訳：共通の）、*великая*（直訳：偉大な／和訳：偉大な、大いなる）、*незавидная*（直訳：うらやむに足らない／和訳：うらやむに足らない、あやかりたくない）、*сложная*（直訳：複雑な／和訳：錯綜した）、*удивительная*（直訳：驚くべき／和訳：驚くべき）、*человеческая*（直訳：人間の／和訳：人間の）、*странная*（直訳：奇妙な／和訳：奇妙な）、*женская*（直

訳：女の／和訳：女の)、 жестокая (直訳：残酷な／和訳：残酷な、過酷な)、  
интересная (直訳：興味深い／和訳：興味深い)、 несчастная (直訳：不幸な／和訳：  
不幸な、不運)、 будущая (直訳：未来の／和訳：未来の、将来)、 особая (直訳：特  
別な／和訳：特別な)、 посмертная (直訳：死後の／和訳：死後の)、 лёгкая (直訳：  
軽い、楽な／和訳：楽な)、 сломанная (直訳：壊された／和訳：壊された)、 простая  
(直訳：単純な、ありふれた／和訳：単純な、ありふれた)、 хорошая (直訳：良い  
／和訳：良い、幸運)、 неизбежная (直訳：避けがたい／和訳：避けがたい)、 слепая  
(直訳：盲目の／和訳：盲目の、悲運)、 окончательная (直訳：最終的な／和訳：最  
最終的な)、 капризная (直訳：いたづらな／和訳：いたづらな)、 плохая (直訳：悪い  
／和訳：悲惨な、不運)、 лучшая (直訳：最善の／和訳：最善の)、 щедрая (直訳：  
気前の良い／和訳：恵み豊かな)、 единая (直訳：共通の／和訳：共通の、一蓮托生)、  
роковая (直訳：宿命的な、不可避の／和訳：不可避の)、 драматичная (直訳：劇的  
な／和訳：劇的な)、 единственная (直訳：たった一つの／和訳：たった一つの)、  
прекрасная (直訳：素晴らしい／和訳：素晴らしい)、 неумолимая (直訳：頑固な／  
和訳：不可避の)、 суровая (直訳：厳しい、仮借ない／和訳：仮借ない、過酷な)、  
различная (直訳：別々の／和訳：別々の)、 жалкая (直訳：惨めな／和訳：惨めな)、  
добрая (直訳：親切な、良い／和訳：幸せな、幸運)、 героическая (直訳：英雄的な  
／和訳：英雄的な)、 милостивая (直訳：寛容な／和訳：哀れみ深い)、 минувшая  
(直訳：過ぎ去った／和訳：過ぎ去った)、 унылая (直訳：憂鬱な／和訳：憂鬱な)、  
исключительная (直訳：特別な／和訳：特別な)、 безоблачная (直訳：雲のない／和  
訳：陰りのない、幸福な)、 плачевная (直訳：悲惨な／和訳：悲惨な)、  
благополучная (直訳：恵まれた／和訳：恵まれた)、 неотвратимая (直訳：不可避の、  
避けがたい／和訳：不可避の、避けがたい)、 недобрая (直訳：意地の悪い、不吉な  
／和訳：不運)、 изменчивая (直訳：気まぐれな／和訳：気まぐれな)、 тревожная  
(直訳：気がかりな、不安な／和訳：気がかりな)、 непостижимая (直訳：不可解な  
／和訳：不可解な)、 блистательная (直訳：輝かしい／和訳：輝かしい)、  
своеобразная (直訳：一風変わった／和訳：一風変わった)、 поразительная (直訳：  
驚愕の／和訳：驚愕の)、 переменчивая (直訳：移り気な／和訳：移り気な、気まぐ  
れな)、 мрачная (直訳：暗い、暗澹たる／和訳：暗澹たる)、 неудачная (直訳：失敗  
の／和訳：不幸な)、 покалеченная (直訳：不具にされた／和訳：台無しになった)、  
одинокая (直訳：孤独な／和訳：孤独な)、 дурная (直訳：悪い、不吉な／和訳：不  
幸な、不運)、 всеобщая (直訳：すべてに共通の／和訳：普遍的な)、 дивная (直訳：

素敵な、素晴らしい／和訳：素晴らしい)、неисповедимая (直訳：不可解な／和訳：不思議な巡り合わせ)、бессмысленная (直訳：無意味な／和訳：訳のわからない)、позорная (直訳：恥ずべき／和訳：屈辱的な)、благотворительная (直訳：良い結果をもたらす／和訳：幸運)、скорбная (直訳：悲しい、痛ましい／和訳：悲痛な)、лютая (直訳：凶暴な／和訳：残酷な)、предсказанная (直訳：予告された／和訳：予告された)、отведённая (直訳：回避された、避けられた／和訳：免れることができた)、казённая (直訳：国庫負担の、国有の／和訳：国から与えられた、お仕着せの)、унизительная (直訳：屈辱的な／和訳：屈辱的な)、согласительная (直訳：同情的な／和訳：同情的な、哀れみ深い)、неприметная (直訳：目立たない、地味な／和訳：地味な、平凡な)、грубая (直訳：荒い、粗暴な／和訳：ひどい)、мещанская (直訳：俗物的な、小市民的な／和訳：小市民的な)、бесчувственная (直訳：冷淡な／和訳：冷淡な、薄情な)

#### <судьба (自動詞) >

сводить (кого-то с кем-то) (直訳：(～と～を) 引き合わせる／和訳：(～と～を) 引き合わせる)、распоряжаться (кем-то) (直訳：(～に) 命じる、指図する／和訳：(～に) 命じる、指図する)、поражать (кого-то) (直訳：(～を) 驚かす／和訳：(～を) 驚かす)、решает (что-то) (直訳：(～を) 決定する／和訳：(～を) 決定する、(～が) 定められる)、дарить/подарить (что-то) (直訳：(～を) 贈る／和訳：(～を) 贈る、(～は) 賜物だ)、приводить (кого-то к кому-то/чему-то) (直訳：(誰かを、誰か/何かのところへ) 導く／和訳：(誰かを、誰か/何かのところへ) 導く)、делать (по своему / с кем-то что-то) (直訳：(気ままに) 振る舞う/ (誰かをどのように) する／和訳：(気ままに) 振る舞う/ (誰かをどのように) する)、ждать (кого-то) (直訳：(～を) 待つ／和訳：(～を) 待ち受ける)、давать (давать что-то (напр. отсрочку) , сделать что-то) (直訳：(何かを (例：猶予を)) 与える、(何かを) 行う／和訳：(何かを (例：猶予を)) 与える、(何かを) 行う)、складываться (直訳：なる、形成される／和訳：なる、形成される)、посылать (что-то/кого-то) (直訳：(何かを/誰かを) 遣わす、与える／和訳：(何かを/誰かを) 遣わす、与える)、преподносить (что-то) (直訳：(思いがけない何かを) 示す、与える／和訳：(思いがけない何かを) 示す、与える)、бросать (кого-то куда-то) (直訳：(誰かをどこかへ) 投げる／和訳：(誰かをどこかへ) 放り出す)、улыбаться (кому-то) (直訳：(～に) 微笑む／和訳：(～に) 微笑む、運が回ってくる)、приготовить (что-то кому-то)

(直訳：(何かを誰かに)用意する／和訳：(何かを誰かに)用意する)、**зависеть**  
 (от чего-то) (直訳：(～に)左右される、(～)次第である／和訳：(～に)左右さ  
 れる、(～)次第である)、**сталкивать** (кого-то с кем-то) (直訳：(～を～に)遭遇さ  
 せる、不意に出会わせる／和訳：(～を～に)遭遇させる、不意に出会わせる)、  
**связать** (кого-то с кем-то) (直訳：(誰かを誰かと)結びつける／和訳：(誰かを誰か  
 と)結びつける、運命を共にする)、**заносить** (кого-то куда-то) (直訳：(誰かをどこ  
 かへ)押し流す、連れて行く／和訳：(誰かをどこかへ)押し流す、連れて行く)、  
**предоставлять** (что-то, \*напр. возможность, шанс) (直訳：(何かを(例：機会、チャ  
 ンスを))与える／和訳：(何かを(例：機会、チャンスを))与える)、**подкинуть**  
 (что-то кому-то) (直訳：(何かを誰かに)投げ上げる／和訳：(何かを誰かに)与え  
 る)、**поворачиваться** (к-кому то) (直訳：(誰かの方へ)向きを変える／和訳：(誰か  
 の方へ)向きを変える)、**заставлять** (кого-то сделать что-то) (直訳：(誰かに何かを)  
 させる、強制する／和訳：(誰かに何かを)させる、強制する)、**разводить** (кого-то  
 с кем-то) (直訳：(～と～を)別れさせる、引き離す／和訳：(～と～を)別れさせる、  
 引き離す)、**волновать** (кого-то) (直訳：(～を)心配させる、不安にする／和訳：  
 (～を)心配させる、不安にする)、**забрасывать** (кого-то куда-то) (直訳：(誰かを  
 どこかへ)投げ出す／和訳：(誰かをどこかへ)追いやる)、**отпускать** (кому-то  
 некоторое время для чего-то) (直訳：(何かのため誰かに一定の時間を)許す、与える  
 ／和訳：(何かのため誰かに一定の時間を)許す、与える)、**хотеть** (что-то) (直  
 訳：(何かを)望む、欲する／和訳：(何かを)望む、欲する)、**хранить** (кого-то)  
 (直訳：(～を)守る／和訳：(～を)守る)、**помогать** (кому-то) (直訳：(～を)助  
 ける／和訳：(～を)助ける)、**выпадать** (кому-то) (直訳：(～のもとに)落ちてく  
 る／和訳：(～が何かをする)巡り合わせになる)、**поставить** (кого-то в  
 определенные обстоятельства) (直訳：(ある状況の中に～を)立たせる、置く／和  
 訳：(ある状況の中に～を)立たせる、置く)、**спасать** (кого-то) (直訳：(～を)救  
 う／和訳：(～を)救う)、**смиловиться** (над кем-то) (直訳：(～を)哀れむ／和  
 訳：(～を)哀れむ)、**благоволить** (к кому-то) (直訳：(～に)好意を示す、目をか  
 ける／和訳：(～に)好意を示す、目をかける)、**относиться** (к кому-то  
 определенным образом) (直訳：(あるやり方で～を)扱う／和訳：(あるやり方で～  
 を)扱う)、**обходиться** (с кем-то как-то) (直訳：(あるやり方で～を)扱う／和訳：  
 (あるやり方で～を)扱う)、**постигать** (кого-то) (直訳：(～を)襲う／和訳：(～  
 を)襲う、(～が何かに)見舞われる)、**оставаться** (напр. неизвестной) (直訳：(知



られないままなどに) なる、ままだである／和訳：(知られないままなどに) なる、ま  
 まである)、повести (кого-то куда-то) (直訳：(誰かをどこかへ) 導く／和訳：(誰か  
 をどこかへ) 導く)、тревожить (кого-то) (直訳：(～を) 不安にさせる、心配させ  
 る／和訳：(～を) 不安にさせる、心配させる)、щадить (кого-то) (直訳：(～を)  
 見逃す、宥赦する／和訳：(～を) 見逃す、宥赦する)、вручать (что-то/кого-то  
 кому-то) (直訳：(何かを/誰かを、誰かに) 託す、ゆだねる／和訳：(何かを/誰かを、  
 誰かに) 託す、ゆだねる)、давать шанс (кому-то) (直訳：(～に) チャンスを与え  
 る／和訳：(～に) チャンスを与える)、отнимать (что-то/кого-то у кого-то) (直訳：  
 (～から何かを/誰かを) 奪う、取り上げる／和訳：(～から何かを/誰かを) 奪う、取  
 り上げる)、обижать (кого-то) (直訳：(～を) 愚弄する、(～に) けちる／和訳：  
 (～を) 愚弄する、(～に) けちる)、предлагать (кого-то/что-то кому-то) (直訳：  
 (誰かを/何かを、誰かに) 提案する、提示する／和訳：(誰かを/何かを、誰かに) 提  
 案する、提示する)、идти (на встречу кому-то / своим путем) (直訳：(～に向かって  
 /勝手に) 進む／和訳：(～に向かって/勝手に) 進む)、бить (кого-то) (直訳：(～を)  
 打つ、叩く／和訳：(～を) 打つ、叩く)、доставаться (кому-то) (直訳：(～の) 手  
 に入る／和訳：(～にとって) たまたまなる、巡り合わせになる)、судить (кого-то)  
 (直訳：(～を) 裁く／和訳：(～を) 運命づける)、назначать (что-то кому-то \* напр.  
 "одиночество" или "путь") (直訳：(誰かに、何かを (例：「孤独」または「進路」を))  
 指定する／和訳：(誰かに、何かを (例：「孤独」または「進路」を)) 指定する)、  
 подавать знаки (кому-то) (直訳：(～に) 印を与える／和訳：(～に) 印を与える)、  
 забирать (что-то/кого-то у кого-то) (直訳：(誰かから、何か/誰かを) 奪い取る／和  
 訳：(誰かから、何か/誰かを) 奪い取る)、управлять (кем-то) (直訳：(誰かを) 支  
 配する、動かす／和訳：(誰かを) 支配する、動かす)、сулить (что-то кому-то) (直  
 訳：(誰かに何かを) 予告する、約束する／和訳：(誰かに何かを) 予告する、約束す  
 る)、подсказывать (что-то кому-то) (直訳：(誰かに何かを) こっそり告げる／和  
 訳：(誰かに何かを) 暗示する)、заводить (завела куда-то) (直訳：(どこかへ) 連れ  
 て行く (連れて行った) ／和訳：(どこかへ) 連れて行く (連れて行った))、трогать  
 (кого-то \* в знач. "история жизни") (直訳：(「これまで歩んできた道」が、誰かに)  
 触れる／和訳：(「これまで歩んできた道」が、誰かに) 影響を及ぼす)、сплетать  
 (напр. пути) (直訳：(たとえば、道を) 編み上げる／和訳：(たとえば、道を) 編み  
 上げる、作り上げる)、указывать (что-то кому-то) (直訳：(何かを誰かに) 教える  
 ／和訳：(何かを誰かに) 教える)、покарать (кого-то) (直訳：(～を) 厳しく罰する、

報復する／和訳：(～を) 厳しく罰する、報復する)、**возносить** (кого-то) (直訳：(～を) 出世させる／和訳：(～が) 運良く出世する)、**баловать** (кого-то) (直訳：(～を) 甘やかす／和訳：(～を) 甘やかす)、**миновать** (кого-то) (直訳：(誰かのそばを) 素通りする／和訳：(誰かが) 運命を免れる)、**висеть на волоске** (直訳：髪の毛一本にぶら下がっている／和訳：危機に瀕している、風前の灯火だ)、**ударить** (кого-то) (直訳：(～を) 打つ、叩く／和訳：(～を) 打つ、(～に) 打撃を加える)、**пересекаться** (с другой судьбой) (直訳：(他の人の運命と) 交差する／和訳：(他の人の運命と) 交差する)、**швырять** (кого-то куда-то) (直訳：(誰かをどこかへ) 放り投げる／和訳：(誰かをどこかへ) 放り出す)、**прижимать** (кого-то) (直訳：(誰かを) 押さえつける／和訳：(誰かを) 追い詰める)、**заботить** (кого-то) (直訳：(～を) 心配させる／和訳：(～を) 心配させる)、**прельщать** (кого-то) (直訳：(～を) 誘惑する／和訳：(～を) 誘惑する)、**изменить** ... (直訳：...を変える／和訳：...を変える)、**испытывать** ... (直訳：...を試す／和訳：...を試す)

### <судьба (他動詞)>

**повторить** ... (直訳：...を繰り返す／和訳：...を繰り返す)、**решать** ... (直訳：...を決定する／和訳：...を決定する)、**искушать** ... (直訳：...を試す、誘惑する／和訳：運試しをする、冒険を試みる)、**влиять на** ... (直訳：...に影響を及ぼす／和訳：...に影響を及ぼす)、**узнать** (чью-то) ... (直訳：(誰かの) ...を知る／和訳：(誰かの) ...を知る)、**сетовать на** ... (直訳：...を嘆く／和訳：...を嘆く、身の上をかこつ)、**найти свою** ... (直訳：自らの...を見出す／和訳：自らの...を見出す)、**жаловаться на** ... (直訳：...のことで愚痴を言う／和訳：身の上をかこつ)、**бороться с** ... (直訳：...と戦う、格闘する／和訳：...と戦う、格闘する)、**благодарить** ... (直訳：...に感謝する／和訳：...に感謝する)、**разделить** ... (直訳：...を分かち合う／和訳：...を共にする)、**выяснить** ... (直訳：...を明らかにする／和訳：...を明らかにする、知る)、**требовать от** ... (直訳：...に(何かを) 要求する／和訳：...に(何かを) 要求する)、**смириться с** ... (直訳：...に妥協する／和訳：...に甘んじる、運命とあきらめる)、**обмануть** ... (直訳：...をだます／和訳：...を出し抜く)、**предсказать** ... (直訳：...を予言する、予告する／和訳：...を予言する、予告する)、**спорить с** ... (直訳：...と口論する、...に抵抗する／和訳：...にあらがう)、**управлять** ... (直訳：...を支配する、動かす／和訳：...を支配する、動かす)、**беспокоиться о** ... (直訳：...について心配する／和訳：...について心配する)、**определять** ... (直訳：...を決定する／和訳：...

を決定する)、спастись от ... (直訳: ...を免れる/和訳: ...を免れる)、выбирать ... (直訳: ...を選ぶ/和訳: ...を選ぶ)、прислушиваться к ... (直訳: ...に耳をすます、注意深く聞き耳を立てる/和訳: ...に耳をすます、...に従う)、вершить ... (直訳: ...を支配する、左右する/和訳: ...を支配する、左右する)、взять ... в свои руки (直訳: ...を手中にする/和訳: ...を手中にする、自ら支配する)、перехитрить ... (直訳: ...の裏をかく/和訳: ...の裏をかく、...を出し抜く)、мириться с ... (直訳: ...と和解する、妥協する/和訳: ...に甘んじる、運命とあきらめる)、покориться ... (直訳: ...に服従する/和訳: ...に従う、運命とあきらめる)、сказать ... (直訳: ...を告げる/和訳: ...を告げる)、устроить ... (直訳: ...を作る/和訳: ...を作る)、примириться с ... (直訳: ...を甘受する/和訳: ...に甘んじる、運命とあきらめる)、связать ... с (直訳: (~と) ...を結びつける/和訳: (~と) ...を共にする)、интересоваться ... (\* судьбой посылки) (直訳: ...に (与えられた運命に) 関心を持つ/和訳: ...に (与えられた運命に) 関心を持つ)、корить ... (за что-то) (直訳: (何かのことで) ...を非難する/和訳: (何かのことで) ...をとがめる、愚痴を言う)、роптать на ... (直訳: ...のことで愚痴を言う/和訳: 身の上をかこつ)、подчиниться ... (直訳: ...に従う/和訳: ...に従う、運命とあきらめる)、отразиться на ... (直訳: ...に反映する/和訳: ...に反映する、影響する)、попытать ... (直訳: ...を試す/和訳: 運試しをする)、предопределить ... (直訳: ...を決める、定める/和訳: ...を決める、定める)、переписать ... (直訳: ...を書き換える/和訳: ...を書き換える、変える)、проклинать ... (直訳: ...を呪う/和訳: ...を呪う)、быть не/равнодушным к ... (直訳: ...に無関心でいる/いない/和訳: ...に超然としている/おびえる)、облегчить ... (直訳: ...を楽なものにする/和訳: ...を楽なものにする)、предвидеть ... (直訳: ...を予見する/和訳: ...を予見する)、принимать (свою) ... (直訳: (自らの) ...を受け入れる/和訳: (自らの) ...を受け入れる)、быть довольным ... (直訳: ...に満足する/和訳: ...に満足する)、отдаться ... (直訳: ...に身をゆだねる、従う/和訳: ...に従う、甘受する)、волноваться о ... (直訳: ...について心配する/和訳: ...について心配する、気遣う)、пенять на ... (直訳: ...のことで愚痴を言う/和訳: 身の上をかこつ)、знать ... (直訳: ...を知っている/和訳: ...を知っている)、уйти от ... (直訳: ...から逃れる/和訳: ...から逃れる)、победить ... (直訳: ...に打ち勝つ/和訳: ...に打ち勝つ)、тревожиться о ... (直訳: ...について心配する/和訳: ...について心配する、気遣う)、печься о ... (直訳: ...に気を配る、心配する/和訳: ...に気を配る、心配する)、вверять свою ... (直訳: 自らの...をゆだねる/和訳: ...をゆだねる)

訳：自らの...をゆだねる)、**повиноваться** ... (直訳：...に服従する、従う／和訳：...に従う、運命とあきらめる)、**просить у** ... (直訳：...に(何かを)求める／和訳：...に(何かを)求める、幸運を当てにする)、**оплакивать** ... (直訳：...を悼む、嘆く／和訳：...を悼む、嘆く)、**молить** ... (直訳：...に懇願する／和訳：...に懇願する、幸運を当てにする)、**соединить** ... (直訳：...を結びつける／和訳：...を結びつける)、**заниматься** ... (直訳：...に配慮する、面倒を見る／和訳：...に配慮する)、**предугадать** ... (直訳：...を予測する、予見する／和訳：...を予測する、予見する)、**вверить** ... (直訳：...を任せる、委任する／和訳：...をゆだねる)、**бросать вызов** ... (直訳：...に挑戦する／和訳：...に挑戦する)、**творить** ... (直訳：...を創造する／和訳：...を作り出す)、**пойти наперекор** ... (直訳：...に逆らって進む／和訳：...に逆らって進む)、**сопротивляться** ... (直訳：...に抵抗する／和訳：...にあらがう)、**быть благодарным** ... (直訳：...に感謝する／和訳：...に感謝する)、**делить** ... (直訳：...を分かち合う／和訳：...を共にする)、**клясть** ... (直訳：...を呪う／和訳：...を呪う)、**угадать** ... (直訳：...を言い当てる、推測する／和訳：...を見抜く、当てる)、**прожить** ... (直訳：...を生き抜く／和訳：...を生き抜く)、**касаться** ... (直訳：...に触れる、関係する／和訳：...に関係する、関わる)、**обеспокоиться** ... (直訳：...のことを心配する、面倒を見る／和訳：...のことを心配する、配慮する)、**переменить** ... (直訳：...を取り替える、変える／和訳：...を変える)、**быть хозяином** ... (直訳：...の主人になる／和訳：...の主人になる、...の作者になる)、**быть игрушкой** ... (直訳：...のおもちゃになる／和訳：...にもてあそばされる、翻弄される)、**угодить** ... (直訳：...の気に入る、...を喜ばす／和訳：...の気に入る、...を喜ばす)、**исследовать** ... (直訳：...を調べる／和訳：...を調べる)、**перевернуть** ... (直訳：...をひっくり返す／和訳：...を一変する)、**описать** ... (直訳：...を叙述する、述べる／和訳：...を叙述する、述べる)、**идти навстречу** ... (直訳：...に向かって行く、応ずる／和訳：...に向かって行く、応ずる)、**вопросать о** ... (直訳：...について尋ねる／和訳：...について尋ねる)、**перебороть** ... (直訳：...に打ち勝つ／和訳：...に打ち勝つ)、**исполнить** ... (直訳：...を実行する、成し遂げる／和訳：...を成し遂げる、実現する)、**умилостивить** ... (直訳：...に哀れんでもらう／和訳：...に哀れんでもらう)、**заслужить** ... (直訳：...を勝ち取る／和訳：...を勝ち取る)、**быть недовольным** ... (直訳：...に満足できなくなる、不満を抱く／和訳：...に満足できなくなる、不満を抱く)、**переспорить** ... (直訳：...を言い負かす、言いくるめる／和訳：...を言い負かす、言いくるめる)、**толковать** ... (直訳：...を解釈する／和訳：...を読み解く)、

быть встревоженным ... (直訳：...のことを心配する、気遣う／和訳：...のことを心配する、気遣う)、отдавать в руки ... (直訳：...の手に(何かを)渡す／和訳：...に(何かを)ゆだねる)、следовать зову ... (直訳：...の呼び掛けに従う／和訳：...の呼び掛けに従う)

#### <судьба、その他の用法と連語>

волею ... (直訳：...の意志によって／和訳：偶然に)、подарок ... (直訳：...の贈り物／和訳：...の贈り物、賜物)、ирония ... (直訳：...の皮肉／和訳：...の皮肉、いたずら)、не ... (в значении "не суждено") (直訳：(何かをする)運命ではなかった／和訳：(何かをする)巡り合わせではなかった)、ответственность за ... (直訳：...に対する責任／和訳：...に対する責任)、(принимать) участие в ... (直訳：...に加わる／和訳：...を共にする)、удары ... (直訳：...の打撃、衝撃／和訳：...の打撃、衝撃)、какими ... (судьбами \* мн. число) (直訳：どのような運命によって／和訳：なんの巡り合わせで、奇遇ですね)、превратности ... (直訳：...の急変／和訳：...の急転)、от ... не уйдешь (直訳：...からは逃れられない／和訳：...からは逃れられない)、баловень ... (直訳：...の寵児／和訳：...の寵児、幸運児)、поворот ... (直訳：...の急転／和訳：...の急転)、линия ... (直訳：...の線、道筋／和訳：運命)、колесо ... (直訳：...の輪／和訳：...の輪)、судьба-злодейка (直訳：運命という悪党／和訳：運命という悪党、つらい運命、悲運)、дар ... (直訳：...の賜物／和訳：...の賜物)、зов ... (直訳：...の呼び掛け／和訳：...の呼び掛け)、выбор ... (直訳：...の選択／和訳：...の選択)、перст ... (直訳：...の指／和訳：宿命、天命)、хозяин своей ... (直訳：自らの...の主人／和訳：自らの...の作り手)、рука ... (直訳：...の手／和訳：...の手)、покорность ... (судьбе) (直訳：...への服従／和訳：...への服従)、претензии к ... (直訳：...に対する苦情／和訳：...に対する不平)、книга ... (мн. число) (直訳：...の書／和訳：...の書)、оставить на произвол ... (直訳：...の好きなようにさせる／和訳：成り行きに任せる、見殺しにする)、насмешка ... (直訳：...の嘲笑／和訳：...の嘲笑、奇妙で不可解な偶然)、вызов ... (直訳：...の挑戦／和訳：...の挑戦)、вопреки ... (直訳：...にあらがって／和訳：...にあらがって)、зигзаги ... (直訳：...の曲折／和訳：...の曲折)、избранник ... (直訳：...に選ばれたもの／和訳：...の寵児)、бросать на произвол ... (直訳：...の好きなようにさせる／和訳：成り行きに任せる、見殺しにする)、перипетии ... (直訳：...の激変、急展開／和訳：...の激変、急展開)、... не миновать (直訳：...を免れることはできない／和訳：...を免れること

はできない)、шутка ... (直訳：...の冗談、悪ふざけ／和訳：...の戯れ、いたずら)、  
милость ... (直訳：...の哀れみ／和訳：...の哀れみ)、сплетение (судеб) ... (直  
訳：...の絡み合い／和訳：...の絡み合い)、капризы ... (直訳：...のいたずら／和  
訳：...のいたずら)、игрушка ... (直訳：...のおもちゃ／和訳：...の慰み者)、  
переносить превратности ... (直訳：...の急転を経験する／和訳：...の急転を経験す  
る)、несправедливость ... (直訳：...の不公平／和訳：...の不公平)、узор ... (直訳：  
...の模様／和訳：...の文 (あや))、перекресток ... (直訳：...の交差点／和訳：...の  
交差点)、назначенная ... (直訳：指定された...／和訳：定められた...)、какая ...  
Уготована (直訳：どのような...が用意されているのか／和訳：どのような...が待ち  
受けているのか)、вмешательство в ... (直訳：...への介入／和訳：...への介入、...の  
変更)、... уготована (直訳：...が用意されている／和訳：...が定められている)、  
власть ... (直訳：...の力／和訳：...の力)、проклятие ... (直訳：...の呪い／和訳：  
...の呪い)、длань ... (直訳：...の手／和訳：...の手)、против ... не поперешь (直訳：  
...に逆らって進むことはできない／和訳：...には従うほかない)、жестокость ... (直  
訳：...の残酷さ、厳しさ／和訳：...の残酷さ、厳しさ)、обиженный ... (судьбою)  
(直訳：...に辱められた、愚弄された／和訳：不運な、恵まれない)、перемена ...  
(直訳：...の変化／和訳：...の変化)、общность (судеб) (直訳：...の共通性／和  
訳：...の共通性)、выверт ... (直訳：...の奇妙な振る舞い／和訳：不思議な巡り合わ  
せ)、с ... не поспоришь (直訳：...とは議論できない／和訳：...にはあらがえない)、  
брошенный ... (直訳：...に投げられた、放り出された／和訳：...に放り出された、  
見放された)、предназначенный ... (судьбою) (直訳：...によって定められた／和  
訳：...によって定められた)、прихоть ... (直訳：...の気まぐれ／和訳：...の気まぐ  
れ、いたずら)、веление ... (直訳：...の命令／和訳：...の命令)、жертва ... (直訳：  
...の犠牲／和訳：...の犠牲)、награда ... (直訳：...の褒美／和訳：...の褒美、成功)、  
дыхание ... (直訳：...の息吹／和訳：...の息吹)、причуда ... (直訳：...の気まぐれ／  
和訳：...の気まぐれ、いたずら)、отмеченный ... (судьбой) (直訳：...によって印を  
つけられた／和訳：...によって未来を定められた、選ばれた)、игрушка в руках ...  
(直訳：...の手中のおもちゃ／和訳：...の慰み者)、распоряжение ... (直訳：...の命  
令／和訳：...の命令)、предначертанный ... (直訳：...によって定められた／和訳：  
...によって定められた)、гонимый ... (судьбою) (直訳：...によって追われている／  
和訳：...によって追われている)、отдаться в руки ... (直訳：...の手に身をゆだねる／  
和訳：...に従う、...を甘受する)、напасти ... (судьбы) (直訳：...の災厄／和訳：不

幸、不運)、отдаться на милость ... (直訳：...の慈悲心に身を任せる／和訳：...の慈悲心に身を任せる)、обойдённый ... (судьбою) (直訳：...によってだまされた／和訳：不幸な、不運な)、предписанный ... (судьбою) (直訳：...によって定められた／和訳：...によって定められた)、неизменность ... (直訳：...の不変性／和訳：...の不変性)、испытывать удары ... (直訳：...の打撃を経験する、受ける／和訳：...の打撃を経験する、受ける)

このような連語の豊富さと数の多さ (320 個以上) は、ロシア語において судьба (運命) という言葉が非常によく習得されていることを示す。судьба は、非常に多種多様な固有の形容語をもち (горькая (苦い)、тяжелая (重い)、добрая (明るい/良いなど)、しばしば目的語としても主語としても用いられる。現段階では、連語の数の多さと多様性は、судьба という言葉が、すでに前で述べたとおり、ロシア語においては自らのクラスター (судьба (運命)、участь (運命/宿命)、доля (運/定め)、рок (運命/宿命) などの同義語群) の中心であるからだと推測できる。この同義語群の他の言葉に結合する連語の数はずっと少ないと考えられるが、後ほどこれらの言葉を分析し、この仮説を検証してみたい。このほかに、前述したとおり、ロシア語の судьба という言葉は、他の言語での対応語/相当する語句に比べ使用頻度がずっと高い。このことから、他の言語においては、運命を意味するクラスターに属する言葉の連語の数はやや少ない、という仮説が浮上する。この事実についても、後ほど各言語における場合を分類して検証する。судьба という言葉は抽象的な概念なので、上述した語用法は、前項で解説したとおり、他の物質的または抽象的概念をもつ言葉との比較によって条件づけられる。судьба という言葉にどのような概念の意味が写像されるかを知るため、これらをいくつかのグループに分類してみる。висеть на волоске (危機に瀕している)、одинокая (孤立した) などの特徴的な語用法を表面的に分析すると、即座に жизнь (人生) という概念に行きつく。以下に судьба という言葉の連語のうち、жизнь (人生) という言葉と一緒に用いられ、жизнь (人生) という概念が судьба (運命) という言葉の概念構造の要素の一つであることによって条件づけられるものを列挙する。(注 5)、(注 6)、(注 7)

отразиться на ..., соединить ..., вопрошать о ..., неизменность ... , испытывать удары ..., распоряжаться (кем-то), обходиться (с кем-то как-то), повести (кого-то куда-то), суровая, великая, изменить ..., ... уготована, зависеть (от чего-то), дальнейшая, печальная, одна, нелёгкая, счастливая, тяжёлая, творческая, сложная, удивительная, человеческая,

странная, женская, интересная, несчастная, будущая, лёгкая, сломанная, простая, хорошая, плохая, лучшая, драматичная, единственная, прекрасная, жалкая, героическая, минувшая, унылая, исключительная, безоблачная, плачевная, благополучная, неотвратимая, непостижимая, блистательная, покалеченная, одинокая, дивная, бессмысленная, казённая, унижительная, неприметная, мещанская, дурная, приводить (кого-то к кому-то/чему-то), ждать (кого-то), складываться, преподносить (что-то), приготовить (что-то кому-то), сталкивать (кого-то с кем-то), связать (кого-то с кем-то), заносить (кого-то куда-то), предоставлять (что-то, \*напр. возможность, шанс), подкинуть (что-то кому-то), поворачиваться (к-кому то), заставлять (кого-то сделать что-то), разводиться (кого-то с кем-то), забрасывать (кого-то куда-то), поставить (кого-то в определенные обстоятельства), идти (на встречу кому-то / своим путем), трогать (кого-то \* в знач. "история жизни"), сплетать (напр. пути), баловать (кого-то), висеть на волоске, пересекаться (с другой судьбой), прижимать (кого-то), заботить (кого-то), прельщать (кого-то), повторить ..., влиять на ..., сетовать на ..., жаловаться на ..., разделить ..., смириться с ..., устроить ..., связать ... с, облегчить ..., быть довольным ..., вверять свою ..., оплакивать ..., вверить ..., делить ..., клясть ..., прожить ..., переменить ..., быть хозяином ..., исследовать ..., перевернуть ..., описать ..., быть недовольным ..., ответственность за ..., линия ..., колесо ..., хозяин своей ..., перипетии ..., вмешательство в ..., горькая, посмертная, изменчивая, тревожная, своеобразная, поразительная, переменчивая, неудачная, позорная, бросать (кого-то куда-то), бить (кого-то), заводить (завела куда-то), швырять (кого-то куда-то), мириться с ..., заслужить ..., (принимать) участие в ..., несправедливость ..., роптать на ..., управлять ..., напасти ..., толковать ..., доставаться, выверт ..., узор ...

судьба と 人生 の両方に共通する連語は全部で135個であった。これらの連語の一部はいくつかの他のソースドメインにも共通することを後ほど明らかにする。现阶段では судьба という言葉の連語の約半数以下(41%)が жизнь という言葉のソースドメインに条件づけられることがいえる。このソースドメインの存在は基本的に表面にあり、多くの言語話者は意識的に жизнь (人生) という言葉を судьба (運命) という言葉の同義語としており、また逆に судьба (運命) を жизнь (人生) の同義語として使用する。言語話者が жалуется на свою судьбу (自らの運命を嘆く) というときは、もちろんいくらかのニュアンス(話者自身の人生に対する影響力の評価)はあるが、まさに彼自身の「人生」が念頭におかれている。

また、前述したように、概念のソースドメインが常にその言葉の同義語として使えるとは限らないことも指摘できる。(ロシア語の言葉 драка (喧嘩) は спор (論争/議論) のソー



ソースドメインであるが、спор の概念を、драка という言葉に置きかえることは困難である。) судьба と жизнь という概念のもつ共通した性質 (горькая (苦い)、тяжелая (重い) など) は、ある抽象的概念の連語 (概念メタファー) が他の抽象的概念に写像されているという本稿の第一部で述べた結論を裏づける。抽象概念のソースドメインには必ず物質的概念が入っている必要がない。つまり、судьба に горькая (苦い) や тяжелая (重い) という自らの特性を写像しているのは жизнь (人生) という概念であり、судьба (運命) と他の物質的に重いもの (たとえば石) や苦い液体との直接的な比較ではない。同様に興味深いのは、жизнь (人生) という言葉はレーマの使用頻度リストである«Новый частотный словарь русской лексики» (新ロシア語用語頻度辞典) (Ляшевская, 2009) において最も頻繁に使用される言葉の第 55 位に入っているが、судьба (運命) という言葉は第 507 位であることである。この傾向は、本稿で立てた、概念の樹状構造の仮説と有機的に合致する。Жизнь (人生) という言葉は、ソースドメインに相応しく、ロシア語話者にとってはより基本的で使用頻度の高い概念である。引き続き судьба という言葉の分析を行い、この語が表す概念の構造の他の要素も定義しよう。327 個の連語のうち 56 個 (17%) は будущее (未来) という言葉に相応する。(注 5)、(注 6)、(注 7)

... уготована, общая, незавидная, особая, неизбежная, единая, различная, мрачная, предсказанная, решает (что-то), волновать (кого-то), тревожить (кого-то), сулить (что-то кому-то), решать ..., узнать (чью-то) ..., выяснить ..., предсказать ..., беспокоиться о ..., определять ..., взять ... в свои руки, сказать ..., предопределить ..., быть не/равнодушным к ..., предвидеть ..., знать ..., тревожиться о ..., пещься о ..., предугадать ..., творить ..., угадать ..., касаться ..., идти навстречу ..., выбор ..., какая ... уготована, великая, изменить ..., зависеть (от чего-то), дальнейшая, плохая, лучшая, непостижимая, ждать (кого-то), висеть на волоске, заботить (кого-то), переменить ..., позорная, заслужить ..., волноваться о ..., всеобщая, скорбная, отведённая, выбирать ..., заниматься ..., быть встревоженным ..., ... не миновать, окончательная

предугадать (予測する) や предвидеть (予見する) などの語結合は、судьба (運命) の性質の一部には、まさにこの言葉 (будущее (未来)) が含まれることを、明確に示している。жизнь (人生) というソースドメインの場合と同様に、будущее (未来) というソースドメインも、元の意味を大きく損なうことなく、ある文において судьба (運命) の同義語になることができる

上述したリストにあるもの以外の судьба という言葉の連語も検討、分析してみたい。容

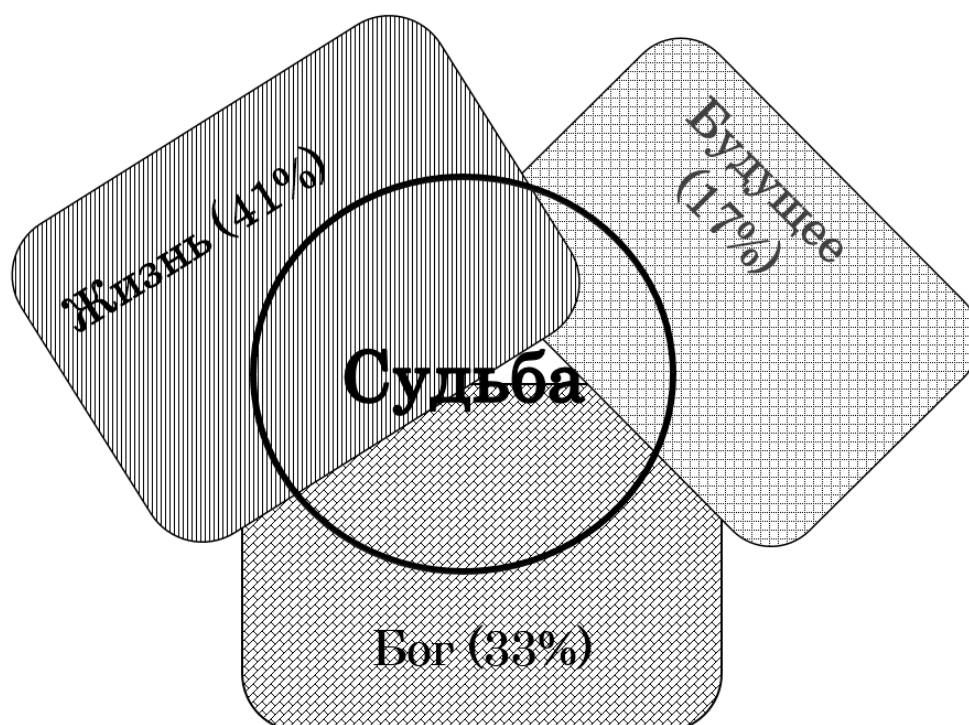
易に気づくのは、残りの連語の大部分は、人間をコントロールする何らかの至高の、超自然的な力の発現に関連することである。以下に挙げた言葉（109例、全部の連語の33%）は全て、**бог**（神）や**господь**（主/神）といった言葉に特徴的なものである。この関連性は、以下のような特徴的な語結合において顕著にみられる。**отпускать кому-либо что-либо**（何かを与える）、**щадить кого-то**（～を容赦する）、**смиловаться над кем-то**（～に慈悲をかける）、**перст**（の指）。（注5）、（注6）、（注7）

злая, жестокая, милостивая, дарить/подарить (что-то), делать (по своему / с кем-то что-то), давать (давать что-то (напр. отсрочку), сделать что-то), посылать (что-то/кого-то), улыбаться (кому-то), отпускать (кому-то некоторое время для чего-то), хотеть (что-то), хранить (кого-то), помогать (кому-то), спасать (кого-то), смиловаться (над кем-то), благоволить (к кому-то), относиться (к кому-то определенным образом), щадить (кого-то), вручать (что-то/кого-то кому-то), давать шанс (кому-то), судить (кого-то), назначать (что-то кому-то \* напр. "одиночество" или "путь"), подавать знаки (кому-то), забирать (что-то/кого-то у кого-то), подсказывать (что-то кому-то), указывать (что-то кому-то), покарать (кого-то), возносить (кого-то), ударить (кого-то), покориться ..., отдалиться ..., пенять на ..., просить у ..., молить ..., быть игрушкой ..., угодить ..., умилостивить ..., отдавать в руки ..., следовать зову ..., волею ..., подарок ..., перст ..., покорность ... (судьбе), претензии к ..., насмешка ..., избранник ..., милость ..., проклятие ..., длань ..., против ... не поперешь, жестокость ..., обиженный ... (судьбой), предназначенный ... (судьбой), прихоть ..., награда ..., отмеченный ... (судьбой), игрушка в руках ..., распоряжение ..., распоряжаться (кем-то), обходиться (с кем-то как-то), отнимать (что-то/кого-то у кого-то), обижать (кого-то), предлагать (кого-то/что-то кому-то), повести (кого-то куда-то), щедрая, неумолимая, добрая, недобрая, благодетельная, лютая, сострадательная, грубая, бесчувственная, сводить (кого-то с кем-то), управлять (кем-то), удары ..., вызов ..., дыхание ..., причуда ..., суровая, перебороть ..., переспорить ..., испытывать ..., искушать ..., благодарить ..., требовать от ..., дар ..., зов ..., рука ..., власть ..., веление ..., отдалиться в руки ..., отдалиться на милость ..., обмануть ..., перехитрить ..., корить ... (за что-то), проклинать ..., брошенный ..., с ... не поспоришь, предначертанный ..., гонимый ... (судьбой), спорить с ..., предписанный ... (судьбой), прислушиваться к ..., повиноваться ..., победить..., сказать ..., подчиниться ..., бросать вызов ..., быть благодарным ...

Бог（神）という言葉も、レーマの使用頻度リストである「Новый частотный словарь русской лексики」（新ロシア語用語頻度辞典）（Ляшевская、2009）において **жизнь**（人生）

という他のソースドメインと同様に、**судьба**（運命）という言葉よりも上位の第 220 位であることが指摘できる。

以上、ロシア語の **судьба**（運命）という言葉の意味に写像される三つの主要な概念を考察し、この語のもつ連語の約 90% がそれら三つの概念に集約されることが分かった。**судьба**（運命）という言葉に結びつく連語の数で判断するなら、これらの三つの概念はともに **судьба**（運命）という概念の構成において顕著な役割を果たし、その構造の中心をなしていると言える。これらを図式にあらわすと以下のようなになる。



次に、まだ分類していない残りの約 10% の連語を取り上げ、背後にある周辺的なソースドメインの存在を分析してみたい。残りの連語の大部分は、いくつかのグループに分類できる。最初のグループは、**путь**（道）または **дорога**（道）というソースドメインに結びつけることができる。このグループのすべての連語を以下に挙げる。（注 5）、（注 6）、（注 7）

**неисповедимая** 不思議な/不可知な, **пересекаться** (с другой судьбой) 交差する (他の運命と)、**зигзаги ...** のジグザグ, **сплетение** (судеб) ..., 絡み合い (運命の) **перекресток** (...交差点), **повести** (кого-то куда-то) 導く (誰かをどこかへ), **сплетать** (напр. пути) 結びつける (例えば道), **поворот** (...曲がり角), **заводить**

(завела куда-то) (連れて行く (どこかへ連れて行った)), особая (特別の), дальнейшая (これからの), приводить (кого-то к кому-то/чему-то) (連れてくる (誰かを、誰かのところに/何かに)), заносить (кого-то куда-то) (連れて行く (誰かをどこかへ)), повторить (...繰り返す,) найти свою ..., (自分の...を見つける) какими ... (судьбами \* мн. число) どのような (運命によって \*複数形)

上に挙げた連語の一部は、すでにソースドメイン *жизнь* (人生) に分類されていたことに気づくだろう。例えば *перекресток* (交差点)、*заводить кого-то куда-то* (誰かをどこかへ連れて行く)、*дальнейший* (これからの) などである。この概念の連語の表面的な分析によって、*дорога/путь* というソースドメインは、ロシア語における *жизнь* (人生) という概念の構造において、ある一定の位置 (中央ではないかもしれないが) を占めていることが明らかになる。それらの大部分が *судьба* (運命) という概念に転移したことは、十分にあり得る。しかし、「道」という意味と結びついた *судьба* (運命) という言葉の連語の中には、*жизнь* (人生) という概念には適用できないものもある。例えば、*неисповедимая судьба* (不可知な運命) や *какими судьбами?* (どのような運命によって?) という表現がある。*неисповедимый* (不可知な) というロシア語の言葉は、それ自体の使用頻度がとても低く、他の言葉とも非常に限定的な範囲でしか結びつかない。

この言葉と最も強く結合するのは *пути Господни* (神の道) という言葉である (*неисповедимы пути Господни* (不可知な神の道/神のみ業は神秘に包まれている) ロシア語で、出会いを引き起こした状況への驚きをあらわす表現 *какими судьбами?* (どのような運命によって? /偶然ですね) という語結合については、ソースドメインの謎を解く鍵は *судьба* (運命) という言葉が複数形になっていることである。この用法は、上述した *неисповедимы пути Господни* (不可知な神の道) という成句においても、*путь* (道) という言葉が複数形でのみ使用されることに関連している確率がきわめて高い。このような点では、文学において時々使用される *какими неисповедимыми путями* (どのような不可知な道を経て) という語結合は非常に示唆的である。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

Салтыков-Щедрин «Господа ташкентцы. Картины нравов».

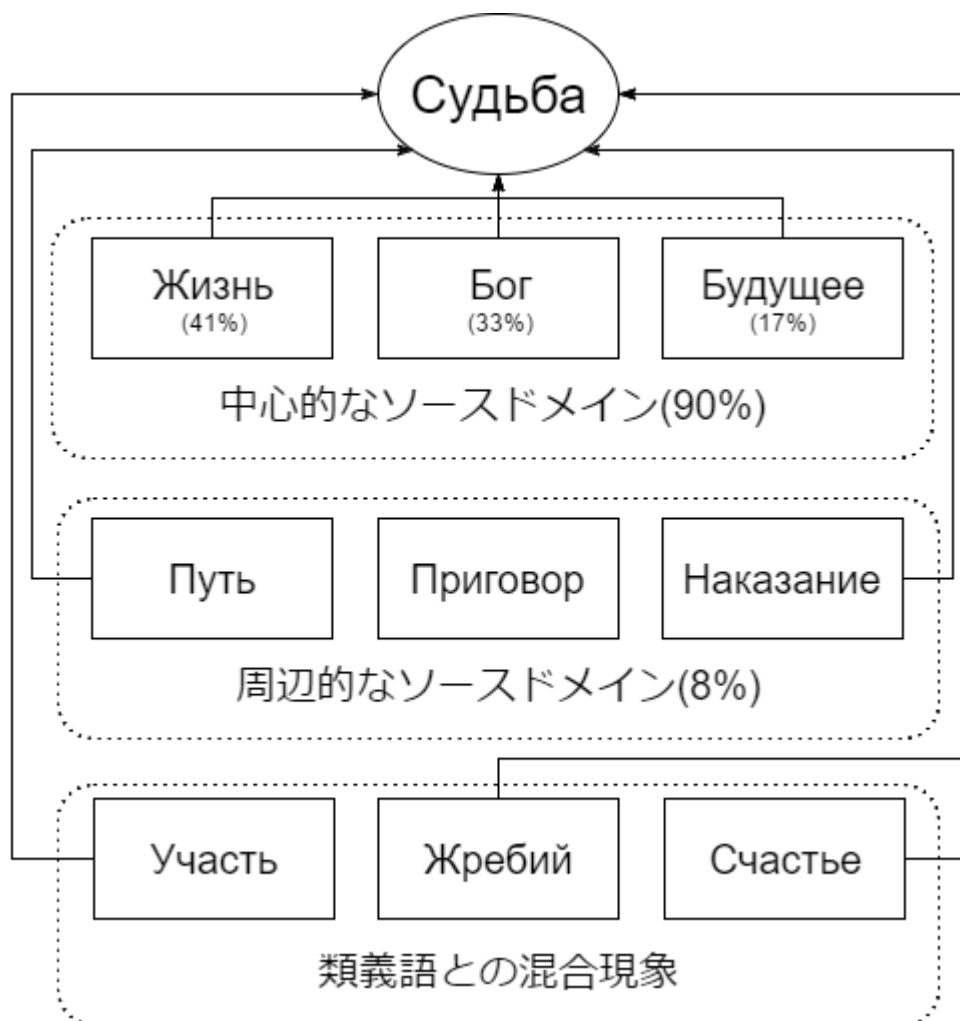
Но когда он, наконец, написал книжицу, в которой изобразил, **какими неисповедимыми путями** он дошел до сознания истин святой православной веры, то все признали, что более благонадежного русского, чем этот русский Ферлакур, — и желать не надо.

まだ分類されていない連語からなる次の二つのグループは、言葉本来の語源と関連づけることができる。「Историко-этимологический словарь современного русского языка»（現代ロシア語歴史語源辞典）（Черных、1999）によれば、судьба という言葉は 少なくとも 11 世紀から使用されているが、最初は、語根からも推測できるように裁判、裁判所、判決という意味をもっていた。その後この言葉の意味は変化したが、最初の意味の影響は、いくつかの連語においてその痕跡をみることができる。назначенная судьба（定められた運命）、смириться с судьбой（運命に屈する）、примириться с судьбой（運命に忍従する）、исполнить судьбу（運命を遂行する）、вопреки судьбе（運命に逆らって）、подчиниться судьбе（運命に従う）などの語結合は、решение（決議）や приговор（判決/宣告）などの概念を導くが、переписать（судьбу）（書き換える（運命を））という連語は решение（決議）というロシア語の言葉には相当せず、приговор（判決/宣告）という言葉のみに当てはまる。

裁判というテーマに関連した судьба の周近的ソースドメインの一つは、наказание（罰）という概念である。これは以下のような連語に表れる。уйти от судьбы（運命から逃れる）、принимать свою судьбу（自らの運命を受け入れる）、спастись от судьбы（運命から救う）、не миновать судьбы（運命を免れることはできない）、от судьбы не уйдешь（運命から逃れることはできない）、судьба постигла（кого-то）（運命は誰かを捉えた）、судьба миновала кого-то（運命は誰かを通り過ぎた）、вершить судьбу（運命を執行する）。

судьба（運命）という言葉の連語の分析によって、前項の概念の構造の分析の際に我々の視野に入らなかった、もう一つの興味深い現象が解明できる。それは次に挙げる残りの連語の分析で現れる。すなわち、1. испытывать судьбу（運命を体験する）、попытать судьбу（運命を試みる）2. кому-то выпала определенная судьба（ある運命が誰かに当たった）、слепая судьба（盲目的な運命）3. отведенная кому-то судьба（誰かに配られた運命）などである。これら三つのすべてのグループにおける連語はかなり特殊で、ごく限られた数の言葉としか語結合を形成しない。したがって、どの概念が運命という言葉に相当するかを判断することは難しくない。第一のグループは счастье（幸運）、第二のグループは жребий（賽、くじ）、第三のグループは участь（宿命）である。この三つの言葉は、ロシア語における судьба（運命）という言葉の同義語として、すでに前述している。これらの中で судьба（運命）という言葉に結びつく連語は非常に少なく、これらはいつも頻繁に使用されるわけではない。そのため счастье（幸運）、жребий（賽、くじ）、участь（宿命）という概念が、судьба（運命）という言葉の完全なソースドメインであると明言することはできないが、同義語群（クラスター）の一つの語から他のものへの性質の転移は発生していると考えられる。この考察が他の同義語群にも当てはまるかは後ほど検証したいが、このよ

うな転移は全く自然的なものである。なぜなら母語話者は、同義の概念の間に必ずしも常に厳密な境界線を引くわけではなく、それらを周期的に互換し、それによって元来はその概念に特有ではない、ある周辺的な連語が定着するからである。連語の分析結果によって судьба（運命）というロシア語の概念の構造は、以下のように推測される。



Weirzbicka (1992、72) の NSM 法による説明は以下のとおりである。

sud'ba

- (a) different things happen to people
- (b) not because they want it
- (c) one can think this: more bad things will happen to me than good things
- (d) one cannot think: these things will not happen to me if I say: 'I don't want it'
- (e) it would be bad to say: 'I don't want it'

(f) I imagine I know that things happen to people because someone says: 'I want it'

(g) I imagine this someone can say things about people that other people can't say

(h) I think: all good and bad things that happen to a person are parts of one thing

図で示したように、жизнь (人生) は連語の数から判断すれば、судьба (運命) という概念の主要なソースドメインであるが、この言葉のすべての固有の連語が судьба (運命) という概念に転移しているというわけでは決してない。つまり、概念の部分的写像という効果が観察できる。

例えば、液体や水という概念に何らかの関連があり、人生という言葉に固有の語結合のうち、судьба (運命) という言葉と一緒に使用されるものは全くない。жизнь течет (人生は流れる) (размерно (整然と)、быстро (速く)、жизнь кипит (人生は沸騰している)、жизнь бьёт ключом (人生が湧き出る)、жизнь протекает (人生は流れ過ぎる)、неторопливая жизнь (悠々とした人生)、течение жизни (人生の流れ) などである。前項で指摘したとおり、概念のソースドメインのある性質の部分的写像の過程および概念はまだ研究されておらず、体系的に叙述されていない。ある性質 (連語) がソースドメインから概念へ転移するかどうかの理由やアルゴリズムは、明確化されておらず、しばしば随意的であるかのように感じられる。しかし、судьба (運命) と жизнь (人生) という概念の場合、少なくとも、写像されていない連語の一部は、ある一つのテーマによって結びつけられていることが明確に分かる。正確に言及するためには、ロシア語における жизнь (人生) という概念の個別の研究が必要不可欠であるが、表面的な分析によると、жизнь (人生) という概念の中に、なんらかの理由で судьба (運命) という概念に入ることができなかった вода (水)、река (川)、ручей (小川) という水関連のソースドメインが存在するということが分かる。

もう一方で、разрушить (破壊する)、построить (建設する)、сломать (壊す)、перевернуть (ひっくり返す) などの структура (構造/組織)、строение (構造/構成) に関連した連語は全て、судьба と жизнь に共通することが分かる。つまりここでもまた、連語の一部の随意的な写像ではなく、ソースドメイン全体の性質の転移がなされたことになる。これらの事実から、部分的写像は常に随意的であるわけではなく、ある性質は一つのソースドメインによって結合されたグループごとに、転移されたり、されなかったりすることが推測できる。

文化的キーワードなどの複雑で抽象的な概念の意味の研究は、しばしば 研究者自身の個人的感覚や言語領域が基礎になるということを、前項ですでに言及した。その結果、い

くつかの研究の結論や総括は、他の言語話者の疑念をまねくことも起こり得る。それゆえに、我々がとった連語の詳細な分類という手法は、評価の客観性を高めるためにきわめて重要である。例として、Shmelev（多くのロシア語のキーワードや概念の優れた分析で有名な学者）の論文の結論（Шмелев, 2009, 209–210）と、我々の得た研究結果とを比較したい。

Существительное судьба имеет в русском языке два значения: ‘события чьей-либо жизни’ (В его судьбе было много печального) и ‘таинственная сила, определяющая события чьей-либо жизни’ (так решила судьба). В соответствии с этими двумя значениями слово судьба возглавляет два раз личных синонимических ряда: (1) доля, участь, удел, жребий и (2) рок, фатум, фортуна....

Однако в обоих случаях за употреблением этого слова стоит представление о том, что из множества возможных линий развития событий в какой-то момент выбирается одна (решается судьба). После того как судьба решена, дальнейший ход событий уже как бы предопределен, и это отражено во многих русских пословицах, концептуализующих судьбу как некое существо, подстерегающее человека или гонящееся за ним (ср. Судьбы не миновать; От судьбы не уйдешь).

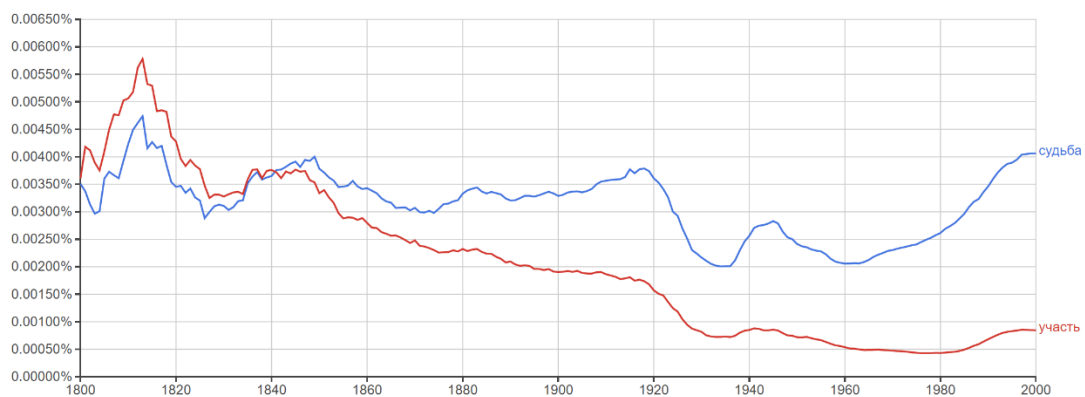
ロシア語において *судьба* 運命 という名詞は二つの意味を持つ。一つは「ある人の人生に起きる出来事」（例：В его судьбе было много печального 「彼の運命にはたくさんの悲しいことがあった」）で、もう一つは「ある人の人生を決定する秘められた力」（例：так решила судьба 「運命がこのように決めた」）である。この二つの意味に対応し、*судьба* 運命 という言葉の同義語は次の二つのグループに分かれる。(1) доля 運/定め、участь 運命/宿命、удел 運命/天恵、жребий 運命/くじ (2) рок 運命/宿命 фатум 運命/天命 фортуна 運命/幸運....

しかしいずれにおいても、この言葉を使う場合は、出来事が進展していく際に、起こりうる数多くの選択枝の中からある時に一つが選ばれる（*решается судьба* 運命によって決定される）という概念が浮かびあがる。運命が決定された後は、それからの出来事の進展はすでに定められたものということになる。この考え方は、運命を、人間を待ち受けつきたもうものと概念づけた、多くのロシアの諺にも反映されている（例：Судьбы не миновать 「運命を免れることはできない」 От судьбы не уйдешь 「運命からは逃げられない」）。



Shmelev の前提によれば、*судьбы не миновать* (運命を免れない) や、*от судьбы не уйдешь* (運命からは逃げられない) といった表現では、*судьба* という概念が、人を待ち受けている、あるいは人を追いかけるある種の存在と同一視されている。と同時に、我々の分析が示すように *судьба* という概念にはそのような意味が一切ない。*судьба* に全く別のソースドメイン、つまり *наказание* (罰) という意味のソースドメインが入っており、*не миновать* (免れない) や *не уйдешь* (逃げられない) という連語は *наказание* から写像される。罰の意は、上に示された *судьба/наказание постигла кого-то* (誰かを運命/罰が襲う) や *судьба/наказание миновала кого-то* (誰かが運命/罰を免れた) といった表現の中にも見ることができる。

ロシア語における *судьба* という概念をより正確に説明するためには、その他の幾つかの代表的な同義語との違いを比較すべきと考える。ここでは、*участь* (宿命) と *рок* (凶運) の意味について考察することにする。まずは *участь* という概念について分析してみよう。興味深いことに、Google n-gram viewer (注 6) のデータによれば、*участь* という語は 200 年前には *судьба* という語よりも頻繁に使われていた。両語の使用頻度が同程度になったのが 1840 年代頃で、その後はほぼ一貫して *судьба* の使用頻度が増し、両者の差が広がっていったとされている。



このデータが正しいなら、この時期にロシア語話者の意識に何らかの変化が起き、*судьба* がより重要かつ必要な概念になり、それと同時に *участь* に対する話者の関心が失われた結果、その語義が末端に追いやられた事になる。同意義語群内における中心的概念の転換というテーマは、別の研究に譲るべきであるので、ここでは *участь* という概念の現代的な意味について研究することとし、手始めとしてこれを使った連語を下記に示す。(注 5)、(注 6)、(注 7)

## <形容詞+участь>

печальная (直訳：悲しい／和訳：悲しい)、незавидная (直訳：うらやむに足りない／和訳：うらやむに足りない、あやかりたくない)、аналогичная (直訳：似たような／和訳：似たような)、подобная (直訳：似たような／和訳：似たような)、подобная (直訳：似たような／和訳：似たような)、страшная (直訳：恐ろしい／和訳：恐ろしい)、лучшая (直訳：最善の／和訳：最善の)、горькая (直訳：苦い／和訳：痛ましい、悲運)、тяжёлая (直訳：重い／和訳：過酷な、つらい)、ужасная (直訳：悲惨な／和訳：悲惨な)、завидная (直訳：うらやましい／和訳：うらやましい)、дивная (直訳：素敵で、素晴らしい／和訳：素晴らしい)、нелёгкая (直訳：容易でない／和訳：つらい)、плачевная (直訳：悲惨な／和訳：悲惨な)、жалкая (直訳：惨めな／和訳：惨めな)、плохая (直訳：悪い／和訳：悲惨な、不運)、посмертная (直訳：死後の／和訳：死後の)、странная (直訳：奇妙な／和訳：奇妙な)、дальнейшая (直訳：今後の／和訳：今後の、将来)、злая (直訳：悪意に満ちた、意地悪な／和訳：不幸な、悲運)、вечная (直訳：永遠の／和訳：永遠の)、общая (直訳：共通の／和訳：共通の)、загробная (直訳：死後の／和訳：死後の)、несчастливая (直訳：不幸な／和訳：不幸な、不運)、конечная (直訳：最後の／和訳：最後の)、жестокая (直訳：残酷な／和訳：残酷な、過酷な)、хорошая (直訳：良い／和訳：良い、幸運)、тяжёлая (直訳：重い／和訳：過酷な、つらい)、женская (直訳：女の／和訳：女の)、лёгкая (直訳：軽い、楽な／和訳：楽な)、окончательная (直訳：最終的な／和訳：最終的な)、скорбная (直訳：悲しい、痛ましい／和訳：悲痛な)、позорная (直訳：恥ずべき／和訳：屈辱的な)、счастливая (直訳：幸せな／和訳：幸せな、幸運)、сходная (直訳：似たような／和訳：似たような)、суровая (直訳：厳しい、仮借ない／和訳：仮借ない、過酷な)、единая (直訳：共通の／和訳：共通の、一蓮托生)、будущая (直訳：未来の／和訳：未来の、将来)、непростая (直訳：普通でない、非凡な／和訳：普通でない、非凡な)、человеческая (直訳：人間の／和訳：人間の)、горестная (直訳：悲しむべき／和訳：悲しむべき、悲運)、прекрасная (直訳：素晴らしい／和訳：素晴らしい)、единственная (直訳：たった一つの／和訳：たった一つの)、роковая (直訳：宿命の、不可避の／和訳：不可避の)、великая (直訳：偉大な／和訳：偉大な、大いなる)、сложная (直訳：複雑な／和訳：錯綜した)、рабская (直訳：奴隷のような／和訳：奴隷のような、耐えがたい)、славная (直訳：光栄ある、輝かしい／和訳：光栄ある、輝か

しい)、**мрачная** (直訳：暗い、暗澹たる / 和訳：暗澹たる)、**особая** (直訳：特別な / 和訳：特別な)、**земная** (直訳：地上の、現世の / 和訳：地上の、現世の)、**историческая** (直訳：歴史的な / 和訳：歴史的、人民の行く末)、**унизительная** (直訳：屈辱的な / 和訳：屈辱的な)、**равная** (直訳：同じ / 和訳：同じ)、**дурная** (直訳：悪い、不吉な / 和訳：不幸な、不運)、**неотвратимая** (直訳：不可避の、避けがたい / 和訳：不可避の、避けがたい)、**простая** (直訳：単純な、ありふれた / 和訳：単純な、ありふれた)、**всеобщая** (直訳：すべてに共通の / 和訳：普遍的な)、**одинокая** (直訳：孤独な / 和訳：孤独な)、**интересная** (直訳：興味深い / 和訳：興味深い)、**высшая** (直訳：最高の / 和訳：最高の)、**триумфальная** (直訳：晴れがましい、勝利の / 和訳：晴れがましい、勝利の)、**предстоящая** (直訳：目前に迫った / 和訳：目前に迫った)、**добрая** (直訳：親切な、良い / 和訳：幸せな、幸運)、**недобрая** (直訳：意地の悪い、不吉な / 和訳：不運)、**унылая** (直訳：憂鬱な / 和訳：憂鬱な)、**тревожная** (直訳：気がかりな、不安な / 和訳：気がかりな)、**удивительная** (直訳：驚くべき / 和訳：驚くべき)、**творческая** (直訳：創作上の、創造的な / 和訳：創作上の)、**слепая** (直訳：盲目の / 和訳：盲目の、悲運)、... **уготована** (直訳：...が用意されている / 和訳：...が定められている)、... **предрешена** (直訳：...がすでに決定されている / 和訳：...が定められている)

### <участь (自動詞)>

... **постигает кого-то** (直訳：...が～を襲う / 和訳：...が～を襲う、～が何かに見舞われる)、... **ждет кого-то** (直訳：...が～を待ち受ける / 和訳：...が～を待ち受ける)、**миновать кого-то** (直訳：誰かのそばを素通りする / 和訳：誰かが運命を免れる)、**доставаться кому-то** (直訳：～の手に入る / 和訳：～にとってたまたまなる、巡り合わせになる)、**выпадать кому-то** (直訳：～のもとに落ちてくる / 和訳：～が何かをする巡り合わせになる)、**грозить кому-то** (直訳：～を脅かす / 和訳：～を脅かす)、**чья-то участь зависит от...** (直訳：誰かの運命は...次第である / 和訳：誰かの運命は...次第である)、... **готовиться кому-то** (直訳：...が～に用意されている / 和訳：...が～を待ち受けている)、**распоряжаться кем-то** (直訳：～に命じる、指図する / 和訳：～に命じる、指図する)、... **решается** (直訳：...が決定される / 和訳：...が決定される)、... **сводит кого-то с кем-то** (直訳：...が～と～を引き合わせる / 和訳：...が～と～を引き合わせる)、... **прельщает кого-то** (直訳：...が～を誘

惑する / 和訳： ...が～を誘惑する)

<участь (他動詞) >

облегчить ... (直訳： ...を楽なものにする / 和訳： ...を楽なものにする)、избежать ... (участи) (直訳： ...を免れる / 和訳： ...を免れる)、разделить ... (直訳： ...を分かち合う / 和訳： ...を共にする)、изменить ... (直訳： ...を変える / 和訳： ...を変える)、принимать (свою) ... (直訳： (自らの) ...を受け入れる / 和訳： (自らの) ...を受け入れる)、повторить ... (直訳： ...を繰り返す / 和訳： ...を繰り返す)、мириться с ... (直訳： ...と和解する、妥協する / 和訳： ...に甘んじる、運命とあきらめる)、смириться с ... (直訳： ...に妥協する / 和訳： ...に甘んじる、運命とあきらめる)、решить чью-то ... (直訳： 誰かの...を決定する / 和訳： 誰かの...を決定する)、смягчить чью-то ... (直訳： ...を楽なものにする / 和訳： ...を楽なものにする)、спастись от ... (直訳： ...を免れる / 和訳： ...を免れる)、становиться чьей-то ... (直訳： 誰かの...になる / 和訳： 誰かの...になる)、дождаться своей ... (直訳： 自らの...を待ち受ける / 和訳： 自らの...を待ち受ける)、влиять на ... (直訳： ...に影響を及ぼす / 和訳： ...に影響を及ぼす)、оплакивать (свою) ... (直訳： (自らの) ...を悼む、嘆く / 和訳： (自らの) ...を嘆く)、улучшить ... (直訳： ...を改善する / 和訳： ...を改善する)、примириться с ... (直訳： ...を甘受する / 和訳： ...に甘んじる、運命とあきらめる)、подвергнуться ... (直訳： (誰かの/何かの) ...と同じ目に遭う / 和訳： (誰かの/何かの) ...と同じ目に遭う)、готовить (кому-то) ... (чего-то) (直訳： (誰かに何かの) ...を用意する / 和訳： (誰かに何かの) ...を用意する)、быть достойным ... (直訳： ...にふさわしい者になる / 和訳： ...にふさわしい者になる)、жаловаться на (свою) ... (直訳： (自らの) ...のことで愚痴を言う / 和訳： (自らの) 身の上をかこつ)、узнать (свою) ... (直訳： (自らの) ...を知る / 和訳： (自らの) ...を知る)、переменить ... (直訳： ...を取り替える、変える / 和訳： ...を変える)、ждать (свою) ... (直訳： (自らの) ...を待つ / 和訳： (自らの) ...を待ち受ける)、сожалеть о (своей) ... (直訳： (自らの) ...を悔やむ、哀れむ / 和訳： (自らの) ...を悔やむ、哀れむ)、беспокоиться о (своей) ... (直訳： (自らの) ...について心配する / 和訳： (自らの) ...について心配する)、завидовать чьей-то ... (直訳： 誰かの...をうらやむ / 和訳： 誰かの...をうらやむ)、делить с кем-то ... (直訳： ～と...を分かち合う / 和訳： ～と...を共にする)、знать (свою) ... (直

訳：（自らの）...を知っている／和訳：（自らの）...を知っている）、озабоченный（своей）...（直訳：（自らの）...を心配している、におびえている／和訳：（自らの）...を心配している、におびえている）、отведена кому-то...（直訳：～は...を免れた／和訳：～は...を免れた）

我々が使用頻度を基準に、ロシア語として自然な表現を選出したところ、連語の数は全部で115になった。この数は、судьбаという語を分析する際に我々が出した仮説、つまり、同義語群内で中心的ではない語の一般的な使用頻度は中心的な語のそれよりも低く、連語の数はそれほど多くないという特徴があるという仮説を、裏付けるものである。つまり、話者にとって участьの意味は、予め定められた人間の人生に関する状況を表現する際に、いわば副次的な役割を果たしている。участьの使用頻度は судьбаのそれに比べて著しく少なく（10倍以上）、話者がこの語に様々な特性（隠喩的な表現）を付与する傾向にないことが分かる。何よりもそれは、участьを用いた連語の数が судьбаのそれより2分の1以下であることから明らかである。

既に述べたように、судьбаと участьは一つと同義語群に属す語であるが、ここまで連語数に差があれば、お互いに正確な等価語ではないと思わざるを得ない。この2つの同義語の相違を理解するために、участьの連語をまとめ、双方の意味の概念構造を比較してみたい。以下に示す連語の一部は судьбаと участьの両方で使用可能なものであることが分かる。

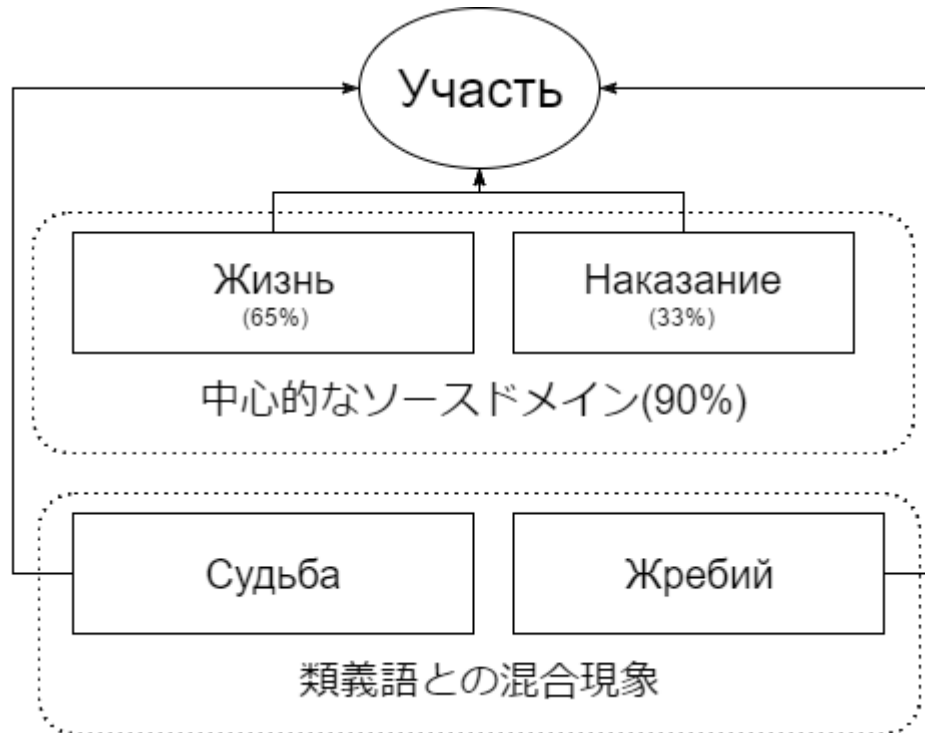
печальная, незавидная, тяжёлая, ужасная, завидная, дивная, нелёгкая, плачевная, жалкая, плохая, посмертная, странная, дальнейшая, злая, вечная, общая, загробная, несчастная, жестокая, хорошая, тяжкая, женская, лёгкая, скорбная, позорная, счастливая, сходная, суровая, будущая, непростая, человеческая, горестная, прекрасная, единственная, великая, сложная, рабская, славная, мрачная, особая, земная, историческая, унижительная, равная, дурная, простая, всеобщая, одинокая, интересная, высшая, триумфальная, предстоящая, добрая, недобрая, унылая, тревожная, удивительная, творческая, доставаться кому-то, чья-то участь зависит от..., распоряжаться кем-то, ... сводит кого-то с кем-то, ... прельщает кого-то, изменить..., влиять на..., улучшить..., озабоченный (своей) ..., аналогичная, подобная, подобная, страшная, лучшая, горькая, оплакивать (свою) ..., беспокоится о...

以上に列挙した連語は全て、我々が судьбаという概念を分析した際に、жизнь（人生）のソースドメインに分類したものばかりである。つまり、このソースドメインは双方の語意

の構造内に入る。жизнь というソースドメインは、участь (宿命) という概念が持つ連語のほぼ 65%を占めている。さらに次の大きな連語グループの分析を試みよう。

ужасная, суровая, чья-то участь зависит от..., изменить ..., неотвратимая, ... постигает кого-то, ... ждет кого-то, миновать кого-то, грозить кому-то, ... готовиться кому-то/уготовано, ... решается, облегчить ..., избежать ... (участи), разделить ..., принимать (свою) ..., мириться с ..., смириться с ..., смягчить чью-то ..., спастись от ..., (что-то) становится чьей-то ..., дожидаться своей ..., быть достойным ..., жаловаться на (свою) ..., узнать (свою) ..., переменить ..., ждать (свою) ..., сожалеть о (своей) ..., ... уготована, позорная, примириться с ..., подвергнуться ...

以上に示された連語は全て наказание という一つの意味に分類することができる。それは、неотвратимое (避けられない) や миновать (免れない)、постигает (襲う、見舞う) 等との連語から明らかである。судьба という概念の中にも、はるか周縁部にはあるが (連語の 3%以下) ソースドメインとしておそらくこの意味があることが認められた。また、участь という概念の中に、一般に使用される連語の内の 26%に、この意味が認められる。つまり、жизнь と наказание というソースドメインが、участь という語を用いた連語の 90%を占めるのである。残りの 10%の一部については、既に述べた、一同義語群内の連語干渉の例に入れることができるだろう。участь という語を、выпала участь (宿命が当たる) あるいは слепая участь (盲目的な宿命) のように用いた表現は、судьба (運命) という語の場合と同様、жребий (賽、くじ) という語の影響を受けたと解釈できるし、знать свою участь (自分の宿命を知る)、конечная участь (最後の宿命)、участь предрешена (定められた宿命)、участь отведена кому-то (誰かに対して与えられた宿命)、повторить чью-то участь (誰かの宿命を繰り返す)、готовить (кому-то) ... (чего-то/чего-то) ((誰かに) (何かを) 宿命として用意する) といった表現は、участь と судьба が部分的に混同した結果だと言える。結論として、ロシア語における участь の概念構造は、以下のように表すことができる。



図から分かるように、*участь* の概念構造は、*судьба* のそれに比べて随分と単純である。その中心的なソースドメインに入る要素は3つではなく、わずかに2つである。*участь* という概念の中には、例えば *судьба* という概念における *бог* のような、ロシア語話者がそれを超越的な力に相当するものとみなしていると言えるような連語が一つもない。*участь* が主語として表現されている連語の数が比較的少ないのは、その典型である。一方、*судьба* という概念は、*бог* というソースドメインに帰着する連語の中では、主語として表されることが多い。*участь* は誰も動かさないし（ただし *судьба* は人を動かすことができる）、誰も罰しない（*судьба* は人を罰することができる）。同様に *отдаться в руки участи*（宿命の手に委ねる）とは言わないが、*отдаться в руки судьбы*（運命の手に委ねる）という表現は自然である。

また、*участь* に何かを頼むことはできないし、擬人化されて、神あるいは超越的な存在として、誰かの言うことを聞き入れたり理解したりすることもない。

さらに、*участь* という概念を使った連語には、ある興味深い傾向がみられる。この語に付く形容辞のほとんどが、*жизнь*（人生）というソースドメインに基づき、また *участь* が目的語あるいは主語として表現されている連語のほとんどの起源は、*наказание* というソースドメインに帰着するのである。もちろん、少々乱暴な分け方だが、一般的に言えば、ロシア語話者が *участь* という概念を考える時、それは（主語としても目的語としても）*наказание* として作用（機能）するが、それ自体（性質）は *жизнь* に似ている傾向にある。

участь と судьба という概念のもう一つの違いは、будущее (未来) というソースドメインの存在である。участь という概念を用いた連語の中で、この領域の影響を受けているものは極めて少ない可能性が高く、あったとしても、その位置はこの概念構造のはるか周縁部である。一方、судьба という概念の基盤 (中心) を成すものの一つとして、それが果たす役割は明らかである。あるいは、その存在があるからこそ、ロシア語話者は судьба を、ある程度変化させたり、影響を与えられたりできるものだと思えるのかもしれない。ロシア語に судьба という語があるのは、ロシア語話者の現実感が運命論的で受動的である事の証明であると、相当数の言語学者や文化人類学者が主張しているのは既に述べた通りである。それでも、この語を творить (創造する) や взять в свои руки (手にとってコントロールする) といった連語で使用する頻度の方がずっと高いのである。これらやその他の連語から判断するに、ロシア語では、将来というものは容易に変更され、修正されることが分かる。もう一つのソースドメインである жизнь も同様に、изменить (変える) という語とともに用いられる事が頻繁にあることから、ロシア語話者が судьба を、たとえ部分的にでも、場合によっては、変えたり、影響を与えたりできるものであると思えるのは、この 2 つのソースドメイン (жизнь (人生) と будущее (未来)) があるからかもしれない。一方、участь は、ロシア語話者にとって、自分で変えられるものには思えない。この概念の構造内には жизнь が含まれるので、それが участь にそのような性格を与えることは理論的には可能なのだが、どういったわけかそうはならない。その理由は、もう一つの強いソースドメインであり、жизнь という概念がもつ特性の一部を本質的にブロックする、наказание の存在によってのみ説明できる。наказание という語の定義に拠れば、罰を受けるべき誰かが、罰を変えることはできないからだ。罰を変えることができるのは、その罰を与える者だけである。изменить свою участь (自分の宿命を変える) という表現が全く使われないのは、この特殊性により説明されるだろう。ロシア語では、изменить свою участь (自分の宿命を変える) とは決して言わない。こうした表現は、自分の宿命ではなく、誰かの宿命を変える、という表現においてのみ可能である。宗教的な教書には、「бог может изменить участь человека на страшном суде」(神は最後の審判で人類の宿命を変えることができる) のような、神が誰かの宿命に影響を与えたり、宿命を変えたりするといった表現が頻繁に見受けられる。

また、участь や рок が судьба と異なるもう一つの点は、同義語群に属する語として счастье (幸福、幸運) という語の影響 (部分的特性の干渉) を受けない事である。例えば испытать рок (悲運を試す)、испытывать рок (悲運だめしをする)、испытать участь (宿命を試す)、испытывать участь (宿命だめしをする) という表現は自然ではない。



以降では、судьба のもう一つの同義語である рок について詳しく見ていこう。この語が一般的に使われている連語は以下のとおりである。(注5)、(注6)、(注7)

### <形容詞+рок>

злой (直訳：悪意にみちた運命／和訳：悲運)、неумолимый (直訳：避けがたい運命／和訳：避けがたい運命)、суровый (直訳：苛酷な運命／和訳：苛酷な運命)、зловещий (直訳：不吉な運命／和訳：不吉な運命)、жестокий (直訳：苛酷な運命／和訳：苛酷な運命)、безжалостный (直訳：無慈悲な運命／和訳：無慈悲な運命)、грозный (直訳：恐ろしい運命／和訳：恐ろしい運命)、слепой (直訳：先が見えない運命、浅はかな運命／和訳：一瞬先はわからない)、коварный (直訳：狡猾な運命／和訳：狡猾な運命)、неотвратимый (直訳：避けられぬ運命／和訳：避けられぬ運命、宿命)、страшный (直訳：恐ろしい運命／和訳：恐ろしい運命)、несчастный (直訳：不幸な運命／和訳：不幸な運命)、тёмный (直訳：暗い運命／和訳：真つ暗闇の運命)、ужасный (直訳：身の毛もよだつような運命／和訳：身の毛もよだつような運命)、печальный (直訳：悲しい運命／和訳：悲しい運命)、свирепый (直訳：激烈な運命／和訳：激烈な運命)、изменчивый (直訳：変わりやすい運命、定まらない運命／和訳：移り気な運命)、непостижимый (直訳：計り知れない運命／和訳：計り知れない運命)、пресловутый (直訳：悪名たかき運命／和訳：悪名たかき運命)、завистливый (直訳：羨ましい運命／和訳：運命が(人)を羨み、急に悪いことを起こす)、незримый (直訳：神秘的な運命／和訳：神秘的な運命、不可思議な運命)、всевластный (直訳：独裁的な運命／和訳：全てを支配する運命)、необъяснимый (直訳：説明のつかない運命／和訳：説明のつかない運命)、тяжелый (直訳：重い運命／和訳：重い運命)、благоклонный (直訳：好意的な運命／和訳：好意的な運命)、тягостный (直訳：困難な運命／和訳：困難な運命)、самовластный (直訳：横暴な運命／和訳：運命の専横、運命のなすがまま)

### <рок (自動詞) >

... несет кого-то куда-то (直訳：運命が～を～へ運ぶ／和訳：運命に誘われて、運命の手によって)、... приводит кого-то куда-то (直訳：運命が～を～へ導く／和訳：運命の導きにより)、... преследует кого-то (直訳：運命が～につきまとう／和訳：運命が～につきまとう)、... нависает над кем-то (直訳：運命が～を覆う／和訳：逃れられぬ宿命)、... тяготит над кем-то (直訳：運命が～の重圧となる／和訳：～は運命に

疲れている)、... решает что-то (直訳：運命が～を決める／和訳：運命の決定によつて)、... постигает кого-то (直訳：運命が～を捉える、捕捉する／和訳：～の目に遭う)、... судит кого-то (直訳：運命が～を裁く／和訳：運命が～を裁く)、... распорядился (так/таким образом) (直訳：運命はこのように命じた／和訳：運命によって～した)、довлеть над кем-то (直訳：悪意にみちた運命／和訳：運命が～にのしかかる、～を押しつぶす)、висеть над кем-то (直訳：運命が～に差し迫る／和訳：運命が～に差し迫る、切迫した運命)、посылать кому-то что-то (испытания) (直訳：運命が～に～の経験を送る／和訳：～を経験したのは運命だ、運命だと思って～を経験する)、... заставляет кого-то делать что-то (直訳：運命が～に～の経験を強いる／和訳：(否定的なことを) 経験する、経験せざるを得ない運命)、... повисает над кем-то (直訳：運命が～に迫っている／和訳：～に運命の時が差し迫っていた)、... забрасывает кого-то куда-то (直訳：運命が～を～に放り込む／和訳：否応なしに～に巻き込まれる、運命に翻弄される)、... сводит кого-то с кем-то (直訳：運命が～と～を会わせる、和解させる／和訳：～と～は和解することとなった。運命に引き合わされる。)、... приговаривает кого-то (直訳：運命が宣言を下す、判決を下す／和訳：運命が宣言を下す、判決を下す)、... уготовил что-то кому-то (直訳：運命が～に～を準備する／和訳：～が起こったのは運命)、... забирает кого-то (直訳：運命が～を連れ去る、奪い取る／和訳：～亡くなる)、... сулит кому-то что-то (直訳：運命が～に約束する、予言する／和訳：運命の約束、さだめ)、... поразил кого-то (直訳：運命が～を打つ、～を驚かせる／和訳：非常に悪いことが起きた)、... обошел кого-то (стороной) (直訳：運命が～の傍らを通り過ぎる／和訳：運命がすりぬける、チャンスを逃す)、... карает кого-то (直訳：運命が～に報復する／和訳：因果応報、因果は巡る)、... губит кого-то (直訳：運命が～を破滅させる／和訳：運命によって滅びる、破滅する)、... выпадает кому-то (直訳：運命が～に巡り合わせる／和訳：～というめぐり合わせになる)

### <рок (自動詞)>

бороться с ... (直訳：運命と闘う／和訳：運命と闘う)、уйти от ... (直訳：運命から離れる／和訳：(危険なことや大病などの) 運命を乗り越える)、спорить с ... (直訳：運命と喧嘩する／和訳：運命と闘う)、противостоять ... (直訳：運命に抵抗する、運命に向かって立つ／和訳：運命に逆らう)、покориться ... (直訳：運命に忍従する／和訳：運命とあきらめる)、бросить вызов ... (直訳：運命に歯向かう／和訳：運命

に齒向かう)、обмануть ... (直訳：運命を欺く／和訳：運命を裏切る)、роптать на ... (直訳：運命に不平をもらす／和訳：運命に不平をもらす)、подчиниться ... (直訳：運命に服従する／和訳：運命に服従する)、сопротивляться ... (直訳：運命に逆らって／和訳：運命に逆らって)、откупиться от ... (直訳：運命から自由になる／和訳：(危険や大病などを) 乗り越える)、отдаться на волю ... (直訳：運命の意思に身を委ねる／和訳：運命に身を委ねる)、перехитрить ... (直訳：運命の裏をかく／和訳：運命の裏をかく)、склониться перед ... (直訳：運命の言うことを聞く／和訳：運命に屈する)

### <рок (その他) >

власть ... (直訳：運命の権威／和訳：運命の力、運命のなすがまま)、печать ... (直訳：運命の痕跡、運命の封印／和訳：運命の痕跡、運命の封印)、вызов (року) (直訳：運命に挑戦する／和訳：運命に挑む)、воля ... (直訳：運命の意思／和訳：運命の意思、運命の決めたこと)、удары ... (直訳：運命の衝撃、運命の打撃／和訳：運命の一撃、運命の鉄槌)、навстречу ... (直訳：運命に従って／和訳：運命のままに、運命を受け入れる)、веление ... (直訳：運命の命令／和訳：運命の要請)、насмешка ... (直訳：運命の嘲笑／和訳：運命の嘲笑、運命が嘲笑うかのように)、поступь ... (直訳：運命の歩み、運命の歩調／和訳：運命と共に)、дыхание ... (直訳：運命の呼吸／和訳：運命の息遣い、運命の息吹)、закон ... (直訳：運命の法則／和訳：運命の法則、因果応報)、отмеченный ... (直訳：指摘された運命／和訳：文脈によります)、приговор ... (直訳：運命の宣告／和訳：運命の宣告、運命の決定)、наперекор ... (直訳：運命に逆らって／和訳：運命に逆らって)、длань ... (直訳：運命の掌／和訳：運命のなすがまま)、голос ... (直訳：運命の声／和訳：運命の声)

以上に挙げた連語をテーマ別に分類してみよう。судьба という概念を分析した時と同様、多くの連語に、人間的、あるいは亜人間的(擬人化された)特徴を持った、ソースドメインの存在が認められる。例えば、рок (凶運) は、слепой (盲目的)、суровый (容赦ない)、благоклонный (好意的な) 時があれば、решать что-то (何かを決めたり)、карать кого-то (誰かを罰したり) する事もあるし、時にはそれから откупиться от рока (お金などを払って解放される) こともできる。

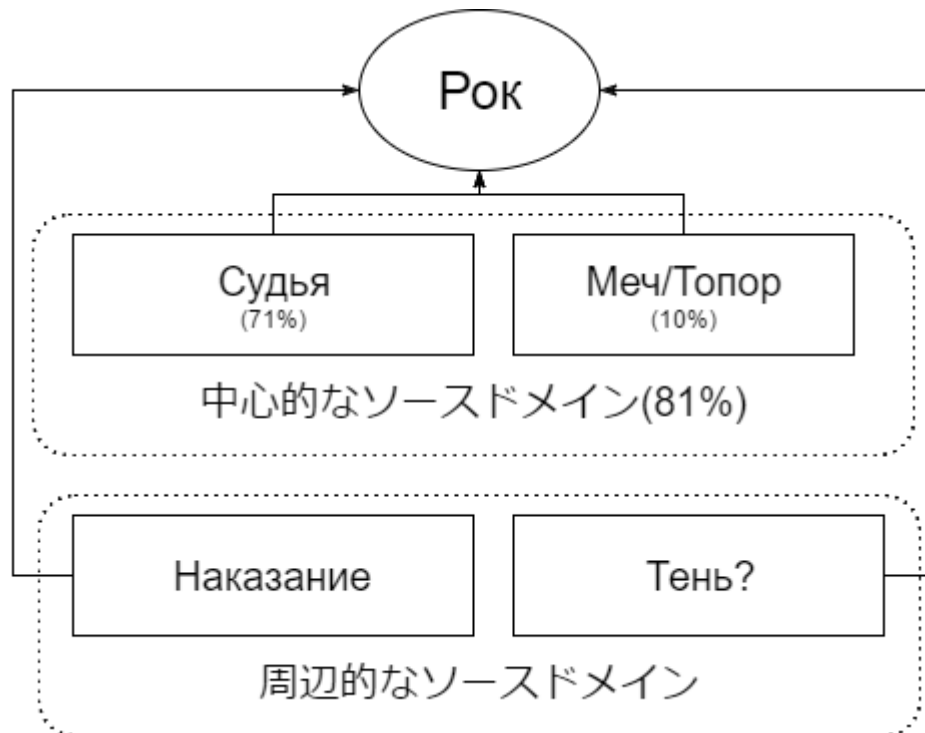
злой, неумолимый, суровый, зловещий, жестокий, безжалостный, грозный, слепой,

коварный, страшный, ужасный, печальный, свирепый, пресловутый, завистливый, всевластный, благосклонный, самовластный, ... решает что-то, ... судит кого-то, ... заставляет кого-то делать что-то, ... приговаривает кого-то, ... уготвил что-то кому-то, ... сулит кому-то что-то, ... карает кого-то, ... губит кого-то, бороться с ..., спорить с ..., противостоять ..., покориться ..., обмануть ..., роптать на ..., подчиниться ..., сопротивляться ..., откупиться от ..., отдаться на волю ..., перехитрить ..., склониться перед ..., власть ..., печать ..., воля ..., веление ..., насмешка ..., приговор ..., длань ..., голос ..., прихоть ..., ... распорядился (так/таким образом), посылать кому-то что-то (испытания), ... забрасывает кого-то куда-то, ... сводит кого-то с кем-то, бросить вызов ..., поступь ..., дыхание ..., закон ..., отмеченный ..., наперекор ..., незримый, преследует кого-то

この事から、рокも судьбаと同様 бог という観念に支えられていると仮定することは論理的に可能だが、рок が持つニュアンスを見れば、別の仮定も考えられる。рок を表す形容辞には否定的なものが多いが、злой (悪意がある)、завистливый (嫉妬深い)、коварный (陰湿な)、самовластный (横暴な) 等、бог や судьба という概念と比べると、その性格はそれほど強いものではない。さらに、рок (凶運) の連語には審判に言及したものが明らかに多い。例えば、судить кого-то (誰かを裁く)、приговаривать кого-то (誰かに言い渡す)、печать рока (凶運の烙印) 等がそれである。ここから分かるように、ロシア語話者にとって рок (凶運) は、бог (神) に比べ、より低俗で否定的な存在に見えるため (例えば судьба という概念に見られる現象と同じであるが)、そのソースドメインは судья (審判者) か、あるいはより考えにくくはあるが、правитель (支配者) という概念だと仮定できる。我々が選んだ 83 の連語のうち 57 以上 (68%) にこの意味が共通している。残りの 32% の連語を明確に分類化するのは、участь という概念を分析するよりも遥かに難しい。それは、この語が使用される頻度が全体的に少ないからかもしれない。具体的な連語の一つ一つについて、それを全ての話者が、概念メタファーとして使い、理解しているのか、あるいはレトリック上のものでしかないのかを、その語の使用頻度に基づき明確に定義することは困難なのである。

Удары, ... повисает над кем-то, дозлеть над кем-то, висеть над кем-то, тяжелый, ... нависает над кем-то, ... тяготит над кем-то, ... поразил кого-то といった連語は、меч/топор (刀、斧) という言葉、つまり、死刑に使用される武器に集約することができる。постигать кого-то, преследовать, уйти от..., неотвратимый という連語は、наказание という単語にカテゴライズできる。我々が選んだ рок の連語の大部分を集約したものを、以下に

提示する。



一方、Wierzbicka (1992、73) は以下のようにロシア語の рок を NSM 法で説明している。

Rok

- (a) bad things happen to people
- (b) I imagine I know that some bad things happen to some people because someone wants it
- (c) it is not someone like a human being
- (d) one can say that it is something, not someone
- (e) one cannot know what it is
- (f) it is not part of this world
- (g) it is something bad
- (h) if this someone or something wants something it will happen
- (i) one cannot think: 'if I say: I don't want it, it will not happen'
- (j) it cannot not happen

さらに、Wierzbicka (1992、72) は以下のようにロシア語の рок の特徴をまとめている。

Turning now briefly to the Russian concept of rok, I will first note that in English it can be approximated not only by fate but also by doom, since its connotations are even more final, ominous, and calamitous than those of fate. I will also stress that, judging from its frequency of use, the concept of rok is not nearly as central to Russian culture as is sud'ba.

ここで露単語 rok の概念に言及しよう。まず、この語は fate に加えて doom にも類似している。終末、不吉、破滅的といったニュアンスを含蓄しているためだ。更に、使用頻度から分かるように、rok は sud'ba ほどロシア文化の中核を成すような概念ではないことも強調したい。

Wierzbicka の説明が、部分的に我々のそれと一致することは論証できる。Рок が、人間の人生における否定的事件に対応しており、なんらかの思考する存在を意味するものであり、またその決定は最終的なもので、この概念 (судья, меч, наказание) において我々が強調したソースドメインの影響によるものと説明できる。全体として、想定した通り、ロシア語では рок という概念は судьба という概念よりも使用頻度をはるかに低く、従って連語数もはるかに少ない。

共通のソースドメイン жизнь (例：сложная, горькая / 困難な、苦い) 故に、我々がこれまで見てきた участь の概念と、судьба の概念との間に共通点が多いとするなら、рок の概念がこのように使用されることはあり得ない。実行可能な唯一の対比は、そこに、人格化された大いなる力に似た бог や судья という中心ソースドメインがあることである。участь がより受動的であるのに対し、これらのソースドメインは、主語の役割における語結合の中で、судьба と рок の概念をより能動的なものとしている。судьба と異なり、рок になんらかの影響を及ぼしたり、рок と「論争」したりすることができない。рок の持つ終局性と宿命性は、судьба や участь の概念よりもはるかに強い。

ではここで、ロシア語の судьба、участь、рок の概念が他言語にどのように訳されているか、また、他言語における然るべき概念と意味が一致しているか否かについて検討する。

先ずウクライナ語から検討する。上述した通り、ウクライナ語では、運命を指す同義語における中心概念は доля である。中心概念に比べ、他の概念 (талан, фортуна など) が使用されることは非常に稀である。ロシア語の概念 судьба が訳される際、最もよく用いられるウクライナ語の概念は доля である。これは、我々の研究で検討した辞書、文学作品の翻訳の大部分においても同様であった。ロシア語の概念 судьба のウクライナ語訳の例、なかでも судьба の三つの主要ソースドメインからなる連語を分析すると、ウクライナ語の概念

доля は、ウクライナ語を母語とする人々に同様に解釈されていることが分かる。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

< жизнь / життя (人生) >

【原文】 Горький «Старуха Изергиль».

И когда обворуют сами себя, истратив время, то начнут **плакаться на судьбу**.

【ウクライナ語訳】 Горький «Стара Ізергіль».

І коли обкрадуть самі себе, змарнувавши час, то почнуть **нарікати на долю**.

< бог / бог (神) >

【原文】 Гоголь «Мертвые души».

Но в это время, казалось, как будто **сама судьба решила над ним сжалиться**.

【ウクライナ語訳】 Гоголь «Мертві душі».

Та в цей час, здавалося, ніби **сама доля вирішила над ним зглянутись**.

< будущее/майбутнє (未来) >

【原文】 Булгаков «Мастер и Маргарита» (ч. 2) .

ГЛАВА 29. **Судьба мастера и Маргариты определена**

【ウクライナ語訳】 Булгаков «Майстер і Маргарита» (ч. 2) .

РОЗДІЛ 29 **Долю майстра і Маргарити визначено**

この傾向は、ウクライナ語の **доля** を用いた連語をざっと分析しただけでも確認できる。**доля** の連語を以下に示す。(注 5)、(注 6)、(注 7)

< життя (人生) >

припадати на, подальша, трагічна, жіноча, власна, сумна, щаслива, спільна, гірка, нелегка, дальша, людська, важка, пов'язана, майбутня, завидна, нещасна, особиста, драматична, добра, легка, складна, дивна, найкраща, страшна, політична, мінлива, прекрасна, сирітська, героїчна, жаклива, печальна, зламана, клята, ганебна, таємнича, зв'язана, теперішня, згорьована, злиденна, страхітлива, самотня, весела, лучча, трудна, ненависна, заслуговувати інше життя, мріяти про інше життя

< бог (神) >

лиха, зла, невблаганна, ласкава, лукава, приходити, обзиватися, голубити, вірити в, спокушати, зустріти, вирішувати, дарувати щось комусь, подарувати щось комусь, посилати щось комусь, приготувати комусь щось, розкидувати, давати, готувати, відміряти, розлучати, обділяти, поєднати когось з кимось, наділяти чимось, сприяти чомусь, всміхатися, відвертатися від когось, з'єднувати когось, хотіти, обирати когось, берегти когось, дбати про когось, втручатися у щось, дякувати, обдурити, довіряти, скоритись, рятувати когось, змилосердитися, штовхати, повести, кривдити когось, приносити щось, посміхатися комусь, усміхатися, ходити, вести когось, боятися, помститися, закидувати когось-кудись, приводити когось кудись, складатися, зводити когось з кимось, заносити когось кудись

< майбутнє (未来) >

краща, неминуча, грядуща, чекати когось, залежати, вирішуватись, йти про, вирішувати, визначати, перейматися, побачити, розпоряджатися, дізнатися, бачити, пророкувати, вгадувати, цікавитись, заслуговувати іншу, мріяти про іншу, переживати за, вболівати за, обирати, ... в руках, керувати, знати

これらのリストにはウクライナ語の *доля* に特徴的な連語すべてが提示されているわけではないが、全体的な傾向を見ると、ロシア語の *судьба* を想起させる。Бог (神) と життя (人生) という二つのより強固なソースドメインと、わずかに脆弱なソースドメイン *майбутнє* (未来) という三つのソースドメインの影響が見られる。ロシア語の *судьба* とウクライナ語の *доля* の中心ソースドメインにおける唯一の違いは、人生と神を意味するソースドメインの強さのみである。ロシア語での *судьба* の概念では、その連語の数において、ソースドメイン *жизнь* が、ソースドメイン *бог* を若干上回っている。他方、ウクライナ語では逆の様相を呈している。ある種の擬人化された力として *доля* を意味する連語の割合は、*жизнь* を指す連語よりもわずかに多い。またより詳細に見ると、この擬人化された力は神のような遠い存在、超越したなにもものかだけを連想させるものではないことが分かる。ウクライナ語には、この力が、常にどこかを *ходить*、*бродить*、*блукає* (歩いたり、ぶらぶらしたり、彷徨ったり) しているような、より俗世間的な人々、普通の人間にすら似ていることをほのめかすような多くの連語がある。

*доля* は、*цуратись когось*、*обходити когось* (だれかを避けたり、回り道したり) するし、*прийти* (やって来る) こともできるし、*доля* を *шукати*、*зустріти* (探したり、出会ったり)



することもできる。この他、この超越的な力の相対的な世俗性は、голубити когось、бути ласкавою（だれかを慈しむ、愛撫する）といった単語にも見てとれる。このような連語がロシア語的に不自然であるとは言えないが、ウクライナ語ではこうした連語がより頻繁に現れる印象がある。つまり、ウクライナ語の概念 *доля* とロシア語の概念 *судьба* における中心ソースドメインが全体的に合致するとして、ウクライナ語ではこの概念により大きな擬人性（人間らしさ）が付け加えられる傾向がある。このことから、ウクライナ語における人間とその運命の相対的距離は、ロシア語よりわずかに近いと仮定できる。ウクライナ語の *доля* は、ロシア語の *судьба* より、人間により優しく/近いものととらえることができる。例えば、ウクライナ語には *свавілля долі*（運命の専横）という表現はあまり見当たらない。このような行為は、*доля* には本質的なものではない。この *доля* の概念とは本質的に異なるものを訳すことになった場合、訳者は *доля* という単語は使わず、別の言葉で状況を描写するのである。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

【原文】 Костенко «Україна як жертва і чинник глобалізації катастроф».

До того ж і поза межами Зони є величезний масив **полишених напризволяще** мертвих сіл, що так і стояли роками, в чагарях і руїнах, будучи Клондайком для мародерів, притулком для злочинців і бомжів.

【露訳】 Костенко «Украина как жертва и фактор глобализации катастроф».

К тому же и за пределами Зоны есть огромный массив **брошенных на произвол судьбы** мертвых сел, которые так и стояли годами, в зарослях и руинах, будучи Клондайком для мародеров, пристанищем для преступников и бомжей.

全体として、ウクライナ語の *доля* とロシア語の *судьба* の中心ソースドメインにおける類似性は、二つのスラブ語系言語の類似性によって説明され得る。しかし前述したように、ウクライナ語 *доля* のロシア語における同義語の末端にウクライナ語の *доля* と起源を同じくする *доля* があることは興味深い。何百年も前には、両言語における二つの *доля* の概念が意味するものは同じであったかもしれない。しかしながら、現在では本質的な違いがある。実は、ロシア語の *доля* の構造において、*бог* と *будущее* のソースドメインは全く欠如しているか、または、あるとしても極めて弱いのである。例えば、*будущее*（未来）を意味するロシア語における語結合 *решать чью-то долю*、*пророчить долю*（～の運命を決める、予言する）や、超自然的な力を示唆する *доля объединила кого-то с кем-то*、*доля вмешалась во что-то*（運命が～と～を引き合わせた、運命の手によって～した）が用いられることは非常に

稀であるか、あるいは全くない。ロシア語の *доля* でその影響を明確に確認することができる唯一のソースドメインは、*жизнь* の概念である（例：*тяжелая доля*、*выпасть на долю человека...*、など。（辛い運命、～に何か起きる））。ロシア語の *доля* の末端の構造においても、ソースドメイン *счастье* の意味は存在している。これは、形容詞の *обездоленный*（不幸な、文字通り「運がない」）や、同根類義表現である「*Слава Богу, не без доли*」、*«Где нет доли, тут и счастье не велико»*（*«Толковый словарь живого великорусского языка»*、*Даль*）にも表れている。もともと *доля* という言葉は、文字通り（その主要な意味「割り当て」の通りに）、幸せの一部、あるいは、天から人に割り当てられたものという意味に理解されていたかもしれない。現代ウクライナ語の *доля* に関しては、上述の通り、ロシア語の *доля* とは違い、能動的なソースドメインがはるかに多い。ウクライナ語の *доля* は、本質的に（少なくとも中心ソースドメインでは）、ロシア語の *судьба* の概念に非常に似ている。ウクライナ語の *доля* に新しい意味が加わったのは、頻繁に行われる言語接触や翻訳借用、あるいは、翻訳の結果、ロシア語の影響を受けたものであろう。このことは、例えば、*судьбоносный*（運命を決めるような）から派生したであろう *доленосный* という派生語が間接的に物語っている。

ロシア語の *доля* には、*доленосный* という派生語は存在しない。これは、ウクライナ語の *доля* の概念が、形式的にも内容的にも、ロシア語の *судьба* の影響を部分的に受けていることを証明するものであろう。しかしこの問題に確信をもって答えるためには、個別の、この概念の連語使用頻度の変化の通時的研究が必要となる。今のところは、この概念の現代的意味を詳細に検討していく。

ここからは、ウクライナ語の *доля* の概念の周辺的なソースドメインの状況を解明していく。ウクライナ語の *доля* と一連の同義語 *щастя*（幸福、幸運）の概念の関係性はかなり強い。同様の関係性がロシア語の *судьба* との間にも認められることはすでに述べた。しかしながら、ウクライナ語のほうがこの関係性は強い。これらの概念に共通する連語の他に、この特性は *щастя-доля*（幸福/運命）という単語にも表れている。この場合、二つの概念は一つになって、一体として使われている。ロシア語とは違い、ウクライナの *доля* は、「*доле моя, щастя мое!*」（*«Микола Джеря»*、*І. Нечуй-Левицький*）のように、愛する人、あるいは、親しい人への呼びかけとして用いられ得る。上述したように、*доля* の概念の擬人化の結果であると考えることができる。この他、*доля* と *щастя* は、*щербата*（あばたの、ひび割れた）あるいは *горбата*（猫背の）などの人の特徴を強調する形容語とともに用いられることもある。基本的に、*доля* の解釈の特徴は、民間に伝わるフォークロアに顕著に見ることができる。フォークロアには、*доля* との文字通りの邂逅が頻繁に描かれている。フォークロアで

はこの単語は、幸せと解釈されており、女性のイメージ、見知らぬ人などとして描かれている。(«Великий універсальний словник української мови»)

ロシア語の *судьба* にあって、ウクライナ語の *доля* にはない周辺のソースドメインについて語るなら、第一に注目すべきことはソースドメイン *наказание* である。*уйти от судьбы*、*принимать свою судьбу*、*спастись от судьбы*、*не миновать судьбы*、*от судьбы не уйдешь*、*судьба постигла (кого-то)*、*судьба миновала (кого-то)*、*вершить судьбу* といった「運命」の連語は、ソースドメイン *наказание* が存在することで説明可能であることはすでに言及した。ウクライナ語では、このソースドメインの存在はかなり弱い。同じように（ソースドメイン *наказание* の等価語 *покарання* を用いて）ウクライナ語の語結合を作るなら、*уникнути долі*、*приймати свою долю*、*спастись від долі*、*вершити чиясь долю* などのフレーズができる。こうして得られた総合的フレーズの大半は使用可能なものの、ロシア語と比較すると、ウクライナ語ではそれ程頻繁にしようされない。*спіткала доля* という語結合に関しては、*горе/несчастье*（不幸）のような周辺のソースドメインに分類されるというのが我々の意見である。つまり、この二つの概念の否定的ニュアンスについて言うなら、ロシア語ではソースドメイン *наказание* が、ウクライナ語では *горе/нещастя/лихо* が、このニュアンスを *судьба* に付与している。二つの言語におけるこれらのソースドメインは周辺のソースドメインでありながら、ドメインの構造と、それぞれの言語を母語とする人々がこの概念をどうとらえるかに著しく影響している。翻訳に関しては、訳す対象である言語の概念に相応のソースドメインがない場合、その概念は使わないようにするか、その連語に関連したソースドメインのみを翻訳するというパターンが多い。例えば、ウクライナ語の *зазнав лихої долі* という連語は *горе* の特徴的な連語を用いて (*испытал, потерпел, перенес*) *судьба* としてロシア語に翻訳することができない。*перенес злюю судьбу* という表現は、意味が通じず、不自然である。*судьба* という言葉が使われず、ウクライナ語の *доля* の概念のソースドメインだけ (*горе*) が使われた訳語、例えば *изведал лиха, хлебнул горя* などが自然な訳語となるであろう。

一方、*наказание* というソースドメインに関連したロシア語の *судьба* の連語、例えば «Он не знал, за что именно его постигла такая судьба» という文章をウクライナ語に訳す場合、ウクライナ語の *доля* にはこのようなソースドメインがないため、*доля* の否定的ニュアンスを表すソースドメインを探し出し、それに関連した連語を使うことになる。つまりこの場合なら、*постигла судьба (наказание (罰))* というソースドメインに関連した連語) は *спіткала доля (лихо (災難、不幸))* というソースドメインに関連した連語) と訳されることになる。加えて、訳語には *за что* を使用することは不可能である。なぜなら、この表現は

наказание (наказать за что-то (～に対して罰する) のソースドメイン特有の表現であるからである。спіткала доля за щось (直訳は «встретила судьба за что-то) というフレーズは、論理的に不可能である。つまり «Він не знав чому саме його спіткала така доля»が«Он не знал, за что именно его постигла такая судьба»の正確なウクライナ語訳になるであろう。辞書の定義では、より正確な訳を考えつくのは難しい。しかしながら、ロシア語の *судьба* とウクライナ語の *доля* という言葉がもつ独自の世界観について言うなら、この二つのフレーズがどれくらい等価であるかについては議論の余地がある。«Он не знал, за что именно его постигла такая судьба»というロシア語話者は、過去の行いによってなにか悪いことが起こり、それが一体何故起こったのかという問題に向き合うという意味合いになる。他方、ウクライナ語訳では、疑問詞 *чому* (なぜ、どうして) と *спіткала* (会った) という単語は、このようなことは示唆していない。ウクライナ語の話者は悪いことが起こった際それが何かに起因したものとは考えず、単に起こったこととして捉える。上述の訳語では、ある世界観を別の世界観に置き換えたことになる。文学作品の翻訳については、このような置き換えの適切性は問題となる場合もあるだろう。原文の能動的なソースドメイン (連語を伝えるもの) を見出し、(そのソースドメインが機能的に似ている場合) それを訳語にそのまま使うという手法を使えばより原文に近い翻訳になっていた可能性もある。この手法は、(азнав лихої долі → хлебнул горя) 先の例でも生かされている。この場合、«Он не знал, за что именно его постигла такая судьба»は、«Він не знав за що його так покарано»あるいは«Він не знав за що йому таке трапилось»と訳され得る。上記の二つの手法と別に、言語に新しい意味を加えて、意図的に不自然な訳語を使うというより実験的な第三の手法も考えられる。つまり、オリジナル言語には存在するが、訳の対象となる言語の概念にはないソースドメインの連語を使うことになる。

ウクライナ語の *доля* にあまり見られず、*судьба* の概念のもうひとつの周辺的なソースドメインは、*путь* という概念である。*судьбы пересеклись, сплетение судеб, перекресток судьбы* などの連語は、ウクライナ語にも等価語を有している (*перетнулись долі, сплетіння доль, перехрестя долі*)。しかしながら、*неисповедимая* あるいは *какими путями* のような連語における *пути Господни* の意味に関しては、ウクライナ語の *доля* は使われない。*несповідима доля* あるいは «якими долями тебе сюди занесло?» という表現は不自然である。現実にこのような表現を訳す場合、*доля* という概念は用いられず、別の言葉で置き換えられている。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】 Гоголь «Мертвые души».

" Ба, ба, ба! "вскричал он вдруг, расставив обе руки при виде Чичикова. " **Какими судьбами?** " Чичиков узнал Ноздрева, того самого, с которым он вместе обедал у прокурора и который с ним в несколько минут сошелся на такую короткую ногу, что начал уже говорить ты, хотя, впрочем, он с своей стороны не подал к тому никакого повода.

【ウクライナ語訳】 Гоголь «Мертві душі».

" Те, те, те! "скрикнув він раптом і розставив обидві руки, побачивши Чичикова. " **Яким вітром?** " Чичиков пізнав Ноздрьова, того самого, з яким він разом обідав у прокурора і який з ним за кілька хвилин зійшовся на таку коротку ногу, що почав уже говорити" ти ", хоч, зрештою, він зі свого боку не дав на те ніякого приводу.

【原文】 Гоголь «Повесть о том, как поссорился Иван Иванович с Иваном Никифоровичем».

Даже отправлявший должность фельдъегеря и сторожа инвалид, который до того стоял у дверей, почесывая в своей грязной рубашке с нашивкою на плече, даже этот инвалид разинул рот и наступил кому-то на ногу. — **Какими судьбами!** что и как? Как здоровье ваше, Иван Никифорович?

【ウクライナ語訳】 Гоголь «Повість про те, як посварилися Іван Іванович з Іваном Никифоровичем».

Навіть інвалід, що виконував обов'язки фельд'єгера й сторожа і перед тим стояв біля дверей, чухаючись у своїй брудній сорочці, з нашивкою на плечі, навіть цей інвалід роззявив рота й наступив комусь на ногу. «**Яким це вас вітром занесло?** що та як? Як здоров'я ваше, Іване Никифоровичу?»

全体として、上記に示した通り、ロシア語で **судьба** の概念が使われる回数は、ウクライナ語の **доля** よりはるかに多い。従って、訳出の際、テキストの整合性を保つために、この単語の使用回数も少なくなることは理に適っている。**судьба** という単語の意味を損なうことなく、ウクライナ語の **доля** を使って訳すことが可能であるとしても、実際には訳者は常にこの言葉を使うとは限らない。なぜなら、(ウクライナ語で) この概念をあまりにも多用すると、読者は必要以上にこの言葉に注意を向けることになり、また、この言葉に原文以上の意味付けをしてしまうことになるからである。**судьба** がウクライナ語の **обставини** (状況) という単語に置き換えられている訳語の例を以下引用する。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】 Ильф, Петров «Золотой телёнок».

**Судьба давала** только одну секунду времени для создания спасительной комбинации.

【ウクライナ語訳】 Ільф, Петров «Золоте теля».

**Обставини давали** лише одну секунду для створення рятівної комбінації.

ここからは、ロシア語の単語 **судьба** の日本語訳の例を検討していく。

研究社露和辞典（1988年）では、ロシア語の **судьба** の訳語として、運命、宿命、天運、まわり合わせ、運、悲運、幸運、歩んできた道、来歴、将来などが提示されている。先に引用したこの種の単語の使用頻度に関するデータから判断するに、同義語における中心概念の一つは「運命」である。ロシア語の

**судьба** の概念との一致に関しては、我々が分析した文学作品では、**судьба** が日本語に訳される場合、もっともよく使われる単語は「運命」であった。例えば以下の翻訳が参考になろう。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

【原文】 Чехов «Три сестры».

Что бы там ни говорили, Маша хорошая, честная женщина, я ее очень люблю и **благодарю свою судьбу. Судьба у людей разная...**

【和訳】 チェーホフ『三人姉妹』

まあなんといっても、マーシャは立派な、潔白な女性です。わたしはあれを大そう愛している。自分の**運命**に感謝している。.....人の**運命**はさまざまだな。

【原文】 Тургенев «Первая любовь».

Но, пока я волновался и строил различные планы, **судьба уже порадела обо мне.**

【和訳】 ツルゲーネフ『はつ恋』

.....とはいえ、わたしがしきりに気をもんで、いろんな計画を立てているうちに、**運命**はちゃんとお膳立てをしてくれたのである。

【原文】 Чехов «Вишневый сад».

Сегодня **судьба моя** решается, **судьба...**

【和訳】 チェーホフ『桜の園』

今日こそ、わたしの**運命**のきまる日よ、**運命**の.....

【原文】 Достоевский «Преступление и наказание».

Вообще же все стали к ней вдруг относиться с особенным уважением. Все это способствовало, главным образом, и тому неожиданному случаю, через который теперь **меняется, можно сказать, вся судьба наша.**

【和訳、工藤精一郎】 ドストエフスキー 『罪と罰』

とにかく、急に掌をかえたように、みんながあの娘をことさらに尊敬の目で見られるようになりました。こうしたことが大きな原因となって、わたしたちの**運命を変える**といってもさしつかえないような、あの思いがけぬ幸運が訪れたのです。

【原文】 Чехов «Вишневый сад».

Собственно говоря, не касаясь других предметов, я должен выразиться о себе, между прочим, **что судьба относится ко мне без сожаления**, как буря к небольшому кораблю.

【和訳】 チェーホフ 『桜の園』

つまり結局ですな、ほかの問題はさておいて、自分一個のことに關するかぎり、ともあれ僕はつぎのごとく言わざるを得んのですよ——**運命が僕を遇することの無慈悲残忍なる**、あらしが小舟をもてあそぶに異ならん、とね。

先に紹介した **судьба** の使用例において、**жизнь** (人生) (**судьба у людей разная, вся судьба наша**)、**будущее** (未来) (**решается судьба**)、**бог** (神) (**благодарить судьбу, судьба относится ко мне без сожаления**) という、この概念の三つの中心ソースドメインが出現している。日本語訳の際、この三つのソースドメインはいずれも、「運命」という言葉を用いて訳出されることは注目に値する。「運命」という言葉が用いられることで、日本語の「運命」の概念にも、ロシア語の **судьба** に現れる三つの主要な意味、つまり、**будущее**、**жизнь**、**бог/высшие силы** を伝えるソースドメイン (意義素) が全て内包されていると仮定できる。この仮定を確認するために、日本語の単語「運命」の連語を、ロシア語と同様に、グループ分けしてみよう。(注5)、(注6)、(注7)

<人生>

運命が変わる、運命が決まる、運命が交錯する、運命が動く、運命が重なる、運命が尽きる、運命が好転する、運命が分かれる、運命が開ける、運命が狂う、運命が絡み合う、運命が交わる、運命が暗転する、運命が一転する、運命が回りだす、運命が急転する、運命が走り出す、運命が関わる、運命を描く、運命を変える、運命を考える、運命を知る、運命を選ぶ、運命を決める、運命を左右する、運命を握る、運命を実現する、運命を切り開く、運命を共にする、運命を辿る、運命を担う、運命を生きる、運命を操る、運命を支配する、運命を書き換える、運命を生き抜く、運命を与えられる、運命を歩む、運命を読み解く、運命を司る、運命を覆す、運命を悟る、運命を呪う、運命を恨む、運命を試す、運命を定める、運命を託す、運命を嘆く、運命を決定づける、運命を委ねる、運命をかける、運命を分かち合う、運命を分かち、運命を享受する、運命に甘んじる、運命を捻じ曲げる、運命を甘受する、運命を目の当たりにする、運命に関わる、運命に直面する、運命に影響を与える、運命に耐える、運命に圧倒される、運命の流れ、運命の扉、運命の行方、運命の歯車、運命の乗り換え、運命の分かれ道、運命の幕開け、運命の行く先、運命が傾く

#### <将来・未来>

運命が変わる、運命が決まる、運命が重なる、運命が分かれる、運命が開ける、運命が待ち受ける、運命が待ち構える、運命が方向づけられる、運命が閉ざされる、運命に関わる、運命を背負う、運命を描く、運命を作る、運命を読む、運命を変える、運命を考える、運命を持つ、運命を知る、運命を選ぶ、運命を見る、運命を決める、運命をもたらす、運命を待つ、運命を左右する、運命を握る、運命を信じる、運命を実現する、運命を切り開く、運命を共にする、運命を辿る、運命を担う、運命を生きる、運命を操る、運命を支配する、運命を掴む、運命を書き換える、運命を与えられる、運命を読み解く、運命を司る、運命を悟る、運命を試す、運命を定める、運命を託す、運命を受け止める、運命を予測する、運命を決定づける、運命を委ねる、運命を分かち合う、未来を分かち、運命を享受する、運命を予言する、運命を捻じ曲げる、運命を目の当たりにする、運命を上書きする、運命に向かう、運命に直面する、運命に影響を与える、運命の扉、運命の行方、運命の足音、運命の行く先、運命を引き寄せる

#### <神>

運命が存在する、運命が許す、運命が訪れる、運命が待っている、運命が待ち受ける、運命が味方する、運命を感じる、運命を信じる、運命を呪う、運命を恨む、運命を試



す、運命に翻弄される、運命に立ち向かう、運命に抗う、運命に支配される、運命に導かれる、運命に逆らう、運命に感謝する、運命に委ねる、運命に打ち勝つ、運命に縛られる、運命に従う、運命に対峙する、運命に操られる、運命にもてあそばされる、運命から逃れる、運命から自由になる、運命と闘う、運命の悪戯

この傾向は、逆方向への翻訳の場合にも見受けられる。例えば以下の例では、「運命が決せられる」という語結合に現れるソースドメイン「未来」は、同様のソースドメイン будущее に固有の連語 определить とともに、судьба という単語を用いてロシア語に訳されている。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

【原文】 三島由紀夫『金閣寺』

私は濡縁に腰かけて待った。こうして待つうちに、あの濡れたひびわれた女の手で**運命が決せられる**のは、いかにも無意味に思われたが、そういう無意味に賭けるつもりで来たのだから、それもよかった。

【露訳】 Мисима «Золотой храм».

Я прекрасно сознавал бессмысленность веры в то, что **мою судьбу могут определить** эти мокрые мозолистые руки, но ведь я и пришел сюда, чтобы отдаться на волю бессмысленного случая, это вполне меня устраивало.

【原文】 夏目漱石『こころ』

私も父の**運命**が本当に気の毒になった。

【英訳】 Soseki “Kokoro”.

I too began to feel sad about **my father's fate**.

【ロシア語訳】 Сосэки «Сердце»

Мне тоже стало очень жаль отца.

【ウクライナ語訳】 Сосекі «Серце».

Тепер і мене взяв жаль за **батькову долю**.

同じ連語が、二つ以上のソースドメインに固有のものとして使われる場合、訳者は、具体的なフレーズにおいて、そのいずれの意味が現れているかを様々に解釈する。例えば

обеспечить судьбу という連語の обеспечить という語は、обеспечить чью-то жизнь (人生) にも、обеспечить чье-то будущее (未来) にも、使われている。このように翻訳者が судьба の異なる意味 (ソースドメイン) に重点を置いた例が以下にみられる。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

【原文】 Достоевский «Преступление и наказание».

Ясно, что тут не кто иной, как Родион Романович Раскольников в ходу и на первом плане стоит. Ну как же-с, счастье его может устроить, в университете содержать, компаньоном сделать в конторе, **всю судьбу его обеспечить**; пожалуй, богачом впоследствии будет, почетным, уважаемым, а может быть, даже славным человеком окончит жизнь!

【和訳、工藤精一郎】 ドストエフスキー『罪と罰』

この芝居では、ほかならぬロジオン・ロマーノヴィチ・ラスコーリニコフが登場し、しかも主演であることも、はっきりしている。なにいいさ、彼の幸福が築き上げられるのだ。彼を大学に学ばせ、事務所で主人の片腕にしてやり、**彼の生涯を保証**してやることができる、もしかしたら、彼はのちに金持になり、人に尊敬されるようになりっぱな人になり、しかも名誉ある人間として生涯をとじるかもしれぬ!

【英訳】 Dostoevsky “Crime and Punishment”.

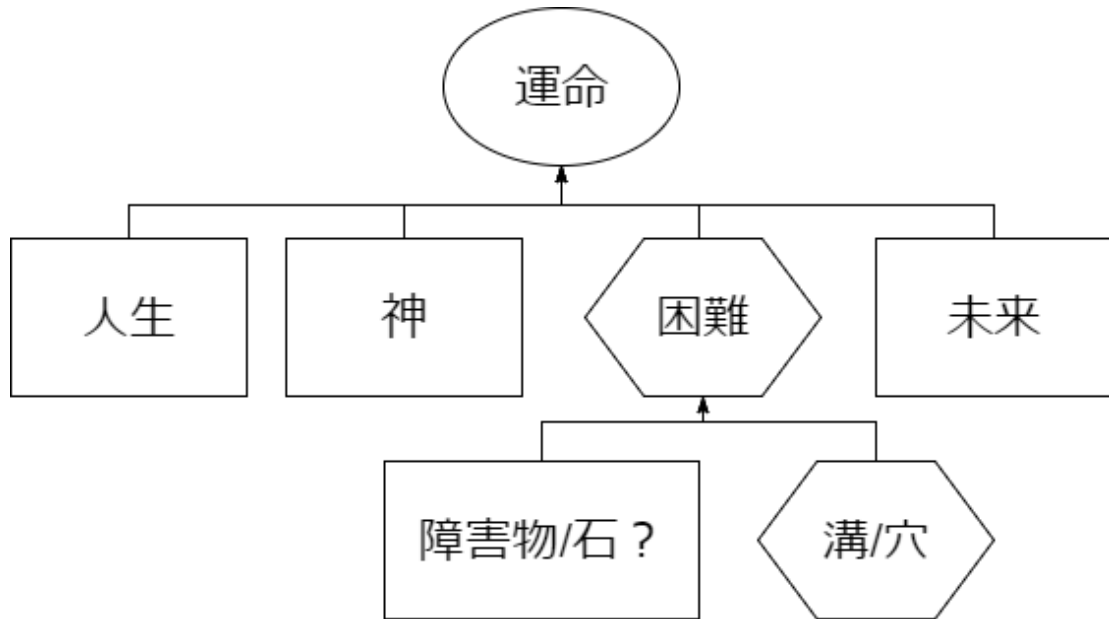
It's clear that Rodion Romanovitch Raskolnikov is the central figure in the business, and no one else. Oh, yes, she can ensure his happiness, keep him in the university, make him a partner in the office, **make his whole future secure**; perhaps he may even be a rich man later on, prosperous, respected, and may even end his life a famous man!

ロシア語の судьба という言葉には内包されないが、日本語の「運命」の中に出現する他の能動的ソースドメインについて言うなら、以下引用する連語から、日本語の「運命」の概念には、かなり能動的なソースドメイン「困難」も含まれていると想定することができる。(注 5)、(注 6)、(注 7)

運命が待っている、運命が訪れる、運命が降りかかる、運命が待ち受ける、運命が待ち構える、運命が迫る、運命がのしかかる、運命を背負う、運命を感じる、運命を持つ、運命を知る、運命を見る、運命をもたらす、運命を共にする、運命を生きる、運命を生き抜く、運命を乗り越える、運命を強いられる、運命を受け止める、運命を予

測する、運命を嘆く、運命を暗示する、運命を分かち合う、運命に陥る、運命に向かう、運命に立ち向かう、運命に直面する、運命に巻き込まれる、運命に耐える、運命に打ち勝つ、運命に対峙する、運命に押しつぶされる、運命から逃れる、運命から自由になる、運命と闘う

ソースドメイン「未来」「神」「人生」から派生した連語の大半は、極めてわかりやすく、ロシア語に訳しやすい。上記に引用した、ソースドメイン「困難」に関連する連語に関しては、翻訳の難しさの理由をいくつかのグループに分類することができる。第一のグループは、多様なソースドメインに共通の連語、例えば、「運命が待っている、運命をもつ、運命を予測する」という連語は「困難」と「未来」に共通する。「運命を嘆く」という連語は「困難」と「人生」に共通する（使用頻度は様々ではある）。これらソースドメインはロシア語の *судьба* の構造のなかで表現されており、従ってロシア語に訳すのは容易く、訳語も、*ждет судьба, ждать судьбу, предвидеть судьбу* あるいは *сетовать на судьбу* など文字通りの意味になる。第二グループは、例えば、「運命を乗り越える、運命に陥る、運命に直面する、運命に巻き込まれる、運命に耐える」といった、「困難」というソースドメインによってのみ説明可能な連語である。この場合、「困難」という概念そのものの構造にいくつかのニュアンスがある。障害という概念によって説明され得る上述の連語部分は、極めて自然にロシア語に訳される。例えば、「運命を乗り越える、運命に直面する」は、特段の問題なく *преодолеть судьбу, встретится с судьбой* と訳される。それは日本語の「困難」とロシア語の *трудности* という両方の概念はなんらかの「障害物」に例えられているからである。次は「運命に陥る、運命に巻き込まれる」という日本語表現をより詳しく見ていこう。日本語で特徴的なのは、「困難」が、なんからの深みにはまったり、巻き込まれたりすることに例えられることである。ロシア語の *трудности* の場合、このような意味合いは観察されない。「*Я впал в трудности*» あるいは «*меня затянули трудности*» という表現は存在しない。言葉の全貌を余すところなく伝えるために、「困難」と *трудности* の樹状概念構造を深く掘り下げていくことが必要である。しかしながら、上述の事実からも分かるように、この連語を訳す際の問題は、概念構造の第 2 階層に特定のソースドメインがないことにある。この影響を図式化すると、次のようになる。



特定の概念のソースドメインに等価語がない場合の翻訳（*заснаги лихої долі* → *хлебнуть горя*）では概念そのものではなく、不足しているソースドメインを訳語として用いるという手法については、すでに検討した。先に述べたケースについては、ロシア語の *судьба* の概念には、日本語の「困難」に相当するソースドメイン *трудности* が、末端にはあるものの、基本的に含まれている。しかしながら、一部の連語で、ロシア語には存在しない、まさに渦巻きや穴を思わせる「困難」の概念のソースドメインが前面に現れている場合、翻訳は困難を極める。同様の手法で、ロシア語の *трудности* には不足しているソースドメイン *круговорот* を用いて訳してみよう。例えば、「すべての人物が危険な運命に巻き込まれる極上のミステリー」という表現は、「Отличный детектив, где всех героев затягивает в опасный круговорот судьбы」と極めて自然に訳出できる。

つまり、翻訳者が概念の特定の性質に重点を置くことを望み、母国語に同様の言葉が見つからなければ、翻訳対象言語では、この機能に相当するソースドメインを使うだけでなく、第1階層のソースドメインが両言語において合わない場合は、レベルを飛び越えて第2階層のソースドメインを使うこともできる。次の翻訳例から分かるように、翻訳者はこれ以外にも様々な手法を用いている。ウクライナ語訳では、運命は、基本的に困難に近い *біда*（不幸）として伝えられる。ロシア語では、*наказание* というソースドメインから否定的の意味合いを受けている *постигла судьба* が使われる。英語では中立的な *bashing* が使われる。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

【原文】夏目漱石『吾輩は猫である』

おや今度もまた魂胆だ、なるほど実業家の勢力はえらいものだ、石炭の燃殻のような主人を逆上させるのも、苦悶の結果主人の頭が蠅滑りの難所となるのも、その頭がイスキラスと同様の**運命に陥る**のも皆実業家の勢力である。

【英訳】 Soseki “I Am a Cat”.

The power of a businessman is indeed formidable. By its frightening force my clinker of a master has been set afire with frenzy; his thatch of hair is well on its agonized way to becoming a skating rink for flies, and his skull can soon expect an Aeschylean **bashing**.

【露訳】 Сосэки «Ваш покорный слуга кот».

До чего же сильны богачи! В их руках все. Они могут сделать голову хозяина гладкой и такой скользкой, что даже мухам на ней не за что будет уцепиться, по их воле эту голову может **постигнуть судьба** головы Эсхила

【ウクライナ語訳】 Сосекі «Ваш покiрний слуга кiт».

Довести мого пасивного, як камiнь, господаря до запаморочення, замучити його так, щоб голова полисила і на ній не могла муха втриматися, напустити на його голову **бiду, яка спiткала** Есхіла, - усе в руках багатiв.

ここからは、日本語の概念に欠けているロシア語 **судьба** の周辺的なソースドメインが、日本語への翻訳の際にどのように表現されるかについて検討していく。先に取り上げたソースドメイン **приговор** (判決、宣告) を例として取り上げる。「Братья Карамзовы」から以下に引用する例のなかで、「судьба свершиться」という連語が「運命の計らいで」という日本語に訳されている。そもそもロシア語では連語 **свершиться** は、**приговор** や、**судьба** の概念のソースドメインの一つである **наказание** に特有のものである。しかし文脈から推すに、著者は語結合になんら否定的な意味を含ませていない。従って、意義素 **приговор**、あるいは、**судьба** には少し弱い **правосудие** が前面に引き出されている。上記の連語から仮定する限り、日本語にとって「運命」を判決に例えることは本質的ではない（「判決」という言葉からの直訳は、恐らく、「運命を執行する」になろう）。翻訳者はその翻訳のなかで、「計らい」「神の計らい」「天の計らい」という言葉を用いて、神の観念を前面に引き出した。著者は、この言葉を使用することで、あたかも **судьба** の観念と、結果として遂行される「公平な判決」の観念を結びつけた。ただし、原文には、日本語の「～の計らい」に見られる

ような、*судьба* の善なる意思を思わせるような示唆はない。原文では、冷静で公平な判決とだけ記されている。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】 Достоевский «Братья Карамазовы».

Я Ивану в этом смысле ничего и никогда не говорил, Иван, разумеется, мне тоже об этом никогда ни полслова, ни малейшего намека; **но судьба свершится**, и достойный станет на место, а недостойный скроется в переулочек навеки – в грязный свой переулочек, в возлюбленный и свойственный ему переулочек, и там, в грязи и вони, погибнет добровольно и с наслаждением.

【和訳、中山省三郎】 ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』

おれはこんな意味のことは一度だってイワンに話したことがないし、イワンのほうからももちろん、そんなことは一言半句だって、おれに匂わしたことはないのさ。しかし、そのうちには**運命の計らい**で、価値ある者が相当の席について、価値のない者は永久に路地の奥へ隠れてしまうのだ——自分の気に入った、自分に相当したきたない路地の奥へ——そして汚物と悪臭の中に、満足と喜びを覚えながら滅びていくのだ。

以下引用する例のなかで、翻訳者が、この言葉の中心ソースドメインの一つである *наказание* と関連している *участь* の連語を翻訳する際に、どのように対応したかを見ることができる。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】 Достоевский «Братья Карамазовы».

Митя сидел на стульчике у входной двери и в нервном нетерпении ждал **своей участи**.

【和訳、中山省三郎】 ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』

ミーチャは入口の戸のわきにある小さな橋子に腰をかけて、神経のないいらしさを感じながら、**わが身の成り行き**を待っていた。

【原文】 Достоевский «Братья Карамазовы».

– И поверьте, Дмитрий Федорович, – каким-то умиленно радостным голоском подхватил Николай Парфенович, – что всякое искреннее и полное сознание ваше, сделанное именно в теперешнюю минуту, может впоследствии повлиять **к безмерному облегчению участи вашей** и даже, кроме того...

【和訳、中山省三郎】ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』

「いや、本当にね、ドミトリーさん」とニコライはいかにも感激したような、情しそうな声で口をいれた、「今のような場合に、誠意のある十分な告白をなされば、後に**あなたの宿命の苦しみを和らげるために**、どんなに力を添えるかわかりませんよ、のみならず…」

ждать своей участи と обогатить свою участь という連語は、ソースドメイン наказание に極めて特徴的である。また後者では、ドミトリーが、自白を求める検事と対話するという状況によって、意味が強調されている。いずれの連語の場合も、翻訳者は、「成り行き」と「宿命の苦しみ」を用いることで、強調箇所を少し変えることを優先したのである。そしてこの場合、この翻訳は十分正しいと判断できる。なぜなら、судьба の概念における наказание は、いずれにしても周辺的なソースドメインで、限定的なニュアンスを付与するだけであり、主たる意味ではない。原文にはないが、翻訳中でソースドメイン наказание が前面に引き出されている、逆の例も見てみよう。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】村上春樹『1Q84』

「私が知りたいのは『さきがけ』の中でエリの身に何が起こったのかということだ。そしてまた深田夫婦が**どのような運命を辿ったのか**ということだ。この七年間、私はそれを解明しようと自分なりに努めてきたが、結局手がかりひとつ掴めなかった。

【露訳】Мураками «1Q84. Тысяча невестьсот восемьдесят четыре».

Я хотел бы знать, что именно в «Воздушном коконе» произошло с организмом Эри, — очень внятно произнес сэнсэй. — **А также какая участь постигла её родителей.** Семь лет подряд я пытался найти ответы на эти вопросы, но до сих пор ничего не добился.

【ウクライナ語訳】Мураками «1Q84».

Я хотів би дізнатися, що сталося з Ері в комуні «Сакіґакі». **А також, яка доля спіткала подружжя Фукади.** Упродовж семи років я по-своєму намагався це з'ясувати, але не знайшов нічого, за що можна зачепитися.

「運命を辿った」という日本語の表現から、「運命」が「人生」あるいは「未来」に例えられていることが分かる。一方で翻訳には、ソースドメイン наказание に由来する«постигла участь»が用いられている。この場合の問題は、もはやこのような意味のソースドメインが

引き出された点ではなく、*участь* に否定的ニュアンスが付け加えられ、事が好ましからざる進展を見せることが強調された点にある。だが我々が考えるところ、日本語にはこのようなニュアンスはない。「Какая участь постигла родителей」というフレーズを見た読者は、意識的あるいは無意識に、両親になにか悪いことが起こったと想像してしまう。ウクライナ語の翻訳«спіткала доля»にもまた、否定的ニュアンスが存在する。なぜなら、すでに言及した *лихо/горе* のソースドメインが強調されるからである。しかしながらここで言及しておくべきことは、否定的ニュアンスをもつソースドメイン *наказание* は、ロシア語の *участь* の概念の中心のひとつであることである。片や、*лихо/горе* は *доля* の構造の末端にある。我々の意見では、ウクライナ語訳の«спіткала доля»に比べ、「родителей постигла участь」というロシア語訳が、はるかにペシミスティックな色彩を帯びている理由がここにある。中立的な訳について言うなら、否定的ニュアンスを排除するために、翻訳者はソースドメイン *жизнь* を用い、この連語を *сложилась жизнь* と訳すのが相応しかっただろう。下に挙げる例では、翻訳者はまさにこの方法を用いている。ソースドメイン *будущее/майбутнє* を用い、「運命を辿る」の訳語は、「какое бы будущее не ожидало»から«какая бы судьба не ожидала»に、「яке майбутнє судилося»から«яка доля судилася»にそれぞれ転じられている。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】村上春樹『1Q84』

彼女の意識の中から生み出された話だ。彼の陰の技術者としてのささやかな役目はすでに終了していたし、その作品がこれから先どのような運命を辿ることになると、それは天吾には関わりのないことだった。また関わりを持つべきではないことだった。

【露訳】Мураками «1Q84. Тысяча невестьсот восемьдесят четыре».

Это девочка рассказала её, вытянув каждое событие из своего подсознания. Его теневая роль техника-оператора сыграна. **Какая бы судьба ни ожидала** это произведение в будущем, Тэнго это уже не касалось. И не должно касаться.

【ウクライナ語訳】Муракамі «1Q84».

Воно народилося в її свідомості. Тіньова, залаштункова, технічна роль Тенго скінчилася, а тому його не обходило, **яка доля судилася** цьому творові в майбутньому. І не мало обходити.

本稿の概念の捉え方に、ソースドメインがどのように影響するのか、もう一つの例を検討する。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)



【原文】村上春樹『1Q84』

考えを集中するにはニコチンの助けが必要だった。二三日さきの運命だって知れたものではない。十五年先の健康について思い煩う必要があるだろうか。

【露訳】 Мураками «1Q84. Тысяча невестьсот восемьдесят четыре».

Никотин необходим ему, чтобы сосредоточиться. Когда не знаешь, что с тобой случится через пару-тройку дней, к чему беспокоиться о болезнях, которые доконают тебя лет через десять-пятнадцать?

【ウクライナ語訳】 Муракамі «1Q84».

Та щоб зосереджено думати, потребував допомоги нікотину. Як складеться доля у найближчі два-три дні — зовсім не дрібниця. Тож чи варто клопотатися про здоров'я в наступні п'ятнадцять років?

「二三日先の運命」という日本語のフレーズには、「運命」の中心ソースドメインの一つ「未来」が前面に押し出されている。「未来」の等価語 будущее (ロシア語) あるいは майбутнє (ウクライナ語) もまた、それぞれ судьба と доля のソースドメインである。しかしながら、ロシア人翻訳者は судьба という言葉を用いていない。そして、これには理由がある。ロシア語を母語とする人々にとって、судьба の概念は、未来という意味で使われる場合でも、たった 2~3 日後に起こるような出来事ではないと考えられているのである。«Не знал, как сложится судьба через 2-3 дня»という翻訳は、あまりにも短い時間幅と、судьба という語が持つある種の熱気 (偉大さ) は相反するものである故に、不自然に響く。もし 2~3 年の時間幅であれば、このような翻訳は全くノーマルなものとして読まれることであろう。だからこそ、翻訳者はこの言葉を描写的な翻訳に置き換えることにしたのである。доля を用いたウクライナ語翻訳が、完全とは言えないまでも、より自然であるのは興味深い。仮に、時間幅が数か月であったとしたなら、この翻訳はウクライナ語を母語とする人々になんら疑問を抱かせなかったであろう。日本語を母語とする人々にはこのような連語が自然なものに見なされ、ウクライナ語では部分的に許容され、ロシア語では許容されないのは何故か。ソースドメインを表面的に分析しただけでは、この問いに答えることはできない。各言語における超自然的な力を表すソースドメインの立場 (異なる理解のされ方) という観点から、部分的に答えることはできるかもしれない。すでに述べた通り、ロシア語におけるこのソースドメイン (神) は、судьба の概念を、ウクライナ語で観察され

るよりも、より高尚で、異質で、一般の人々から遠いものになっている。

ここからは、日本語の単語「運命」のロシア語訳の一例を検討していく。次の例では、翻訳者は「運命」を рок として訳出している。翻訳では、рок の概念が擬人化された *предстанет рок* という連語が使われている。рок の概念構造には、судья と（死刑の道具としての）меч/топор という二つのソースドメインがあり、それ故に不可避性や終局性という意義素が付与されていることはすでに指摘した。つまるところ、ロシア語で рок は、だれかの死に関連して非常によく使われている。рок がもっているこのニュアンスが、翻訳者をして、この文脈においてこの言葉を選択せしめたのであろう。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

【原文】夏目漱石『ころ』

私はその時この燈火が音のしない渦の中に、自然と捲き込まれている事に気が付かなかった。しばらくすれば、その灯もまたふっと消えてしまうべき運命を、眼の前に控えているのだとは固より気が付かなかった。

【露訳】Сосэки «Сердце».

Я не знал, что в этот момент светильник этот сам падает в немую пучину. Я не знал, что ещё немного — **и перед ним предстанет рок**, который потушит и этот свет.

本章の始めに指摘した通り、「運命」の一連の同義語には、ロシア語では судьба、あるいは、ウクライナ語なら доля と訳される、様々な数多くの概念がある。例えば、「縁」は、次のように訳されている。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

【原文】夏目漱石『吾輩は猫である』

縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れんのである。

【英訳】Soseki “I Am a Cat”.

**It was sheer chance;** if the bamboo fence had not been broken just at that point, I might have starved to death at the roadside.

【露訳】Сосэки «Ваш покорный слуга кот».

**Удивительная вещь — случай:** не будь этой дыры, умер бы я в конце концов от голода

где-нибудь на дороге. Вот уж недаром говорят: «Неисповедимы пути господни».

【ウクライナ語訳】 Сосекі «Ваш покірний слуга кіт».

Дивна все-таки річ — доля: якби не було того отвору, довелось б мені вмерти з голоду десь у рові. Правду кажуть: «Ніхто не знає, що його на світі чекає».

辞書の定義（デジタル大辞泉）では、この単語には「運命」の他に、非常に多くの様々な意味がある。この単語は非常に多面的であり、それ故、日本語を母語としない人々にとってわかりにくいものとなっている。

- 1 《(梵) pratyaya の訳》 仏語。結果を生じる直接的な原因に対して、間接的な原因。原因を助成して結果を生じさせる条件や事情。「前世からの縁」
- 2 そのようになるめぐりあわせ。「一緒に仕事をするのも、何かの縁だろう」
- 3 関係を作るきっかけ。「同宿したのが縁で友人になる」
- 4 血縁的、家族的なつながり。親子・夫婦などの関係。「兄弟の縁を切る」
- 5 人と人のかかわりあい。また、物事とのかかわりあい。関係。「金の切れ目が縁の切れ目」「遊びとは縁のない生活」
- 6 （「椽」とも書く）和風住宅で、座敷の外部に面した側に設ける板敷きの部分。雨戸・ガラス戸などの内側に設けるものを縁側、外側に設けるものを濡れ縁ということが多い。

この概念の連語分析の結果、上述した辞書の定義が確認されている。（注5）、（注6）、（注7）

<運命>

縁が訪れる、縁が尽きる、縁を感じる、縁を持つ、縁を待つ、縁をもたらず、縁を引き寄せる、縁を信じる、縁を掴む、縁を占う、縁に出会う、縁に感謝する、縁で会う

<関係>

縁が続く、縁がない、縁がある、縁が生まれる、縁ができる、縁が生じる、縁が切れる、縁が薄れる、縁が深まる、縁が復活する、縁がつながる、縁が結ばれる、縁を大切にする、縁を切る、縁を持つ、縁を結ぶ、縁を求める、縁を繋ぐ、縁をもたらず、縁を深める、縁を保つ、縁を育む、縁を広げる、縁を築く、縁を占う、縁を生かす、縁を断ち切る、縁を強める、縁を紡ぐ、縁を取り持つ、縁を修復する、縁に繋がる、

縁に感謝する、縁に付く、縁に恵まれる、良縁/悪縁、腐れ縁、強い/弱い縁、濃い/薄い縁、長い/短い、縁が強い/弱い、縁が濃い/薄い、縁が近い/遠い、縁が浅い/深い

#### <出会い>

縁が欲しい、縁がない、縁がある、縁が訪れる、縁が生まれる、縁が生じる、縁が尽きる、縁が舞い込む、縁が逃げる、縁を大切にす、縁を探す、縁を求める、縁を待つ、縁を招く、縁をもたらず、縁をいただく、縁を願う、縁を引き寄せる、縁を掴む、縁を逃す、縁を生かす、縁を遠ざける、縁を取り持つ、縁に感謝する、縁に恵まれる、良縁/悪縁

#### <きっかけ>

縁で会う、縁で付き合う、縁で知り合う、何かの縁、ちょっとした縁

我々が検討した例では、「縁」という言葉はしばしば、なにかとの繋がり、あるいは、人と人との関係という意味で使われている。この意味で、あらゆる点から判断するに、この語の翻訳の際、翻訳者にはなんら問題は生じない。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

#### 【原文】村上春樹『1Q84』

少女時代に「証人会」に属していたが、十代になって脱会し教団とはきっぱり縁を切っている。

#### 【露訳】 Мураками «1Q84. Тысяча невестьсот восемьдесят четыре».

В раннем детстве она воспитывалась в секте «очевидцев», но, повзрослев, **оборвала отношения** как с сектой, так и с семьей.

#### 【ウクライナ語訳】 Мураками «1Q84».

У дитинстві належала до секти «Братство свідків», але в десятирічному віці **порвала з нею будь-які зв'язки**.

#### 【原文】村上春樹『1Q84』

「ああ、学問的なものとはきっぱり縁を切っている。優秀な学者だったが、アカデミズムの世界にはとくに未練もないみたいだ。もともと権威や組織とはそりが合わず、どちらかと言えば異端の人だった」

【英訳】 Murakami “1Q84”.

“True, **he’s cut all ties with** academia. He was an outstanding scholar, but he doesn’t seem to miss the academic world. But then, he never did want much to do with authority or the organization. He was always something of a maverick.”

【露訳】 Мураками «1Q84. Тысяча невестьсот восемьдесят четыре».

— А кстати, Эбисуно-сэнсэй **ушел** из науки, не так ли? И книжек больше не пишет.

— Верно. Хотя ученым он был выдающимся, но уж больно недолго любил академизм. И не хотел принадлежать ни к какой системе. Одним словом, еретик.

【ウクライナ語訳】 Мураками «1Q84».

— Так, **порвав зв’язки з наукою**. Був першокласним ученим, але, видно, не сумує за світом академізму. Вже давно не знаходив спільної мови з авторитетами й організаціями. Загалом еретик.

【原文】 村上春樹『1Q84』

ちょうど良い機会かもしれない。このあたりでいろんな面倒とは**縁を切り**、人生をあらためてやり直すのも悪くない。新しい職場、新しい場所、新しい人間関係。

【英訳】 Murakami “1Q84”.

It might be the perfect opportunity. Now might be a good time **to make a break with** all his troubles and start his life over again: a new job, a new place, new relationships.

【露訳】 Мураками «1Q84. Тысяча невестьсот восемьдесят четыре».

Возможно, именно сейчас судьба дарует ему уникальный шанс **оборвать все старые связи** с миром и начать с нуля: новая работа, новое жилище, новые отношения...

【ウクライナ語訳】 Мураками «1Q84».

Можливо, саме зараз наспіла для цього добра нагода. Зовсім непогано **позбутися** різних клопотів і почати нове життя. З новим місцем роботи, квартирою і новими людськими стосунками

とはいえ、この概念が運命あるいは偶然な出来事と関係している場合には、この語を翻訳するのは難しくなる。なぜなら、この場合は、単に運命のみだけでなく、人と知り合っ

たり、出会ったりする運命を意味しているからである。日本語を母語としない人々には、このような意味が結び付くなど考えもしない場合がある。例えば、「ちょっとした縁で」というフレーズをロシア語に訳すのは極めて難しい。このフレーズでは、「縁」という概念が、「ちょっとした」という程度を示す言葉を有している。以下に取り上げる例では、「ちょっとした縁で」が、”with thanks to a distant connection”あるいは«по счастью, отец Тэнго оказался на короткой ноге»と訳され、翻訳者は、運命よりは知り合ったことの幸運を強調している。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】村上春樹『1Q84』

欧州戦線を終結させたソビエト軍は、大量の兵力をシベリア鉄道で極東に移動し、国境線を越えるための配備を着々と整えていた。父親はちょっとした縁で親しくなったある役人からそのような切迫した情勢をこっそり知らされ、ソビエト軍の侵攻を予期していた。弱体化した関東軍はとてもちこたえられそうにないから、そうなったら身ひとつで逃げ出せるように準備をしておくと、その役人は彼に耳打ちしてくれた。

【英訳】Murakami “1Q84”.

Having ended its operations on the European front, the Soviet army had used the Trans-Siberian Railway to shift a huge military force to the Far East in preparation for the border crossing. Tengo's father had been expecting this to happen, having been secretly informed of the impending situation by a certain official, a man **he had become friendly with thanks to a distant connection**. The man had told him privately that Japan's weakened Kwantung Army could never stand up to such an invasion, so he should prepare to flee with the clothes on his back as soon as it happened-the sooner the better.

【露訳】Мураками «1Q84. Тысяча невестьсот восемьдесят четыре».

По Транссибирской магистрали Советы перебрасывали на Дальний Восток огромные силы, готовясь к масштабному наступлению. От одного чиновника, с которым, **по счастью, отец Тэнго оказался на короткой ноге**, он и услышал тревожную информацию. «Квантунская армия слишком ослабла, чтобы выстоять против русских, — сообщил ему под большим секретом чиновник. — Если шкура дорога, беги отсюда ко всем чертям, да как можно скорее!»

ロシア語では、ものに使われる *судьба* の概念は、例えば、「Меня интересует судьба моей посылки.」のような、ものと出来事の関連性を意味する、ごく一般的、日常的な意味を有し

ている。しかしながらこの概念が人と結びつくと、すでに指摘したように、ソースドメイン *бог* (神) の影響を強く受ける。日常的なシチュエーションで必ず使われるわけではないのは、恐らくこのためであろう。例えば、だれかにあったときに発せられる「これもお縁ですね〜」「この度は、素晴らしいご縁をいただきました」というフレーズは、*судьба* の概念を使ってロシア語で自然に伝えるのは難しい。首尾よくだれかに出会えた場合でも、*«Это судьба.»*あるいは*«Как хорошо, что нас свела судьба.»*という表現は使われない。ロシア語で、人と知り合ったときに *судьба* を使うためには、話し手の人生に実際に深い痕跡を残さなければならない。従って、実際には翻訳者は、*судьба* という単語を避け、より平凡で日常的な概念 *случай* を使う。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】川端康成 『雪国』

「まあじゃあ、御縁でもってまたいっしょになろう。」と、娘に言い残して降りて行った。

【露訳】カバбата «Снежная страна».

— Ну, будьте здоровы! Может, еще когда и встретимся, **если выпадет случай**, — сказал он и сошел с поезда.

【ウクライナ語訳】カバбата «Країна снігу».

— Бувайте здорові! Може, ще зустрінемось **при нагоді**, — сказав він і зійшов з поїзда

*судьба* というロシア語の概念の訳として、日本語では時に「運」という概念を利用できるが、それはその意味 (デジタル大辞泉) の一つが運命という一連の同義の概念に含めることができるからである。

- 1 人の身の上にめぐりくる幸・不幸を支配する、人間の意志を超越したはたらき。天命。運命。「運が悪い」
- 2 よいめぐりあわせ。幸運。「運が向いてくる」「運がない」

縁の場合もそうだが、この概念も多くのほかの意味を持っている。主に、上記の辞書の定義から分かるように、その意味の一つは幸せと首尾よい出来事という概念に結びついていて、この意味では、英語の *luck*、またはロシア語の *везение/счастье* (幸運/幸せ) の概念にかなり近く、訳す際に特に問題はない。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】安部公房『砂の女』

訪問者は、この穴ぐらから解放された、**運のいい住人**に対して、本能的な妬みをおぼえるかもしれない。

【英訳】Abe “The Woman in the Dunes”.

Perhaps the caller would be instinctively jealous of the **lucky man** who had been freed from this hole.

【露訳】Абэ «Женщина в песках».

Посетитель чувствует еще, пожалуй, инстинктивную зависть к **счастливчику**, который вырвался из этой дыры

運が運命として、筆者の検討する訳におけるネガティブな表現で使用される場合、この概念は英語の“bad luck”またはロシア語の«не повезло»と表現される。この傾向は英語の fate 及びロシア語の **судьба** が深刻な力を意味し、比較的小さな失敗や成功という意味では使用されないためであると説明することができる。以下の訳で、訳者は fate または **судьба** の概念に関連のない単語を使用している。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

【原文】安部公房『砂の女』

たそうで……それも、**運わるく**、ちょうど台風のころで、とくべつ仕事がきつかったんでしょねえ……」

【英訳】Abe “The Woman in the Dunes”.

Besides, it **happened** to be the typhoon season, and the work was extra hard."

【露訳】Абэ «Женщина в песках».

А тут еще, **как назло**, время тайфунов, вот и перетрутился...

反対の例として、原文に運や成功といった概念の示唆が何もないのに、日本語では「運が向いてくる」という連語が使用されている。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

【原文】Capote “Breakfast at Tiffany's”

She had something working for her, she had them interested, she **could've really rolled**.



【和訳】カポーティ 『ティファニーで朝食を』

何か彼女のためになるような事が起っていてみんなの興味を集めていたんですから、彼女の出方ひとつで、ほんとうに**運が向いてくる**こともありえたわけですね。

【露訳】Капоте «Завтрак у Тиффани».

**Она попала в струю**, ей заинтересовались, и она действительно могла сняться в кино.

しかしながら、人生に影響を及ぼす天の力について言及があり、運が運命の意味に若干近いものとなる場合、特に運を英語で **Providence**、ロシア語で **судьба**、ウクライナ語で **доля** とする翻訳がみられる。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

【原文】夏目漱石 『吾輩は猫である』

いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶって**運を天に任せていた**。

【英訳】Soseki “I Am a Cat”.

Accepting that I had no hope, I lay stone-still, my eyes shut tight and **trusting to Providence**.

【露訳】Сосэки «Ваш покорный слуга кот».

«Это уж совсем никуда не годится», — подумал я и, закрыв глаза, **вверил свою судьбу небу**.

【ウクライナ語訳】Сосекі «Ваш покірний слуга кіт».

«Ну, це вже занадто», — подумав я і заплющив очі, **довіривши свою долю небу**.

もうひとつの反対の例として、ロシア語の **смириться пред судьбой**（運を天に任せる）（**смиряться пред Богом**（神の前に屈服する）という連語が当てはまる参考となる）という表現は、日本語で「運を天にまかせる」、英語で **yield to fate** と訳されている。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

【原文】Достоевский «Братья Карамазовы».

То-то брат, такие такими и остаются, **они не смиряются пред судьбой**. Так ты думаешь, что я не буду ее вечно любить?

【和訳】 ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』

そのとおりなんだよ、弟、ああいう女はいつまでたってもあのとおりなんだよ、ああいう風な女は、けして運を天にまかせるといことがないのさ、

【英訳】 Dostoevsky “The Brothers Karamazov”.

Quite so, brother. **Such people remain always the same.** They don't yield to fate. So you think I shan't love her for ever.

英語訳における単語 *fate* のいくつかの使用例は、すでに引用した。ここからは、少し詳細に英訳例を検討していく。ロシア語の概念 *судьба* の英語における等価語は、*fate*, *destiny*, *lot* などであるが、すでに見てきたように、英語でこれらの単語が用いられる頻度は、ロシア語 *судьба* の同義語の使用頻度より、はるかに低い。Wierzbicka (1992, 66) は、*fate* という単語を一度も目にすることなく、一冊の文学作品を読み終える機会は極めて多いことを論証している。

In English, fate is not a particularly salient concept and it is not often mentioned in English discourse; for example, one can easily read a long English novel, or a volume of letters or memoirs, without encountering fate once; similarly, it is possible to read a comparable Russian book without encountering *rok* once, but it is impossible to read a Russian novel, or a volume of memoirs or letters, without coming across many references to *sud'ba*

英語において *fate* は特に顕著な概念ではなく、文中に表れないことも多い。例えば、英語で書かれた小説や長文の手紙、自叙伝を読んで一度も *fate* を見ないことは大いにあり得る。同様に、ロシア語で同等の分量の本を読んで一度も *rok* を見ないことも十分にあり得る。ところが、*sud'ba* は、ロシア語の小説、長文の手紙、自叙伝の中で幾度も言及され、この語を見ない可能性はない。

我々はこの事実を、いくつかの英語の本で検証した。例えば、“Breakfast at Tiffany's” (Truman Capote)、または、“Grapes of Wrath” (John Steinback) では、“fate”という言葉は一度も使われていない。“Great Gatsby” (Scott Fitzgerald) では、たった一度だけである。“Harry Potter” (Joanne Rowling) シリーズ全7巻で“fate”が使用されているのは、不活動体名詞として約15回、“destiny”は6回である（但し“Wand of Destiny”という語結合を除く）。一方、ロシア語訳（ロスメン出版社）において、*судьба* という概念が名詞形で53回使用され

ているのは興味深い事実である。судьба が、オリジナルより翻訳版でなぜこれほどに多用されるのかを理解するために、各例を個別に分析する必要がある (lot, providence あるいは luck などのような、他の同義語から訳された可能性もある)。しかしながら、これは単に、この種の単語が英語より頻繁に使われるというロシア語の特性によることは十分にあり得る。ちなみに、日本語訳版「ハリー・ポッター」シリーズ全 7 巻では、「運命」という言葉が約 35 回使われている。つまり、オリジナル版の著者が、fate あるいは destiny という言葉で表現することを好まなかった出来事や状況描写ですら、日本語版ではこの概念が用いられている可能性がある。例えば、以下の翻訳は、まさにこのように訳されている。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

【原文】 Rowling “Harry Potter and the Chamber of Secrets”.

I just want to say, Harry, that I’m sorry I ever suspected you. I know you’d never attack Hermione Granger, and I apologize for all the stuff I said. **We’re all in the same boat now, and, well —**”

【和訳】 ローリング 『ハリー・ポッターと秘密の部屋』

「ハリー、僕は君を一度でも疑ったことを、申し訳なく思っています。君はハーマイオニー・グレンジャーを決して襲ったりしない。僕が今まで言ったことをお詫びします。僕たちは今、みんなおんなじ**運命**にあるんだ。だからー」

【露訳】 Роулинг «Гарри Поттер и Тайная комната».

— Хочу извиниться, Гарри, за то, что подозревал тебя. На Гермиону Грэйнджер ты бы никогда не напал. Так что прошу прощения за все, что я говорил о тебе раньше. **Теперь мы все в одной лодке**, ну и...

【ウクライナ語訳】 Ролінг «Гаррі Поттер і таємна кімната».

— Гаррі, хочу вибачитися за те, що я тебе підозрював. Я знаю, що ти ніколи б не напав на Герміону Грейнджер. Прошу вибачення за все, що я тоді наговорив. **Тепер ми всі в однаковому становищі**, а тому...

日本語訳版「ハリー・ポッター」で、オリジナル版では fate の概念も、destiny の概念も使用されていない箇所、日本語の「運命」が出てくる箇所を以下に示す。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

【原文】 Rowling “Harry Potter and the Chamber of Secrets”.

“The wizard family Dobby serves, sir. . . . Dobby is a house-elf — **bound to** serve one house and one family forever. . . .”

【和訳】 ローリング 『ハリー・ポッターと秘密の部屋』

「ドビーめがお仕えしているご主人様、魔法使いの家族でございます……ドビーは屋敷しもべです……一つの屋敷、一つの家族に一生お仕えする**運命**なのです」

【露訳】 Роулинг «Гарри Поттер и Тайная комната».

О своих хозяевах, сэр... Добби — домовый эльф, **его участь** до конца дней жить в одном доме, служить одной семье...

【ウクライナ語訳】 Ролінг «Гаррі Поттер і таємна кімната».

Родину чарівників, яким прислуговує Добі... Паничу, Добі — ельф домовик, і він **зобов'язаний** вічно служити одному домові й одній родині.

次の例では、英語の“choice”が「運命」と訳されている。片や、ロシア語とウクライナ語に翻訳する際、翻訳者は英語の choice に意味が近い単語（выбор、 вибір）をそれぞれ選択している。日本人翻訳者は、この文脈では「運命」が適切であると考えた。翻訳の正しさの程度を評価するつもりはない。しかしながら、翻訳者がこの言葉を選んだという事実は、「運命」の概念は、日本語の世界観においてゆるぎないポジションを占めており、日本語を母語とする人々（翻訳者も含めて）は、様々なシチュエーションを描写する際、この言葉を使うことに抵抗がない、ということなのかもしれない。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

【原文】 Bronte “Wuthering Heights”.

A sad pity-- I must beware how I cause her to regret her **choice**.

【和訳】 ブロンテ 『嵐が丘』

なんと悲しいいじらしい——おれに会って、ああいう夫を持った**運命**を悔むようなことのないように気をつけなければならんぞ」と、そこまで考え

【露訳】 Бронте «Грозовой перевал».

И жалко и грустно! Нетрудно понять, как сильно должна была она пожалеть о своем **выборе**, увидев меня!

【ウクライナ語訳】 Бронте «Буремний Перевал».

Як шкода, що я змусив її пожалкувати про свій **вибір**.

次例の中で、“We’re all in the same boat now”というフレーズは、「僕たちは今、みんなおんなじ運命にあるんだ」と訳されている（この例はすでに別のところで引用した）。困難な状況を同じ舟に乗り合わせることに例えることは、日本語の文学的隠喩表現にはあまり適さないのだろう。だからこそ翻訳者は、この状況を「運命」という言葉を使って訳出したのであろう。「同じ立場にいる/同じ状況である」という別の言い方でしたら、より中立的であり、オリジナルにある意味（困難）を完全には伝えきれない。すでに示した通り、「運命」の概念構造には「困難」という概念が含まれており、したがって、原文に即したニュアンスが伝えられ得る（運命にある←困難にある）。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

【原文】 Rowling “Harry Potter and the Chamber of Secrets”.

“I just want to say, Harry, that I’m sorry I ever suspected you. I know you’d never attack Hermione Granger, and I apologize for all the stuff I said. **We’re all in the same boat now**, and, well —”

【和訳】 ローリング 『ハリー・ポッターと秘密の部屋』

「ハリー、僕は君を一度でも疑ったことを、申し訳なく思っています。君はハーマイオニー・グレンジャーを決して襲ったりしない。僕が今まで言ったことをお詫びします。僕たちは今、**みんなおんなじ運命にあるんだ**。だから——」

【露訳】 Роулинг «Гарри Поттер и Тайная комната».

— Хочу извиниться, Гарри, за то, что подозревал тебя. На Гермиону Грэйнджер ты бы никогда не напал. Так что прошу прощения за все, что я говорил о тебе раньше. **Теперь мы все в одной лодке**, ну и...

【ウクライナ語訳】 Ролінг «Гаррі Поттер і таємна кімната».

— Гаррі, хочу вибачитися за те, що я тебе підозрював. Я знаю, що ти ніколи б не напав на Герміону Грейнджер. Прошу вибачення за все, що я тоді наговорив. **Тепер ми всі в**

однаковому становищі, а тому...

ここから、話を英語の fate に戻す。fate が用いられる基本的意味について言えば、судьба の概念との間にいくつかの共通点を見いだせる。例えば、以下の文章では、fate は будущее (未来) の意味で使われている。ロシア語、ウクライナ語、日本語への翻訳の際に用いられる連語では、まさにこのソースドメインが前面に引き出されている。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

【原文】 Rowling “Harry Potter and the Prisoner of Azkaban”.

“**It’s the fate that awaits** Sirius Black. It was in the Daily Prophet this morning. The Ministry have given the dementors permission to perform it if they find him.”

【和訳】 ローリング 『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』

「シリウス・ブラックを待ち受ける**運命**がそれだ。今朝の『日刊予言者新聞』に載っていたよ。魔法省が吸魂鬼に対して、ブラックを見つけたらそれを執行することを許可したようだ」

【露訳】 Роулинг «Гарри Поттер и узник Азкабана».

**Такая судьба ожидает** и Сириуса Блэка. Об этом сегодня написано в утреннем выпуске «Пророка». Министерство дало разрешение применить Поцелуй, если они его найдут.

【ウクライナ語訳】 Ролінг «Гаррі Поттер і в'язень Азкабану».

**Така ж доля чекає** на Сіріуса Блека. Сьогодні про це написали в "Щоденному віщуні". Міністерство дало дементорам дозвіл виконати Цілунок, коли його знайдуть.

英語の fate の概念中にソースドメイン future が存在することは、await, bring, lie in somebody's hands, depend, invest in, determine, affect, predict, seal, face, care about, worry about, reveal, improve, imagine, deny, to be concerned about, wonder about, contemplate といった固有の連語からも分かる。fate という言葉が、god のような、なんらかの大いなる力を連想させることは、以下のロシア語から英語への翻訳に見ることができる。(注目すべき箇所には太字にする)

【原文】 Тургенев «Первая любовь».

Мне казалось, что уже больше ничего **нельзя требовать от судьбы**, что теперь бы следовало взять, вздохнуть хорошенько в последний раз, да и умереть

【英訳】 Turgenev “First Love”.

It seemed to me that now I could **ask nothing more of fate**, that now I ought to ‘go, and draw a deep last sigh and die.

このソースドメインは、以下の連語に極めて明確に現れている。(注5)、(注6)、(注7)

strike, love, intervene, step, decide, allow, lead, decreed, point, deal, place, turn, has somebody's back, provide, know, have different plans, take a hand, play its hand, choose, smile, conspire, favor, carry, show, bring together, hate, orchestrate, take away, wing, tell, play a part, flip, make a decision, laugh, arrange, deem, help, separate, unite, bestow, shine, contribute, bless, throw together, align (with), pull together, elude, overhear, assemble, open doors, locate, follow, hear, rail at, rebel against, accuse, book of, finger of, ordained by ..., leave it up to, whim of, the decrees of, to be against, as ... has willed, abandon oneself to

また次の語法では、ロシア語の *судьба*、あるいは、ウクライナ語の *доля* のように、英語の *fate* も人間の人生 (life) の概念の影響下にあることが分かる。(注5)、(注6)、(注7)

horrible, terrible, tragic, cruel, sad, dark, common, bloody, future, strange, human, political, usual, hard, true, eternal, bad, evil, doomed, the worst, economic, miserable, hideous, horrific, blessed, personal, collective, harsh, fiery, historical, lucky, financial, divine, the best, inscrutable, romantic, relentless, fearful, precious, traditional, perilous, heavy, wayward, heartless, unenviable, humane, serious, celestial, prewritten, rests in somebody's hands, happen, take a turn, catch up, hit, stop, win, tie, reward, imprison, render, tease, hang upon, assure, limit, regulate, to be interested in, reflect, look at, mess with, change, endure, rage against, know, find, control, decide, endanger, escape, examine, share, accept, discuss, discover, mention, experience, deserve, drive, fix, master, battle over, lament, desire, abide, mould, tempt, sorrow over, moan about, generate, grieve at, pain at, victim of, chain of, irony of, ups and downs of, quirk of, strands of, no ... but what we make, ... is at stake, ... hangs in the balance, caprice of, the only, choose a better, deserve a better, trapped by, roulette wheel of, put ... into your own hands

英語の概念 *fate* の末端の意味/ソースドメインについて言うなら、以下の例から判断するに、この言葉には終局性あるいは死の要素が存在していると仮定できる。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

【原文】 Rowling “Harry Potter and the Prisoner of Azkaban”.

You helped uncover the truth. You **saved an innocent man from a terrible fate.**

【和訳】 ローリング 『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』

「君は、真実を明らかにするのを手伝った。一人の無実の男を、恐ろしい運命から救ったのじゃ」

【露訳】 Роулинг «Гарри Поттер и узник Азкабана».

Ты помог установить истину. **Спас невиновного человека от ужасной судьбы...**

【ウクライナ語訳】 Ролінг «Гаррі Поттер і в'язень Азкабану».

Ти допоміг встановити істину. **Врятував невинну людину від жахливої долі.**

人間が病で死ぬ状況が、連語«meet the same fate»を用いた、日本語から英語への逆方向への翻訳でも、このニュアンスが観察できる。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

【原文】 安部公房 『砂の女』

思いなしか、嘲りの気配が感じられ、男はふと、観光絵葉書のセールスマンが、**彼と同じ運命にあって**病死したという、女の話の思いだした。

【英訳】 Abe “The Woman in the Dunes”.

he suddenly recalled the woman's story about the postcard salesman **who, after meeting the same fate as he,** had taken sick and died.

【露訳】 Абэ «Женщина в песках».

Мужчине почудилась в его словах насмешка, и тут же он вспомнил рассказ женщины об открыточнике, **которого постигла такая же участь,** и что потом он заболел и умер.



meet the same fate という語法は、恐らく meet one's end / meet one's death から派生したものである。同様の状況描写の場合、ロシア語では судьба ではなく、まさに участь が用いられているのは興味深い。すでに示した通り、участь は судьба よりも否定的な意味合いを有している。なぜなら、この語のソースドメインのなかに、この場合は連語 постигнуть によって表現されている、非常に能動的な наказание の概念が含まれているからである。英語に関しては、Wierzbicka (1992, 92) も fate の中の追加的な意味である終局性に気づいており、以下のように述べている。

Fate is a deterministic concept. It refers to things which 'happen' and it presents them as inevitable, irreversible, uncontrollable, and determined by earlier causes.

NSM 法 (Wierzbicka, 1992, 95) で Fate は以下のように説明されている。

fate

- (a) different things happen in the world that are bad for people
- (b) these things happen because some other things happen
- (c) if those other things happen, these things cannot not happen

destiny については、Wierzbicka が論証しているように、終局性の意義素自体はこの語に含まれているものの、英語を母語とする人々はこの言葉を逆の意味合い、つまり、より肯定的な意味合いで捉えている。そのため、destiny をロシア語の судьба と訳すのは、必ずしも正しいとは言えないと彼女は見なしている (Wierzbicka, 1992, 69)。

But destiny is misleading as a translation of sud'ba, because of its optimistic and purposeful overtones: it suggests vaguely that at the end 'all was well', and an important goal was achieved. Sud'ba implies neither a 'good' or meaningful outcome, like destiny, nor a 'bad' or meaningless outcome, like fate; nor is it totally neutral between good and bad

Wierzbicka の NSM 法による説明の中には fate と違って、destiny は bad という言葉で説明されていない。

Destiny

- (a) different things can happen to different people
- (b) different people can do different things

- (c) some people can do things that other people can't do
- (d) I imagine I know that someone wants it
- (e) this someone is not part of this world

この特性は、以下の抜粋中で翻訳者が言葉を選択する際の鍵となったのであろう。

(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】 Достоевский «Братья Карамазовы».

Скажи мне сам прямо, я зову тебя – отвечай: представь, что это ты сам возводишь **здание судьбы человеческой** с целью в финале осчастливить людей, дать им наконец мир и покой, но для этого необходимо и неминуемо предстояло бы замучить всего лишь одно только крохотное созданище, вот того самого ребеночка, бывшего себя кулачком в грудь, и на неотомщенных слезках его основать это здание, согласился ли бы ты быть архитектором на этих условиях, скажи и не лги!

【英訳】 Dostoevsky “The Brothers Karamazov”.

Tell me yourself, I challenge your answer. Imagine that you are **creating a fabric of human destiny** with the object of making men happy in the end, giving them peace and rest at last, but that it was essential and inevitable to torture to death only one tiny creature — that baby beating its breast with its fist, for instance — and to found that edifice on its unavenged tears, would you consent to be the architect on those conditions? Tell me, and tell the truth.’

上記の例では、人々を幸せにすることが、*возведения здания судьбы человеческой* の目的であった。したがって、*fate* 及びその死と終局性のニュアンスは、この文脈における翻訳としては適していなかった。*destiny* の連語を分析すると、この言葉の潜在的な中心ソースドメインのなかに同じく *life*、*future*、*god* を見出すことができるが、*fate* と *destiny* の違いは、*destiny* には周辺的なソースドメイン *end/death* がないことである。その代わり、周辺的なソースドメインにおいて、「(人生に課せられた) 目的、(大いなる) 目的」あるいは「使命」という概念が大きな位置を占めている。このことは、次の二つの例の中でも観察できる。  
(注目すべき箇所には太字にする)

【原文】 Rowling “Harry Potter and the Sorcerer's Stone”.

Perhaps Harry had eaten a bit too much, because he had a very strange dream. He was wearing Professor Quirrell’s turban, which kept talking to him, telling him he must transfer to Slytherin

at once, because it was his destiny.

【露訳】 Роулинг «Гарри Поттер и Философский Камень».

Наверное, странный сон, приснившийся Гарри, объяснялся тем, что он слишком много съел. Во сне он расхаживал в тюрбане профессора Квиррелла, а тюрбан беседовал с ним, убеждая его, что он должен перейти на факультет Слизерин, **поскольку так ему предначертано судьбой.**

【原文】 村上春樹『1Q84』

預言者は同時に王であり、王は殺されることを運命づけられている。つまり彼女は運命が寄越した刺客なのだ。そして彼女はその王であり預言者である存在を暴力的に消去することによって、世界の善悪のバランスを保ったのだ。その結果、彼女は死んでいかななくてはならない。

【英訳】 Murakami “1Q84”.

A prophet is simultaneously a king, and a king **is destined to be killed**. She was, in other words, an assassin sent by destiny. By violently exterminating a being who was both prophet and king, she had preserved the balance of good and evil in the world, as a result of which she must die.

最初の例では、英語からロシア語への翻訳者は、судьба（例えば、「поскольку это судьба」というフレーズ）を単に訳さなかったのではなく、「предначертано судьбой」というフレーズを使って、「使命」という意義素を強調する必要があると考えたのである。二つ目の抜粋は、日本語のフレーズ「運命づけられている」と「運命」が英語の destiny と訳されている例である。殺される人間の定めという明らかに否定的な意味を有しているものの、翻訳者にとっては、なんらかの大いなる目的あるいは使命があるという事実が destiny という語を選択する際の鍵となったのであろう。

#### 4-4 概念構造表層の分析に基づいた文化的キーワードの習得問題と翻訳可能性（日本語：迷惑、世間、義理、人情）

前章においては、詳細な連語の分析について、さまざまな言語におけるある文化的キーワードの個々の意味上のニュアンスを明らかにする際、それが利用可能であるということ、そして、一つの類義語のまとまりの中から等価の訳語を選び出す際に実際に役立つということを示してみせた。本章においては、文化的キーワードのような翻訳が困難と考えられている語か、または本稿の手法が持つ機能を示すのに適している語のうち、さらにいくつかの個別の語を検討してみよう。そして、そのような語の連語を表層的に分析するだけでも、日本語を母語としない者が意味上・用法上の明確なニュアンスを感じ取る助けになり得るということを示してみよう。

「迷惑」という日本語の単語から始めよう。これは、日本社会を研究する者がその社会における相互関係を記述する際によく引き合いに出す概念である。またこれは、日本における子供のしつけを研究する研究者（Hendry, 1989, 164）によって、長時間が費やされる重要な考え方の一つ（周りの人を不快に思わせないための教育）として引き合いに出される概念でもある（Shimizu, 2002, 148-149）。

Even the word *hito* (people) is usually used to refer primarily to nonfamily members. This is an important distinction not usually drawn in reports of Japanese childrearing attitudes and behavior. For example, the injunction *hito ni meiwaku o kakenai* (don't cause trouble for other people), is frequently quoted as one of the most important goals of Japanese early socialization

人という語でさえ普通は家族以外の人間を指す場合が多い。これは、日本の児童の態度や行動の評価において通常明示されないが、重要な特徴である。例えば、「人に迷惑をかけない」という教訓は、日本の早期社会化で最も重視される目標の一つである。

この概念は、使用頻度から判断すると日本人の言語的世界観において実際に一定の意味を有している。「迷惑」は、Sketch Engine のコーパス（注 7）においては百万語につき 36.5 回、名大会話コーパス（<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>）（注 6）においては 27 回用いられている。

この概念の日本社会における役割については深入りしない。この概念が興味深いのは、日本語を母語としない者にとってその意味が明快であるとはいいがたいためである。ロシア語を母語とする筆者のインフォーマントのうち、日本に 5 年以上住み、日本語能力検定

一級レベルの日本語を使いこなすことのできる人の多くが、迷惑という日本語の概念の理解において、似たような穴を有しているということがわかった。この概念は、その意味のうちの一つである「やっかいごと」としてのみよく理解され、一方そのようなやっかいごとがもたらされた人の感覚（気持ち）としては理解されていない。つまり、そのせいで「迷惑した」という句が、まるで誰かが誰かにやっかいごとまたは不愉快事をもたらしているというふうに理解されるのである。たとえば、「ヘッドランプで迷惑する人がいます」という文は、「Есть люди, которые доставляют другим неудобства светом головных фонарей»（「ヘッドランプによって他人を不快にする人がいる」）とロシア語では誤って受け取られてしまいかねない。もちろん、これが単に日本語教育システムの影響のせいであるということも大いにあり得るのだが、しかし、言語理解におけるこのような欠陥は、ある概念が、日本語とその人の母語においては正確な意味の理解が妨げられるほど異なっているということの証明である可能性もまた十分にあるのである。つまり、ある単語における一定のソースドメインが二つの言語で重なり合っているところでは、人はかなり早く新しい単語の意味をつかむことができるが、その人の言語的世界観にはない何かがあるところでは、困難が生じるのである。Wierzbicka も、fate という英単語の意味を記述する際に似たような傾向に気がついている。彼女の指摘によると、前章で検討を行った fate という単語が、母語ではなじまないような文脈で用いられている例においては、英語を母語としない彼女のインフォーマントの理解度が低かったのである。たとえば、彼らにとって“The fate of drugs in the organism”といったような学術論文の表題は、彼らの母語で「運命」の概念に対応する概念がより人間中心的であるために不自然に感じられたのである（Wierzbicka, 1992, 93）。

Thus a list of book titles in a library catalogue offers among others, the following items: The fate of drugs in the organism, Fate of pesticides in the environment, The fate of fossil fuel CO2 in the ocean, and Fate of pollutants in air and water environments. It is inconceivable that sud'ba, los, Schicksal, destino, sorte, destin, or sort could be used like that....

In fact, even the title of Jonathan Schell's (1982) book, The fate of the Earth, perplexed all the non-English informants whom I have asked for a translation, and after much mind searching, they all offered the equivalent of the English future rather than any putative equivalent of fate

従って、蔵書目録にある本の題名リストには、とりわけ The fate of drugs in the organism、Fate of pesticides in the environment、The fate of fossil fuel CO2 in the ocean、Fate of pollutants in air and water environments といったものが表れる。sud'ba、los、Schicksal、destino、sorte、destin などの単語がこのように使われることはない...

Jonathan Schell's (1982) 著 The fate of the Earth というタイトルでさえ、非英語話者に訳を依頼すると皆当惑し、大いに悩んだ末、fate と同義と想定される語ではなく、全員が英単語の future に対応する語を訳語として選択した。

「迷惑」についていうと、この概念におけるどのソースドメインがロシア語話者の幾人かを混乱させるのか、明言することはかなり難しい。この語がどのように訳されるかについていえば、下記の訳文においては、状況次第で、**неловкое положение** (気詰まりな状況)、**тягость** (負担になるもの)、**беспокойство** (心配)、**досаждать** (いらいらさせる) などといった、かなり多種多様な訳例を見ることができる。(注 1)

【原文】 宮本輝『錦繡』

これ以上の離婚の理由はなかったであろうと思います。**多くの人に迷惑をかけました。**  
私も傷を負いましたが、あなたの受けた傷はそれよりも大きかったことでしょう。

【露訳】 Миямото «Узорчатая парча».

Считаю это достаточно веской причиной для развода. **Я поставил в неловкое положение очень многих людей.**

【原文】 宮本輝『錦繡』

ですが、私にはもうあなたにこれ以上手紙を書きつづける気持はありません。お便りをいただくのは、**はっきり申し上げて迷惑です。**

【露訳】 Миямото «Узорчатая парча».

Но впредь я не стану писать Вам. Честно **признаться**, переписка с Вами стала мне в **тягость.**

【原文】 宮本輝『錦繡』

まだまだあなたにとっては**御迷惑**このうえない手紙を差し上げることになりそうでございます。

【露訳】 Миямото «Узорчатая парча».

Так что я буду и дальше писать Вам **письма, что доставляют Вам лишь беспокойство.**

【原文】 夏目漱石『こころ』

「邪魔だとはいいません」 なるほど**迷惑という様子**は、先生のどこにも見えなかった。

【露訳】 Сосэки «Сердце».

— Я не говорю, что мешаете. И в самом деле, по нему никогда не **было видно, что я ему в чём-нибудь досаждаю.**

「迷惑」という概念の連語、具体的にいうと「多大な迷惑」、「迷惑を被る」といった特徴的な用法を表層的に分析することによって、「迷惑」という語が「被害」といったような概念と極めて密接に関連しているものと推測することができる。本稿の結論を裏付けるものとして、これらの概念に共通するその他の連語を以下に示す。（注5）、（注6）、（注7）

<被害>

迷惑がかかる、迷惑が生じる、迷惑が及ぶ、迷惑が降りかかる、迷惑を防ぐ、迷惑を考えない、迷惑を受ける、迷惑を与える、迷惑を起こす、迷惑を避ける、迷惑を及ぼす、迷惑を指摘する、迷惑を恐れる、迷惑を被る、迷惑を軽減する、迷惑を回避する、迷惑を心配する、迷惑を考慮する、迷惑をまき散らす、迷惑を顧みない、迷惑になる、かなりの迷惑、多大な迷惑、大変な迷惑、大きな迷惑

次の例における英語の表現“somebody might get hurt”を翻訳者が「迷惑するやつが出るかもしれねえぜ。」と訳すことにしたのは、まさに「迷惑」が「被害」といづらか共通性があるからなのかもしれない。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

【原文】 Steinbeck “The Grapes of Wrath”.

"Board of Health says we got to clean out this camp. An' if it gets around that you got reds<sup>[1]</sup> out here - why, **somebody might git hurt.**"

【和訳】 スタインベック 『怒りの葡萄』

「衛生局では、このキャンプをとり払わなきゃならねえと言っている。それに、このなかに赤の野郎が入ってるということが評判になると——なあ、**迷惑するやつが出る**

かもしれねえぜ。」

「なあ、迷惑するやつが出るかもしれねえぜ。」という上記の訳文において「迷惑」を「怪我」に変えると、英語文のほぼ逐語的な翻訳になるのであるから興味深い。

「迷惑」という概念は、日本社会の内部における個々人の相互関係を記述する際によく引き合いに出される。序文においてすでに触れたが、そもそも、研究者らが日本の文化的キーワードと呼ぶ言葉のうち、おそらく大部分が何らかの形で社会および社会における人々の役割というテーマと関係しているのである（「甘え」、「和」、「遠慮」、「思いやり」、「気兼ね」、「恥」、「恩」、「義理」、「人情」、「本音・建前」、「常識」、「面倒」、「世話」など）。ロシア語の«общество»（社会）に対する日本語の等価語についていうと、比較的新しい言葉である「社会」と、より古い言葉である「世間」の少なくとも二つがある。阿部（1995、13～14）は、これらの語の違いを次のように説明している。

西洋では社会というとき、個人が前提となる。個人は譲り渡すことのできない尊厳をもっているとされており、その個人が集まって社会をつくとみなされている。したがって個人の意思に基づいてその社会のあり方も決まるのであって、社会をつくりあげている最終的な単位として個人があると理解されている。日本ではいまだ個人に尊厳があるということは十分に認められているわけではない。しかも世間は個人の意思によってつくり、個人の意思でそのあり方も決まるとは考えられていない。世間は所与とみなされているのである。

「社会」という言葉がロシア語の *общество* または英語の *society* にどれくらい近いのかという問題は、また別の研究テーマになってしまうが、「世間」は、「社会」に比べてより深く文化に根ざしており、外国人にとっては潜在的に理解が困難な言葉であるということは断言できる。「社会」という用語が導入され普及して以降も、「世間」という概念が消えてなくなることはなく、現代語においても活発に用いられ続けている。たとえば、SketchEngine のコーパス（Japanese Web 2011（jpTenTen11））にはこの語が百万語あたり 25.5 回現れている。文芸作品ではどうかというと、この語は百年以上前に書かれた夏目漱石の『こころ』には 30 回、比較的新しい小説である村上春樹の『世界の終わり』と『ハードボイルドワンダーランド』には 32 回用いられている。それに比べ、「社会」の方はこの村上作品においてたった 4 回用いられているにすぎない。当然ながら「世間」という概念は日本の文化や社会を研究する多くの者の関心を集めている。これについて言及のある著作は以下のとおりである。佐藤直樹の『世間の目』（2004）や『「世間」の現象学』（2001）、井上忠司（2007）の『「世間体」の構造』、阿部謹也（1995）の『「世間」とは何か』、Mente（2004）



の “Japan's Cultural Code Words: 233 Key Terms that Explain the Attitudes and Behavior of the Japanese”、Lebra (2004) の “The Japanese Self in Cultural Logic”、Sugimoto (2003) の “An Introduction to Japanese Society”、Harootyan (2000) の “Overcome by Modernity: History, Culture, and Community in Interwar Japan Book”。

日本社会を研究する者の多くが、まさにこの概念を通して人々の役割および社会における特殊性を伝えようと試みている。たとえば、Sugimoto (2003, 281) は次のように述べている。 Sugimoto (2003, 281)

In reference to seken's censoring functions, it is often said that if one deviates from social norms, seken will not accept one. If one does something shameful, one will not be able to face seken. One should not expect seken to be lenient and permissive. When an organization is found to be involved in an unacceptable practice, its leaders often make public apologies for disturbing seken. When one refers to seken accepting or renouncing a certain choice or behavior, one envisages seken not only as the standard gauge or rule but as those individuals who compel it. As an imagined but realistic entity, seken presents itself as a web of people who provide the moral yardsticks that favor the status quo and traditional practices... A case in point is the concept of seken, an imagined community that has the normative power of approving or disapproving of and sanctioning individual behavior.

世間は検閲官としての機能を持つ。社会規範から外れると、世間はその人物を受け入れないと度々述べられる。恥ずべき行為をした人物は、世間に顔向けできない。世間が大目に見てくれることや、寛大であることを期待すべきではない。組織の許容されない行為への加担が判明すると、通常その代表者が世間を騒がせたことを公に謝罪する。ある選択や行動を世間が容認あるいは否認することに関して述べる際、世間は、基準や規則としてみなされるだけでなく、それらを強要する個々人をも指す。世間は、想像上の統一体であるが現実的でもあり、現状と従来の慣行を重んじた倫理的基準を提示する人々の集合体として存在する…。ここで論点にしているのは世間の概念であり、世間は、個人の行動を承認または非難したり、また監視したりするような規範を定める権限を持った想像上のコミュニティである。

次は、「世間」という言葉の連語を分析することで、この語が持つ基本的な二つの意味について理解することができるという点を見てみることにしよう。最初はこの概念が次の例において、英語、ロシア語、そしてウクライナ語にそれぞれどう訳されているかを分析してみよう。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】村上春樹『1Q84』

こんな姓に生まれていなかったら、私の人生は今とは違いかたちをとっていたかもしれない。たとえば佐藤だとか、田中だとか、鈴木だとか、そんなありふれた名前だったら、私はもう少しリラックスした人生を送り、もう少し寛容な目で**世間を眺めていたかもしれない**。あるいは。

【英訳】Murakami “1Q84”.

My life might have been totally different if I hadn't been born with this name. If I had had an ordinary name like Sato or Tanaka or Suzuki, I could have lived a slightly more relaxed life or **looked at people** with somewhat more forgiving eyes.

【露訳】Мураками «1Q84. Тысяча невестьсот восемьдесят четыре».

Родись я под другой фамилией, думала она, может, вся моя жизнь сложилась бы иначе? Скажем, живи я Танакой, Сато или Судзуки — глядишь, и сама была бы спокойней, **и на мир вокруг смотрела бы** куда снисходительнее? Кто знает...

【ウクライナ語訳】Мураками «1Q84».

«Якби я не народилася з таким прізвищем, то моє життя, мабуть, відрізнялося б від теперішнього. Якби я мала таке звичайне прізвище, як Сато, Танака або Судзукі, **то дивилася б на світ** трохи поблажливішим поглядом. Можливо».

英訳は、ロシア語訳およびウクライナ語訳とは若干異なっているということが分かる。前者においては、「世間」は **people**、つまり「人」、「人々」という言葉で訳されているのに対し、ロシア語およびウクライナ語訳においてはより一般的で抽象的な言葉である **мир** や **світ** (世界) が用いられているのである。英語にも **world** という言葉があるにもかかわらず、なぜか翻訳者は **people** という言葉の方を選んだ。もちろん、**world** と **people** は、**мир** と **люди** がそうであるように、ある意味では類義語であるとみなすこともできるだろう。とはいえ厳密に言えば、これらはそれぞれ固有の意味上のニュアンスを持った別の言葉である。日

本語における等価語はどうかというと、「世の中」という概念は、「人々」という概念ほど人間中心的ではない。「人々の目」などといった言い方ができる一方で、「世の中」は「目」と連語で用いられることはまれである。他方、「世の中」には、「狭く」なったり、「広く」なったりするという性質がある。「世間」についていうと、その二面性を見て取ることができる。「世間」は目を持つこともできるし（世間の目）、それと同時に、「広い」または「狭い」ということもできるのである。さらに、「世の中」という概念が「大きい」または「小さい」という形容詞と共に用いることができないという点も興味深く、この特性は「世間」においてもみることができる。「世間が大きい」や「世間が小さい」といった連語は、「世の中が大きい」や「世の中が小さい」と同様、不自然である。このような相関性は、「世間」という概念の構造の中に「人々」および「世の中」という語がソースドメインとして入っていることの証明なのかもしれない。このことを検証するため、「世間」と「人々」の双方、また「世間」と「世の中」の双方に共通の連語をグループ分けしてみよう。（注5）、（注6）、（注7）

#### <人々>

世間が間違っている、世間が認める、世間が動く、世間が望む、世間が騒ぐ、世間が沸く、世間が許す、世間が求める、世間が盛り上がる、世間が驚く、世間が嫌う、世間が受け入れる、世間が忘れる、世間が振り向く、世間がもてはやす、世間が追いつく、世間が浮かれる、世間が寝静まる、世間を騒がす、世間を欺く、世間を見下す、世間をだます、世間を恨む、世間を惑わす、世間を混乱させる、世間を納得させる、世間を見渡す、世間をあざ笑う、世間を震撼させる、世間を挑発する、世間を見返す、世間を皮肉る、世間を驚かす、世間を驚愕させる、世間を知る、世間に訴える、世間に踊らされる、世間にアピールする、世間に受け入れられる、世間に広まる、世間に知らせる、世間に広める、世間に見せつける、世間に迎合する、世間に言いふらす、世間から離れる、世間から注目される、世間から同情される、世間から忘れ去られる、世間から疎まれる、世間から遠ざかる、世間から見放される、世間から蔑まれる、世間から忌み嫌われる、世間と違う、世間と関わる、世間と戦う、世間と向き合う、世間と繋がる、世間と相容れない、世間の声、世間の関心、世間の常識、世間の目、世間の偏見、世間の同情

#### <世の中>

世間が間違っている、世間が認める、世間が動く、世間が望む、世間が騒ぐ、世間が

沸く、世間が許す、世間が求める、世間が盛り上がる、世間が驚く、世間が受け入れる、世間がもてはやす、世間が浮かれる、世間を騒がす、世間を反映している、世間を賑わす、世間を見下す、世間を揺るがす、世間を恨む、世間を惑わす、世間を混乱させる、世間を納得させる、世間を見渡す、世間をなめる、世間をあざ笑う、世間を震撼させる、世間を席卷する、世間を皮肉る、世間を驚かす、世間を闊歩する、世間を渡り歩く、世間を驚愕させる、世間で評価される、世間で注目される、世間で通用する、世間で噂される、世間で認められる、世間でヒットする、世間で受け入れられる、世間で認知される、世間で非難される、世間で定着している、世間で騒がれる、世間で誤解される、世間で飛び交っている、世間で浸透している、世間で流行る、世間で酷評される、世間でまかり通っている、世間で出回る、世間でもてはやされる、世間で笑いものにされる、世間を知る、世間に訴える、世間に踊らされる、世間にさらす、世間にアピールする、世間に受け入れられる、世間に媚びる、世間に広まる、世間に知らせる、世間に広める、世間に逆行する、世間に出回る、世間に見せつける、世間に迎合する、世間にはびこる、世間に反抗する、世間に放り出される、世間に蔓延する、世間に公言する、世間に溢れかえる、世間に順応する、世間に露呈する、世間から外れる、世間から注目される、世間から隔離される、世間から同情される、世間からずれている、世間からはみ出す、世間から孤立する、世間から見放される、世間から取り残される、世間と関わる、世間と向き合う、世間と繋がる、世間と相容れない、世間と折り合いをつける、世間知らず、世間の声、世間の関心、世間の常識、世間の目、世間の偏見、世間の同情、世間の風当たり、世間の荒波、世間の晒し者

共通して用いられる連語の相当多くがこの二つのグループに分割できるということが見て取れる。これは、「人々」および「世の中」が、「世間」という概念における中心的なソースドメインであると推察する根拠となる。判断できるかぎり、ロシア語、英語、そしてウクライナ語に「人々」と「世の中」という二つの意味を同時かつ完全に表現できるような単一の概念は存在しない。従って、上に引用した例についていうならば、翻訳者によってその概念における力点の置き所が異なるということは、十分予測可能であった。複雑で抽象的な概念の翻訳におけるこのような対応の仕方については以前にも見たとおりである。翻訳者は、知ってか知らずか、その語における中心的なソースドメインのうち一方を選択し、自らの言語に翻訳するに際しては実際その等価語を用いるのである。もちろん、そのような翻訳が原文と完全に一致するのか、さらには、このような選択によって一定の偏りがどちらか一方へ生じてしまうのではないかという問いに対し、明快に答えることは難し

い。ある決まった文脈においては、文章の理解に本質的な影響を与えず文意を伝えるうえでは、より重要性の賦与された一つのソースドメインを用いるだけで十分であることも多い。しかしながら、個別の概念の全体や、特定の言語的世界観におけるその意味合いに関する翻訳可能性についていうならば、これに対する答えはまずもって否定的なものとならざるを得ないであろう。「世間」という語の下に示すもう一つの使用例においては、対置された「世間」と「人間」という用語を翻訳者がどのように扱っているかを見ることができ。彼は、「世間」の訳語として **world** を選び、「人間」の訳語として **people** を選んでいる。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】夏目漱石『こころ』

私は嫌われてるとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。然し先生は**世間が嫌**なんでしょう。世間というより近頃では人間が嫌になっているんでしょう。だからその人間の一人として、私も好かれる筈がないじゃありませんか

【英訳】Soseki “Kokoro”.

“Oh, no, I don’t think for a moment that I am disliked. There is no reason why I should be. But you seem he seems to be rather **weary of the world**. Indeed, it would be more correct to say of Sensei these days that he is weary of people.

「世間」の概念の使用例を見ると、この概念が、「文化的キーワード」として定義づけられている他の概念と共に頻繁に使われていることが分かる。辞書、あるいは、特殊な文化学的研究においていくつかの「文化的キーワード」が描写される際のこの法則性については、本論文前半ですでに指摘した。ここでは、やはり文学作品を例にとり、この法則性の正しさを見ていく。例えば以下の二例では、「世間/世間体」と日本固有の概念「義理」について検討する。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】夏目漱石『こころ』

「何もお前のためにするんじゃないとお父さんがおっしゃるんじゃないけれども、お前だって**世間への義理**ぐらいいは知っているだろう」

【英訳】Soseki “Kokoro”.

"It isn't that your father is saying that we are not having a party for your sake," said my mother. "But even you must be aware of **one's duty to one's neighbors**."

【露訳】 Сосэки «Сердце».

— Отец вовсе не сказал, что он делает это для тебя, но всё же ведь ты же знаешь о **наших обязанностях перед другими.**

【原文】 安部公房『砂の女』

農村じゃ、**世間体**だとか、つき合いの**義理**ってこともあるし、跡取りの家出ともなれば、よくよくの事情がなけりゃねえ……」 「そうですよ……**義理は、なんたって、義理ですから……**」

【英文】 Abe “The Woman in the Dunes”.

In country villages you **have social obligations and reputation** to think of, so there really must have been a reason for the heir of the family to have left home... —Yes, certainly. **An obligation is an obligation.**

【露訳】 Абэ «Женщина в песках».

В деревне люди лучше сознают свой **долг**, думают о том, чтобы **сохранить доброе имя**. Поэтому должны, наверное, быть какие-то особые причины, чтобы наследник ушел из дому... - Да, конечно... **Долг есть долг...**

「世間への義理」という語結合は頻繁に目にする言葉である。あらゆることから判断するに、この語結合は、周囲の人々に対する人間のある種の義務についての観念を伝えている。以下示すように、この意味で「義理」が使われる場合、「外の世界」という言葉とともに使われることさえある。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】 安部公房『砂の女』

当然、外の**世界に義理**だてしたりするいわれは、何もない。しかも彼が、その加害者の片割れだとなれば、むき出された牙は、そのまま彼にたいして向けられていたことにもなるわけだ。

【英文】 Abe “The Woman in the Dunes”.

Naturally there was no reason why they should **be under obligation to the outside world.**

【露訳】 Абэ «Женщина в песках».

Естественно, у них не было никаких **обязательств по отношению к остальному миру.**

上記に引用した例全てにおいて、英語とロシア語への翻訳者が、*duty, obligation, обязанности, долг* といった義務に似た言葉を使用している。日本語の連語に関しては、「義理がある、義理がない、義理が絡む、義理を行う、義理を感じる、義理を守る、義理を果たす、義理を重んじる、義理を尽くす、義理を忘れる、義理を貫く、義理を済ませる、義理に反する、義理に縛られる、義理に背く、義理で参加する、義理が重い」など、「義理」と「義務」には共通する極めて多くの連語がある。

「義理」が「義務」の概念を通じて理解されることを論証するためには、より深く綿密な研究が必要になる。とはいえ、「重い」あるいは「誰かに義理/義務がある」というような独特の語結合が存在することが、このように仮定する理由となっている。誰かが他人に対して負っている義務の感覚を示す表現は、翻訳者が以下のような構文を訳す際にしばしば用いている。例えば以下の抜粋では、「～に義理がある」は、ロシア語で«многим был обязан»と訳されている。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】夏目漱石『坊っちゃん』

「人を頼んで懸合うておみると、遠山さんでも古賀さんに**義理がある**から、すぐには返事は出来かねて——まあよう考えてみようぐらいの挨拶をおしたのじゃがなもし

【露訳】Сосэки «Мальчуган».

– Кога повел переговоры через третье лицо, но Тояма все оттягивал, так как он **многим был обязан** Кога, и, не зная, что ответить, говорил только: «О, конечно... я хорошенько подумаю...»

もう一つの特徴的な語結合「義理が悪い」から、「義理」の概念構造にはもう一つ概念が内包されており、それは恐らく「礼儀」ではないかという考えが導かれる。以下の例では、英語、ロシア語、ウクライナ語への翻訳者は、この表現を翻訳する際、“must”、«обов’язок»、«виноват»という、義務の感覚と関連づけた言葉を用いることを選んだ。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】夏目漱石『吾輩は猫である』

早く飲んで早く出掛けなくては**義理が悪い**。

【英訳】Soseki “I Am a Cat”.

Yes, indeed, I **must** drink it quickly and go out quickly.

【露訳】 Сосэки «Ваш покорный слуга кот».

Я чувствовал, что буду **очень виноват перед** ней, если сейчас же не выпью лекарство и мы не отправимся в театр.

【ウクライナ語訳】 Сосекі «Ваш покірний слуга кіт».

«Я не **виконаю свого обов’язку**, якщо негайно не вип’ю і ми не підемо до театру», — вирішив я і пригубив чашку.

それが正しいか否かを分析するつもりはない。しかしながら日本語には「義務が悪い」という表現はない。そして、「義理が悪い」との語結合は、ソースドメイン「礼儀」からきているものだと考えられる。この仮定を擁護するために、「義理」と「礼儀」に共通していると考えられる複数の連語を提示する。(注5)、(注6)、(注7)

義理がある、義理がない、義理が廃れる、義理を行う、義理を知らない、義理を感じる、義理を示す、義理を守る、義理をわきまえる、義理を果たす、義理を通す、義理を重んじる、義理を捨てる、義理を欠く、義理を大切にす、義理を尽くす、義理を忘れる、義理を返す、義理を貫く、義理に欠ける、義理に反する、義理に背く、義理で笑う、義理で付き合う、義理で返す、義理のつもり、義理の拍手、義理が悪い、義理にうるさい、義理に厚い

この言葉が使われている次の例はユーモラスなものであり、この例からは、この語結合がどれほど広く使われているのかを判断するのは難しい。しかしながら、「義務」と「礼儀」のいずれかを選ぶなら、我々の意見では、恐らく著者は後者を意図していたのであろう。英語の翻訳者は、この言葉からより離れ、“for sheer love”という表現を用いている。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】 夏目漱石『坊っちゃん』

鯉の一匹ぐらい**義理にだって**、かかってくれるだろうと、どぼんと錘と糸を抛り込んでいい加減に指の先であやつっていた。

【英訳】 Soseki “Botchan”.

At least a bonito or two would give me a bite **for sheer love**. Thus thinking, I dropped my line



with the plummet and waited for a bite, letting go and hauling it in a little with my finger

翻訳者が「義理」を love と訳した際に、どれほど意識的、意図的であったのか、翻訳者にとって、なぜこの置き換えがもっとも適切であったのかは容易には判断できない。しかし「義理」のような難しく抽象的な言葉の連語を表面的に分析するだけでも、翻訳者は、具体的文脈においてこの用語をどう理解すべきかについての追加的情報を得ることができる。等価語を選ぶ手助けとなり得るであろう。

<人情>

「義理」の概念は、「人情」の概念としばしば対比される。「人情」の概念もまた、日本の「文化的キーワード」の一つと考えられている。いわゆる「日本人論」研究の範疇を含め、多様な日本社会研究においてこの言葉に言及される（山田『日本人と人間関係—義理人情と日本人論文化論』（1979年）、Masamichi “Social Attitudes in Japan: Trends and Cross-National Perspectives”（2002）、Hayashi “Japanese Culture in Comparative Perspective”（1997））ことは稀ではない。この言葉の二つの基本的意味について、Lebra（1986、46）は次のように書いている。

Social fusion seems to underlie the concept of ninjō, "human feeling." By ninjō, the Japanese mean two attitudes without consciously distinguishing them: (1) indulgence of Ego's natural inclination or desire in disregard of giri ("social obligations"), and (2) empathetic understanding and tolerance of Alter's desire, which may go against Ego's

人情の根底を成すのは社会的融合のようだ。日本人は意識的に区別することなく、人情によって次の二つの態度を意味している。(1) 自我のままにふるまうことや、義理（社会的義務）を無視した欲望。(2) 自我と対極をなす共感的理解や、他者の欲望に対する寛容。

以下二つの例では、「人情」の概念が、人間らしい気持ちとして、英語、ロシア語、ウクライナ語で伝えられている。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

【原文】太宰治『人間失格』

「やはり、死んだ女が恋いしいだろう」「はい」ことさらに、消え入るような細い声で返事しました。「そこが、やはり人情というものだ」

【英訳】Dazai “No longer human”.

"You miss her, don't you?" "Yes." I answered in a particularly faint and faraway voice. "**That's human nature, I guess.**"

【露訳】 Осаму «Исповедь 'неполноценного' человека».

- Что, все горюешь по утопшей? - Да. - Я старался говорить как можно жалостливее. -  
Понятно... **Человек - он чувствует...**

【原文】 夏目漱石『こころ』

私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つといい出すと、**人情は妙なもの**で、父も母も反対した。

【英訳】 Soseki "Kokoro".

**Human nature being the perverse thing that it is, my parents opposed my decision.**

【露訳】 Сосэки «Сердце».

Когда я заявил о том, что уезжаю, **по странности человеческих чувств** отец и мать воспротивились.

【ウクライナ語訳】 Сосеки «Серце».

Коли сказав, що їду, — **дивна то річ — людська натура**, — і батько, і мати почали мене відмовляти.

「人情」と「感情」両方に使われる以下の連語から判ずるに、「感情」という言葉を使って、「人情」の概念がもつ意味の大部分を確実に描写できる。(注5)、(注6)、(注7)

人情が絡む、人情が薄れる、人情が存在する、人情がある、人情がない、人情を持つ、人情を見せる、人情を捨てる、人情を優先する、人情に富む、感情に欠ける、人情に訴える、人情に縛られる、人情に流される、人情にとられる、人情に従う、人情で動く、当たり前の人情、温かい人情、豊かな人情、素朴な人情、優しい人情、薄い人情、人情を重視する、人情を描く、人情を重んじる、人情を解する、人情を加味する、人情に反する、人情に背く、人情で考える、人情で結ばれている

「人情」の二つ目の意味に関しては、「優しさ」という言葉を使って説明できる。この二つの概念に共通する連語を以下提示する。(注5)、(注6)、(注7)

人情があふれる、人情が染みる、人情が息づく、人情が存在する、人情がある、人情がない、人情を持つ、人情を見せる、人情を感じる、人情を大切にす、人情を知る、人情を捨てる、人情を噛みしめる、人情に溢れる、人情に満ちた、人情に触れる、人情に欠ける、人情に接する、人情に惹かれる、人情に感動する、人情につけこむ、下町の人情、昭和の人情、浪花の人情、当たり前の人情、温かい人情、素朴な人情、粋な人情、深い人情、人情を重視する、人情を描く、人情を重んじる、人情にほだされる

まさにこの意味は、以下提示する翻訳例の第一案に現れている。(注目すべき箇所には太字にする)(注1)

【原文】夏目漱石『吾輩は猫である』

御三はいっこう顧みる景色がない。生れついでのお多角だから**人情に疎い**のはとうから承知の上だが、そこをうまく泣き立てて同情を起させるのが、こっちの手際である。

【英訳】Soseki “I Am a Cat”.

O-san does not take the slightest notice. Since she was born polygonal, I am perfectly well aware that **her heart is as cold as a clock**, but I am counting on my mewling skills to move her rusty sympathies.

【露訳】Сосэки «Ваш покорный слуга кот».

О-Сан не обращала на меня никакого внимания. Известно, что она от рождения многоугольна и весьма **жестокосердна**. Но в том-то и заключается мастерство, чтобы суметь разжалобить даже ее.

【ウクライナ語訳】Сосекі «Ваш покірний слуга кіт».

А служниці дарма. Відомо кожному, що зроду в такої безжалісної пики **нема ні крихти милосердя**. Але ж майстерність у тому й полягає, щоб розжалобити навіть її.

「人情」を含む「文化的キーワード」のそれぞれが、その本質故に非常に多面的であることは明らかである。特定の世界観におけるこれらの概念の使用と意味についてのあらゆる特徴を余すところなく描写するためには、連語を単にカテゴライズするだけでは不十

分である。しかしながら、日本語を母語としない人々にとって、この難解で抽象的な概念がわかりづらいものになっている理由は、なによりも、これらの用語の意味が、一貫性のあるものとして様々な部分（ソースドメイン）から成り立っていることにある。このソースドメイン自体は日本語を母語としない人々にそれぞれに理解される場合があり得る。しかしながら、個々のソースドメインが、どのようなロジック（理由）でひとつのもの（概念）に結合されているのかを理解するのは外国人には極めて難しいのである。外国語を学ぶ際、人は母国語と外国語の単語を比較対照しようとするものである。そして事実、それぞれの言語の言語世界像は、かなりの程度普遍性を持っている。単語の大部分の概念構造や意味も似ていることが多い。しかし、この言語学的普遍性を言語全体にあてはめようとするあまり、その言語を母語としない人々は誤解に陥ってしまうのである。つまるところ、単語の意味を形成するソースドメインが一致している部分は外国語の概念で容易に理解できるが、一致していない部分では理解に欠落部分が生じてしまうのである。我々の見たところ、単語の概念構造が複雑であればあるほど、抽象度が高ければ高いほど、その単語の意味は部分的にはあるが、各言語で異なっている。このような単語は、その末端にであったとしても、他言語にないソースドメインを有していることは稀ではない。その定義と一連の特性から、「文化的キーワード」は、難しさ、複雑さにおいて群を抜いている。「文化的キーワード」の意味は、同じように相対的に難解で抽象的な別の単語の理解の上に成立している。また、この別の単語も、さらに別の単語を通じて理解されているのである。連語分析は、ある言語を母語としない人々が、「文化的キーワード」のソースドメインを解明し、辞書なしでもその特徴を理解する助けになり得る。例えば上述したように、「迷惑がかかる、迷惑が生じる、迷惑を被る、多大な迷惑」などの言い方がなぜ可能なのかを理解するためには、「迷惑」という概念の中心ソースドメインのなかに「被害」の概念があることを知っておくだけで十分である。あるいは、ロシア語の概念 *судьба* の意味をいったん忘れ、「находится с кем-то в/внутри одной судьбе/ы」という意味の「私たちは同じ運命にある」というフレーズが成立しているロジックを理解するためには、「困難」が「運命」の周辺的なソースドメインの一つであることがわかっていればよいのである。

連語分析と、連語分析を用いた概念構造におけるソースドメインを区別することは、ある言語を母語としない人々だけでなく、その言語を母語とする人々の助けにもなる。かつて本能的なレベルで感じていた感覚があり、その感覚に明確な形式を与えられなかったことを理解できるようになる。例えば、同義語とされている単語の間にはどんな違いがあるのを示せるようになる。これについては次章で述べることにする。

#### 4-5 類義語の意味の差異とその翻訳可能性（ロシア語：жалость、сочувствие、日本語：同情、英語：pity）

類義語はよく意味の同じ語彙として定義されるが、その範囲は曖昧である。ただし、本稿の研究対象外であるため、この問題に深入りはしない。しかし、辞書などに類義語として示される単語の意味上の違いとその起点領域を調べることによって、本稿の認知モデルと連語分析アプローチの有効性を確かめることが可能なので、それを本章で行いたい。類義語の意味的な差異を調べるには連語の分析が有効であると Partington (1998, 29) も主張している。

Comparing the collocational behaviour of so-called synonyms in concordance data may supplement dictionary information and help learners decide in what circumstances substitution of one item for another is possible in a text.

上記のことを踏まえて、以下でロシア語の жалость（情け、同情）と сочувствие（同情）という類義語を分析する。これらの単語は意味的にかなり近く、ロシア語話者でも使い分けが困難な場合もある。ロシア語ネイティブにもわかりにくい類義語の違いを解明するうえでも連語の分析は有効であると思われる。これらの類義語はさまざまな視点から研究（Зализняк, 2005）されているが、メタファー的連語の分析から違いを洗い出して、その結果を先行研究と照らし合わせてみよう。まずは上で述べたように、言語コーパスなどを使って、それぞれの言葉における使用頻度の高い連語（スロヴェイ, 2016, 234）のリストを作る。（注5）、（注6）、（注7）

##### < жалость（自動詞） >

пробудиться（в сердце）（目覚める、活気づく）、шевелинуться（в сердце）（ゆれる、活気づく、うごめく）、трогать（душу）（触れる、さわる、かまう、感動させる）、накатиться на кого-то（転がってきてぶつかる）、обуревать кого-то（（意欲に）燃える）、разъедать（душу）（破壊する、破滅的影響を与える）、раздирать（引き裂く、分裂させる）、поселиться（в ком-то）（生ずる、居座る）、уколоть（сердце）（傷つける）、охватить（包む、とりこにする、支配する）、изводить кого-то（やっつける、苦しめる）、сдавить сердце（弱る）、вырваться（振り切る、抜け出す）、налететь（ぶつかる、遭遇する）、накатиться（覆いかぶさる）、терзать（苦しめる、悩ます）、

приходить (達する), уходить (疲れ果てさせる), нахлынуть (込み上げる), залить кого-то (支配する、とらえる), забирает (とらわれる), разобрать кого-то (とらえる、虜にする), проникать (入り込む、広まる), взять (кого-то) (とらえる、支配する), сотрясать (кого-то) (感動させる), мучать (кого-то) (悩ます、苦しめる)

< жалость (他動詞) >

подавить (抑える), вызывать (чем-то) (呼び起こす), вызвать (в ком-то) (惹き起こす), испытывать (いだく、感じる), пробудить (奮い立たせる), выказывать (現わす), проявлять (現わす、発揮する), изобразить (表現する), рождать (生む), иметь (持つ), бить на (жалость) (打つ), привести в (жалость) (起こす), давить на (押す、締めつける、抑える), отогнать (撃退する), отринуть (拒否する、はねつける), возыметь (感じ始める), преодолевать (抑える、こらえる), не ведать (感じない), почувствовать (おぼえる、抱く、感じる), чувствовать (感じる、直感する), ощутить (感ずる、実感する), побороть в себе (克服する、乗り越える)

< 形容詞 + жалость >

материнская (母性的な), беспредельная (果てしない), глубокая (奥深い), искренняя (誠意ある), неприкрытая (剥き出しの), горячая (熱い), острая (鋭敏な), горькая (痛烈な), огромная (絶大な), щемящая (重苦しい), глубинная (深層の), слабая (希薄な), сильная (強い), подлинная (正真の), неосознанная (無意識の), большая (偉大な), обильная (豊かな), небольшая (僅かな), брезгливая (潔癖な), слепая (盲目的な), мучительная (切ない), природная (自然の), восторженная (熱狂的な), постыдная (浅ましい), нестерпимая (耐え難い), неодолимая (克服しがたい), гадливая (嫌悪に満ちた), плохо скрытая (不完全に隠された)

次は сочувствие の使用頻度の高い連語を以下に抽出する。(注5)、(注6)、(注7)

< сочувствие (自動詞) >

пропадать (消失する), возникать (起こる), есть (в ком-то) (ある), испаряться (消える), пронзать (突き抜く), появиться (生じる), усиливаться (強まる)

< сочувствие (他動詞) >

вызвать (в ком-то) (呼び起こす), испытывать (感じる/試す), пробудить (起こす),  
выказывать (現わす), проявлять (発する), изобразить (描写する), рождать (生  
む), иметь (持つ), выражать (現わす), встречать (в ком-то) (受け入れる),  
надеяться (на) (期待する), проявить (現わす), иметь (чье-то ...) (持つ),  
завоевать (себе) (得る), возбуждать (引き起こす), найти (в ком-то) (見出す),  
искать (探す), рассчитывать на (期待する), уповать на (期待する), утратить (喪  
失する), отбросить (捨てる), принять (受け入れる), отвергнуть (拒否する、拒絶  
する), претендовать (на) (要求する、自任する), получать (手に入れる),  
опираться на (よりかかる), играть на (к кому-то) (果たす)

< 形容詞 + сочувствие >

Материнское (母性的な), беспредельное (果てしない), глубокое (奥深い),  
искреннее (誠意ある), неприкрытое (剥き出しの), горячее (熱い), острое (鋭敏  
な), горькое (痛烈な), огромное (絶大な), щемящее (重苦しい), глубинное (深  
層の), слабое (希薄な), сильное (強い), подлинное (正真の), гарантированное  
(確実な), благородное (高潔な), встречное (反対の), невольное (本能的な、不  
本意の), дружественное (友好的な), деланное (人為的な), пассивное (受動的な),  
полное (十分な), всеобщее (普遍的な), настоящее (真の), взаимное (相互の),  
безусловное (無条件の), всяческое (ありとあらゆる)

上記のリストから分かるように、類義語である сочувствие と жалость の連語の中には当  
然ながら共通しているものもあるわけだが、異なる連語を見つければ、単語の意味の違い  
にたどり着くことができるはずである。その結果を以下にまとめた (スロヴェイ、2016、  
237)。сочувствие に使えるが、жалость とは使えない、あるいは不自然に聞こえる連語。

< 他動詞 >

выражать, встречать в ком-то, надеяться на ..., проявить, иметь чье-то сочувствие,  
завоевать себе, найти (в ком-то), искать, рассчитывать на, уповать на, утратить ... к,  
отбросить, примите наше ..., отвергнуть любое/всякое, претендовать на, получать,  
опираться на

< 形容詞 + 名詞 >

гарантированное, благородное, встречное, невольное, дружественное, деланное, пассивное, полное, всеобщее, настоящее, взаимное, безусловное, всяческое

上記で抽出した単語を分析すると *сочувствие* のソースドメインには、*жалость* のソースドメインには入っていない *поддержка* (サポート、応援) という概念 (単語) のあることが分かる。上記の連語はすべて *поддержка* の連語でもあり、*помощь* や *содействие* などの似た意味を持つ言葉には部分的にしか使えない。

この結果は Levontina (Апресян, 2003, 328) の以下の説明と合致している。

(В отличие от жалости) Сочувствие и участие возможно только по отношению к людям, т. к. эти чувства представляют собой не просто произвольную реакцию на чужую боль, но и результат осмысления ситуации, анализа положения человека и мысленной постановки себя на его место. В этом отношении сочувствие близко к пониманию...

*сочувствие* および *участие* は、(*жалость* とは違って) 人に対してのみ用いることができる。なぜなら、これらの感情は、単に他人の痛みに対する不随意的反応なのではなく、その人の状況を理解して分析し、心の中でその人の身になってみた結果だからである。この点で *сочувствие* は理解に近い感情である。

*сочувствие* のソースドメインの一つである *поддержка* は人に対してしか使えないため、そのターゲットドメインの *сочувствие* にも同じ特徴が見受けられる。以下の引用からも *сочувствие* という概念には *поддержка* が含まれているという Levontina (Апресян, 2003, 329) の洞察が読み取れる。

Для сочувствия характерна внутренняя готовность помочь, которая часто реализуется и в поведении;

«сочувствие»には、しばしば行動の中でも実現される「助けよう」という心構えがある。

Сочувствие и особенно участие обычно предполагают понимание, даже поддержку.

«сочувствие»と特に«участие»には、一般的に理解や、「поддержка」さえもが前提となっているのである。



次は、視点を変えて、сочувствиеには使えない жалостьの連語を抽出し、分析してみよう(スロヴェイ、2016、237)。(注5)、(注6)、(注7)

#### <他動詞>

бить на, в сердце пробудилась, в сердце шевельнулась, не знать, подавить, привести в, давить на, отогнать, отринуть, возыметь, преодолевать, не ведать..., почувствовать, чувствовать, ощутить, побороть в себе, трогать душу, накатило, обуревать кого-то, разъедать (душу), раздирать, поселиться в ком-то, уколоть сердце, охватить, изводить кого-то, сдавить сердце, вырваться, налететь, накатиться, терзать, приходиться, уходить, нахлынуть, залить кого-то, забирает, разобрать кого-то, проникать, плохо скрытая, взять, ... взяла на кого-то, сотрясать, мучать

#### <形容詞+名詞>

неосознанная, большая, обильная, небольшая, брезгливая, слепая, мучительная, природная, восторженная, постыдная, нестерпимая, неодолимая, гадливая

жалостьには、「勝手に現れる」、「勝手に人を捉える」、「勝手に去る」といった、人間にはコントロールできないという特性が読み取れる。жалостьはощутить、「чувствовать」という連語で使えるが、これはсочувствиеには使えない。このことから жалостьという概念には чувство(感情)が入っていると分かる。上記の連語のすべてがソースドメインである чувствоにも使えることから分かります。чувствоという言葉の用法は、жалостьという言葉の用法と性質(不合理でコントロールできない)を定義づけている。

このような「Жалость」の特徴は Levontina (Апресян, 2003) の研究にも指摘されている。

Сочувствие и участие связаны скорее не с непосредственным душевным движением, а с более или менее рационально сформированным отношением к объекту. Эти синонимы не употребляются в контекстах, описывающих импульсивные и неконтролируемые реакции.

«сочувствие»と«участие»は、直接的な心の動きに由来するというよりは、対象に対して多かれ少なかれ理性的に形成された態度に由来している。これらの類義語は、衝動的で制御不能な反応が描かれているような文脈では用いられない。

жалостьの他の連語を分析すれば、сочувствиеにはない周辺の起点領域の存在が明らかになる。привести в, отогнать, отринуть, побороть в себе, разъедать (душу), раздирать、

подавить、выказывать などの жалость 特有の共起表現から見られるように、жалость には отвращение (嫌悪) という概念が部分的に写像されていると分かる。さらに、「в сердце пробудилась...»、「в сердце шевельнулась»、「прилив материнской жалости」という жалость の共起表現は、нежность (優しさ) という起点領域から来ている。このような写像は部分的ではあるものの、「嫌悪」と「優しさ」という対立した概念が同時に жалость という概念の構造に入っているということになる。同様の分析結果は Levontina (Зализняк, 2005, 272) の研究にも見られる。

Этим жалость напоминает такие чувства, как нежность, с одной стороны, и отвращение – с другой, и часто с ними сочетается: бывает нежная жалость, а бывает брезгливая жалость. Если объект чувства симпатичен в своей слабости, жалость к нему сочетается с нежностью, умилением: отталкивающая слабость вызывает вместе с жалостью отвращение, презрение, гадливость.

一瞥したところ、жалость はその概念のなかに、нежность と отвращение として同時に理解される二つの異なる本質を有していることは、不自然なことのようと思われる。しかしながらこの事実は、連語の他に、文学作品に見られる数多くの例によっても間接的に論証されている。文学作品では、著者はこの概念を同列のものとして扱っている。例えば、トルストイの『アンナ・カレーニナ』では、一つの文章のなかで、жалость / гадливость や нежность / жалость をひとまとめのものとして用いている。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

【原文】 Толстой «Анна Каренина».

Этот прекрасный ребенок внушал ему только **чувство гадливости и жалости**.

【英訳】 Tolstoy “Anna Karenina”.

This splendid baby excited in him no feeling but **disgust and compassion**.

【原文】 Толстой «Анна Каренина».

Левин посмотрел еще раз на портрет и на ее фигуру, как она, взяв руку брата, проходила с ним в высокие двери, и почувствовал к ней **нежность и жалость**, удивившие его самого.

【英訳】 Tolstoy “Anna Karenina”.

as taking her brother’s arm she walked with him to the high doors and he felt for her a **tenderness and pity** at which he wondered himself.

【原文】 Толстой «Анна Каренина».

Но к новорожденной маленькой девочке он испытывал какое-то особенное **чувство не только жалости, но и нежности.**

【英訳】 Tolstoy “Anna Karenina”.

But for the little newborn baby he felt a quite peculiar sentiment, **not of pity, only, but of tenderness.**

さらに、жалостьの特徴として、この語がメタファー的にболь（痛み）という概念に例えられている点を挙げるができる。そのような特徴は他の研究においても確認されている。

В. Апресян и Ю. Апресян (1995[1993]: 460) пишут о том, что концепт жалость метафорически представляется как физическая боль, приводя в доказательство тот факт, что слова жалость и боль часто встречаются в схожих устойчивых сочетаниях: жалость кольнула / пронзает / щемит, острая жалость vs. боль кольнула, боль пронзает, в груди щемило, острая боль. На основании этих данных они предлагают включить следующие компоненты в толкование слова жалость (Апресян и Апресян 1995[1993]: 464): душа человека чувствует нечто подобное тому, что ощущает тело человека, когда ему больно; тело человека реагирует на такое чувство как на боль.

V. ApresyanとYu. Apresyan (1995[1993]: 460) は、жалость（憐み）という概念が、隠喩的に肉体的苦痛としてイメージされていると述べ、その証拠として、жалостьとболь（痛み）の間には、類似する連語が多くあるという事実を挙げている。жалость кольнула（刺すように痛む）／пронзает（突き刺す）／щемит（締め付ける）／острая жалость（鋭い／）。これに対してболь кольнула、боль пронзает、в груди щемило（胸が締め付けられる）、острая боль。これらのデータに基づき、V. ApresyanとYu. Apresyanは、次のような内容をжалостьの解釈に含めることを提案した。「体が痛む時に人が体で感じることに似た何かを心で感じること。人の体はそのような感情に痛みとして反応する」。

ところで英語に関して言うなら、「痛み」の概念は、ロシア語の жалость、英語の pity と共通のものであり得る。 острая/мучительная боль と acute pain (острая/мучительная жалость - acute pity)、あるいは send a pang of pain (a pang of pity) と пронзила боль (пронзила жалость) を比較してみよう。このような連語を有する文章の翻訳例を以下に示す。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

【原文】 Чехов «Припадок».

Тяжелая ненависть и гадливое чувство уступили свое место **острому чувству жалости и злобы** на обидчика

【英訳】 Chekhov “A Nervous Breakdown”.

The feeling of oppressive hate and disgust gave way to **an acute feeling of pity** and anger against the aggressor.

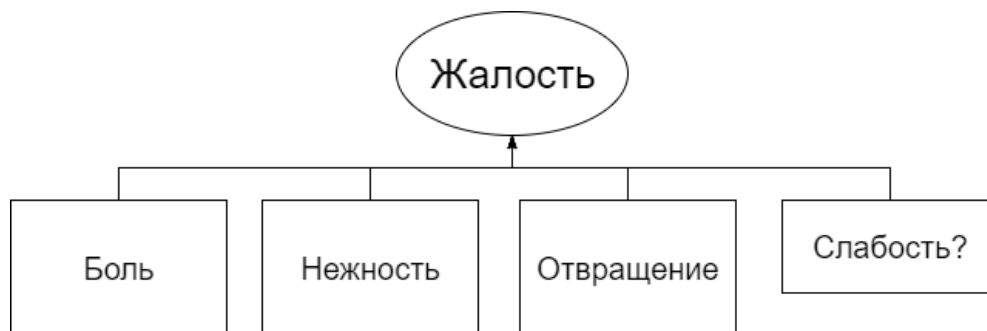
【原文】 Nabokov “Look at the harlequins!”.

Something about her inclined neck, her melancholy concentration, the ghost of a smile directed at the child in the stroller, sent such a **pang of pity** through my nervous system that I could not resist accosting her

【露訳】 Набоков «Смотри на арлекинов!».

Что-то в наклоне ее шеи, в печальной сосредоточенности, в призрачной улыбке, обращенной к ребенку, пронзило мои нервы такой **мучительной жалостью**, что я не сдержался и окликнул ее.

ソースドメインの数と概念構造の難解さについては、жалость の概念は сочувствие に比べて、はるかに広くスケールが大きい。概念 сочувствие の連語の大半が、中心ソースドメイン поддержка や интерес (вызвать ... в ком-то, испытывать, пробудить, выказывать, проявлять, изобразить, иметь, выражать, встречать в ком-то, проявить, беспредельное, глубокое, искреннее, неприкрытое, слабая, сильная, подлинная) や周辺的なソースドメイン чувство を用いて説明され得るものであるとすると、жалость の概念は以下の図に示すように、はるかに難解である。



жалость の概念におけるソースドメイン боль、нежность、отвращение についてはすでに触れたが、末端においても、例えば бить на жалость の語結合で表されるように、слабость の概念の影響は顕著である。

このように、жалость の概念は広汎な意味を有しているため、ロシア語から英語へ、または英語からロシア語への翻訳では feeling、shame、tenderness、unhappy など様々な単語で訳出されている。(注目すべき箇所には太字にする) (注 1)

【原文】 Толстой «Анна Каренина».

Лизвета Петровна прижимала эти тарачившиеся ручки, заключая их в полотняные одежды, на него **нашла такая жалость к этому существу** и такой страх, что она повредит ему, что он удержал ее за руку.

【英訳】 Tolstoy “Anna Karenina”.

as though they were soft springs, and putting them into linen garments, **such pity for the little creature came upon him**, and such terror that she would hurt it, that he held her hand back.

【原文】 Vladimir Nabokov “The Vane sisters”.

I also remember wondering whether D. had already informed her of his decision, and **I felt acutely unhappy** about my dutiful little student as during 150 minutes my gaze kept reverting to her, so childishly slight in close-fitting gray, and kept observing that carefully waved dark hair, that small, small-flowered hat with a little hyaline veil as worn that season, and under it her small face broken into a cubist pattern by scars due to a skin disease, pathetically masked by a sunlamp tan that hardened her features, whose charm was further impaired by her having painted everything that could be painted, so that the pale gums of her teeth between cherry-red chapped lips and the diluted blue ink of her eyes under darkened lids were the only visible openings into her beauty.

【露訳】 Набоков «Сестры Вэйн».

Помню еще, я гадал, сообщил ли ей уже Д. о своем решении, **и испытывал острую жалость** к прилежной маленькой студентке, пока на протяжении ста пятидесяти минут мои глаза все обращались к ней, такой по-детски хрупкой в облегающем сером платье, и разглядывали старательно завитые темные волосы, мелкую шляпку с меленькими цветочками и стекловидной вуалькой, какие носили в тот сезон, и под ней — мелкое личико, на кубистский пошиб изломанное шрамами, оставленными кожной болезнью и трогательно замаскированными искусственным загаром, ужесточившим ее черты, очарованью которых она еще повредила, раскрасив все, что можно раскрасить, так что бледные десны между вишенно-красными потрескавшимися губами и разжиженная чернильная синева глаз под утемненными веками только и остались просветами в ее красоту.

【原文】 Kurt Vonnegut “Hocus Pocus”.

I was so **overwhelmed by the pathos**, by the beautiful voice I hadn't heard for so long, by the young Margaret inside the witch!

【露訳】 Курт Воннегут «Фокус-покус».

Меня **сразила острая жалость**, и этот дивный голос, который я почти позабыл, и юная Маргарет в обличье старой ведьмы!

【原文】 Margaret Mitchell “Gone with the Wind”.

She thought of the four Tarletons, the red-haired twins and Tom and Boyd, and a **passionate sadness caught at her throat**.

【露訳】 Митчелл «Унесённые ветром».

Она вспоминала четырех братьев Тарлтонов — и рыжеволосых близнецов, и Тома с Бойдом, — **и острая жалость теснила ей грудь**.

【原文】 Fowles “The Collector”.

Not the faintest line of humour or **tenderness**, even of sarcasm, on his face.

【露訳】 Фаулз «Коллекционер».

В голосе – ни тени юмора или **жалости**; ни даже саркастической усмешки на губах.

【原文】 Bradbury “Fahrenheit 451”.

he said. “**What a shame!** she said

【露訳】 Фаулз «451 по Фаренгейту».

— спросил он. — **Какая жалость!** — воскликнула она.

【原文】 Чехов «Агафья».

Не то, чтобы у него не хватало воли, энергии или **жалости к матери**, а просто так, не чувствовалось охоты к труду и не сознавалась польза его...

【英訳】 Chekhov “Agafya”.

It was not that he was lacking in will, or energy, or **feeling for his mother**; it was simply that he felt no inclination for work and did not recognize the advantage of it.

ロシア語の単語 *сочувствие* と *жалость* の日本語訳に関しては、辞書では「同情、あわれみ」などの語が示されている。「同情」と「あわれみ」の概念は同じではないだろう。それ故、ドストエフスキーの作品の一部のロシア語のフレーズ «*сострадания и чувства ищущу*» が、「あわれみと同情が見つかる」という日本語に訳されているのは興味深い。（注目すべき箇所には太字にする）（注1）

【原文】 Достоевский «Преступление и Наказание».

И чем более пью, тем более и чувствую. Для того и пью, что в питии сем **сострадания и чувства ищущу... Пью, ибо сугубо страдать хочу!**

【和訳、工藤精一郎】 ドストエフスキー 『罪と罰』

飲めば、あわれみと同情が見つかるような気がして、それで飲むんですよ.....飲むのは、とことんまで苦しみたいからさ！

【英訳】 Dostoevsky “Crime and Punishment”.

That’s why I drink too. I try to **find sympathy and feeling** in drink.... I drink so that I may suffer twice as much!’

ロシア語の *жалость* と *сочувствие* の日本語の等価語を詳細に検討するつもりはない。ただ、日本語の概念が完全にロシア語のそれと合致しない確率が高いことを指摘しておく。例え

ば以下の抜粋における「同情」という語の英語、ロシア語、ウクライナ語訳には、それぞれの言語で認識されている *сочувствие* あるいは *жалость* の概念と全く共通するものがない (*pity, sympathy, жалость, сострадание, жаль, співчуття* など)。以下の例では、「同情の糸」は、英語は単に *bond* と訳されているが、この語には余分なニュアンスは含まれていない。片やロシア語とウクライナ語では«*нитка приязні / нити дружбы*»と訳され、親しさと好意の意義素が引き出されている。(注目すべき箇所には太字にする) (注1)

【原文】夏目漱石『こころ』

もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向かって、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ**同情の糸**は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまったろう。

【英訳】Soseki “Kokoro”.

Had I been curious in an impersonal and analytical way, **the bond between us would surely not have lasted.**

【露訳】Сосэки «Сердце».

Если бы в моих отношениях к нему хоть немного проглядывало любопытство или стремление изучать его, те **нити дружбы, что связывали нас, несомненно сейчас же порвались бы без всякой жалости.**

【ウクライナ語訳】Сосекі «Серце».

Якби моя цікавість бодай трохи спрямовувалась на його серце, якби я був занадто цікавий, то, мабуть, **нитка приязні, що єднала нас, урвалася б відразу.**

「同情」がこのように理解されるのは、その連語の一部が、潜在的に「同情」の意味を構成する要素の一つである「思いやり」の概念と共にしばしば用いられることからきているのであろう。

同情が込められている, 同情が芽生える, 同情が失せる, 同情を寄せる, 同情を感じる, 同情を強要する, 同情を失う, 同情を抱く, 同情を受ける, 同情を表す, 同情を示す, 同情を生む, 同情を高める, 同情を見せる, 同情につけこむ, 同情を注ぐ, 同情に満ちる, 同情に欠ける, 同情に溢れる, 同情の念, 同情の目, 同情の気持ち, 同情のまなざし, 同情のふり, 深い同情, 同情が生まれる, 同情を持つ



## 結論

### 5-1 本研究のまとめ

本稿では序章に掲げた目的に即して、抽象名詞、とりわけ世界観と密接につながっていて、他言語に翻訳しにくい（あるいは不可能）とされる文化的キーワードの意味を解明するために、概念メタファーなどの認知意味論におけるアプローチの弱点を踏まえ、独自のアプローチを提示した。本稿のアプローチを、個人の主観や、言語の特性による影響が少ない方法（言語コーパスのデータ活用など）で実証し、今まで他の研究では取り上げられることのなかった文化的キーワードの意味の問題、人間の思考や、人が言葉を理解する仕組みにおける特徴の一端に光を当てた。後半では本稿の概念メタファー分析手法を日本語、英語、ロシア語、ウクライナ語の文化的キーワードと思われる概念に適用し、実際の文芸作品の翻訳に即して、その翻訳可能性について考察した。その際、外来語の意味、抽象性の高いないし低い語彙の意味、語彙の意味変化、同族言語の似たような言葉におけるニュアンスの違い、類義語の意味などの多様な観点から、提示した仮説を適用し、その有効性を実証した。以下、本研究で提示したアプローチの主な特徴についてまとめる。

1. 概念の意味を形成する起点領域としては、一つ以上の別の概念、イメージスキーマ、プロトタイプ、身体的な経験、専門知識などがあり得るが、その有無と度合いは概念によって異なる。本稿の研究対象である文化的キーワードが抽象性の高い語彙であるため、メタファー的に理解されている部分が大きく、メタファー的な起点領域を調べることによってその意味における重要な特徴が解明できることを示した。
2. 起点領域（ソースドメイン）となる別の概念は抽象的な概念または記号ではなく、自然言語の中の他の言葉であると分かった。ソースドメインの概念は概念領域（ターゲットドメイン）よりシンプルで、主従関係のあるシステムを作っている。複雑な概念は、よりシンプルな（分かりやすい）単位によって構築され、その全体図は木系図として表すことができる。なお、ソースドメインがターゲットドメインの言葉の意味を構築する際に、ターゲットドメインと関連している行為や思考もソースドメインの影響を受ける。
3. 本稿の研究対象である文化的キーワードは、抽象性の高い語彙であり、メタファーを通して理解されている領域が大きいため、その起点領域を調べることで、その意味に関する重要な情報を得ることができる。言葉（ターゲットドメイン）のソースドメイン（起点領域）を調べるには、ターゲットドメインの単語との連語で使用頻度の高いものを調査し、

分類する必要がある。

4. 概念の構造に入っているソースドメインの中には中心的なものと同期的（末端）なものがある。これらの境界は曖昧ではあるが、中心的なソースドメインを特定するには二つの方法が有効である。

1. そのソースドメインがターゲットドメインに写像する連語の数を調べる。
2. 一部の文脈においてターゲットドメインの同義語としてソースドメインが使えることを確認する。

概念メタファーが言葉の意味に与える影響の程度についてまとめると、上述した通り、単語の意味は、(辞書の定義、概念メタファー、イメージスキーマ、プロトタイプなど) 互いを排除せず、補完し合う様々な手段で同時に形成され得る。意味の形成手段それぞれが及ぼす影響の程度は、単語の種類によって変化する。概して抽象的概念であれば、その理解の鍵となるのは概念メタファーであり、他の手段より優位にある。とは言え、これは、辞書や専門書が主たる出典である様々な知の分野における抽象的用語にはあてはまらない。しかしこのような特殊分野でも、我々の思考の隠喩化による概念メタファーの影響は常にゼロではない。ロシア語の *судьба* や日本語の「世間」あるいは英語の *privacy* など、専門用語でない抽象的概念に関しては、我々は辞書を見ずとも母語における意味を記憶している。言葉の意味は、我々がそれぞれの言葉を聞いた環境、つまりその言葉に固有の連語や文脈によって知覚されている。なお、それぞれの単語に関連している概念メタファーの数（概念構造の難解さ）は以下の4つのファクターに影響されると本研究で判明した。

**第1ファクター**—概念の抽象度。言葉の意味がどの程度概念メタファーによって決められるか。このような概念の構造の難解度は、抽象度によって異なっている。言葉の抽象性は、常に明白なものではない。概ね考えられているように、日常生活で人間を取り巻くもの、あるいは、現象は、しばしば文字通りに解釈され、その言葉が描写されている使用例のなかには概念メタファーはない。しかしながら我々の研究が示した通り、*огонь* のようなベースとなる概念の理解ですら、しばしばメタファーを通じて表現されている (*огонь ← зверь*)。

**第2ファクター**—概念の使用にかかる時間。借用されたばかりの言葉の概念構造を分析した結果、初めのうちは、その言語に存在する概念の一つと同じものと考えられているこ

とがわかった。後に、借用語の構造に別の中心ソースドメインが加えられ、その結果、借用語の意味が変化していく。概して借用語の連語分析は相対的に易しい。なぜならその連語は、借用語の基礎となる単語の連語とほぼ一致しているからである。借用語がその言語に根付いてから10～20年を経た後ですら、借用語の構造は、せいぜい1つから3つのソースドメインの影響によるものとして、相対的に容易く説明できる。この場合、この概念に固有の連語はほぼ100%、これらのソースドメインに基づいて問題なく分けられ、なんら疑問は生じない。一方、その言語において何百年もの間用いられている概念（100年以上前に借用された概念も含む）の分析は、はるかに難しい。分析が難しいのは、言葉には、時間とともに数多くの中心及び周辺的なソースドメインが加えられていくからである。時間の経過と共に、いくつかのソースドメインの影響が低下したり、別のソースドメインが新しいものにとって代わられたりする。この場合、古いソースドメインの連語はその言語から消えてゆくことになるが、すぐに消失するわけではなく、時には極めて長期にわたって残ることもある。このような残存フラグメントの存在が、理論的に証明していることがある。それは、ある期間、ある概念構造に包括されていたなにかのソースドメインがあるとしても、その残存の連語は非常に少数であるため、明らかな結論を導き出すためには通時的な概念の連語分析を実施するしかない、ということである。

**第3 ファクター**—概念の使用頻度。我々が検討してきた同義語群（例えばロシア語の *судьба, рок, участь, доля*）の中で最も連語が多いのは、同義語全体の中心概念であった（この場合の「中心」とは、最も使用頻度が高く、言語に浸透しているという意味）。したがって、このような概念はもっとも難解な概念構造を有している。なぜなら、この概念が含むソースドメイン数は、同義語の概念のそれを上回っていたからである。このような概念には、2～3の中心ソースドメインの他に、概念に意味の多面性を与える3～4の周辺的なドメインが認められた。

**第4 ファクター**—一つの同義語グループに属する概念の間で行われる連語の借用。一つ同義語群内で、ある同義語の特徴が別の同義語へ（ごく部分的に）移行し得ることはすでに示した。ある言語を母語とする人々が、同義的概念の意味を必ずしも完璧に区別しているわけではないため、その概念の連語が、他の概念と並行して使われることがある。それ故、ソースドメイン別の連語の分類過程がかなり複雑なものになっている。このような概念の分析からは、まだ若い借用語、あるいは、特定の同義語群に入っていない単語の分析ほど、すっきりと明確な結果は得られない。

「文化的キーワード」の概念構造の難解さについて言えば、これらの単語は、通常、上述の4つのファクター全ての影響を受けている。「文化的キーワード」は高度に抽象化された概念であり、その意味を理解するためには、この言語に存在する数多くの別の抽象概念を理解する必要がある。概念メタファーをもとに単語の従属関係を示す樹系図を描くとするならば、「文化的キーワード」は疑いなくその頂上近くにある。また、「文化的キーワード」は特定の言語的世界観の中心をなすエレメントであり、はるか昔から存在し、頻繁に使われてきたものであるが故に、第2、第3ファクターの影響を受けている。第4ファクターに関しては、「文化的キーワード」は、具体的世界観における特定の重要な思想を具体化したものとして、しばしば同義語群に含まれており、独立して存在してはいない。例えばロシア語の世界観では、人間の一生が予め定められているという思想は非常に重要であり、それ故、ロシア語を母語とする人々にとってこの思想に包含される不可欠なニュアンスを表現するには、たとえこの単語がもつあらゆるニュアンスを総動員したとしても、*судьба* という一つの単語だけでは不十分なのであろう。*судьба* には劣るものの、*участь*、*рок*、*доля* が、他の言語の等価語に比べて使用頻度がはるかに際立っているのは、これ故のことなのだと思う。

## 5-2 概念分析の観点からみた「文化的キーワード」の翻訳可能性

「文化的キーワード」の翻訳可能性は次の二つの尺度で検討できると分かった。1. (文脈から離れた) 具体的な言語的世界観のなかでの概念の意味的翻訳可能性。2. 具体的シチュエーションや文脈における翻訳可能性。

### 1. (文脈から離れた) 具体的な言語的世界観における概念の意味的翻訳可能性

ある文化において、単独の文化的キーワードの意味を、そのニュアンス (プロトタイプやイメージスキーマなどを通じて表されるもの)、その言語における連辞、言語的世界観のなかで割り当てられている特性なども含めて伝えられる可能性については、いくつかの単語あるいは表現を用いたとしても不可能であることは明らかである。他方、高度に抽象化された概念としての「文化的キーワード」の意味は、その多くが、その構造を作っている概念メタファーに依っている。「文化的キーワード」の構造に関する情報を他言語に描写的に伝える可能性については、いくつかの条件付きで、理論的には可能だろう。例えば、英語あるいは日本語には、ロシア語の概念 *будущее, бог, жизнь, наказание, приговор, путь* と完全に同じ概念があるとして、その連語を使って、ロシア語の *судьба* の概念に似ているであろう一種のヴァーチャルな用語を作ることはできるだろう。抽象的概念の概念構造を外国語で理解することは、この言葉の学習者が、連語の構築ロジックをより深く理解する助けとなる。いくつかの連語については、予測すら可能になる。しかしながら、我々が見るところ、ロシア語の *судьба* の概念が、*будущее, бог, жизнь, наказание, приговор, путь* という要素から成立しているということがわかっているだけでは、なぜロシア語を母語とする人々が、この素材を使って *судьба* という概念を作り出したのかを理解するには、やはり不十分である。つまり、単語の意味の個々の要素を理解していたとしても、これらの要素を一貫性のあるひとつのものに統合する必要性を理解するのは極めて難しい。もちろん実際には、(概念 *судьба* を形成している) *будущее, жизнь, наказание* などのような抽象的概念もまた、あらゆる言語に普遍的なものではなく、この概念の説明のために、構造を分析し、そこに含まれる要素を他言語の等価語と比較する必要がある。つまり、多様な言語の (文化的キーワードレベルの) 二つの難解な抽象的概念を十分に比較するには、全階層において機能している、あらゆる抽象概念が枝分かれした構造を再現することが求められ得る。この樹形図の最下層には、あらゆる言語に普遍的な概念が位置することになる (恐らく、大部分が、Wierzbicka が提起した *primes* と一致するであろう)。他方、ある文化において重要な言葉が置かれる場所に関して、その文化においてその言葉がどれほど重要であるのか

を伝えるためには、単語の意味が外国語の等価語と完全に一致しているだけでは不十分である。例えば、ロシア語の *судьба* の同義語群中に *доля* という言葉がある。しかしながら、同義語群の中で、もっとも頻繁に使われる言葉はまさに *судьба* であり、片やウクライナ語においては、*доля* がその同義語群中の中心である。昔のロシア語とウクライナ語で *доля* を比較すると、ロシア語の *доля* はウクライナ語のそれに常に似ていることがわかる。しかしながら、ロシア語を母語とする人々はなんらかの理由で *судьба* をはるかに頻繁に使うことにした。*судьба* の質は、彼らの世界観における現実のあり様を描写するのにより適しているのであるだろう。つまり、広義での「翻訳可能性」の問題は、意味を伝えることだけでなく、文化を伝えるために言葉が果たす役割と重要性を理解することにあるのである。ある世界観において、特定の概念が、別の概念よりも重要であるということは、翻訳中にも現れる。英語からの翻訳テキストの中で、*судьба* の概念が、オリジナル・テキスト中の *fate* やその同義語よりはるかに頻繁に使われていたことはすでに示した。つまり翻訳者は、原文で、人間の生活、生命に影響を及ぼす「大いなる力」という概念を用いて説明されていない状況や出来事を描写する場合にも、この概念を用いたのである。

また我々は、言語における文化的キーワードが単独では存在しないことも示した。通常、これらの言葉は、その言語における別の文化的キーワードと密接な関連がある。こうした言葉は、世界を同じ角度から見つつ、互いに対立することなく、補完し合う存在である。全階層において、文化的キーワードの概念構造を完全に分析したとしても、この言語を母語とする人々の、様々な状況下での思考論理を完全には理解できない（例えば、「世間」を正確に訳しても、場合によって、「世間を騒がせた」などというフレーズとともに謝罪することがなぜ一般的なのかを理解することはできない）。

## 2. 具体的シチュエーションや文脈における翻訳可能性

具体的文脈における文化的キーワードの翻訳可能性に関しては、我々が提案した、単語の概念構造分析手法を使うことで、この問題を新たな視点から見ることができる。この手法を用いることで、この問題を実践的な局面に落としこむことができ、a) 翻訳する際、なぜ翻訳者がその単語を選択したのかを理解し、また、b) 「文化的キーワード」のような難解で抽象的な概念を実際に翻訳する際の手段となる。我々の研究の極めて重要な成果の一つは、具体的文脈によって、抽象名詞の意味がどのように現れてくるのか、その過程を示したことにある。この過程を理解することで、文化的キーワードの翻訳可能性分析が実際に使えるものになった。概念の意味が現れる際の特徴は、具合的環境において、アクチュアライズ（前面に引き出）されるソースドメインはたった一つだけ（稀に二つ）であるこ

とである。すでに示したように、抽象的概念はそれぞれ、同時に複数の中心及び周辺的なソースドメインの影響を受ける。しかしながら具体的文脈のなかでは、そのなかのいくつかの影響が強められる。連語が文脈を作る場合がしばしばある。連語から、今どのような意味が前面に引き出されているのかを定めることができる。例えば *решается судьба* なら、ソースドメイン *будущее* が、*горькая судьба* ならソースドメイン *жизнь* が前面に出てきている。しかし、連語は影響を及ぼす唯一のファクターではない。特定の意味を前面に引き出すためには、単語に特定の文法的特徴を付与するだけで事足りる場合がある。例えば、ロシア語の概念 *судьба* の複数形 (*судьбы*) は、ソースドメイン *жизнь* がより前面に引き出された意味になる。意味が狭められるこの特性は、Wierzbicka (1992, 80) も指摘している。

The Russian word *sud'ba*, too, loses many of its implications when it is used in the plural, as when one speaks of the *sud'by* of the Russian intelligentsia, the British fleet, or French literature,

露単語 *sud'ba* もまた、複数形で使われるとその含意の多くを失う。ロシアの知識人、イギリス海軍、フランス文学などの *sud'by* (運命) について言及する際がその例である。

ここで理解しなければならないことは、一つのソースドメインが前面に引き出されることで、他のソースドメインが完全にかき消されてしまうわけではなく、単にその影響が限定的になっただけで、その影響を及ぼし続けるということである。*решается судьба* というフレーズは、*решается будущее* の意味に極めて近いものの、常に同じわけではない。なぜなら *будущее* の概念は、人間の受動的役割や、(*судьба* の概念と違い) 起こることの不可知性に関する観念に向けられたものではないからである。翻訳の実際については、文化的キーワードの意味が様々な言語において一致しないことが多いため、翻訳者は意識的あるいは無意識のうちに、その状況において前面に引き出されているソースドメインを特定し、訳す。我々が分析した翻訳例の大部分で、この手法が取り入れられていた。本稿で適用した概念メタファーの分析手法で文学作品の複数の翻訳例を分析した結果、翻訳時の等価語選択の助けとなる数々の方法を確立することができた。文化的キーワードを訳すための等価語を選択するのが難しい場合、以下の3つの方法が可能だろう。

a. 連語、又は、他の特徴から、文化的キーワードのどのソースドメインが前面に出ているかを定め、翻訳時には概念 (文化的キーワード) でなく、そのソースドメインの等価語を使う。我々が分析した翻訳から判断するに、これはもっとも広く使われている方法であ

る。この方法を採用するにあたっての難しさは、二つの言語でソースドメインが一致していない場合である。例えば、日本語の連語「運命に巻き込まれる」又は「運命に陥る」では、ソースドメイン「困難」が前面に引き出されているが、ロシア語の概念 *трудности* の意味には部分的に一致しない。なぜならロシア語を母語とする人々は *трудности* を、遭遇し得る障害という意味にしか捉えていないからである。片や、日本語の「困難」は、単に障害を意味するだけでなく、人が陥るかもしれない穴、あるいは、渦をも意味している。結果的に、翻訳者は概念構造の階層を一つ降り（運命→困難→渦）、ロシア語への翻訳では *водоворот* を用いた（*водоворот судьбы*）。

**b.** 利用できる（そしてしばしば見受けられる）二番目の方法—外国語の概念の特定の本質を表すオリジナル・ソースドメインを、似たような特質をもつ母国語の他のソースドメインに置換する方法。例えば、ロシア語の単語 *судьба* の中で、人間に及ぼす否定的影響を担っているのは周縁的なソースドメイン *наказание* で、ウクライナ語の *доля* の場合は *лихо/горе* である。*наказание* は、ウクライナ語の *доля* に固有のソースドメインではないため、翻訳者は、「Он не знал, за что именно его постигла такая судьба」というフレーズを、ウクライナ語に固有のソースドメイン *лихо/горе* を用いた結果（この結果、「за что」は「чому」に変えられることになるが）、「Він не знав чому його спіткала така доля」と訳出することができる。このような翻訳は形式的には正しいと思われる。しかしながら、このような意味の欠落が致命的なものになってしまうケースや文脈があることが想定される。二番目のこの方法では、実際に一つの世界観が別の世界観に置き換えられるが、これは同化（*domestication*）という用語でまとめられる。

**c.** 三番目の方法—ある意味で実験的な方法だが、他言語への翻訳対象概念のオリジナル構造を転移させる方法であり、異化（*foreignization*）の一種である。文学作品を理解するために、他言語にはないなんらかの概念の本質を正確に伝えることが重要だとしたら、理論的に、その言語に固有でない連語の使用を想定することができる。そうすることで、概念メタファーを文学メタファーに転換できる。我々が検討した文化的キーワードの普遍性については、その言葉と、想定される他言語の等価語の中心ソースドメインは一致していることが多かった。つまり、（翻訳不可能とされる文化的キーワードにすら）その主要な意味に関しては、なにがしかの普遍性が観察される。文化的キーワードの翻訳可能性に関する問題の大部分は、この言葉に独自の意味合いを与える、他ならぬ周縁的なソースドメインに誘導されたものである。実際的な観点から見れば、概念が難解になればなるほど、そのソースドメインは多くなり、したがって、他言語には類似のものがない概念が含まれている確率も高くなる。



### 5-3 今後の展望と課題

我々の研究は、言語における名詞の優位性と名詞に特有の連語の分析上に構築されている。あらゆる動詞や形容詞は、名詞の本質あるいはその機能メカニズムを明らかにする、付随的なものとして扱われている。実際、かなり多くの文化的キーワードが名詞で表されており、我々が提案した方法は、その多くの意味を解明することができる。しかしながら、文化的キーワードが別の品詞で表されている場合、我々の方法では成果を得られない。そのため、本稿で提示した手法は他の品詞もカバーできるように改善方法を探す課題がある。

さらに、文化的キーワードは、その特徴的本質故に、時間が経過してもなかなか意味が変化しない。なぜなら、文化の鍵となる観念を内包しており、文化は比較的变化しにくいからである。しかしながら本稿では、連語の通時的分析で、借用語の意味がいかに短期間で変化し得るか、新しいソースドメインがどのように概念構造に根付き、中心的なポジションを占めていくのかを提示した。また、その言語に独自のものと見なされている単語の主要ソースドメインが変化する例も示した（例えば、ум という概念に含まれるソースドメイン оружие から別のソースドメイン механизм への漸進的置換）。さらに、現時点で能動的なソースドメインによる分類が難しい文化的キーワードに少数の連語があることも観察した（概念構造からいくつかのソースドメインが抜け落ちた後の痕跡であろう）。長い時間がかかるかもしれないが、このことは、文化的キーワードの意味も変化し得ることを証明している。従って、より客観的で完全な、文化的キーワードの研究結果を得るために、時間の経過とともにこれらの言葉がどう変化していくのかという通時的切り口で連語の研究を継続していくことは意味がある。

もう一つの今後の重大な課題として挙げられることは、概念の構造におけるソースドメインの部分的写像である。それは言葉の意味に関わる本質的な問題で、その理由やアルゴリズムの解明は人が言葉を理解する仕組みの解明に導くだろう。しかし、概念のソースドメインのある性質の部分的写像の過程、つまり、ある性質（連語）がソースドメインから概念へ転移するかどうかの理由やアルゴリズムは、先行研究では明確化されておらず、しばしば随意的であるかのように捉えられている。本研究でも部分的写像の仕組みを解明することは結局できなかったが、その課題の解決に導くであろう二つの方向を提示した。1. 先行研究がしばしば曖昧に捉えがちだったソースドメインの存在を具体化することによって部分的写像の一部の問題が解決できると証明した。ソースドメインとしては形のないアイデアではなく、その言語に使用される実際の単語を厳密に選択すれば、分析対象となっている概念の構造がよりわかりやすくなる。2. ロシア語の、судьба（運命）とそのソースドメインと思われる жизнь（人生）という概念の分析で示したように、写像されている、

または写像されていない連語の一部は、ある一つのテーマ（ソースドメイン）によって結びつけられている場合がある。жизньのソースドメインの中から、構造物に関連した連語がсудьбаに伝わり、「川/水」というソースドメインの連語が伝わっていないということになっている。つまり部分的写像は常に随意的であるわけではなく、ある性質は一つのソースドメインによって結合されたグループごとに、転移されたり、されなかったりすることが見られた。このような傾向がどこまで他の概念にも共通しているかは、今後の研究の課題である。

この研究で、抽象的単語の概念構造を理解することは、文学作品の翻訳分析、あるいは、翻訳の際の等価語選択において有用であることを示した。我々の経験から、連語の自動検索システムを利用する場合でさえ、文化的キーワードや他の抽象的用語のソースドメインの候補を特定するのは、長い時間を要する、極めて骨が折れる作業であることがわかる。本稿で提案した方法を実際の翻訳作業において十二分に活用するために、中心及び周遍的なソースドメインが全て網羅された、独自の抽象語辞典が必要となると考える。この辞書は、下層に普遍的概念を、頂上に仮に文化的キーワードを配置した逆樹系図の形になるかもしれない。このような辞書は翻訳作業の助けとなるだけでなく、文化人類学、認知言語学、心理学など他の学術分野の研究者が文化的キーワードを新たな観点から見直す手助けとなり得るであろう。我々の方法と辞書のもう一つの実際の活用法は、外国語学習者に向けたものである。我々の研究によれば、母国語におけるソースドメインが外国語の等価語と一致しない場合、単語の意味がもつニュアンスを理解しにくくなることがある。単語の概念構造を示すことで、単に外国語を母語とする人々のロジックを理解する助けになるだけでなく、実際に外国語を使う際、多くの場面で抽象概念を正しく使うためのコツを与えてくれることになる。

## 注

(注1) 本稿で一次資料として扱う文芸作品とその翻訳は以下の通りである。

1. Emily Bronte. *Wuthering Heights*, CreateSpace Independent Publishing Platform, 2015.

和訳：E・ブロンテ『嵐が丘』田中西二郎 訳 新潮社、1995

露訳：Э. Бронте. Грозовой перевал: Перевод: Вольпин Н., Изд.: “Правда”, М., 1988.

ウクライナ語訳：E. Бронте Буремний Перевал: Перевод: Андрияш О., Изд. “Краина Мрий”, К., 2009.

2. F. Scott Fitzgerald. *The Great Gatsby*, Scribner, 2004.

和訳：F・スコット・フィッツジェラルド 『グレート・ギャツビー』野崎孝 訳 新潮社、1995

露訳：Ф. С. Фицджеральд. Великий Гэтсби; Ночь нежна; Последний магнат: Перевод: Калашникова Е., Изд. “Олма-Пресс”, М., 2005.

ウクライナ語訳：Ф. С. Фіцджеральд. Великий Гетсбі: Переклад: Пінчевський М., Изд. “Фоліо”, Харків, 2013.

3. J.K. Rowling. *Harry Potter (Book 1)*, Scholastic Paperbacks, 1998.

J.K. Rowling. *Harry Potter (Book 2)*, Scholastic Paperbacks, 2000.

J.K. Rowling. *Harry Potter (Book 3)*, Scholastic Paperbacks, 2001.

J.K. Rowling. *Harry Potter (Book 4)*, Scholastic Paperbacks, 2002.

J.K. Rowling. *Harry Potter (Book 5)*, Scholastic Paperbacks, 2004.

J.K. Rowling. *Harry Potter (Book 6)*, Scholastic Paperbacks, 2006.

J.K. Rowling. *Harry Potter (Book 7)*, Arthur A. Levine Books, 2009.

和訳：J.K.ローリング『ハリー・ポッターと賢者の石』松岡佑子訳、静山社 2014

J.K.ローリング『ハリー・ポッターと秘密の部屋』松岡佑子訳、静山社 2014

J.K.ローリング『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』松岡佑子訳、静山社 2014

J.K.ローリング『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』松岡佑子訳、静山社 2014

J.K.ローリング『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』松岡佑子訳、静山社 2014

J.K.ローリング『ハリー・ポッターと謎のプリンス』松岡佑子訳、静山社 2014

J.K.ローリング『ハリー・ポッターと死の秘宝』松岡佑子訳、静山社 2015

露訳：Джоан К. Роулинг Гарри Поттер и Философский Камень: Перевод: Оранский И., Изд. “Росмэн”, М., 2001.

Джоан К. Роулинг. Гарри Поттер и Тайная комната: Перевод: Литвинова М., Изд.

“Росмэн”, М., 2001.

Джоан К. Роулинг. Гарри Поттер и узник Азкабана: Перевод: Литвинова М., Изд. “Росмэн”, М., 2001.

Джоан К. Роулинг. Гарри Поттер и Кубок огня: Перевод: Литвинова М., Изд. “Росмэн”, М., 2002.

Джоан К. Роулинг. Гарри Поттер и Орден Феникса: Перевод: Гольшев В., Мотылев Л., Бабков В., М., Изд. “Росмэн”, М., 2002.

Джоан К. Роулинг. Гарри Поттер и Принц-Полукровка: Перевод: Лахути М., Ильин С., Изд. “Росмэн”, М., 2005.

Джоан К. Роулинг. Гарри Поттер и Дары смерти: Перевод: Лахути М., Ильин С., Сокольская М., Изд. “Росмэн”, М., 2007.

ウクライナ語訳: Джоан К. Ролинг. Гарри Поттер і філософський камінь: Перевод: Морозов В., Изд. “А-БА-БА-ГА-ЛА-МА-ГА”, К.; 2001.

Джоан К. Ролинг. Гарри Поттер і таємна кімната: Переклад: Морозов В., Изд. “А-БА-БА-ГА-ЛА-МА-ГА”, К.; 2001.

Джоан К. Ролинг. Гарри Поттер і в'язень Азкабану: Переклад: Морозов В., Изд. “А-БА-БА-ГА-ЛА-МА-ГА”, К.; 2002.

Джоан К. Ролинг. Гарри Поттер і келих вогню: Переклад: Морозов В., Изд. “А-БА-БА-ГА-ЛА-МА-ГА”, К.; 2003.

Джоан К. Ролинг. Гарри Поттер і Орден Фенікса: Переклад: Морозов В., Изд. “А-БА-БА-ГА-ЛА-МА-ГА”, К.; 2004.

Джоан К. Ролинг. Гарри Поттер і смертельні реліквії: Переклад: Морозов В., Изд. “А-БА-БА-ГА-ЛА-МА-ГА”, К.; 2007.

4. John Steinbeck. *The Grapes of Wrath*, Penguin Books, 2002.

和訳: ジョン・スタインベック 『怒りの葡萄』 大久保康雄 訳 新潮社、1995

露訳: Джон Стейнбек. Гроздья гнева: Перевод: Волжина Н., Изд. “Азбука”, Спб., 2013.

5. Truman Capote. *Breakfast at Tiffany's*, Penguin Books Australia Ltd, 1961.

和訳: トルーマン・カポーティ 『ティファニーで朝食を』 龍口直太郎 訳 新潮社、1995

露訳: Капоте Трумен. Завтрак у Тиффани: Перевод: Гольшев В., Изд. “Азбука”, 2011.

ウクライナ語訳: Трумен Капоте. Лугова арфа і Сніданок у Тіффані: Перевод: Митрофанов В., Изд. “Дніпро”, 1977.

6. 太宰治 『人間失格』 新潮社、1995

英訳 : Osamu Dazai. No longer human, translated by Keene D., New Directions Publishing Corporation, 1958.

露訳 : Осаму Дадзай. Исповедь "неполноценного" человека: Перевод: Скальник В., Изд. Аграф, 1998.

7. 川端康成 『雪国』 新潮社、2006

露訳 : Ясунари Кавабата. Снежная страна: Перевод: Рахим З. Изд. "Амфора", Спб., 2000.

ウクライナ語訳: Ясунари Кавабата. Країна снігу: Перевод: Дзюб І., Изд. "Фоліо", Харків, 2008.

8. 安部公房 『砂の女』 新潮社、1995

英訳 : Kobo Abe. The Woman in the Dunes, translated E. Dale Saunders, Charles E. Tuttle company, 1964.

露訳 : Абэ Кобо. Женщина в песках: Перевод: Гривнин В., Изд.: "Феникс", Ростов-на-Дону, 2000.

ウクライナ語訳 : Абе Кобо. Жінка в пісках: Перевод: Дзюб І., Изд.: "Основи", К., 2004.

9. 三島由紀夫 『金閣寺』、新潮社、1995

露訳 : Юкио Мисима. Избранное (Золотой храм): Перевод Чхарташвили Г., Изд., "ТЕРРА", М., 1996.

10. 村上春樹 『1Q84』 BOOK1-3 新潮社、2010

英訳 : Haruki Murakami. 1Q84 Book 1-3, translated by Jay Rubin, Philip Gabriel, Vintage; Reprint edition, 2013.

露訳 : Мураками Харуки. 1Q84. Тысяча невестьсот восемьдесят четыре Книга 1: Перевод: Коваленин Д., Изд.: "Эксмо", 2012.

Мураками Харуки. 1Q84. Тысяча невестьсот восемьдесят четыре Книга 2: Перевод: Коваленин Д., Изд.: "Эксмо", 2016.

Мураками Харуки. 1Q84. Тысяча невестьсот восемьдесят четыре Книга 3: Перевод: Коваленин Д., Изд.: "Эксмо", 2013.

ウクライナ語訳 : Харуки Мураками. 1Q84. Книга перша (квітень - червень): Перевод: Дзюб І., Изд.: "Фоліо", Харків, 2009.

11. 村上春樹 「世界の終わりとハードボイルドワンダーランド」、新潮社、1995  
英訳：Hard-boiled Wonderland and the End of the World (Haruki Murakami) translated by Alfred Birnbaum Kodansha international 1991  
露訳：Страна Чудес Без Тормозов И Конец Света Роман Перевод с японского Дмитрия Коваленина
12. 夏目漱石 「坊ちゃん」『夏目漱石全集 2』ちくま文庫、筑摩書房、1987  
英訳：Soseki Natsume. Botchan, translated by Umeji Sasaki, Charles E. Tuttle Company, Inc, 1968.  
露訳：Нацумэ Сосэки. Мальчуган: Перевод: Карлина Р., Изд.: “Государственное издательство художественной литературы”, 1956.
13. 夏目漱石 『こころ』集英社文庫、集英社 1991  
英訳：Natsume Soseki. Kokoro, translated by Meredith Mckinney, Penguin Classics, 2010.  
露訳：Нацумэ Сосэки. Сердце: Перевод: Конрад Н., Изд.: “Государственное издательство художественной литературы”, 1937.  
ウクライナ語訳：Нацуме Сосэкі. Серце: Перевод: Федоришин, Изд.: “Всесвіт” М., 2004.
14. 夏目漱石 「吾輩は猫である」『夏目漱石全集 1』ちくま文庫、筑摩書房、1987  
英訳：Soseki Natsume. I Am a Cat: Three Volumes in One, Tuttle Publishing; New edition, 2001.  
露訳：Нацумэ Сосэки. Ваш покорный слуга кот: Перевод: Коршикова Л., Стругацкого А., Изд.: “Государственное издательство художественной литературы”, 1960.  
ウクライナ語訳：Нацуме Сосэкі. Ваш покірний слуга кіт: Перевод: Дзюб І., Изд.: “Дніпро”, 1973.
15. А. П. Чехов. Три сестры (Полное собрание сочинений и писем в тридцати томах. Сочинения в восемнадцати томах. Том тринадцатый. Пьесы), Изд.: “Наука”, М., 1986.  
和訳：アントン・チャーホフ 『三人姉妹』神西清訳 新潮社、1995
16. А. П. Чехов. Вишневый сад (Полное собрание сочинений и писем в тридцати томах. Сочинения в восемнадцати томах. Том тринадцатый. Пьесы), Изд.: “Наука”, М., 1986.

和訳：アントン・チェーホフ『桜の園』神西清 訳 新潮社、1995

17. Ф. М. Достоевский. Братья Карамазовы (Собрание сочинений в 15-ти томах), Изд., “Наука”, Л., 1991.

和訳：フョードル・ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟 上巻』中山省三郎 訳 角川文庫、1968

英訳：Fyodor Dostoevsky. The Brothers Karamazov (The Complete novels), translated by Charles James Hogarth, Book House, 2016.

18. Ф. М. Достоевский. Преступление и наказание (Собрание сочинений в 15-ти томах), Изд.: “Наука”, М., 1991.

和訳：フョードル・ドストエフスキー『罪と罰』工藤精一郎 訳 新潮社、1995

英訳：Fyodor Dostoevsky. Harvard Classics Shelf of Fiction vol. 18: Crime and Punishment translated by Constance Garnett, Neilson, William Allan, P.F. Collier and Sons Company, 1917.

19. Л. Н. Толстой. Анна Каренина (Собрание сочинений в двенадцати томах. Том 8), Изд.: “Правда”, 1987.

和訳：レフ・トルストイ『アンナ・カレーニナ』木村浩 訳 新潮社、1995

英訳：Leo Tolstoy. Anna Karenina, translated by Constance Garnett, Defoe & Poe, 2015.

20. И. С. Тургенев. Первая любовь: Изд.: “Астрель: АСТ”, 2008.

和訳：イワン・ツルゲーネフ『はつ恋』神西清 訳 新潮社、1995

英訳：Ivan Turgenev. First Love, translated by Constance Garnett, the University of Adelaide Library, 2014.

21. М. Е. Салтыков-Щедрин. Господа ташкентцы. Картины нравов, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

22. М. Горький. Старуха Изергиль, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

ウクライナ語：М. Горький. Стара Ізергіль: Перевод: Сорока О., Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

23. Н. В. Гоголь. Мертвые души, Национальный корпус русского языка

(<http://ruscorpora.ru/>).

ウクライナ語 : М. В. Гоголь. Мертві душі: Перевод: Сенченка І., Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

24. М. А. Булгаков. Мастер и Маргарита (ч. 2), Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

ウクライナ語 : М. А. Булгаков. Майстер і Маргарита (ч. 2): Перевод: Білорус М., Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

25. Л.В. Костенко. Україна як жертва і чинник глобалізації катастроф, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

露訳 : Л.В. Костенко. Украина как жертва и фактор глобализации катастроф, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

26. Н. В. Гоголь. Повесть о том, как поссорился Иван Иванович с Иваном Никифоровичем, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

ウクライナ語 : М. В. Гоголь. Повесть про те, як посварилися Іван Іванович з Іваном Никифоровичем: Перевод: Хуторян А., Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

27. И. А. Ильф, Е. П. Петров. Золотой телёнок, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

ウクライナ語 : І. А. Ільф, Є. П. Петров. Золоте теля: Перевод: Мокрієв Ю., Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

28. 宮本輝『錦繡』新潮文庫の100冊

英訳 : Teru Miyamoto. Kinshu: Autumn Brocade, translated by Roger K. Thomas A New Directions Book, 2005.

露訳 : Тэру Миямото. Узорчатая парча: Перевод: Дуткиной Г., “Гиперион”, СПб., 2005.

29. А. П. Чехов. Припадок, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

英訳 : Anton Chekhov. A Nervous Breakdown, translated by Constance Garnett,



Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

30. Vladimir Nabokov. Look at the harlequins!, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

露訳 : В. В. Набоков. Смотри на арлекинов!: Перевод: Ильин С., Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

31. Vladimir Nabokov. The Vane sisters, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

露訳 : В. В. Набоков. Сестры Вэйн: Перевод: Ильин С., Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

32. Kurt Vonnegut. Hocus Pocus, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

露訳 : Курт Воннегут. Фокус-покус: Перевод: Ковалева М., Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

33. Margaret Mitchell. Gone with the Wind, Part 1, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

露訳 : Маргарет Митчелл. Унесённые ветром, ч. 1: Перевод: Озерская Т., Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

34. John Fowles. The Collector, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

露訳 : Джон Фаулз. Коллекционер: Перевод: Бессмертная И., Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

35. Ray Bradbury. Fahrenheit 451, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

露訳 : Рэй Брэдбери. 451 по Фаренгейту: Перевод: Шинкарь Т., Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

36. А. П. Чехов. Агафья, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

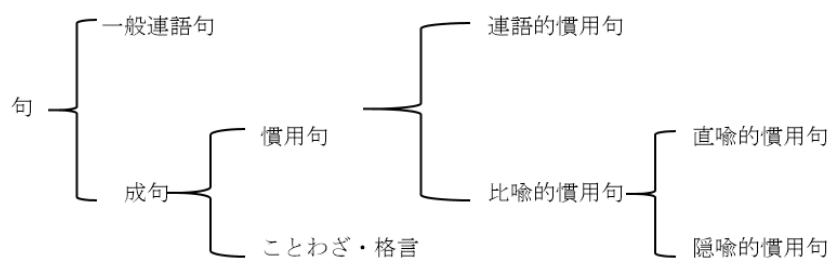
英訳 : Anton Chekhov. Agafya, translated by Constance Garnett, Национальный корпус русского языка (<http://ruscorpora.ru/>).

37. Нечуй-Левицкий І. С. Микола Джеря; Кайдашева сім'я: Повісті. — Донецьк, 1979. — С. 147

(注2) その解釈によると、語結合（連語）とは主従的な文法的結びつきにより2つ以上の自立語が結びついた統語論的な構造体である（Жеребило, 2010）。語結合は、文法的に他の単語を従属させる構成素と、それに文法的に従属する構成素から成るもので、語結合を形作る文法的な結びつきにはいくつかの種類がある。すなわち、「一致（согласование）」（主軸構成素がその格・性・数と同じ形を従属構成素に要求する）、「支配（управление）」（主軸構成素が従属構成素の格を指定して従属させる）、「接続（примыкание）」（従属構成素は不変化詞などであり、主軸構成素の格によって変化しない）といったものである。主軸構成素の品詞によって結語合（連語）には「動詞結合」、「名詞結合」、「形容詞結合」、「副詞結合」がある。なお、主軸構成素と従属構成素の結びつきの強さによって語結合は「自由結合」（«Есть суп» - スープを飲む）と「非自由結合」（慣用句など）に分類される（Ярцева, 1998）。

(注3) それは、原子が何個の他の原子と結合するかを表す化学の原子価（valency）と同様の発想で、述語が取る必須の項の数を表す言語学における用語であり、ルシアン・テニエール Lucien Tesnière によって導入された（Matthews, 2014）。取る項の数によって1項述語、2項述語などがある。「(リンゴが) おいしい」の場合は「おいしい」は1項述語であり、「あげる」（誰が、何を、誰に）は3項述語とされている。述語によっては不可欠な項（必須）とそうでないもの（随意）がある。なお、述語の項の関係によって結合価には様々なタイプがある。

(注4) 例えば、宮地（1982）は日本語の表現を以下のように区分している。



(注5) 本稿で連語収集に利用する辞書のリストを以下に示す。

<ロシア語>

- Абдуллаев Ф. М.* Опорный словарь сочетаемости слов при образовании русских словосочетаний: Пос. для учителей начальной школы. Баку, 1980
- Анисимова Т. И., Иванова З. Э., Ульянов Р. В.* Пособие по лексической сочетаемости слов русского языка. Словарь-справочник; Под ред. Т. П. Плещенко и Л. Ф. Саковец. Минск. (Пособие для студентов-иностранцев и учащихся национальных школ.), 1975
- Бирюк О. Л., Гусев В. Ю., Калинина Е. Ю.* Слова глагольной сочетаемости непредметных имен русского языка ([http://dict.ruslang.ru/abstr\\_noun.php](http://dict.ruslang.ru/abstr_noun.php)), 2008
- Денисов П. Н., Морковкин В. В.* Словарь сочетаемости слов русского языка М., АСТ., 2002
- Регина К. В., Тюрина Г. П., Широкова Л. И.* Устойчивые словосочетания русского языка: Учеб. пос. для студентов-иностранцев / Под ред. Л. И. Широковой М., 1980

<日本語>

- 姫野昌子監修 (2012) 『研究社 日本語コロケーション辞典』 研究社
- 姫野昌子編 (2004) 『研究社 日本語表現活用辞典 (英語)』 研究社
- 金田一秀穂監修 (2006) 『知っておきたい 日本語コロケーション辞典』 学習研究社
- 小内一 (2010) 『てにをは辞典』 三省堂
- 井上宗雄監修 (1992) 『例解 慣用句辞典—言いたい内容から逆引きできる』 創拓社

<英語>

- Oxford Collocations Dictionary For Students of English, 2009 Colin McIntosh
- Longman Collocations Dictionary & Thesaurus Paperback with Online (Longman Collocations Dictionary and Thesaurus) 2013、Pearson Education
- Macmillan Collocations Dictionary, 2010、Michael Rundell
- A Dictionary of English Collocations: Based on the Brown Corpus , 1994, Goran Kjellmer

(注 6)

#### 日本語コーパス

現代日本語書き言葉均衡コーパス - <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>

「中納言」コーパス検索アプリケーション <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

『筑波ウェブコーパス』 <http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/>

#### ロシア語コーパス

Национальный корпус русского языка - <http://www.ruscorpora.ru/>

#### 英語コーパス

The Open American National Corpus - <http://www.anc.org/>

British National Corpus - <http://www.natcorp.ox.ac.uk/corpus/index.xml>

Corpus of Contemporary American English - <http://corpus.byu.edu/coca/>

#### ウクライナ語コーパス

Корпус української мови - <http://www.mova.info/corpus.aspx>

(注 7) 連語抽出ツール WordSketch (Sketchengine) (<https://the.sketchengine.co.uk/>)

世界中の 63 か国言語 (2016 年 9 月の時点) のコーパスを収録し、単語に付随する文法とコロケーションを抽出するツールである。なお、Sketchengine には、独自のアルゴリズムを使用した類義語抽出ツール (Thesaurus) と、類義語 (あるいは意味的に近いことば) における意味的な差異が確認できる機能 Sketch Difference が備わっている。本研究では特に WordSketch という、ことばの共起関係を表示する機能を活用した。WordSketch にはすでに多数のコーパス (例えば、English Web 2013 (enTenTen13) : 19,685,733,337 ワード、日本語 : Japanese Web 2011 (jpTenTen11) : 8,432,256,386 ワード、Russian Web 2011 (ruTenTen11) : 14,553,856,113 ワード、ウクライナ語 : Ukrainian Web 2014 (uaTenTen14) : 2,194,447,594 ワード) が利用可能となっているが、自分で用意した文章をアップロードして、文法の解析と連語の自動抽出が可能である。その機能を利用して、特定の作家あるいは文芸作品における連語の用法の特徴まで調べることができる。

(注 8) Союз писателей СССР. Иностранная литература, тома – 4-6. (Известия), 1971, с. 230.

- (注 9) «Молодая гвардия», Всесоюзный ленинский коммунистический союз молодежи. Центральный комитет, Союз писателей СССР, ЦК ВЛКСМ, 1972, с. 271.
- (注 10) США: проблема больших городов, Евгений Михайлов, "Наука", 1973., с. 60.
- (注 11) «Новая и новейшая история», , Выпуски 1-3, Институт истории (Академия наук СССР), Изд-во "Наука", 1974., с.119.
- (注 12) «Потребляющий мир--за и против», Вячеслав Павлович Мотяшов, "Молодая гвардия," 1976., с. 15.
- (注 13) Молодежь Запада: пути и судьбы / Г. С. Александрович, Лениздать, 1977.
- (注 14) Латинская Америка, Том 1, Институт Латинской Америки (Академия наук СССР), Советский комитет солидарности с народами Латинской Америки, Изд-во "Наука", 1977., с.8.
- (注 15) Литературное обозрение, Выпуски 7-12, Союз писателей СССР, Изд-во "Правда," 1978., с.13.
- (注 16) Вестник Московского университета: Журналистика, Московский государственный университет им. М.В. Ломоносова, Изд-во Московского университета, 1979., с.61.
- (注 17) США--кризис духовной жизни: противоборство двух культур, Танкред Григорьевич Голенпольский, Вячеслав Павлович Шестаков, "Мысль," 1982., с.53.
- (注 18) «Звезда», Выпуски 1-3, Федерация объединений советских писателей. Ленинградское отделение, Ленинградский союз советских писателей, Союз писателей СССР. Ленинградское отделение, Союз писателей СССР. Гос. изд-во худож. лит-ры, 1982., с.158.
- (注 19) Искусство кино, Выпуски 1-4, Государственный комитет по кинематографии, Союз работников кинематографии СССР, Конфедерация союзов кинематографистов, Изд. Союза работников кинематографии СССР, 1982., с. 147.

- (注 20) Взаимосвязь и взаимовлияние внутренней и внешней политики, Джангир Али-Аббасовых Керимов, Институт государства и права (Академия наук СССР), Наука, 1982., с.83.
- (注 21) Труд, право, идеология, С. Л Зивс, Институт государства и права (Академия наук СССР), Изд-во "Наука", 1982.
- (注 22) Новое в русской лексике: Словарные материалы, Объемы 80-83, Институт русского языка, Русский язык, 1984.
- (注 23) Курьеры муз, Лицевая обложка, Юрий Александрович Богомолов, "Искусство", 1986., с. 88.
- (注 24) Массовые виды искусства и современная художественная культура, Анри Суренович Вартанов, В. П Демин, Всесоюзный научно-исследовательский институт искусствознания, "Искусство", 1986., с. 109.
- (注 25) Япония, Институт мировой экономики и международных отношений (Академия наук СССР), Научный совет по координации научно-исследовательских работ в области востоковедения (Академия наук СССР). Секция по изучению Японии, Институт востоковедения (Академия наук СССР), Наука, 1977.
- (注 26) Гиленсон Б. А. Социалистическая традиция в литературе США. -М., 1975., Наука, 1975., с. 174.
- (注 27) США--экономика, политика, идеология. Выпуски 1-6. Институт Соединенных Штатов Америки и Канады (Академия наук СССР), Институт Соединенных Штатов Америки и Канады (Российская академия наук)., Изд. Наука, 1976., с. 105.
- (注 28) «Искусство кино», Выпуски 7-12, СССР. Министерство кинематографии, Союз писателей СССР, Министерство культуры, 1977., с. 137.
- (注 29) Южная Корея--база империализма на Дальнем Востоке, Всеволод Александрович

Маринов, Анатолий Васильевич Торкунов, *Международ. отношения*, 1979.

(注 30) *Народы Азии и Африки*, Выпуски 1-3, Институт востоковедения (Академия наук СССР),  
Институт востоковедения (Академия наук СССР), Институт народов Азии (Академия  
наук СССР), Изд-во Академии наук СССР., 1983., с. 190.

(注 31) В паутине рейтинга. Телевидение и радиовещание, №8, август 1977, с.43

## 参考文献

< 英語 >

- Apresjan J. (2000) *Systematic Lexicography*. translated by Windle, K. Oxford: Oxford University Press.
- Baker P., Hardie A. (2006) *A Glossary of Corpus Linguistics*. Edinburgh University Press.
- Barnden J.A., Glasbey S.R., Lee M.G., Wallington A.M. (2004) “Varieties and directions of inter-domain influence in metaphor” // *Metaphor and Symbol*. Vol 19, No.1.
- Bermann S., Porter C. (2014) *A Companion to Translation Studies*. Wiley-Blackwell.
- Bogusławski A. (2003) *A note on Apresjan’s concept of ‘Polish School of Semantics’*. *With an Appendix*. *Lingua Posnaniensis XLV*: 7-18.
- Bogusławski A. (2007) *A study in the Linguistics-Philosophy Interface*. Warszawa: BEL Studio.
- Brent B., Brent K. (1991) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. University of California Press.
- Budick, S. and Iser, W. (1996) *The Translatability of Cultures, Figurations of the Space Between*. Palo Alto: Stanford University Press.
- Chomsky N. A. (1987) *Language in a psychological setting*. *Sophia Linguistica*.
- Cortazzi M., Jin L., Bahous R., Bacha N. (2008) “*More than a journey: Metaphors for learning in China, Lebanon and the UK*”. Paper presented at the “7th International Conference on Researching and Applying Metaphor (RaAM 7)” on “Metaphor in Cross-Cultural Communication,” held at the University of Extremadura, Spain, 2008.
- Coseriu E., Geckeler H. (1981) *Trends in Structural Semantics*. Tübingen: Narr.
- Enfield N., Wierzbicka A. (2002) guest eds. 2002. *Pragmatics and Cognition*. Special Issue on “The body in description of emotion: cross-linguistic studies”.
- Evans V. (2007) *A Glossary of Cognitive Linguistics*. Edinburgh University Press.
- Fillmore, C.J. (1975) “An alternative to checklist theories of meaning” in: *Papers from the First Annual Meeting of the Berkely Linguistics Society*, pp. 123–132.
- Firth J. R. (1957) *Papers in Linguistics 1934–1951*. London: Oxford University Press.
- Fussell S. R. (2002) *The Verbal Communication of Emotions Interdisciplinary Perspective*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers Mahwah, New Jersey London.
- Gavins J., Steen G. (2003) *Cognitive Poetics in Practice*. London: Routledge.
- Gibbs R.W. Jr., Wilson N.L. (2002) *Bodily action and metaphorical meaning*. *Style*. 2002. Vol. 36 (3).
- Gitsaki C. (1996) *The Development of ESL Collocational Knowledge*. The University of Queensland Publication, PhD Thesis.
- Goatly A. G. (1996) “Grammar and grammatical metaphor, or Language and the myth of power, Metaphors we die by” // *Journal of Pragmatics*, Vol. 25 (4).



- Goddard C., Wierzbicka A. (1994) *Semantic and lexical universals: Theory and empirical findings*. Amsterdam: John Benjamins.
- Goddard C. (2001) *Conceptual primes in early language development*. In Pütz, M., Neimeier, S., and R. Dirven, eds.
- Goddard C., Wierzbicka A. (2002) *Meaning and Universal Grammar: Theory and empirical findings*. Vols. I, II. Amsterdam: John Benjamins.
- Goddard C. (2003) "Thinking across languages and cultures: Six dimensions of variation." in: *Cognitive Linguistics* 14 (2/3): 109-140.
- Gorlee D. L. (1994) *Semiotics and the Problem of Translation: With Special Reference to the Semiotics of Charles S. Peirce*. Rodopi.
- Greimas A. J. (1983) *Structural Semantics: An Attempt at a Method*. translated by Daniele McDowell, Ronald Schleifer and Alan Velie, Lincoln, Nebraska: University of Nebraska Press.
- Halliday M.A.K. (1966). "Lexis as a linguistic level", In C. E. Bazell et al (eds), *In Memory of J.R. Firth*. London: Longman.
- Hardin L.C. and Maffi L. (1997) *Color categories in thought and language*. Cambridge University Press.
- Harkins J., Wierzbicka A. (2001) *Emotions in Crosslinguistic Perspective*. Mouton de Gruyter, Berlin, New York.
- Haroontunian H. (2000) *Overcome by Modernity: History, Culture, and Community in Interwar Japan*. Princeton University Press.
- Hayashi C., Kuroda Y. (1997) *Japanese Culture in Comparative Perspective (Working with Children and Adolescents)*. Praeger.
- Hendry J. (1989) *Becoming Japanese: The World of the Pre-School Child*. University of Hawaii Press.
- Hendry J. (1995) *Wrapping Culture: Politeness, Presentation, and Power in Japan and Other Societies*. Clarendon Press.
- Hendry J. (2003) *Understanding Japanese Society*. Routledge.
- Hipkiss R. A. (1995) *Semantics: Defining the Discipline*. Routledge.
- Hjelmslev L. (1963) *Prolegomena to a Theory of Language*. translated by Hjelmslev, L. 1943 Omkring sprogteoriens grundlæggelse by Whitfield, F.J. Madison: The University of Wisconsin Press.
- Holloway M. (1997) *The Paradoxical Legacy of Franz Boas*. Natural History.
- Jackendoff R. (1983) *Semantics and Cognition*. Cambridge: MIT Press.
- Jackendoff R. (1990) *Semantic Structures*. Cambridge: MIT Press.
- Jackendoff R. (1994) *Patterns in the Mind: Language and Human Nature*. Basic Books.
- Jackendoff R. (2006) "On conceptual semantics." in: *Intercultural Pragmatics*. Vol. 3, Mouton de Gruyter
- Jackendoff R. (2007) *Language, culture, consciousness: Essays on mental structures*. Cambridge: MIT

- Press.
- Jakobson R. (2000) "On linguistic Aspects of translation" in: Laurence Venuti (ed.), *The Translation Studies Reader*. London. New York: Routledge.
- Jaynes J. (1976) *The origin of consciousness in the breakdown of the bicameral mind*. Boston: HoughtonMifflin.
- Kövecses Z. (1990) *Emotion concepts*. New York: Springer Verlag.
- Kövecses Z. (2003) *Metaphor and emotion: Language, culture and body in human feeling*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff G. and Johnson M. (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.
- Lakoff G. and Kövecses Z. (1987) "The Cognitive Model of Anger Inherent in American English", in Dorothy Holland & Naomi Quinn, *Cultural Models in Language and Thought*. New York: Springer.
- Lakoff G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. The University of Chicago Press.
- Lakoff G. and Turner M. (1989) *More than Cool Reason, A Field Guide to Poetic Metaphor*. The University of Chicago Press.
- Langacker R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar: Vol. 1*. Stanford University Press.
- Langacker R. W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter, New York.
- Lebra Takie Sugiyama (1976) *Japanese Patterns of Behaviour*. University of Hawaii Press.
- Lebra Takie Sugiyama (1986) *Japanese Culture and Behavior: Selected Readings*. University of Hawaii Press.
- Lebra Takie Sugiyama (2004) *The Japanese Self in Cultural Logic*. University of Hawaii Press.
- Lehmann W. P. (ed.) (1988) *Prototypes in Language and Cognition*. Karoma.
- Mairal R., Juana G. (2006) *Linguistic Universals*. Cambridge University Press
- Mandelblit N. (1995). *The cognitive view of metaphor and its implications for translation theory. Translation and Meaning*. Maastricht: Universitaire Press.
- Matthews, P. H. (2014) *The Concise Oxford Dictionary of Linguistics*. Oxford University Press.
- Mente Boye De (2004) *Japan's Cultural Code Words: 233 Key Terms that Explain the Attitudes and Behavior of the Japanese*. Tuttle Publishing.
- Moore C. N. and Lower L. (1992) *Translation East and West: A Cross-Cultural Approach. Selected Conference Papers*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Mueller-Vollmer K., Irmscher M. (1988) *Translating Literatures, Translating Cultures: New Vistas and Approaches in Literary Studies*. Stanford: Stanford University Press.
- Murphy M. L. (2010) *Lexical Meaning*. Cambridge University Press.
- Nida E. (1975) *Componential analysis of meaning: an introduction to semantic structures*. Mouton.
- Nida E.A., de Waard, J. (1986) *From One Language to Another: Functional Equivalence in Bible Translating*. Nashville: Thomas Nelson.

- Nida E. A. (2003) *Toward a Science of Translating: With Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translating*. Brill.
- Niyekawa A. (1968) *A psycholinguistic study of the Whorfian hypothesis based on the Japanese passive*. University of Hawaii
- Partington A. (1998) *Patterns and Meanings: Using Corpora for English Language Research and Teaching*. Benjamins Publishing.
- Pawley A., Syder F. (1983) *Two Puzzles for Linguistic Theory: Nativelike Selection and Nativelike Fluency. Language and Communication*. London: Longman.
- Pinker S. (1994) *The Language Instinct*. Penguin.
- Refaie E. (2001) "Metaphors we discriminate by: Naturalized themes in Austrian newspaper articles about asylum seekers" in: *Journal of Sociolinguistics*. 2001. Vol. 5. № 3.
- Rosch, E., Mervis C. B. (1975) *Family resemblances: Studies in the internal structure of categories*. Cognitive Psychology.
- Rubel P. G., Rosman A. (2003) *Translating Cultures Perspectives on Translation and Anthropology*. Berg.
- Rudzka-Ostyn B., ed., (1988) "Semantic extensions into the domain of verbal communication." in: *Topics in Cognitive Linguistics* Brygida Rudzka-Ostyn (ed.), Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Sapir E., Mandelbaum D. G. (1949) *Selected Writings of Edward Sapir in Language, Culture and Personality*. University of California Press.
- Sasaki M., Suzuki T. (2002) *Social Attitudes in Japan: Trends and Cross-National Perspectives*, Brill.
- Semino E., Culpeper J. (2002) *Cognitive Stylistics: Language and Cognition in Text Analysis*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Shimizu H., LeVine R. (2002) *Japanese Frames of Mind Cultural Perspectives on Human Development*. Cambridge University Press, New York.
- Shore B. (1998) *Culture in Mind: Cognition, Culture, and the Problem of Meaning*. Oxford University Press
- Sinclair J.M. (1966) *Beginning the study of lexis*. In Bazell.
- Smith R. J., Beardsley R. K. (2004) *Japanese Culture: Its Development and Characteristics*. Routledge.
- Steiner G. (1975) *After Babel: Aspects of Language and Translation*. London: Oxford University Press.
- Stockwell P. (2002) *Cognitive Poetics: An Introduction*. London: Routledge.
- Sugimoto Y. (2003) *An Introduction to Japanese Society*. Cambridge University Press.
- Talmy L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Taylor J. (1996) *Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar*. Clarendon Press, Oxford.
- Taylor J. (1989) *Linguistic Categorization. Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.

- Unterbeck B. (2000) Rissanen M., Nevalainen T, Saari M. *Gender in Grammar and Cognition*. Mouton de Gruyter, Berlin, New York.
- Venuti L. (1994) “Translation and the Formation of Cultural Identities” in: *Current Issues in Language and Society*. Volume 1. Number 3. – Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- Venuti L. (1995) *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. Routledge.
- Wierzbicka A. (1987) *English speech act verbs: A semantic dictionary*. Sydney: Academic Press.
- Wierzbicka A. (1991) “Japanese Key Words and Core Cultural Values” in: *Language in Society* Vol. 20, No. 3. Cambridge University Press.
- Wierzbicka A. (1992) *Semantics, Culture, and Cognition: Universal Human Concepts in Culture-Specific Configurations*. Oxford University Press.
- Wierzbicka A. (1996) *Semantics: Primes and Universals*. Oxford University Press.
- Wierzbicka A. (1997) *Understanding Cultures through their Key Words English, Russian, Polish, German, and Japanese*. New York: Oxford, Oxford University Press.
- Wierzbicka A. (1999) *Emotions Across Languages and Cultures: Diversity and Universals*. Cambridge University Press.
- Wierzbicka A. (2006) *English: Meaning and Culture*. Oxford: Oxford University Press.
- Wierzbicka A. (2006) “The Semantics of Colour: A New Paradigm” in: Biggam, C., Kay C., Pitchford, N., *Progress in Colour Studies: Language and culture*.
- Wierzbicka. A. (2009) “The Theory of the Mental Lexicon.” in: Tilman Berger, Karl Gutschmidt, Sebastian Kempgen and Peter Kosta (eds), *The Slavic Languages: An international handbook of their history, their structure and their investigation*. [HSK]. Berlin: Mouton de Gruyter. (Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft. Handbook of Linguistics and Communication Science.)  
([https://www.griffith.edu.au/\\_\\_data/assets/pdf\\_file/0011/347528/wierzbicka-mental-lexicon.pdf](https://www.griffith.edu.au/__data/assets/pdf_file/0011/347528/wierzbicka-mental-lexicon.pdf)).
- Whorf B. L. (1956) *Language, thought, and reality: selected writings of Benjamin Lee Whorf*. (Ed.) Carroll, John B., New York: Wiley.
- Ye, Z. (2004) “Chinese categorization of interpersonal relationship and the cultural logic of Chinese social interaction: An indigenous perspective.” *Intercultural Pragmatics* 1 (2): 211-230.

< 日本語 >

阿部謹也 (1995) 『「世間」とは何か』 講談社現代新書

井上忠司 (2007) 『「世間体」の構造』 講談社

井上宗雄監修 (1992) 『例解 慣用句辞典—言いたい内容から逆引きできる』 創拓社

小内一 (2010) 『てにをは辞典』 三省堂

- 学研辞典編集部 (2004) 『日本語「語源」辞典』学研研究社
- 金田一秀穂監修 (2006) 『知っておきたい日本語コロケーション辞典』学習研究社
- 九鬼周造 (1992) 『「いき」の構造』岩波書店
- 小西友七 (1995) 『ニューセンチュリー和英辞典』三省堂
- 近藤いね子・高野フミ (2001) 『プログレッシブ和英中辞典』第3版、小学館
- 佐藤直樹 (2004) 『世間の目』光文社
- 佐藤直樹 (2001) 『「世間」の現象学』青弓社
- 新村出編 (2004) 『広辞苑』第五版、岩波書店
- 鈴木重幸、鈴木康之責任編集 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』東京: むぎ書房
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店
- 鈴木孝夫 (1990) 『日本語と外国語』岩波書店
- スロヴェイ・ヴィヤチェスラヴ (2008) 「日本語の文化的キーワードとその翻訳可能性  
— 英訳、露訳、ウクライナ語訳に即して」(2008年度東京大学大学院人文社会系研究  
科現代文芸論専門分野修士論文、未刊)
- スロヴェイ・ヴィヤチェスラヴ (2016) 「連語から見られる概念メタファーの分析を通  
して理解するロシア語の言語的世界観」現代文芸論研究室論集『れにくさ』、第6号
- 竹林滋編 (2002) 『新和英大辞典』研究社
- 武部良明編 (2004) 『類語実用辞典』三省堂
- 谷口一美 (2006) 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』研究社
- 築島謙三 (1984) 『「日本人論」の中の日本人』大日本図書
- 辻幸夫 (2003) 『認知言語学への招待』大修館書店
- 寺沢正春 (2002) 『日本人の精神構造—伝統と現在—』晃洋書房
- 土居健郎 (2007) 『「甘え」の構造』(増補普及版) 弘文堂  
『日本大百科全書ニッポニカ 全25巻』、(1993) 小学館
- ハバート・パッシン (1978) 『遠慮と貪欲—コトバによる日本人の研究』祥伝社
- 姫野昌子監修 (2012) 『研究社日本語コロケーション辞典』研究社
- 姫野昌子編 (2004) 『研究社日本語表現活用辞典(英語)』研究社
- 広瀬正宜、庄司香久子 (2001) 『日本語使いわけ辞典』講談社
- 藤沼貴編 (2000) 『研究社和露辞典』研究社
- 堀井令以知 (2003) 『日常語の意味変化辞典』東京堂出版
- 増淵宗一 (1994) 『かわいい症候群』日本放送出版協会
- 松村明編 (1995) 『大辞泉』小学館

- 松村明編 (2006) 『大辞林』 第三篇、三省堂編修所
- 松村明監修 (2017) デジタル大辞泉 <https://kotobank.jp/>、小学館
- 松本曜 (2003) 『認知意味論』 大修館書店
- 宮地裕 (1982) 「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語」 雑誌『日本語学』 第4巻第1
- 柳父章 (2008) 『翻訳語成立事情』 岩波新書
- 山田 洋次日 (1979) 『本人と人間関係—義理人情と日本人論文化論 (1979年) (新・青春ゼミ  
〈1〉)』 一光社
- 山本七平 (1997) 『「空気」の研究』 文藝春秋
- 四方田犬彦 (2006) 『「かわいい」論』 ちくま新書
- レイコフ・ジョージ、ジョンソン・マーク(2010) 『レトリック人生』 大修館書店

<ロシア語>

- Абдуллаев Ф. М.* Опорный словарь сочетаемости слов при образовании русских словосочетаний: Пос. для учителей начальной школы. Баку, 1980.
- Абрамов Н.* Словарь русских синонимов и сходных по смыслу выражений. 3-е изд. СПб., 1911.
- Анисимова Т. И., Иванова З. Э., Ульянов Р. В.* Пособие по лексической сочетаемости слов русского языка. Словарь-справочник; Под ред. Т. П. Плещенко и Л. Ф. Саковец. Минск. 1975.
- Апресян Ю. Д., группа авторов под общим руководством Ю. Д. Апресяна,* Новый объяснительный словарь синонимов русского языка, Москва; Вена: Школа Языки славянской культуры, 2003.
- Арутюнова Н. Д.* Понятие судьбы в контексте разных культур, М., «Наука», 1994.
- Бархударов Л. С.* Язык и перевод. М.: Международные отношения, 1975
- Бирюк О. Л., Гусев В. Ю., Калинина Е. Ю.* Словарь глагольной сочетаемости непредметных имен русского языка ([http://dict.ruslang.ru/abstr\\_noun.php](http://dict.ruslang.ru/abstr_noun.php)), 2008
- Виноградов, В. В.* Грамматика русского языка. Изд. АН СССР, т. И, ч. 1. М., 1954.
- Гладкова А. Н.* Русская культурная семантика: эмоции ценности, жизненные установки. М.: Языки славянской культуры, 2009.
- Голованова Е. И.* Введение в когнитивное терминоведение: учеб. пособие. М.: Флинта: Наука, 2011.
- Даль В. И.* Толковый словарь живого великорусского языка. В четырех томах. М., Дрофа, 2011.
- Денисов П. Н., Морковкин В. В.* Словарь сочетаемости слов русского языка М., АСТ, 2002
- Жеребило, Т.В.* Словарь лингвистических терминов. Назрань: ООО «Пилигрим», 2010
- Зализняк А. А., Левонтина И.Б., Шмелев А.Д.* Ключевые идеи русской языковой картины мира:

- Сб. ст. , М.: Языки славянской культуры, 2005.
- Зализняк А. А.* Русская семантика в типологической перспективе, Языки Славянской Культуры, Москва, 2013.
- Зализняк А. А.* «Языковая картина мира» – статья в Универсальной научно-популярной онлайн-энциклопедии ([http://www.krugosvet.ru/enc/gumanitarnye\\_nauki/lingvistika/YAZIKOVAYA\\_KARTINA\\_MIR\\_A.html](http://www.krugosvet.ru/enc/gumanitarnye_nauki/lingvistika/YAZIKOVAYA_KARTINA_MIR_A.html)).
- Котелова Н. З.* Новое в русской лексике: Словарные материалы, Академия наук СССР, Институт Русского языка., Русский язык, 1980.
- Левонтина И. Б., Шмелёв А. Д.* Родные просторы. Логический анализ языка: Языки пространств. М.: Языки русской культуры, 2000.
- Ляшевская О. Н., Шаров С. А.* Частотный словарь современного русского языка (на материалах Национального корпуса русского языка). М.: Азбуковник, 2009.
- Мюллер В. К.* Полный англо-русский русско-английский словарь. 300000 слов и выражений. “М.: Издательство: Эксмо, 2013.
- Пименова М. В.* Смена ведущих концептуальных метафор (на примере концепта ум), Забайкальский государственный гуманитарно-педагогический университет им. Н.Г. Чернышевского, 2009.
- Регина К. В., Тюрина Г. П., Широкова Л. И.* Устойчивые словосочетания русского языка: Учеб. пос. для студентов-иностранцев / Под ред. Л. И. Широковой М., 1980.
- Скворцов О. Г.* Сопоставительное направление в исследовании семантической сферы «Light/Darkness» в зарубежной лингвистике, Политическая лингвистика, Издательство Уральский государственный педагогический университет, 2009.
- Толстой Н. И.* Славянские древности. Этнолингвистический словарь в 5-ти т., М., Международные отношения, 1995-2012.
- Черных П. Я.* Историко-этимологический словарь современного русского языка. 3-е издание, М., Издательство "Русский язык", 1999.
- Чудинов А. П.* Становление и эволюция когнитивного похода к метафоре, Новый филологический вестник, "Издательство Ипполитова", 2007.
- Шмунер А. С.* Изменение глубинного слоя заимствования как отражение концептуализации действительности народом-реципиентом, Вестник Самарского государственного университета, 2010.
- Шмелев А. Д.* Русская языковая картина мира: системные сдвиги в журнале Мир русского слова выпуск № 4, 2009.
- Шмелев А. Д.* Язык и культура: есть ли точки соприкосновения? (<http://www.ruslang.ru/doc/shmelev2013.pdf>), 2013.

*Ярцева В. Н.* Большой энциклопедический словарь. 2-е изд. М.: Большая Рос. энцикл., 1998.

<ウクライナ語>

*Загоруйко О. Я.* Великий універсальний словник української мови. Харків, "Торсінг Плюс", 2009.

*Морозов С. М., Шкаранута Л. М.* Словник іншомовних слів. Національний університет ім. Тараса Шевченка, Український мовно-інформаційний фонд НАН України. «Наукова Думка», Київ, 2000.

Русско-украинский словарь в 3 т., Наукова думка, Київ, 1969.

Словник української мови. В 11 т., Київ: Наукова думка, 1970–1980.



## 謝辞

この研究は、2006年度から6年間にわたる日本政府（文部科学省）奨学金の助成により遂行されたものです。国費留学生として学費と生活費を長い間支援していただいたおかげで、大学の勉強と自分の研究に集中することができました。日本への留学は私の人生の大きな転換となって今に続いており、この素晴らしい機会を与えてくださった日本国に心から感謝しております。

本論文の指導教官であり主査の東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授 沼野充義先生には本研究を進めるにあたり終始あたたかいご指導と激励を賜り、心から感謝の意を表します。日本への留学が決まった2005年に突然連絡したにも関わらず、研究生として私を受け入れていただき、研究のテーマなどについて、熱心にご教授してくださいました。修士並びに博士課程入学後も勉強と生活の面において沼野先生の多大なご指導・ご支援を得なければ、博士論文を完成させることはできなかったでしょう。11年間の丁寧なご指導誠にありがとうございました。

また審査委員をして頂きました東京大学人文社会系研究科教授 西村義樹先生、東京大学人文社会系大学院教授 三谷恵子先生、東京大学大学院人文社会系研究科教授 柳原孝敦先生、東京大学大学院人文社会系研究科准教授 阿部賢一先生からは論文の内容、構成をはじめ参考文献まで様々なご指導ご助言をいただき、初稿の不備が大きく改善されました。御礼申し上げます。

研究生の時代の私に丁寧に日本語を教えてくださいました先生方、並びに修士と博士学生時代に、文学と翻訳の研究の面白さと難しさを教えてくださいました柴田元幸先生、Theodore W. Goossen 先生、野谷文昭先生と他の先生方に深く御礼申し上げます。長い間お世話になりました。

今年で創設10年を記念する東京大学現代文芸論研究室という多文化的で素晴らしい環境に恵まれて、様々な幅広い研究に取り組んでいる修士、博士課程同期の皆様からたくさんの刺激とご助言もいただきました。皆様のおかげで楽しく学生生活を過ごし、一生残る思い出をたくさん作ることが出来ました。心から御礼を申し上げます。

最後に忙しい中で論文のネイティブチェックに協力していただいた方々、支えてくれた友人、私をあたたく応援してくれた両親と祖父母、ありとあらゆる場面で優しく見守り続けてくれた妻のソン・マルガリータに心から感謝します。皆様の支援がなければとうていここまでくることはできませんでした。

博士論文を書き上げられたことに対して、これまでにお世話になった全ての方々に改めて感謝申し上げます。